ISSN 2186-0645

富山市埋蔵文化財調査報告101

富山市黒崎種田遺跡発掘調査報告書

くろさきたねだ

－富山県医師会館建築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－

2020

富山市教育委員会

ISSN 2186-0645

富山市埋蔵文化財調査報告101

富山市黒崎種田遺跡発掘調査報告書

くろ さき たね だ

－富山県医師会館建築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－

２０２０

富山市教育委員会

調査区全景（北から）　奥の台形状の建物（富山県医師会館）付近に蜷川館が所在

区画溝 SD50・51（北から）

井戸終いの祭祀が行われた SE61（北東から）

SK201 出土のウマの歯（西から）

金付きの中世土師器（SP120 出土）

例　　言

1　本書は、富山県富山市黒崎に所在する黒崎種田遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査は、富山県医師会館建築工事に伴い実施した。

3　調査は、富山県医師会から株式会社アーキジオに発注し、富山市教育委員会埋蔵文化財センターの監理のもと実施した。

4　調査の概要は次のとおりである。

調査面積	784．87㎡
発掘作業期間	令和元年7月22日～11月11日
整理作業期間	令和元年9月11日～令和2年8月31日
監理担当者	鹿島昌也（富山市埋蔵文化財センター　専門学芸員）
	野垣好史（同　主査学芸員）
発掘作業担当者	基峰 修　阿部将樹　丸山大貴　村上 佳（株式会社アーキジオ）
整理作業担当者	阿部将樹　基峰 修　今井千尋　三島ゆかり　村上 佳　矢野義治
	（株式会社アーキジオ）

5　本書の執筆は、第1章を鹿島、第2章を野垣、第3章を阿部・基峰・今井・三島・村上・矢野・鹿島、第5章を鹿島・野垣・納屋内が行った。文責は文末に示した。編集は阿部が行った。

6　自然科学分析は、株式会社パレオ・ラボ、株式会社吉田生物研究所に委託し、第4章に成果を掲載した。

7　現地発掘調査から報告書作成にあたり、次の方々よりご指導・ご協力をいただいた。記して謝意を表する（五十音順・敬称略）。

青山　晃　阿部　来　井尻智道　金山真樹　川越光洋　久々忠義　久保尚文　高岡　徹
谷内良徹　中原義史　新田和央　蜷川正美　萩原大輔　堀内秀樹　増渕佳子　松井広信
松尾　樹　水澤幸一　向井裕知　八重樫忠郎　山本雅和　四柳嘉章
富山県埋蔵文化財センター

8　出土遺物・原図・写真は、富山市教育委員会埋蔵文化財センターが保管している。

凡　　例

1　本書で用いた座標は世界測地系第Ⅶ系である。方位は真北、水平水準は海抜高である。

2　遺構は、種別を示す以下の記号と番号の組合せで標記した。番号は遺構種別にかかわらず01からの通し番号を付した。

SA（柵列）　SB（掘立柱建物）　SD（溝）　SE（井戸）　SK（土坑）　SP（ピット）　SX（不明遺構）

3　土層、遺物観察表の色調は『標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に準拠した。

4　挿図中の網掛けは次のとおりである。

：地山　：煤・油煙　：漆　：金

5　参考文献は第5章の後にまとめた。ただし、第4章の自然科学分析は各分析の末尾に掲載した。

6　本文中の参考文献の表記について、一部を次のように略した。

教育委員会 → 教委　　(公財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 → 富山県財団

7　第2・5図は、富山市基本図をもとに作成した。

目　　次

巻頭写真図版
例言・凡例

第１章　調査の経過 ……1
　第１節　調査にいたる経緯 ……1
　第２節　発掘作業及び整理等作業の経過 ……2

第２章　遺跡の位置と環境 ……3
　第１節　地理的環境 ……3
　第２節　歴史的環境 ……5

第３章　調査の方法と成果 ……8
　第１節　調査の方法 ……8
　第２節　層　序 ……9
　第３節　遺　構 ……9
　第４節　遺　物 …… 41

第４章　自然科学分析 …… 68
　第１節　放射性炭素年代測定 …… 68
　第２節　堆積物中の珪藻化石群集 …… 71
　第３節　花粉分析とプラント・オパール分析 …… 74
　第４節　木製品・木材の樹種同定 …… 77
　第５節　SX49の寄生虫卵分析 …… 78
　第６節　漆製品の塗膜構造調査 …… 79
　第７節　漆製品の樹種同定 …… 80

第５章　総　括 …… 85
　第１節　SK201出土のウマについて …… 85
　第２節　SK35竪穴状遺構について …… 88
　第３節　井戸祭祀からみた蜷川氏と徳大寺家領宮河荘の関係 …… 90
　第４節　遺構の変遷と性格 ― 蜷川氏との関係について ― …… 92

引用・参考文献 …… 98

写真図版
報告書抄録

図 目 次

第 1 図　発掘調査区割図……1
第 2 図　調査位置図……2
第 3 図　黒崎種田遺跡位置図……3
第 4 図　富山平野の地形分類図……4
第 5 図　黒崎種田遺跡周辺の遺跡……6
第 6 図　調査区全体平面図……19
第 7 図　a1～a2・b1～b2区平面図　SD06・08・34・SP33断面図……20
第 8 図　a2～a4・b2～b4区平面図　SD15・152断面図……21
第 9 図　b3～b4・c3～c4・d3～d4区平面図　SD50・51・SX52・53断面図……22
第10図　SD54・166・187断面図……23
第11図　SK201平面図・断面図　SD73・188・189・197・199・SX63・149断面図……24
第12図　b4～b6・c4～c6・d4～d5区平面図　SD91・ 100断面図……25
第13図　SD96・SX77・97・98断面図……26
第14図　SB1(SP148・161・165・204) エレベーション・平面図・断面図……27
第15図　SE01・02・03平面図・断面図……28
第16図　SE05・48・58平面図・断面図……29
第17図　SE61・64・65平面図・断面図……30
第18図　SE81・83・108平面図・断面図……31
第19図　SK07・14・16・38・39平面図・断面図……32
第20図　SK35・SP36・SX49平面図・断面図……33
第21図　SK59・60・62・78・79平面図・断面図……34
第22図　SK80・94・95・99・102・137平面図・断面図……35
第23図　SK163・164・168・169・176・179・184・190平面図・断面図……36
第24図　SA1(SP55・56・57)　SP43・70・71・75・87・120・141・143・180平面図・断面図……37
第25図　SA1・SB1遺物実測図……46
第26図　SD08・50・51・54遺物実測図……47
第27図　SD54遺物実測図……48
第28図　SD96・152・188・197・199遺物実測図……49
第29図　SE01・02・03遺物実測図……50
第30図　SE03・05遺物実測図……51
第31図　SE05・48・58遺物実測図……52
第32図　SE61・64遺物実測図……53
第33図　SE64・65・81遺物実測図……54
第34図　SE81・83・108遺物実測図……55
第35図　SK07・14・35・38・59・60遺物実測図……56
第36図　SK62・79・80・102・164・176・190・201遺物実測図……57
第37図　SP36・43・71・75・87・120・141・143・180・SX49遺物実測図……58
第38図　SX49・52・53・63・77・97・98遺物実測図……59
第39図　遺構外遺物実測図……60

第40図　暦年較正結果 …… 70
第41図　マルチプロット図 …… 70
第42図　堆積物中の珪藻化石分布図 …… 72
第43図　花粉分布図 …… 76
第44図　植物珪酸体分布図 …… 76
第45図　堆積物中の珪藻化石の顕微鏡写真 …… 82
第46図　産出した花粉化石 …… 82
第47図　産出した植物珪酸体 …… 83
第48図　木製品・木材の光学顕微鏡写真 …… 83
第49図　漆器塗膜断面の光学顕微鏡写真 …… 84
第50図　漆製品の光学顕微鏡写真 …… 84
第51図　出土したウマの歯 …… 85
第52図　馬小屋の分類模式図 …… 89
第53図　SE61井戸底の遺物出土状況 …… 91
第54図　蜷川氏家紋 …… 91
第55図　道場Ⅰ遺跡漆器・呪符木簡 …… 91
第56図　遺構変遷図 …… 93
第57図　調査区付近の空中写真 …… 94
第58図　地割図による蜷川館のプラン復原 …… 95
第59図　「蜷川館跡之図」 …… 96

表 目 次

第 1 表　遺構一覧表(1) …… 38
第 2 表　遺構一覧表(2) …… 39
第 3 表　遺構一覧表(3) …… 40
第 4 表　遺物一覧表(1) …… 60
第 5 表　遺物一覧表(2) …… 61
第 6 表　遺物一覧表(3) …… 62
第 7 表　遺物一覧表(4) …… 63
第 8 表　遺物一覧表(5) …… 64
第 9 表　遺物一覧表(6) …… 65
第10表　遺物一覧表(7) …… 66
第11表　遺物一覧表(8) …… 67
第12表　測定試料および処理 …… 68
第13表　コラーゲン抽出結果とC/N比 …… 69
第14表　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果 …… 69
第15表　堆積物の特徴 …… 71
第16表　堆積物中の珪藻化石産出表 …… 73
第17表　産出花粉胞子一覧表 …… 75

第18表　試料1g当たりのプラント・オパール個数表…… 75
第19表　出土木材の樹種同定結果一覧…… 77
第20表　試料の計量値と寄生虫卵数 …… 78
第21表　調査資料…… 79
第22表　漆器の断面観察結果…… 79
第23表　漆製品樹種同定結果…… 80
第24表　出土したウマの歯列残存状況…… 85
第25表　出土したウマの歯の計測値 …… 85
第26表　越中出土の中世のウマとその推定年齢・推定体高…… 86

写真図版目次

写真図版1　調査区遠景
写真図版2　調査区全景
写真図版3　遺構(掘立柱建物)
写真図版4　遺構(溝)
写真図版5　遺構(溝)
写真図版6　遺構(溝)
写真図版7　遺構(溝)
写真図版8　遺構(溝)
写真図版9　遺構(井戸)
写真図版10　遺構(井戸)
写真図版11　遺構(井戸)
写真図版12　遺構(井戸・土坑)
写真図版13　遺構(土坑)
写真図版14　遺構(土坑)
写真図版15　遺構(土坑)
写真図版16　遺構(柵列・ピット)
写真図版17　遺構(ピット)
写真図版18　遺構(不明遺構)
写真図版19　遺物(中世土師器)
写真図版20　遺物(中世土師器)
写真図版21　遺物(中世土師器)
写真図版22　遺物(珠洲)
写真図版23　遺物(珠洲・越前・八尾・青白磁・白磁・青磁)
写真図版24　遺物(青磁・古瀬戸・瓦質土器・越中瀬戸・伊万里・磁器・須恵器・土錘・石製品・金属製品)
写真図版25　遺物(木製品)
写真図版26　遺物(木製品)
写真図版27　遺物(木製品)

第１章　調査の経過

第１節　調査にいたる経緯

黒崎種田遺跡は、昭和 63 ～平成 3 年に富山市教育委員会（以下、市教委と呼称）が実施した市内の分布調査で発見された遺跡である。その際には古代の土師器・須恵器、中世の珠洲焼等が採集され、古代から近世にわたる散布地として平成 5 年刊行の『富山市遺跡地図』（遺跡 No. 201480）に登載され、周知の埋蔵文化財包蔵地として知られることとなった。市町村合併後の分布調査等を経て改訂された平成 25 年刊行の『富山市遺跡地図』（遺跡 No. 2010550）には、黒崎、黒瀬、八日町、蜷川地内にまたがる 396,000 ㎡余りの範囲が、古墳時代前期、古代、中世、近世の埋蔵文化財包蔵地として登載されている。

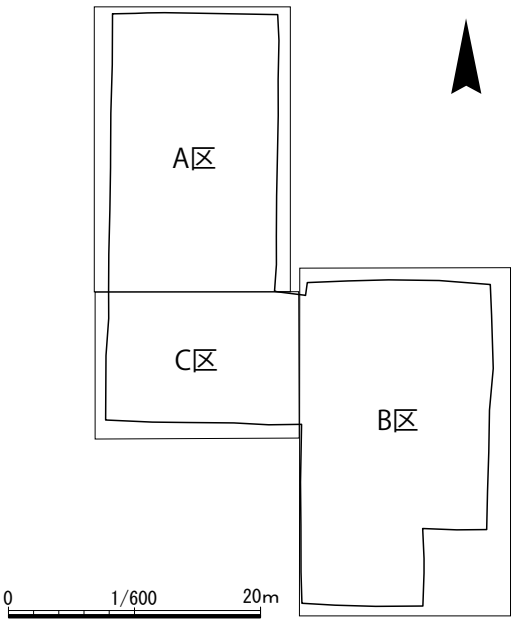
平成 30 年 12 月 19 日に公益社団法人富山県医師会から当該地において、駐車場造成工事に伴い埋蔵文化財の所在確認依頼書が提出された。対象地の水田 4,075 ㎡全域が埋蔵文化財包蔵地に含まれていたことから、平成 31 年 3 月 6 日から 8 日にかけて試掘調査を実施した。その結果、表土直下から鎌倉～室町時代の井戸や土坑などを検出し、中世土師器や珠洲、木製の井戸枠などが出土した。試掘調査範囲のうち 286 ㎡（A 地区）と 339.75 ㎡（B 地区）の計 625.75 ㎡に遺跡の所在を確認した。

試掘調査結果を受け、工事主体者（公益社団法人富山県医師会）と遺跡の保護措置について協議を実施した。工事主体者からは現時点では、駐車場造成の計画であるが、現在蜷川地内にある富山県医師会館の移転新築計画もあり、将来的な建て替えなどを念頭に、保護措置が必要な箇所はあらかじめ発掘調査を実施し、記録保存による保護措置を終えておきたいとの意向が示された。

これを踏まえ、工事主体者より令和元年 5 月 16 日付けで「富山県医師会館建築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査について」の依頼文が提出された。発掘調査は民間発掘調査機関に委託して実施することとし、同年 7 月 3 日付けで、公益社団法人富山県医師会、株式会社アーキジオ富山本社、市教委の三者で協定を締結した。

文化財保護法第 93 条第 1 項に基づく「埋蔵文化財発掘の届出」は、同年 5 月 16 日に工事主体者から提出され、同 17 日付で富山県教育委員会へ副申した。また、文化財保護法第 99 条第 1 項に基づく「埋蔵文化財発掘調査の報告」は同年 7 月 23 日付けで富山県教育委員会へ提出した。

現地発掘作業は、令和元年 7 月 22 日から 11 月 11 日まで実施した。発掘作業中、遺跡所在範囲が A 地区と B 地区の間にも広がることが判明したため、追加で 159.12 ㎡（C 地区）を調査対象とし、調査面積を 784.87 ㎡に改める変更協定を同年 9 月 17 日付で締結した。



第１図　発掘調査区割図

第２節　発掘作業及び整理等作業の経過

発掘調査は、原因者である公益社団法人富山県医師会から株式会社アーキジオ富山本社に委託業務を発注し、埋蔵文化財センター職員が監理にあたった。調査着手前の７月 12 日に三者立ち会いの下、調査範囲について確認を行った。表土掘削はバックホウを用いて７月 22 日から 25 日まで行った。表土掘削と並行して人力による遺構検出を開始した。７月 26 日にＡ地区、７月 29 日にＢ地区のドローンによる遺構検出状況の空中写真撮影を実施した。

７月 29 日から遺構掘削に着手した。遺物の取り上げや出土状況の作図にはトータルステーションを用いて測量を行った。

９月 18 日からＣ地区の表土掘削に着手し、並行して遺構検出を実施した。

９月 27 日にＡ・Ｂ地区の完掘状況、Ｃ地区の遺構検出状況の空中写真撮影を実施し、９月 30 日からＣ地区の遺構掘削に着手した。

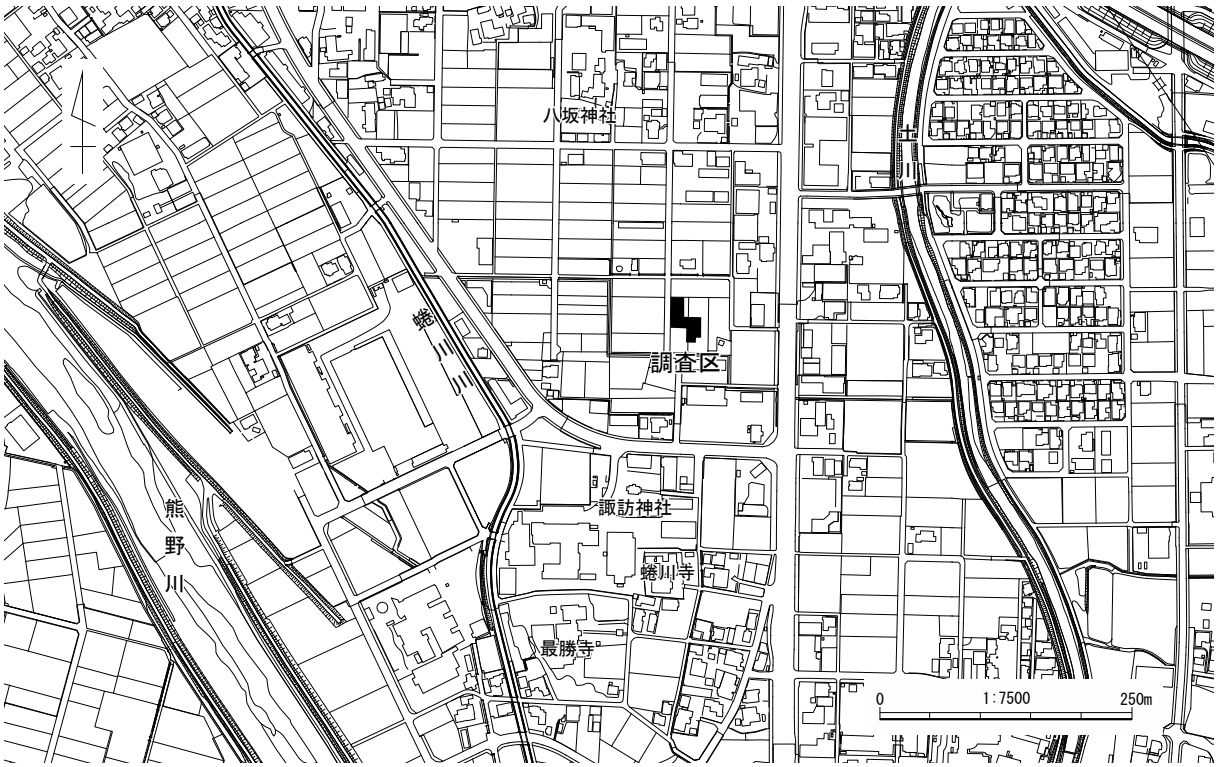
10 月３日に発掘調査の成果を報道関係者に公開した。同５日に市民を対象とした現地説明会を開催し、県内外から 140 名の参加者があった。

A･B 地区については空撮後、石組井戸の断ち割り、木製井戸枠の取り上げを行い、10 月 24 日までに、C 地区の遺構掘削や井戸枠材の取り上げを完了し、同日、完掘状況の空中写真撮影を行った。同 25 日に埋蔵文化財センター所長立ち会いの下、現地発掘作業の終了確認を行った。

10 月 28 日から埋め戻しに着手し、同 30 日に完了した。その後、ハウスなどの機材撤収を実施、11 月 11 日に終了し、12 日付で市教委から工事主体者へ現地引き渡しの通知を行った。

整理等作業は、発掘作業終了後（一部は発掘作業と並行し）、株式会社アーキジオが実施した。遺物洗浄を９月 11 日～ 11 月 29 日に実施し､その後注記･接合を令和２年１月 23 日まで実施した。合わせて、遺物実測図作成、測量図編集・トレース作業・台帳類を作成し、自然科学分析および主な木製品の保存処理を実施した。報告書作成・編集・印刷を同年８月 31 日まで実施し、本書を刊行して業務を完了した。

（鹿島）



第２図　調査位置図

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

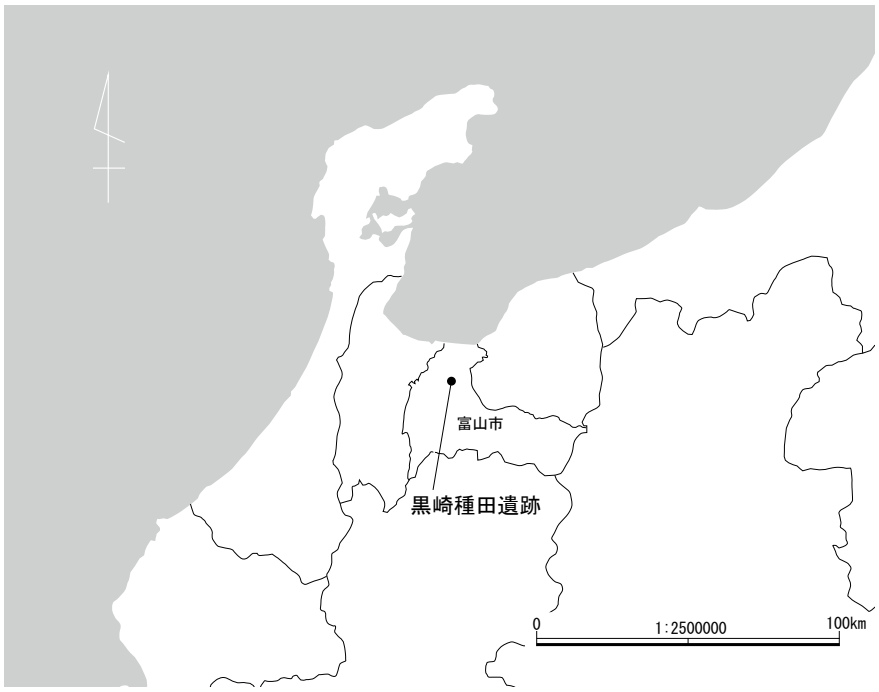
富山市は、平成 17 年（2005）の市町村合併により、富山県の中央部から南東部まで県域の三分の一近くを占める広大な市域となった。北は富山湾、東は立山連峰、西は丘陵・山村地帯が連なり、南は岐阜県境に接して広大な森林が広がる。

県域の中央を南北に延びる呉羽丘陵は、富山県を東西に二分する。東側は「呉東」、西側は「呉西」と呼ばれ、両地域は文化や気候面において違いがある。黒崎種田遺跡は、呉東の富山平野、富山湾から 12 ㎞内陸に入った神通川支流の熊野川右岸に位置する。富山平野は、神通川と常願寺川およびその支流が形成した扇状地と氾濫平野が発達している。特に常願寺川は県南東部の山岳地帯に水源をもち、上流に立山カルデラの大崩壊地があることから莫大な量の砂礫が供給され、広大な扇状地を形成する。神通川扇状地は比較的小さく、下流の富山市街地以北は流路変遷の跡や自然堤防・後背湿地が広がる。黒崎種田遺跡は、常願寺川の扇端付近に位置すると同時に、神通川・熊野川の扇状地帯にも含まれる複合扇状地に立地する。標高はおよそ 18 ～ 24m である。

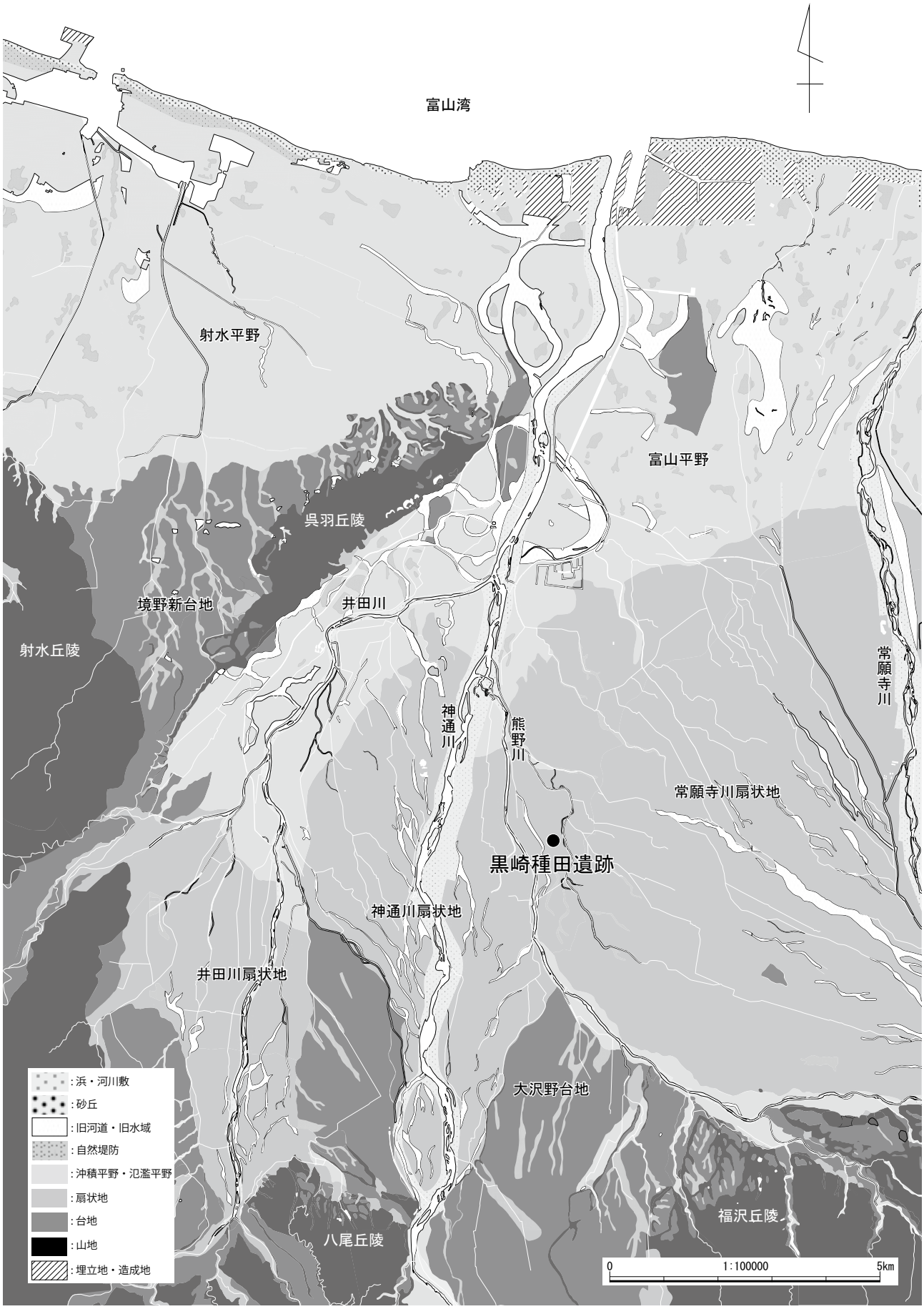
調査地の西約 600 ｍは神通川支流の熊野川が流れ、東約 300m は同じく支流である土川が流れる。また、すぐ西側は市道神通町蜷川線に沿って、蜷川の地名の由来となった巻貝の生息する蜷川川が流れている。蜷川川は現在は細い流路であるが、かつては幅広い河道であった。こうした北流する複数の河道の間に集落が形成されたことがわかる。これまで周辺で行った試掘調査等の結果によると、シルト層の下に礫層が堆積するが、その検出深度は場所によって差がある。旧地形に高低差があったことがうかがえ、微高地を選んで集落が営まれたことが推測される。また、西の熊野川を挟んだ神通川右岸域は、任海宮田遺跡、友杉遺跡など古代･中世を中心とした大規模集落を形成した扇状地が広がる。

遺跡が所在する富山市黒崎地区は、元々水田地帯であったが、国道 41 号が南北に通ったり、北陸自動車道開通で富山インターチェンジが設置されたりしたことで、遺跡の北部付近は工場や企業事務所が多数立地することとなった。また、今回調査区に近い遺跡南部付近もアパート等が相次いで建築されるなど、富山市内でも近年開発が多い地域のひとつである。

調査区の現況は水田で、標高 22.80 ｍである。東・南側は店舗や道路が近接している。



第３図　黒崎種田遺跡位置図



第４図　富山平野の地形分類図

第２節　歴史的環境

1　周辺の遺跡

令和２年７月末時点で、富山市には 1043 ヶ所の遺跡が所在する。黒崎種田遺跡を含む一帯は、扇状地の扇端付近にあり、水を得やすく多くの集落が形成された。特に古代以降は、複数の大規模集落が展開することが発掘調査で明らかになっている。

旧石器時代の遺跡は、本遺跡周辺では確認されないが、もう少し広範囲で見ると、西の神通川左岸にある呉羽丘陵、南側の船倉野・大沢野台地などで遺跡が知られている。

縄文時代も遺跡分布は希薄だが、晩期にやや認められるようになる。本遺跡の東にある吉岡遺跡では晩期後葉の土坑や石組炉を検出したほか、上野井田遺跡、若竹町遺跡、悪王寺遺跡、大利屋敷遺跡などでも縄文土器が出土している。

弥生時代は、前期の遺跡は未確認である。中期は経力遺跡で土器を伴う土坑を確認している（富山市教委 2002)。本遺跡から約 4km 北の市街地にあり、同じ常願寺川扇端部に位置する千石町遺跡では、中期の方形周溝墓５基を検出した。富山市内では唯一の弥生中期の墓域である（富山市教委 2015)。後期になると、県内全体で遺跡が急増するものの、本遺跡周辺は希薄である。南の友杉遺跡で後期後半の竪穴建物１棟が検出されている（富山県財団 2010)。

古墳時代も遺跡は少ない。本遺跡に近い扇状地では散布地が少数知られ、発掘調査でも小規模な集落遺構が確認されている程度である。友杉遺跡では土師器を伴う前期の土坑１基、上新保遺跡では須恵器を伴う後期の土坑１基､朝菜町鳥ノ木遺跡では試掘調査で後期の遺構と須恵器を検出した｡墳墓は、南の大沢野台地に伊豆宮古墳、福居古墳がある。伊豆宮古墳は 15 × 23m の方形墳または八角形墳と推定され、河原石積の横穴式石室から鉄器片が出土している（富山市教委 1988)。福居古墳からは、6 世紀中葉の高霊タイプの陶質土器とされる（定森 1989）脚付有蓋長頸壺が出土したと伝わるが、墳丘や出土状態は不明である。

古代になると開発が急速に進み、周辺の神通川・熊野川流域の扇状地で大規模集落が複数営まれる。主な遺跡は、本遺跡の南に任海宮田遺跡、友杉遺跡、南中田Ｄ遺跡、吉倉Ｂ遺跡、南東に上野井田遺跡、上新保遺跡、朝菜町鳥ノ木遺跡などがある。隣接する任海宮田遺跡・友杉遺跡の両遺跡は、特に規模が大きく、約 270 棟に及ぶ竪穴建物･掘立柱建物･礎石建物を検出し、「城長」･「観音寺」･「寺」･「墾田」･「家」･「馬甘（うまかい）」など 800 点以上に及ぶ墨書土器、石帯の帯飾り、緑釉陶器、奈良三彩火舎などが出土した。これらは８世紀以降に扇状地の開発を目的として進出してきた開墾集落とされる(富山県財団 2008a・2010)。上新保遺跡でも竪穴建物や掘立柱建物 100 棟以上を検出しており、農村集落が想定されている（富山市教委 2000・2009a・2009b)。

中世も多くの集落がみられる。任海宮田遺跡、吉倉Ｂ遺跡、友杉遺跡などのように古代集落と同じ遺跡で確認される例も多い。この時期は、熊野川左岸から神通川を越えた一帯が徳大寺家領宮河荘に比定される（富山県財団 2008b)。この推定域内において、神通川右岸側では任海宮田遺跡、任海鎌倉遺跡、吉倉Ａ･Ｂ遺跡、南中田Ａ～Ｄ遺跡、栗原楮原遺跡など、神通川左岸側では道場Ⅰ・Ⅱ遺跡、中名Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ・Ⅵ遺跡、清水島Ⅱ遺跡、持田Ⅰ遺跡など、多数の集落が確認されている。これら遺跡は各地域において集中して所在し、さながら一連の中世遺跡群を形成するかのような様相を呈する。

一方、黒崎種田遺跡を含む熊野川右岸域は、吉岡遺跡、経力遺跡、上新保遺跡で集落が確認されているが、上記した左岸域ほど大規模でない。また、蜷川館跡、上熊野城跡、太田本郷城跡、興国寺館跡、今泉城跡などの城館遺跡が分布している。

1 黒崎種田遺跡　2 蜷川館跡　3 黒瀬大屋遺跡　4 八日町遺跡　5 上野井田遺跡　6 朝菜町鳥ノ木遺跡　7 上新保遺跡
8 興国寺館跡　9 経力遺跡　10 吉岡遺跡　11 若竹町遺跡　12 悪王寺遺跡　13 上熊野城跡　14 友杉遺跡　15 任海宮田遺跡
16 吉倉A遺跡　17 吉倉B遺跡　18 南中田A遺跡　19 南中田B遺跡　20 南中田C遺跡　21 南中田D遺跡　22 任海鎌倉遺跡
23 栗山楮原遺跡　24 大利屋敷遺跡　25 伊豆宮古墳　26 今泉城跡　　※ ●は発掘調査地点

第5図　黒崎種田遺跡周辺の遺跡

2　黒崎種田遺跡および隣接遺跡の調査成果

黒崎種田遺跡は、北が黒瀬大屋遺跡、西が八日町遺跡、南が蜷川館跡に接する。この 4 遺跡ではこれまで約 160 件の本調査、試掘調査、工事立会を実施している。市内では多くの調査を行っている地域で、遺跡の所在状況と性格がおおよそ把握されている。以下、遺跡が見つかっていない八日町遺跡を除く 3 遺跡について、本調査の成果を中心に概要を記す。

黒崎種田遺跡ではこれまで平成16年度と17年度に、駐車場造成、工場増築に伴う2件の本調査を行っている。16 年度調査は、中世（12 ～ 13 世紀）の掘立柱建物、竪穴状土坑、井戸等を検出した。灯明皿、青磁の碗・盤、青白磁の梅瓶など、一般庶民とは異なる特定階層の生活にかかわるものが多くみられる。17 年度調査は、16 年度調査区の東隣の敷地で行い、古代の竪穴建物 1 棟、大溝等が見つかった（富山市教委 2005）。こうした本調査のほか、試掘調査も多く実施しているが、遺跡が確認されているのは遺跡の北部がほとんどで、今回調査区に近い遺跡南部では、他に 1 件確認されているのみである。

黒崎種田遺跡の北に隣接する黒瀬大屋遺跡は、過去 4 件の本調査を行っている。平成 15 年度は共同住宅建築に伴い、古代の土坑・井戸を検出した（富山県埋蔵文化財センター 2004）。平成 18 年度には賃貸住宅建築伴う調査で、古代と中世の溝・土坑を検出した（富山県埋蔵文化財センター 2007）。平成 21 年度の個人住宅建築に伴う調査では、古墳時代、白鳳時代、中世の土坑・溝を検出した。遺物は古墳時代から近世まで各時代のものが出土している。古墳時代に小規模な集落が営まれ、白鳳時代は集落の縁辺部と推定される（富山市教委 2014）。平成 29 年度の宅地開発に伴う調査では古代の集落を確認した。一面庇掘立柱建物 1 棟、竪穴建物 3 棟のほか、溝、土坑等がある。施釉陶器や墨書・刻書土器が出土した。7 世紀に集落が形成され、8 世紀後半～ 9 世紀前半、9 世紀中頃～後半、9 世紀後半～ 10 世紀初めの 3 時期の変遷が認められている（富山市教委 2018）。

南に位置する蜷川館跡は、これまで本調査は行われていないものの、館の中心部にあたる最勝寺境内において、高岡徹氏らが現存土塁や文献に基づく館のプラン復原、石造物調査等を実施・報告している（高岡編 1998）。それによると、館は南北 2 つの郭からなり、周囲は土塁と堀がめぐる。堀を除く規模は南北 250m、東西 110m という県内最大級の居館となることが明らかにされた。また、境内に分布する石造物や採集遺物は、古代の須恵器を除けば、14 ～ 16 世紀のものがある。石造物は 15 世紀代が最も多く、16 世紀は減少するという傾向が示された。

なお、蜷川館跡の包蔵地範囲のうち、郭の外にあたる周辺部ではこれまで 7 件の試掘調査を行っているが、遺構が確認された例はない。

以上の黒崎種田遺跡、黒瀬大屋遺跡、蜷川館跡の調査成果を踏まえると、黒崎種田遺跡の北部以北から黒瀬大屋遺跡の中部以南にかけて主に古代集落が営まれ、他に古墳時代、中世の小規模な集落遺構が散在するという状況が認められる。一方、今回調査区は黒崎種田遺跡の南端部に位置し、遺構はほぼ中世で占められ、区画溝や金付き土器の出土等、一般集落とは様相が異なる。今回調査区は、上記の黒崎種田遺跡北部や黒瀬大屋遺跡の状況とは一線を画し、「総括」でも述べるとおり、むしろ南の蜷川館跡と関連させて把握されるべきものと考える。したがって、これまでの調査から 3 遺跡の様相を大きく捉えると、黒瀬大屋遺跡から黒崎種田遺跡北部にかけて主に古代集落が、黒崎種田遺跡の中部にやや空白地帯があり、同遺跡南端部から蜷川館跡にかけて中世の居館関連の遺構が広がる状況を想定できる。

（野垣）

第３章　調査の方法と成果

第１節　調査の方法

区　割　調査区は、当初２ヶ所に分かれ、北西部分をＡ区、南東部分をＢ区と設定した。調査途中にＡ区の南に遺跡が広がることが判明し、Ｃ区として追加調査を行った（第１図）。現地発掘作業時はこの区割りに従って遺構検出、遺物取り上げを行った。第２節以降の遺構の記述においては、全体座標から、第６図のとおり、東西方向、南北方向をそれぞれ10mごとにａ～ｄ、１～６にわけ、その組み合わせによってa2区などという具合に遺構の位置を示す。

発掘作業　表土掘削は、バックホウを用いて監理担当者立ち会いのもと、発掘作業担当者が指示を行い、北西部から順次実施した。ほぼ表土直下が検出面の地山であるため、慎重に作業を行った。

表土掘削後、スコップや鋤簾等を用いて遺物に注意を払いながら人力により遺構検出を実施した。出土遺物は、取り上げ番号を付して地区毎に取り上げを行った。

追加調査を行ったa3・４区、b3・４区（旧Ｃ区）付近は表土下に包含層が確認された。トレンチによる層位の確認を行い包含層には遺物が希薄なため、監理担当者立ち会いのもと、バックホウによるすき取りを慎重に行い、遺構検出面まで掘削した。

遺構掘削は、移植ゴテや手ガリ等の道具を用いて半裁を行った後、土層の写真撮影、図面による記録作業を行った。記録作業の後、完掘のための掘削を実施し、完掘後に個別遺構の写真撮影とトータルステーションによる記録作業、ドローンでの空中写真撮影による写真測量を行った。遺構掘削作業終了後、空中写真等の全体撮影を実施した。

調査終了後、井戸断面の断ち割り作業を行った。バックホウと人力作業を併用して慎重に作業を行い、断面記録を作成した。調査完了後は、調査区の埋め戻しを行った。

記録作業　図化作業はトータルステーションと空中写真測量を併用し、全体図は1/100、遺構平面図・断面図は1/20、遺物出土状況図の一部は1/10で作成した。測量基準は世界測地系第Ⅶ系による。写真は2000万画素以上のフルサイズの一眼レフカメラで撮影を行った。

自然科学分析　遺構の時期比定のため３遺構から出土した木材２点とウマの歯１点の放射性炭素年代測定を行った。また、木材の利用状況を調査するために樹種同定を行った。出土した漆器については、製作技法を明らかにする目的で樹種同定、塗膜構造分析を行った。区画溝SD54とSX49については、環境状況を調べるため土壌分析を行った。分析は株式会社パレオ・ラボ、株式会社吉田生物研究所に委託して実施した。

保存処理　木製品が多数出土したため、残存状態のよいものを中心に、漆器５点、井戸曲物４点、草履芯板１点、横槌１点、桶（曲物）２点、柄２点、編み物１点、下駄２点、切羽１点、井戸枠部材等の保存処理を、実測・写真撮影後に行った。処理方法は、高級アルコール法、糖アルコール含侵法とし、それぞれ株式会社吉田生物研究所、株式会社エイ・テックに委託した。

整理作業　遺物コンテナ45箱、長尺コンテナ９箱、井戸枠用大型コンテナ６箱が出土した。整理等作業は、一部発掘作業と併行して行い、遺物洗浄・注記・接合を実施した。遺跡の時期、性格が把握できるように、残存状態が良いもののほか、破片を含めて特徴的な遺物を選定し実測作業を行った。遺物撮影は2000万画素以上のフルサイズ一眼レフカメラを使用した。遺構実測図、遺物実測図のトレース・編集作業はデジタルトレースで行った。（阿部）

第２節　層　序

調査当時は休耕田である。地表面の標高は 22.80m、地山は 22.50m でほぼ平坦である。

約 30cmの耕作土等の直下が地山面である。a3・4 区、b3・4 区付近は炭化物粒を少量含む黒褐色土層の包含層が確認できる（第 9 図 SD50・51・52・SX52・53 断面図 2・3 層）。2・3 層は、後世の河川氾濫等の堆積層である。地山は黄褐色粘土質シルトでしまりが強く、鉄分を多く含む。調査区の北端部分､南端部分は５～30cmの円礫を多く含む。（阿部）

第３節　遺　構

1　概　要

約 203 基の遺構を確認した。すべて同一遺構面での検出である。柵列(SA)の可能性のある遺構 1 列、掘立柱建物（SB）1 基または 2 基、溝（SD）18 条、井戸（SE）12 基、土坑（SK）26 基、ピット（SP）137 基、不明遺構（SX）8 基である。ほぼ表土直下で遺構が検出されていることや井戸等の残存状況をみると、調査区全体にわたり、遺構の上層部が全体的に削平されていることは明らかである。

遺構の時期はほぼ中世で占められ、13 ～ 15 世紀を主体とする。SD96 など近世遺構や 16 世紀以降の遺物も一部認められることから、遺物が出土していない遺構のなかに 16 世紀や近世の遺構が含まれる可能性はある。

2　柵　列（SA）

SA1（SP55・SP56・SP57）(第 24 図)　c・d4 区に位置する。東西方向に 3 基のピットが並ぶ。柱間は約 4.80m、5.50m である。SP55 から礎板とみられる板材が出土していることから柱穴と考え、規模等が類似する 3 基を結んだが、間隔が広く、他の遺構の方向ともややずれることから、柵列遺構とはならない可能性もある。そのため図では点線として結んだ。SP55 は円形で、長軸 0.38m、短軸 0.34m、深さ 0.17m である。断面形状は箱形で、底面はやや丸みを帯びる。底面で板材（2）が出土し、礎板と考えられる。SP56 は楕円形で、長軸 0.44m、短軸 0.38m、深さ 0.25m である。断面は V 字形である。出土遺物はない。SP57 は楕円形で、長軸 0.48m、短軸 0.44m、深さ 0.39m である。断面は箱形、底面は平坦である。中世土師器(1)が出土している。（阿部）

3　掘立柱建物（SB）

SB1（SP148・SP161・SP165・SP204）(第 14 図)　a3・4 区に位置する。SP204 から径 0.20m の先端が加工された柱根とみられる木材（6）が立った状態で出土し、SP148・SP161・SP165 では柱を据えたとみられる一段深い掘り込みがあることから掘立柱建物と考える。1 × 1 間で、規模は北辺 4.85m、東辺 4.56m、南辺 4.42m、西辺 4.84m である。ただし、平面形が歪なため、SP148 と SP204、SP161 と SP165 という 2 基ずつの組み合わせで、それぞれ時期の異なる門のような遺構となる可能性もある。

SP148 は円形で、長軸 1.00m、短軸 0.95m、深さ 0.22m である。断面は緩やかな傾斜で段をつけて掘られている。中央部に柱痕とみられる窪みがある。中世土師器（3・4)、珠洲（5）が出土している。

SP161 は不整形で、長軸 0.65m、短軸 0.40m、深さ 0.51m である。南西部分がピット状に深く掘り込まれる。覆土は深い掘り込み部分が黒褐色土、上層に暗灰黄色土が堆積する。出土遺物はない。

SP165 は不整形で、長軸 0.65m、短軸 0.46、深さ 0.68m である。北側が深く掘り込まれ、壁面はややオーバーハングしている。覆土は単層である。中世土師器の小片が出土している。SP204 は円形で、長軸 0.36m、短軸 0.30m、深さ 0.34m である。断面は箱形を呈する。柱根が出土した。

本遺構は、区画溝と推定される SD50 と SD199 の西側に位置しており、両溝の間を区画溝の陸橋部と見るならば、屋敷の出入口に置かれた門などの可能性がある。なお、SP204 の柱根の放射性炭素年代測定を行った結果、2 σ暦年代範囲で 1314-1357 cal AD (58.3%)、および 1387-1414 cal AD (37.1%) で、14 世紀前半から 15 世紀前半の暦年代を示した。SP148 出土の中世土師器が 15 世紀とみられることを考え合わせると、遺構の時期は15 世紀前半と推測される。 (基峰)

4 溝 (SD)

SD06 (第 7 図) b1 区に位置し、東西に延びる。検出長 2.11m、幅 2.00m、深さ 0.04m である。底面は平坦である。覆土は炭化物を少量と鉄分を含む灰褐色土と、鉄分を含む褐灰色土である。出土遺物はない。

SD08 (第 7 図) a2 区に位置する。南北に延び、重複する SK07・SP33 より古い。残存長 3.45m、幅 0.74m、深さ 0.10m である。底面はやや平坦である。覆土は炭化物と鉄分を少量含む褐灰色土である。中世土師器 (7・8)、SK07 との境付近から鉄滓が出土している。15 世紀と考えられる。

SD15 (第 8 図) b3 区に位置し、東西に延びる。検出長 1.86m、幅 0.99m、深さ 0.20m である。底面は平坦である。覆土は炭化物を少量含む黒褐色土とにぶい褐色土である。中世土師器の小片が出土している。

SD34 (第 7 図) a2 区に位置し、北西－南西に延びる。検出長 3.47m、幅 0.77m、深さ 0.15m である。底面は丸みをもつ。覆土は鉄分を含む褐灰色土と炭化物少量と鉄分を含む灰褐色土である。出土遺物はない。

SD50 (第 8・9 図) a2・3 区、b3 区に位置する。西は調査区外に続く。ほぼ直角に曲がる東西、南北方向からなる溝である。南端は SD54 と重複し、それより新しい。規模は、東西溝が検出長約 9.88m、最大幅 2.78m、最小幅 1.66m で、南北溝が長さ 7.20m、最大幅 2.55m、最小幅 1.80m である。斜めに掘り込まれ、底面は平坦である。検出面からの深さは 0.75m である。上層に地山土を多量に含む褐灰色土層、その下に黒色土層が堆積する。最下層は地山砂が多量に混入した黄灰色土層が堆積する。出土遺物は中世土師器 (9・10)、青磁 (11 ～ 13)、越前 (14)、珠洲 (15 ～ 20)、古瀬戸、折敷 (21)、刀子の鞘(22)がある。屋敷地周囲を巡る区画溝と考えられる。13 世紀から 15 世紀の遺物が出土している。他遺構との重複関係も考慮すると時期は 15 世紀と考えられる。

SD51 (第 8・9 図) a3 区に位置し、西側は調査区外へ続く。調査区際の西端部でわずかに屈曲している状況が認められることから、東西方向の溝が、南へ小さく屈曲した後、すぐ端部になるという形状が推定される。東西の検出長は 3.50m、南北長は 3.78m である。緩やかな角度で掘り込まれ、底面は平坦となる。検出面からの深さは 0.54m である。SD50 と同様、上層に地山土を多量に含む褐灰色土層が堆積し、その下に黒色土層が堆積する。出土遺物は中世土師器 (23・24)、青磁 (25) がある。SD50 と同様に区画溝で、15 世紀と考えられる。

SD54 (第 8・9・10 図) a ～ d3 区、a ～ b4 区にかけて延びる東西と南北方向からなる溝である。東側及び南側の調査区外へ続く。調査区中央付近で屈曲し、屈曲部の西側は大きく張り出す。東西溝は、検出長 24.20m、幅約 0.79 ～ 2.40m、南北溝は、検出長 10.40m、幅約 1.79m である。張り出し部は、南北 6.04m ×東西 5.60m である。張り出し部の底面は中島状に盛り上がる部分 (南北 1.30m ×東

西 1.51m）がある。張り出し部を除いて、底面に向かって急傾斜で掘り込まれる。張り出し部は、傾斜が緩やかで、中島状の範囲を除いて底面は平坦である。検出面からの深さは、平均 0.65m である。張り出し部では、上層に礫混じりの褐灰色や黒褐色の土層が堆積し、西側を中心にその下に 3 ～ 8 ㎝大の礫を多量に含む暗オリーブ褐色の土層が堆積する。最下層には礫混じりの黒色土層が堆積する。礫を多量に含む暗オリーブ褐色土層と最下層の礫混じりの黒色土層はヘドロ状で、調査時は汚水のような臭いが強く、甲虫類の翅が多く見つかった。SD50・SX52・SX53 が重複し、それらよりも古い。出土遺物は中世土師器（26 ～ 34）、青磁（35）、古瀬戸（36・37）、越前（38）、八尾（39）、珠洲（40 ～ 54）、漆器椀（55）、木製品（56）、砥石（57）がある。SD50 との重複関係や出土遺物から 14 世紀代と考えられる。15 世紀の遺物も含むが、重複する後の時期の遺構の混入遺物と考えられる。屋敷地の外周を巡る区画溝と考えられ、張り出し部については、形状や底面に中島状の高まりが確認できること、覆土の状況などから､区画溝の一部を池状の施設としていた可能性がある。（基峰）

SD73（第 9・11 図） c3 区に位置する。南北に延び、北は調査区外に続く。重複する SD54 より古い。検出長 1.70m、幅 0.95m、深さ 0.52m である。底面は平坦である。覆土は 0.5 ～ 1.0 ㎝粒の炭化物を含む灰黄褐色土、0.5 ㎝の炭化物を少量含む黒褐色土と地山砂を多量に含む灰色土である。出土遺物はない。

SD91（第 12 図） c・d5 区に位置し、南西と北東は調査区外に延びる。検出長 3.60m、検出幅 0.38m、深さ 0.04m である。断面形は浅い皿状である。覆土は炭化物粒と地山砂を少量含む黒褐色土である。中世土師器の小片が出土している。（今井）

SD96（第 12･13 図） b5･6 区に位置する。北西－南東に延び､検出長 4.29m､検出幅 3.45m､深さ 0.67m である。底面は平坦である。覆土は上層に褐灰色の土が堆積し、黒色、黒褐色、灰色土が切り合うように堆積する。溝内に杭を打ち込み､長さ 2m 以上の横木を設置している状況が見られた。中世土師器、珠洲（58）、青磁、越中瀬戸（59・60）、伊万里（61）、磁器（62）、連歯下駄（63）、碁石（64）等が出土している。近世の遺構である。

SD100（第 12 図） b5 区に位置する。南北に延び、長さ 2.32m、幅 0.43m、深さ 0.10m である。覆土は 1 ㎜粒の炭化物を少量含み、褐灰色土と地山砂を多量に含む暗灰黄色土である。出土遺物はない。

SD152（第 8 図） a4 区に位置する。東西に延び、東端は SD199、西端で SP148（SB1）と重複し、それらより古い。また SK163 より新しい。検出長 4.68m、幅 0.58m、深さ 0.27m である。覆土は黄褐色を主体としたしまりの良い土である。中世土師器（65 ～ 70）、珠洲、古瀬戸の小片が出土している。14 世紀中頃と考えられる。

SD166（第 8・10 図） a4 区に位置する。南北に延び、長さ 1.34m、幅 0.26m、深さ 0.06m である。断面は逆台形状である。覆土は褐灰色を主体とした土である。中世土師器の小片が出土している。

SD187（第 8・10 図） b4 区に位置する。南北に延び、長さ 2.54m、幅 1.36m、深さ 0.32m である。断面は箱形で、底面はやや凹凸がある。覆土下層は植物の有機物が多く含まれ、自然木が多量に出土している。その後、地山を含む褐灰色土が流れ込み埋没したと思われる。出土遺物はない。

SD188（第 8･11 図） b4 区に位置する。南北に延び､北部は SK190 と重複する。残存長 1.80m､幅 0.53m､深さ 0.23m である。底面はほぼ平坦である。覆土は炭化物粒を含む暗灰黄色土である。中世土師器(71･72）が出土している。14 世紀中頃と考えられる。

SD189（第 8・11 図） b4 区に位置する。南北に延び、SK190 と重複する。残存長 1.43m、幅 0.45m、深さ 0.24m である。断面は逆台形状である。覆土は炭化物粒を少量含む黒褐色土である。中世土師器の小片が出土している。

SD197（第８・11 図） b3 区に位置する。湾曲しながら東西に延びる。重複する SD54 より新しいと考えられる。長さ 4.86m、幅 0.50m、深さ 0.40m である。覆土は黄褐色土を主体とする地山を含む土である。中世土師器（73･74）が出土している。14 世紀代と考えられる。（阿部･村上）

SD199（第８･11 図） a4 区に位置する。南北に延び、南は調査区外へ続く。検出長 4.83m、幅 1.20m、断面は緩やかに傾斜し、底面は平坦となる。深さは 0.22m である。上層に地山土を多量に含む褐灰色土、その下に黒色土が堆積する。出土遺物は中世土師器（75 ～ 78）、越前（79）、珠洲（80）、砥石（81）がある。15 世紀と考えられる。底面で SK201 を検出した。SD50 の南北溝の延長上にあり、方向も一致していることから、SD50 と一対の区画溝を形成する可能性がある。そうであるなら SD199 と SD50 の間の溝が途切れる部分は、出入口にあたる陸橋部と考えることができる。（基峰）

5 井 戸（SE）

北西から南東方向に直線的に並ぶように 12 基検出した。素掘り 2 基、木組 3 基、石組 7 基がある。水溜の曲物を配置しているものが 6 基ある。完掘後に断割りを行い、断面の確認と曲物の取り上げを行った。

SE01（第 15 図） a2 区に位置する素掘り井戸である。掘り方は楕円形を呈し、長径 2.20m、短径 2.00m、深さ 0.54m である。覆土は上層に炭化物が少量混じる。中世土師器（82）、珠洲（83）、八尾（84）、底面付近から漆器椀（85）、草履芯板（87）、板材（86）が出土している。13 世紀後半と考えられる。

SE02（第 15 図） a1 区に位置する石組井戸である。掘り方は円形を呈し、長径 1.77m、短径 1.62m、深さ 0.97m である。円礫を円形に積み上げ、底面に径 0.30m、高さ 0.33m 水溜の曲物を配置している。上層は黒褐色を基調とした粘土質シルトで、炭化物や有機物を含み、この層から破片を含め箸（95 ～ 97）が 40 点近く出土している。曲物内は小礫を含む黒色シルトである。中世土師器（88 ～ 91）、青磁（92）、被熱した珠洲（93・94）や礫（98）が出土している。14 世紀中頃と考えられる。

SE03（第 15 図） a2 区に位置する石組井戸である。平面は円形を呈し、長径 1.80m、短径 1.64m、深さ 1.12m である。円礫を円形に積み上げ、底面に水溜の曲物を配置している。曲物は径 0.34m、高さ 0.13m である。曲物の上面レベルから石臼（106）が出土している。覆土は黒色を基調とし、多量の崩落した礫が含まれる。中世土師器（99 ～ 101）、珠洲（102 ～ 105）、木製品が出土し、被熱した珠洲や木片を含む。14 世紀中頃から 15 世紀と考えられる。

SE05（第 16 図） b2 区に位置する木組井戸である。掘り方は楕円形で、長径 1.38m、短径 1.21m、深さ 0.94m である。深さ 0.40m に隅柱と横桟、縦板が組まれている。横桟は一辺約 0.70m の正方形に組まれている。隅柱は上部の大半が欠損しており、横桟の各角の上面に配置している。縦板は幅 0.14m 前後、厚さ 0.01m 前後で、横桟の外側に並べている。各板の上部は欠損している。横桟と隅柱を交互に乗せた方形縦板組型の井戸枠と考えられる。上部は削平され、井戸枠の下部のみ残っている。井戸枠の底面には径 0.55m、高さ 0.23m の曲物がある。掘り方内は多量の円礫が混入しており、井戸枠の外側を円礫で補強していたか、石組井戸を木組み井戸に造り替えた可能性がある。覆土からは炭化物、多量の燃えた木片が出土している。曲物内は暗灰色を基調とした粘土質シルトである。中世土師器（107）、白磁（108）、越前（109）、木製品（110 ～ 124）が出土している。13 世紀後半と考えられる。

SE48（第 16 図） a1 区に位置する木組井戸である。掘り方は楕円形で、長径 1.81m、短径 1.36m 以上、深さ 0.88m である。覆土には多量の礫が混じる。本遺構付近の地山は多くの礫を含むことから、廃棄後に流れ込んだ可能性がある。深さ 0.60m に、横桟と数枚の縦板で井戸枠が方形に組まれている。横桟は一辺約 0.65m で、縦板は内側に倒れ破損が大きい。隅柱の有無が確認できないが横桟同士が組ま

れているため、横桟と隅柱を交互に乗せた方形縦板組型の井戸枠ないしは横桟のみを使用する方形縦板組型の井戸枠と考えられる。須恵器、中世土師器（125 ～ 132）、珠洲（133 ～ 135）、青磁（136）、古瀬戸（137）、越前（138）、箸（139）、板材が出土している。13 世紀後半と考えられる。

SE58（第 16 図） c3・4 区に位置する石組井戸である。掘り方は円形で、長径 1.30m、短径 1.30m、深さ 0.74m である。円礫を円形に積み上げている。底面に径 0.33m、高さ 0.19m の曲物を配置している。覆土は褐灰色を基調とし、炭化物が少量混じる。曲物の周辺は黒褐色土を基調とする。長さ 10 ㎝以上の箸が 44 点（破片数）出土している。他に須恵器（140）、中世土師器（141 ～ 145）、珠洲、青白磁（146）、箸（147・148）、被熱した木片が出土した。15 世紀末～ 16 世紀初頭頃と考えられる。

SE61（第 17 図） c3・4 区に位置する石組井戸である。掘り方は楕円形を呈し、長径 1.30m、短径 1.13m、深さ 0.81m である。壁面の中程がオーバーハングしている。井戸の石組は底面の一段分のみが残り、底面中央に曲物（161）を配置している。北東部の石の上面に漆器と箸 2 本が並んだ状態で出土していることから、井戸の使用後、廃棄する際に、上部の石組みを取り外したうえで祭祀行為が行われたことが推測できる。また、曲物内の底面には竹（165）が刺さった状態で出土しており、埋めた際の息抜きと考えられる。中世土師器（149 ～ 156）、珠洲、木製品が出土しているが、中世土師器と木製品が大半を占める。木製品は、漆器皿（158）、漆器椀（159・160）、差歯式の高下駄（162・163）、横槌（164）、箸（166 ～ 168）が出土している。14 世紀と考えられる。なお、完掘後の断割りの際、近世の越中瀬戸（157）が 1 点出土したが、他の出土遺物との時期差が大きい。断割りは重機を併用し、周辺部を含めて広めに掘削したことから、別の遺構に含まれていたものが混入した可能性が高い。

SE64（第 17 図） c4 区に位置する素掘り井戸である。掘り方は楕円形を呈し、長径 1.55m、短径 1.41m、深さ 0.76m である。箱形の断面形を呈する。覆土には木片・炭化物を含む。中世土師器（170）、八尾（169）、箆状木製品（171）、箸（172・173）、板状木製品（174）が出土している。箸は破片を含め 3 点以上出土している。14 世紀前半と考えられる。

SE65（第 17 図） b4 区に位置する石組井戸である。掘り方は楕円形である。長径 1.75m、短径 1.38m、深さ 0.80m である。周囲は円礫が円形に積み上げられ、曲物上面のレベルで底面に小円礫が敷かれている。曲物（176）は径 0.53m、高さ 0.50m で、他の井戸の曲物と比べて高さがある。中世土師器（175）、曲物底板（177・178）、箸、不明部材が出土している。13 世紀末から 14 世紀初頭と考えられる。

SE81（第 18 図） c4 区に位置する木組井戸である。西半部のみ検出し、掘り方は楕円形状である。長径 1.54m、残存短径 0.91m、深さ 0.78m である。深さ 0.45m に横桟と隅柱 2 本と縦板が方形に組まれている。横桟は一辺約 0.80m で、隅柱の上部は欠損している。横桟の角の上に乗せている。縦板は幅 0.10m 前後、厚さ 0.01m で、横桟の外側に隙間なく並ぶが上部は欠損している。横桟と隅柱を交互に乗せる方形縦板組型の井戸枠と考えられる。中世土師器（179・180）、青磁（181）、八尾（182）、珠洲（183）箸（189 ～ 192）、木製品（184・188）、十字相欠きつぎの部材（186・187）、抉りを施した部材（185）などが出土している。箸は破片数で 29 点と多い。14 世紀と考えられる。

SE83（第 18 図） c5 区に位置する石組井戸である。掘り方は円形で、長径 1.47m、短径 1.34m、深さ 1.06m である。掘り方内に円礫を円形に積み上げている。覆土上層は崩落した石を含む。下部は黒褐色を基調とした遺物を含む土層で、底面は平坦な砂層である。中世土師器、古瀬戸（193）、瓦質土器（194）、珠洲（195・196）、漆器椀（197）、曲物底板（198）、箸（199）が出土している。曲物底板は表面に漆が多量に付着している。15 世紀後半と考えられる。

SE108（第 18 図） c5 区に位置する石組井戸である。掘り方は楕円形で、長径 1.85m、短径 1.50m、深さ 1.14m である。掘り方内は円礫を円形に積み上げている。底面は水溜めのためか一段深く掘り込

まれている。覆土上層に多くの崩落した石を含む。中世土師器（200）、珠洲（201）、燃えた木片が出土している。13 世紀中頃から 14 世紀中頃と考えられる。（今井）

6　土　坑（SK）

SK07（第 19 図）　a2 区に位置する。東側の一部のみ検出した。平面は不整形で、検出長 2.39m、幅 1.84m、深さ 0.35m である。底面は平坦で礫が多く検出された。覆土はしまりの強い褐灰色土、下層に炭化物を少量と鉄分を含む黒褐色土が堆積している。中世土師器（202 ～ 204）、珠洲（206･207）、青磁（205）、越前（208）、古瀬戸の小片、鉄滓が出土している。15 世紀後半と考えられる。

SK14（第 19 図）　b2 区に位置する。西側の一部のみ検出した。平面は方形状で、長さ 2.15m、検出幅 1.44m、深さ 0.20m である。浅い皿状を呈する断面形である。覆土は褐灰色の覆土を再び掘削し、黒褐色土が下層、炭化物を少量と鉄分を含む褐灰色土が上層に堆積する。再度掘り込みを行った範囲から円礫が多量に出土することから、意図的に投げ込まれた可能性が高い。中世土師器（209・210）、珠洲、火打石（211）が出土している。

SK16（第 19 図）　b3 区に位置し、SD15 の底面で検出した。平面は不整形で、検出長 0.59m、幅 0.50m、深さ 0.06m である。重複する SD15 により上層は失われ、底面のみが残る。覆土は炭化物と鉄分を少量含む黒褐色土である。出土遺物はない。（今井）

SK35（第 20 図）　a2 区に位置する。重複する SP36 より新しい。平面形が長方形に近い土坑で、長軸 4.40m、短軸 1.60m、深さ 0.43m である。北辺に南北 1.15 m、東西約 1.2 mの半円状の張り出しが付随する平面形態を呈する。断面は急傾斜で掘り込まれ、底面は北から南に向かい若干の傾斜がみられる。覆土は上層に炭化物と鉄分を少量含み、径 1 ～ 10 cmの 7.5YR3/1 黒褐色シルト粒が 30 ～ 40% 含む灰褐色土が全体に堆積し、下層は SX49 の埋土と混じる黒褐色土が堆積する。SX49 の円礫を取り除き、土坑部分に配置している可能性もある。中世土師器（212 ～ 214）、珠洲（215･216）、八尾（217）、栓（218）、棒状木製品（219）が出土している。出土遺物は 13 世紀から 15 世紀と幅があるが、中世土師器の年代から遺構の時期は 15 世紀と考えられる。平面形態などから SD50 で区画された屋敷地に付随した馬小屋遺構と推測される。SX49 は馬小屋に伴う排泄溜めの可能性を指摘しておく。本遺構の類例等については、第 5 章第 2 節で詳しく検討する。（鹿島）

SK38（第 19 図）　b3 区に位置する。重複する SD50 より古い。平面は楕円形で、残存長 1.33m、幅 1.21m、深さ 0.16m である。緩やかに掘り込まれ、底面は丸みをもつ。覆土は下層に鉄分を含む黒褐色土が堆積する。中世土師器（220）、珠洲（221）、越前（222）が出土している。14 世紀と考えられる。

SK39（第 19 図）　b3 区に位置する。重複する SD50、SK38、SD15 より古い。平面は不整形で、残存長 1.55m、幅 1.22m、深さ 0.20m である。緩やかに掘り込まれる。覆土は上層に炭化物と鉄分を少量と小礫を含む灰褐色土、下層に鉄分を含む灰褐色砂質シルトが堆積する。中世土師器の小片が出土している。

SK59（第 21 図）　c3 区に位置する。平面は楕円形で、長軸 0.58m、短軸 0.51m、深さ 0.06m である。浅い皿状の断面形を呈する。覆土は地山を含むにぶい黄褐色土である。中世土師器（223）が出土している。

SK60（第 21 図）　c3 区に位置する。南部は SD54、東部は試掘トレンチの掘削により失われている。残存長 1.01m、幅 0.91m、深さ 0.44m である。覆土は、にぶい黄褐色土である。中世土師器（224）が出土している。13 世紀末～ 14 世紀初頭と考えられる。（今井）

SK62（第 21 図）　b・c3 区に位置する。平面は隅丸方形で、長さ 1.60m、残存幅 0.95m、深さ 0.83m

である。SD54の底面付近と、北壁から西壁にかけて円礫を積み上げている。底面も円礫が露出し、凸凹が見られる。上層は、にぶい黄褐色・黄灰色の粘質土、灰オリーブ色・黒褐色の砂質土が斜めに堆積する。下層の上位には、にぶい黄褐色・褐灰色の砂質土、下位に地山砂と礫を含む黄褐色・暗灰黄色の砂質土が堆積する。中世土師器の小片、青磁（225）、柄杓のものとみられる柄（226・227）と曲物（228）が出土した。SD54の底面から連続するように壁面を円礫で覆っていることから、SD54と一連の遺構の可能性がある。SD54は、屋敷の外周を巡る区画溝と考えられることから、区画溝に接して、捕獲した魚を飼っておく生け簀や何らかの貯蔵施設であった可能性もある。（基峰）

SK78（第21図） c4区に位置する。東部は試掘トレンチにかかる。平面は楕円形で、長さ1.10m、残存幅0.84m、深さ0.55mである。壁面は垂直に近い角度で掘られ、底面は中央がやや低くなる。覆土は炭化物粒を少量含み、下層は黒褐色を主とした堆積土である。素掘り井戸の可能性もある。中世土師器の小片が出土している。

SK79（第21図） c4区に位置する。平面は楕円形で、長軸0.96m、短軸0.83m、深さ0.45mである。覆土は下層に0.1～0.5cm粒の炭化物と地山砂少量を含む黒色土が厚く堆積し、上層に炭化物粒を含む黒褐色土、黄灰色土、黒色土が堆積している。中世土師器（229）が出土している。13世紀末～14世紀初頭と考えられる。

SK80（第22図） b4区に位置する。平面は楕円形で、長軸0.94m、短軸0.73m、深さ0.29mである。底面は凹凸がある。覆土は、炭化物粒を少量含む褐灰色土に多量の円礫が混じる。中世土師器（230）、珠洲（231）、被熱した円礫（232）が出土している。15世紀後半と考えられる。

SK94（第22図） c4・5区に位置する。平面は円形で、長軸1.19m、短軸1.08m、深さ0.30mである。壁面は急角度で掘り込まれ、底面はほぼ平坦である。覆土は炭化物粒を少量と円礫を多く含む黒褐色土とオリーブ黒色土が堆積する。中世土師器の小片が出土している。

SK95（第22図） b4区に位置する。平面は楕円形で、長軸0.82m、短軸0.50m、深さ0.09mである。浅い皿状の断面形である。覆土は円礫や炭化物粒を含む褐灰色土である。出土遺物はない。

SK99（第22図） b5区に位置する。平面は楕円形で、長軸1.39m、短軸0.98m、深さ0.14mである。浅い皿状の断面形で、底面はほぼ平坦である。底面に、にぶい黄橙色土が薄く堆積し、その他は炭化物粒を少量含む黒褐色土である。中世土師器の小片が出土している。

SK102（第22図） b5区に位置する。平面は隅丸方形で、長軸1.35m、短軸1.02m、深さ0.65mである。壁面の南側はほぼ垂直、北側は緩やかに掘り込まれる。北部に堆積する黄褐色覆土を掘り込むように、南側の覆土が堆積する状況が認められる。井戸の可能性もある。中世土師器（233）と土錘（234）が出土している。15世紀と考えられる。

SK137（第22図） c4区に位置する。SX77の底面で検出した。西部は試掘トレンチにより失われている。平面は不整形で、長さ0.57m、残存幅0.43m、深さ0.30mである。ほぼ垂直に掘り込まれ、底面は平坦である。覆土は炭化物を少量含むオリーブ黒色土、黄褐色土、黒褐色土、黄灰色土が底面から順に堆積している。出土遺物はない。

SK163（第23図） a4区に位置する。SD152と試掘トレンチにより一部失われている。残存長0.41m、残存幅0.30m、深さ0.05mである。覆土は、にぶい黄色褐土の単層である。出土遺物はない。

SK164（第23図） a4区に位置する。平面は不整形で、長さ1.88m、残存幅0.68m、深さ0.17mである。底面は凹凸がある。覆土は黄褐色土、にぶい黄色褐土が堆積し、試掘トレンチの底面から中世土師器（235・236）が出土している。15世紀と考えられる。

SK168（第23図） b4区に位置する。平面は不整形である。長軸0.94m、短軸0.43m、深さ0.28mで

ある。南側は途中でテラス状となり、北側で一段深くなる。覆土は、にぶい黄褐色土、黄灰色土、黄色土、黄灰色土が順に堆積している。中世土師器の小片が出土している。

SK169（第23図） b4区に位置する。平面は不整形で、長軸1.13m、短軸0.41m、深さ0.21mである。底面は凹凸がある。覆土は灰白色土を主体とする。中世土師器の小片が出土している。重複するSK176より新しいことから13世紀以降である。

SK176（第23図） b4区に位置する。平面は不整形で、残存長1.17m、幅0.65m、深さ0.05mである。底面は若干凹凸がある。覆土は地山と炭化物粒を少量含む褐灰色の単層である。中世土師器と白磁の小片、青磁（237）が出土している。13世紀と考えられる。

SK179（第23図） b4区に位置する。重複するSP177より新しい。平面は不整形で、長軸0.69m、短軸0.61m、深さ0.43mである。垂直に近い角度で掘り込まれる。底面のにぶい黄褐色土と灰黄褐色土の上に円礫が検出され、その上に褐色土、にぶい黄褐色土、黄褐色土が堆積している。中世土師器の小片が出土している。柱穴の可能性もある。

SK184（第23図） b4区に位置する。重複するSP185より古い。平面は楕円形で、長軸0.65m、短軸0.46m、深さ0.51mである。ほぼ垂直に掘り込まれ、北壁はオーバーハングする。覆土は炭化物粒を含む灰白色土を主とする。中世土師器の小片が出土している。

SK190（第23図） b3･4区に位置する。平面は不整方形で、残存長1.74m、幅1.70m、深さ0.24mである。底面は凹凸がある。上層に灰白色土層が堆積し、その下に褐灰色土層が堆積する。中世土師器の小片、珠洲の小片、砥石（239）が出土している。（今井）

SK201（第11図） a4区、SD199の下層に位置する。平面は楕円形と推定され、長さ0.85m、残存幅0.61m、深さ0.33mである。上層に炭化物粒を含む黄灰色土、下層に砂質土を含む灰白色土と褐灰色土が堆積する。中世土師器（238）のほか、下層からウマの歯1体分が出土した。吻部を南に向け、左側を下にしてやや斜めの状態で、上下の歯列が噛み合った状態である。重複するSD199によって本遺構の上層は失われているが、出土状況から、頭部のみが埋納されたとみられる。歯の状態から、3～4歳のメスと思われる。ウマの歯については、第5章第1節で検討を行っている。遺構の重複関係から15世紀代のSD199より古く、14世紀の中世土師器が出土していることから14世紀代の遺構と考えられる。なお、ウマの歯について放射性炭素年代測定を行ったが、必要量のコラーゲンが抽出できず測定不能であった。（三島）

7 ピット（SP）

ピットは計137基検出した。ここでは遺物が出土するなどした主なものを記載し、その他は第2・3表の遺構一覧に示す。

SP33（第7図 SD08図） a2区に位置する。重複するSD08より新しい。平面は楕円形で、長軸0.65m、短軸0.50m、深さ0.24mである。東壁面がテラス状を呈する。覆土は黒褐色土である。中世土師器の小片が出土している。

SP36（第20図 SK35･SX49図） a2区に位置する。重複するSK35より古い。平面は円形で、長さ0.89m、残存幅0.51m、深さ0.14mである。底面は平坦である。覆土は炭化物と鉄分を少量含む灰褐色土である。古瀬戸（240）が出土している。13世紀～14世紀前半と考えられる。

SP43（第24図） a1区に位置する。平面は楕円形で、長軸0.69m、短軸0.45m、深さ0.22mである。覆土は、炭化物と鉄分を少量含む褐灰色土、黒褐色土が底面から順に堆積している。中世土師器（241）が出土している。15世紀前半～中頃と考えられる。

SP70（第24図） c4区に位置する。平面は円形で、長軸0.16m、短軸0.14m、深さ0.07mである。断面はU字状である。覆土はにぶい黄褐色土である。出土遺物はない。

SP71（第24図） c4区に位置する。平面は円形で、長軸0.27m、短軸0.25m、深さ0.08mである。断面はU字状である。覆土は、にぶい黄褐色土である。八尾（242）が出土している。13～14世紀と考えられる。

SP75（第24図） c4区に位置する。平面は楕円形で、長軸0.18m、短軸0.12m、深さ0.12mである。断面はU字状である。覆土は黒褐色土である。中世土師器（243）、越前が出土している。15世紀末～16世紀初頭と考えられる。

SP87（第24図） c5区に位置する。平面は円形で、長軸0.32m、短軸0.30m、深さ0.31mである。ほぼ垂直に掘り込まれる。覆土は0.5～1.0cmの少礫と0.1cm粒の炭化物を含む灰色土である。底面から、方形に加工した礎石の可能性がある石材（245）が出土した。柱穴の可能性があるが、周辺では同様の石材を伴う遺構は確認していない。中世土師器、珠洲（244）が出土している。13世紀前半と考えられる。

SP120（第24図） c4区に位置する。平面は円形で、長軸0.22m、短軸0.22m、深さ0.20mである。断面はU字状である。覆土は黒褐色土である。金付きの中世土師器片（246）が出土している。

SP141（第24図） a3区に位置する。平面は円形で、長軸0.22m、短軸0.18m、深さ0.18mである。ほぼ垂直に掘り込まれる。覆土は黄灰色土である。底面から用途不明の加工木製品（247）が出土している。

SP143（第24図） a3区に位置する。重複するSP204より古い。平面は楕円形で、長軸0.91m、短軸0.75m、深さ0.54mである。ほぼ垂直に掘り込まれ、底面は平坦である。覆土は灰黄褐色土、褐灰色土が堆積する。中世土師器（248）が出土している。

SP180（第24図） b4区に位置する。平面は円形で、長軸0.21m、短軸0.14m、深さ0.12mである。断面はU字状である。覆土はにぶい黄褐色土である。中世土師器（249）が出土している。13世紀末～14世紀初頭と考えられる （阿部・今井）

8 不明遺構（SX）

SX49（第20図） a2区に位置する。平面は楕円形で、長軸1.52m、短軸1.35m、深さ0.86mである。周辺は円礫が散乱している。径0.50m、高さ0.43mの曲物が配置され、底面はほぼ平坦である。覆土は曲物外で黒褐色やにぶい黄橙色土、内側は粘性のある暗灰色土である。中世土師器（250～252）、越前の陶硯（257）、曲物（253）、杓子状木製品（254）、角柱状木製品（255）、柄杓（256）、折敷（258）、編み物（259）が出土している。15世紀後半と考えられる。廃棄された井戸、もしくはSK35と一体の遺構の可能性もありSXとした。井戸の水溜めの曲物をSK35の馬小屋遺構の排泄溜めとして再利用したことが推測される。 （鹿島）

SX52（第8・9図） a3区に位置する。平面は方形で、長軸4.03m、短軸3.20m、深さ0.58mである。底面はほぼ平坦であるが、多少の凹凸がある。覆土はしまりのよい黒色土を主とする。中世土師器(260～262)、古瀬戸（263）、珠洲（264・265）、不明木製品（266）、刀の切羽（267）が出土している。土層断面から重複するSD50・51、SX53より新しい。本遺構から出土した炭化材の放射性炭素年代測定を行った結果、2σ暦年代範囲で1411-1443 cal AD（95.4%）で、15世紀前半から中頃の暦年代を示した。出土遺物の時期も考慮すると遺構の時期は15世紀後半と考えられる。

SX53（第8・9図） b3区に位置する。東側の一部は調査区外である。重複するSD54より新しい。平

面は隅丸の不整方形で、長軸 4.42m、短軸 4.15m、深さ 0.45m である。壁面は緩やかな傾斜で、底面は平坦である。覆土は少量の炭化物粒と地山ブロックが混じる黒色土を主とする。遺物は中世土師器の小片、珠洲 (268) が出土している。 (基峰)

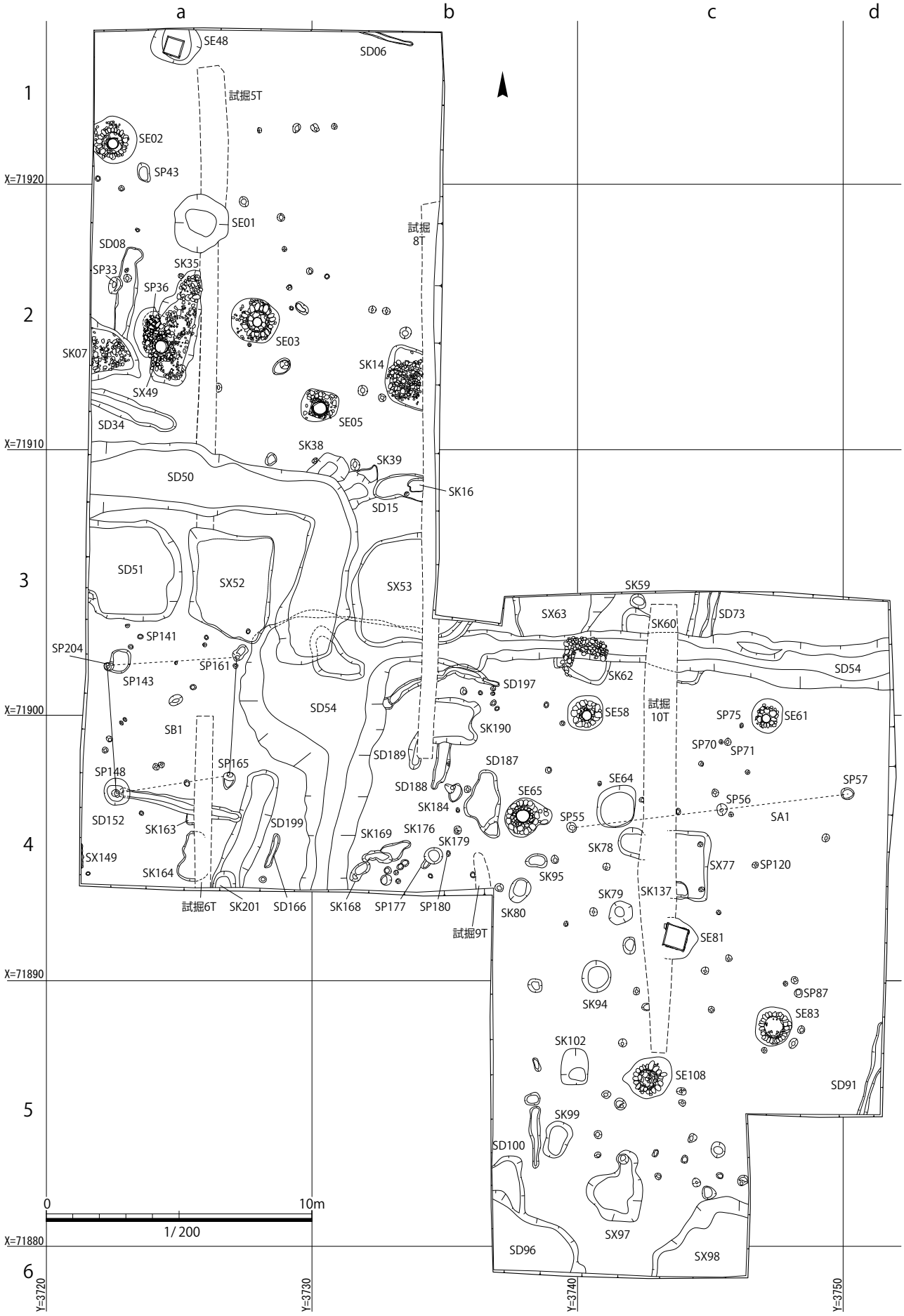
SX63 (第 9・11 図) b・c3 区に位置する。北側の調査区外に延びる。重複する SD54 より古い。平面は不整形で、長さ 3.85m 以上、幅 1.53m 以上、深さ 0.44m である。東壁面は緩やか、西壁面は急角度で掘り込まれ、底面は平坦である。覆土は底面に少量の炭化物粒と多量の地山ブロックが混じるオリーブ褐色土が堆積する。中世土師器 (269)、珠洲、八尾 (270) が出土している。14 世紀前半頃と考えられる。

SX77 (第 12・13 図) c4 区に位置する。遺構の西部は試掘トレンチで失われている。平面は方形で、長さ 2.62m、残存幅 1.32m、深さ 0.15m である。底面は平坦である。覆土は少量の炭化物粒と地山ブロックを多量に含む褐灰色土、赤褐色土、炭化物を少量含む褐灰色土である。中世土師器 (271)、珠洲 (272 ～ 275) が出土している。14 世紀と考えられる。底面で SP135・136 を検出した。

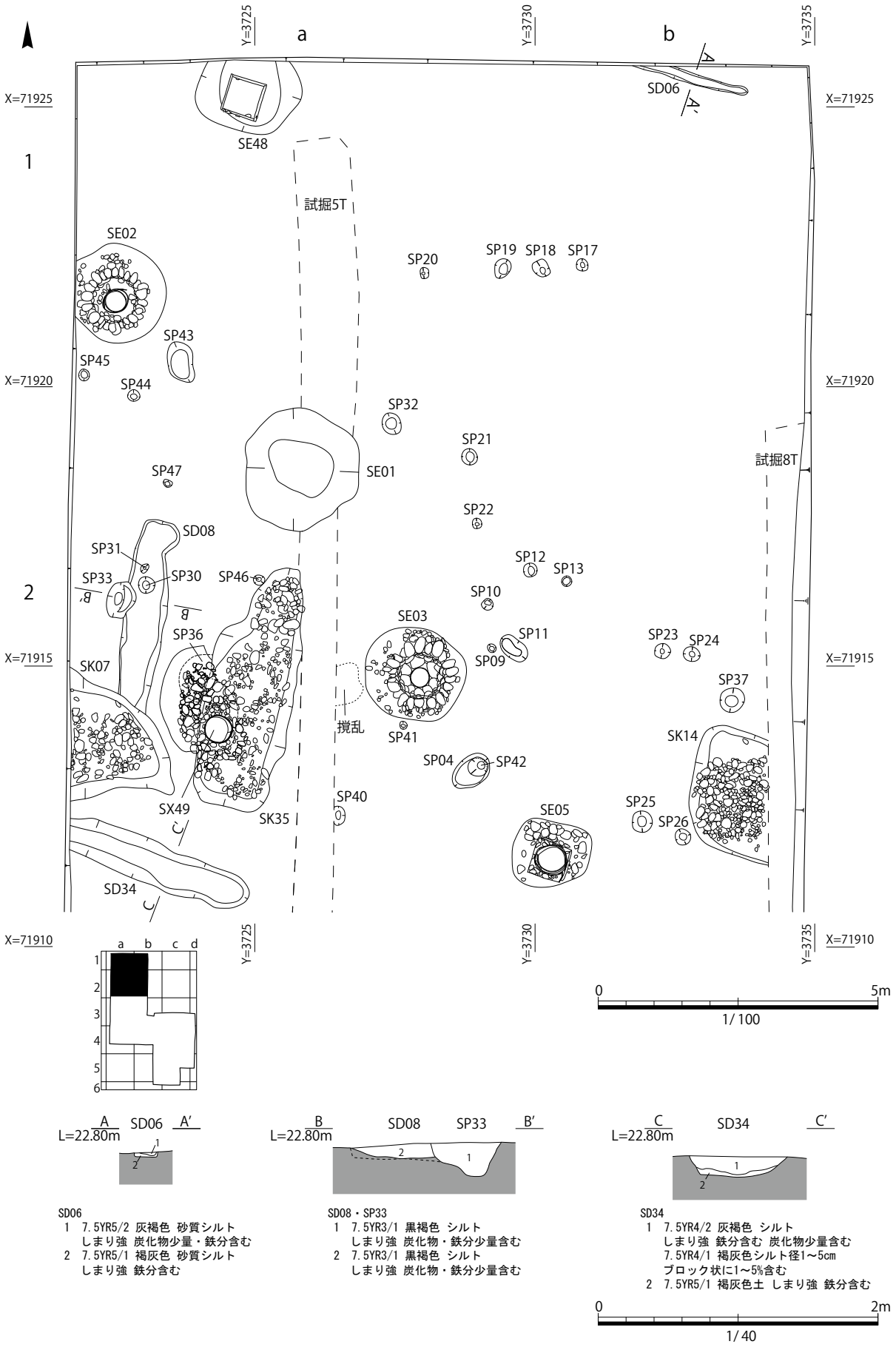
SX97 (第 12・13 図) c5 区に位置する。平面は不整形で、長軸 2.71m、短軸 2.15m、深さ 0.30m である。底面はやや凹凸がある。覆土は小礫と少量の炭化物粒を含む黄灰色土主体で、炭化物粒を少量、地山を多量に含む黄褐色土、オリーブ黒色土が堆積する。中世土師器 (276・277)、珠洲 (278) が出土している。15 世紀中頃と考えられる。

SX98 (第 12・13 図) c5・6 区に位置する。北西の一部を検出した。平面は不整形で、検出長 3.54m、検出幅 3.00m、深さ 0.33m である。緩やかな掘り込みで、底面はやや平坦である。覆土は少量の炭化物粒と地山が混じる褐灰色土が主である。中世土師器 (279 ～ 281)、古瀬戸 (282・283)、珠洲 (284)、青磁が出土している。14 世紀と考えられる。

SX149 (第 8・11 図) a4 区に位置する。東部のごく一部のみ検出した。長さ 0.92m、検出幅 0.09m、深さ 0.16m である。底面は未検出である。覆土は黄灰色土である。出土遺物はない。 (阿部・今井)



第 6 図　調査区全体平面図

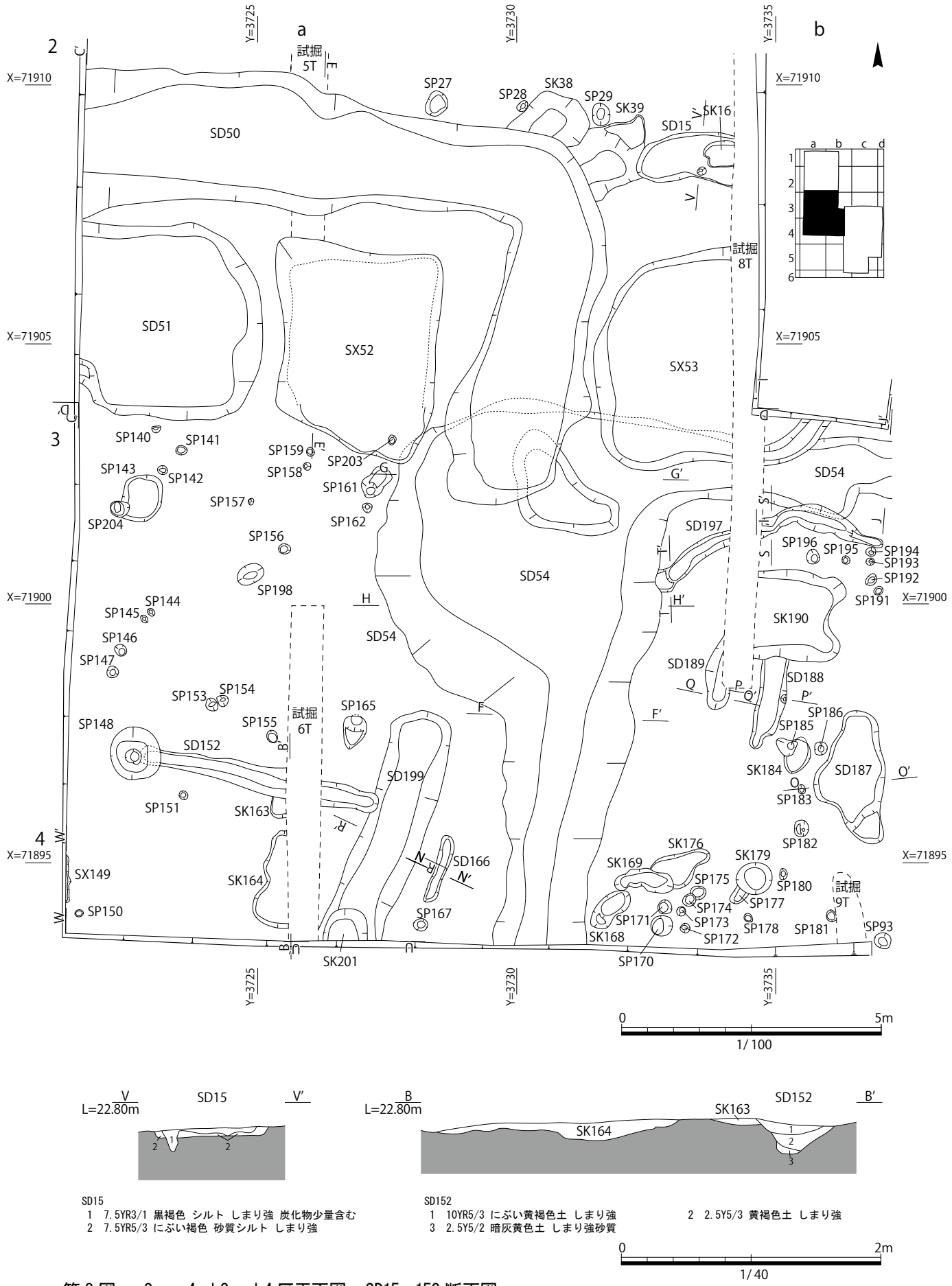


SD06
1 7.5YR5/2 灰褐色 砂質シルト
しまり強 炭化物少量・鉄分含む
2 7.5YR5/1 褐灰色 砂質シルト
しまり強 鉄分含む

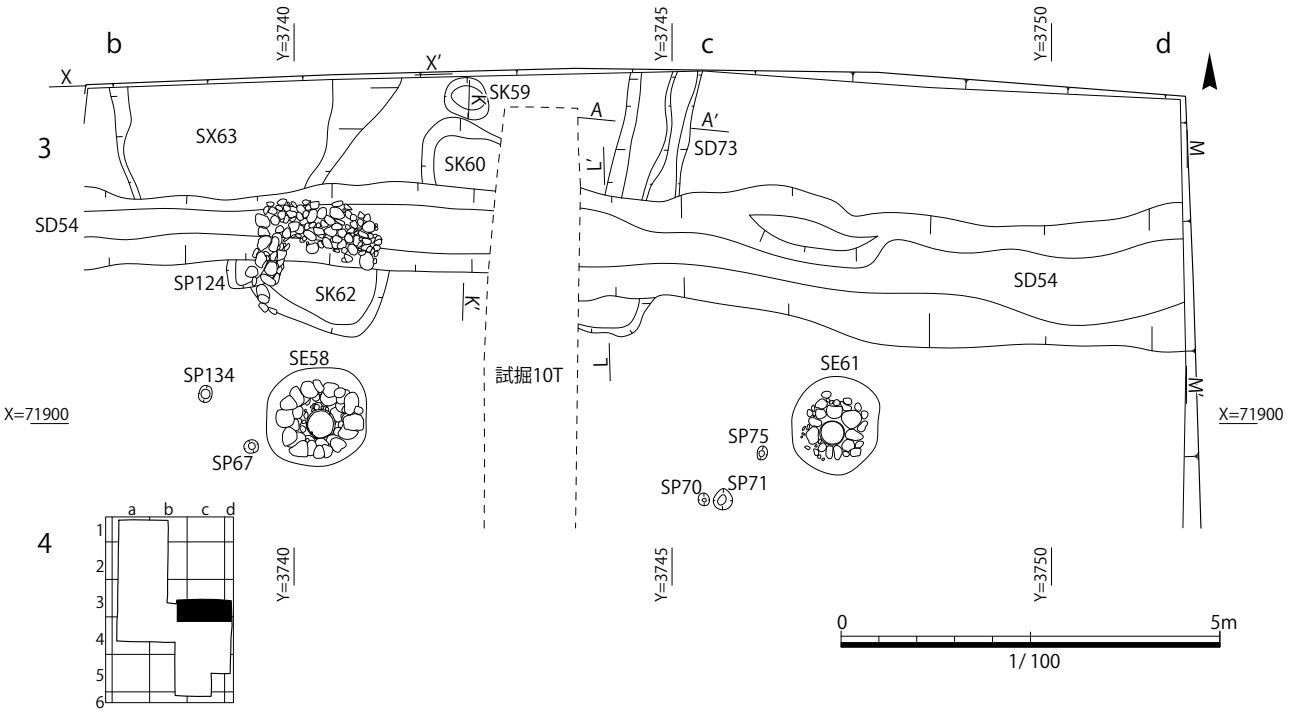
SD08・SP33
1 7.5YR3/1 黒褐色 シルト
しまり強 炭化物・鉄分少量含む
2 7.5YR3/1 黒褐色 シルト
しまり強 炭化物・鉄分少量含む

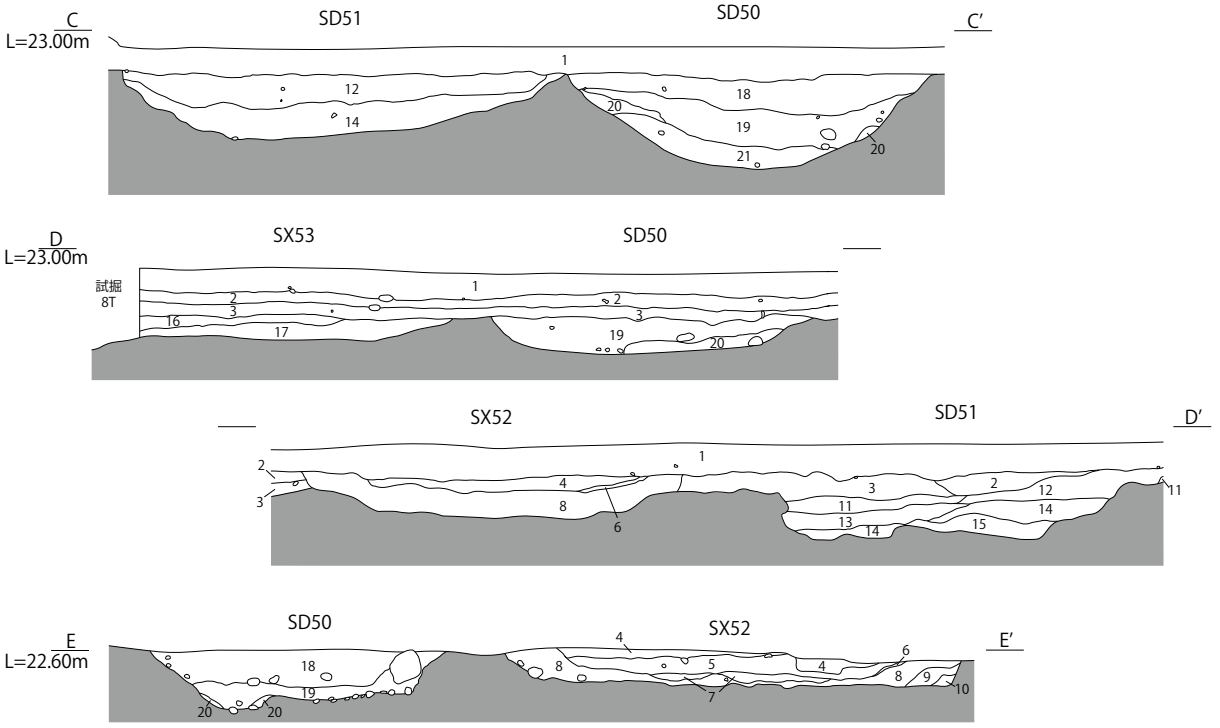
SD34
1 7.5YR4/2 灰褐色 シルト
しまり強 鉄分含む 炭化物少量含む
7.5YR4/1 褐灰色シルト径1～5cm
ブロック状に1～5%含む
2 7.5YR5/1 褐灰色土 しまり強 鉄分含む

第7図　a1～a2・b1～b2区平面図　SD06・08・34・SP33断面図



第 8 図　a2 ～ a4・b2 ～ b4 区平面図　SD15・152 断面図





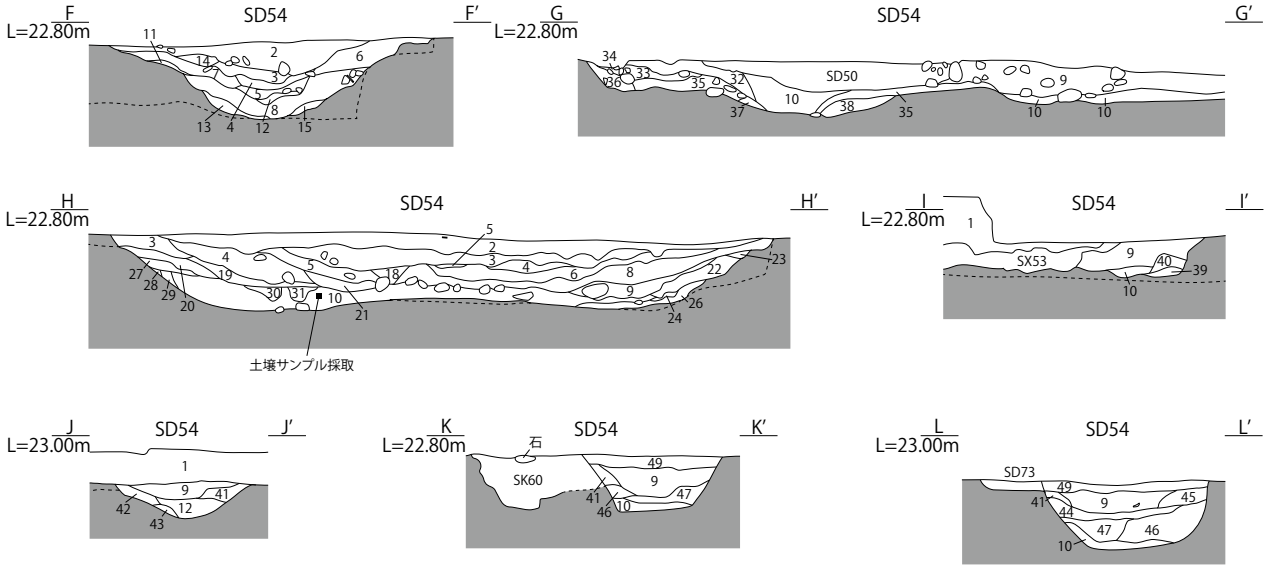
表土
1　7.5Y4/1 褐灰色土 表土＋床土層 しまり強
包含層
2　7.5YR3/1 黒褐色土 しまり強 0.5cm粒炭化物混入
3　10YR3/1 黒褐色土 しまり強 0.1～0.5cm粒炭化物混入
SX52
4　10YR4/1 褐灰色土 しまり強 0.1～0.5cm粒炭化物混入 地山砂多量混入
5　10YR5/3 にぶい黄橙色土 しまり強 0.1cm粒炭化物少量混入 地山砂混入
6　10YR6/4 にぶい黄橙色土 しまり強 地山砂多量混入
7　10YR4/2 灰黄褐色土 しまり強 0.1cm粒炭化物少量混入 地山砂混入
8　10YR2/1 黒色土 しまり強 0.5cm粒炭化物混入 地山砂混入
9　10YR6/1 褐灰色土 しまり強
10　10YR3/1 黒褐色土 しまり強 砂質
SD51
11　10YR2/1 黒色 粘質土 しまり強 0.1cm～1cm粒炭化物混入
0.5cm～2cm粒地山砂ブロック混入
12　10YR5/1 褐灰色土 しまり強 0.5cm粒炭化物混入 地山砂
10YR6/4 にぶい黄橙色の地山土多量混入
13　10YR4/1 褐灰色土 しまり強 0.5cm粒炭化物混入 地山砂少量混入
14　7.5YR1.7/1 黒色土 しまり強 0.1～1cm粒炭化物少量混入 地山砂少量混入
15　2.5Y4/2 暗灰黄色土 しまり強 地山砂多量混入

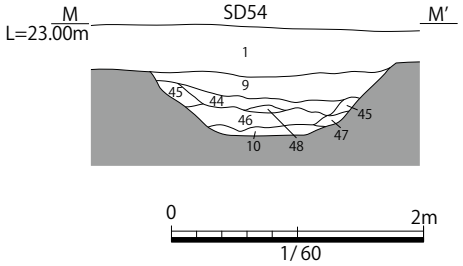
SX53
16　7.5YR2/2 黒褐色土 しまり強 0.1cm粒炭化物少量混入
17　7.5YR2/1 黒色土 しまり強 0.1cm粒炭化物少量混入
0.5cm粒地山砂ブロック混入

SD50
18　10YR5/1 褐灰色土 しまり強 0.5cm粒炭化物混入 地山砂
10YR6/4 にぶい黄橙色の地山土多量混入
19　7.5YR1.7/1 黒色土 しまり強 0.1～1cm粒炭化物少量混入 地山砂少量混入
20　2.5Y4/1 黄灰色土 しまり強 地山砂多量混入
21　2.5Y5/1 黄灰色土 粘質土 しまり強　地山砂多量混入

0　2m
1/60

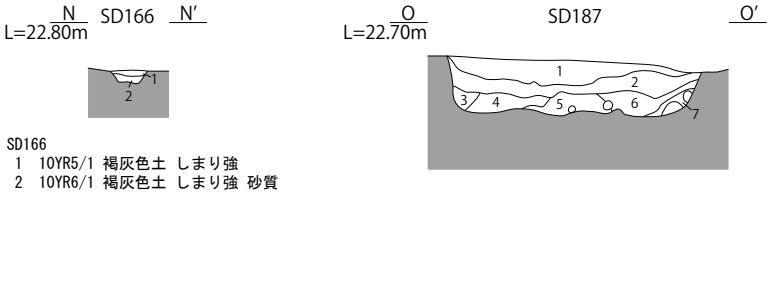
第9図　b3～b4・c3～c4・d3～d4区平面図　SD50・51・SX52・53断面図





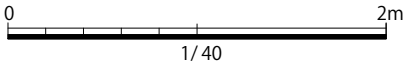
表土等
1　7.5YR4/1 褐灰色土 しまり強

SD54
2　10YR5/1 褐灰色土 しまり強 6～10cm礫混入
3　2.5Y3/2 黒褐色土 しまり強 0.1cm粒炭化物混入
4　2.5Y3/2 黒褐色土 しまり強 植物片少量混入 0.1cm粒炭化物混入 地山土少量混入
5　2.5Y3/1 黒褐色土 しまり強 6～10cm礫混入
6　2.5Y5/2 暗灰黄色土
　しまり強 0.1cm粒炭化物混入 6～10cm礫混入
7　2.5Y4/3 オリーブ褐色土
　しまり強 砂質土少量混入(2.5Y5/3黄褐色) 6～10cm礫混入
8　2.5Y4/2 暗灰黄色土
　しまり強 0.1cm粒炭化物混入 6～10cm礫混入
9　10YR3/2 褐灰色土 しまり強 0.1cm粒炭化物少量混入
10　10YR2/1 黒色土 しまり強 3～8cm礫混入
11　2.5Y3/2 黒褐色土
　しまり強 砂質土混入(2.5Y5/3黄褐色) 6～10cm礫混入
12　2.5Y4/2 暗灰黄色土 しまり強
13　10YR4/1 褐灰色土 しまり強 砂質土 植物片少量混入
14　10YR4/2 灰黄褐色土 しまり強 6～10cm礫混入
15　10YR3/1 黒褐色土 しまり強
16　2.5Y5/2 暗灰黄色土 しまり強 0.1cm粒炭化物混入 1～3cm礫少量混入
17　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色土 しまりよい
18　2.5Y3/1 黒褐色土 しまり強 3～7cm礫少量混入
19　2.5Y4/2 暗灰黄色土 しまり強 0.1～0.3cm粒炭化物混入 1～3cm礫少量混入
20　2.5Y4/3 オリーブ褐色土 しまり強 0.1cm粒炭化物少量混入 1～3cm礫少量混入
21　2.5Y3/2 黒褐色土 しまり強
22　10YR4/1 褐灰色土 しまり強 砂質層
23　10YR7/8 黄橙色土 しまり強
24　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色土 しまり強 砂質層
25　10YR3/1 黒褐色土 しまり強 砂質土多量混入
26　10YR3/1 黒褐色土 しまり強 0.1cm粒炭化物少量混入 植物片少量混入
27　2.5Y4/3 オリーブ褐色土 しまり強 地山土少量混入
28　2.5Y4/2 暗灰黄色土 しまり強
29　2.5Y5/3 黄褐色土 しまり強
30　10YR3/3 暗褐色土 しまり強 1～3cm礫少量混入
31　10YR3/3 暗褐色土 しまり強 地山土少量混入 1～3cm礫少量混入
32　2.5Y4/2 暗灰黄色土 しまり強 0.1～0.3cm粒炭化物少量混入
33　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色土 しまり強 礫群層(3～8cm礫)
34　2.5Y5/3 黄褐色土 しまり強 礫多量混入(3～4cm)
35　2.5Y3/2 黒褐色土 しまり強 礫(3～12cm)混入
36　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色土 礫(6cm)少量混入
37　2.5Y3/2 黒褐色土 しまり強 礫(3～8cm)混入
38　2.5Y4/2 暗灰黄色土 しまり強 礫群層(0.1～3cm)
39　10YR4/1 褐灰色土 しまり強 0.3cm粒礫混入
40　10YR4/1 褐灰色土 しまり強 0.3cm粒礫、地山土多量混入
41　10YR4/1 褐灰色土 しまり強 0.1cm粒炭化物少量混入
42　2.5Y5/1 黄灰色土 しまり強 0.1～0.5cm粒炭化物少量混入
43　2.5Y4/1 黄灰色土 しまり強 砂質土 地山砂多量混入
44　2.5Y3/2 黒褐色土 しまり強 0.3cm粒炭化物少量混入 地山砂少量混入
45　2.5Y5/2 暗灰黄色土 しまり強 0.1～0.3cm粒炭化物少量混入
46　2.5Y4/1 黄灰色土 しまり強 0.1～0.5cm粒炭化物少量混入
47　5Y4/1 灰色土 しまり強 0.5cm粒炭化物少量混入
48　5Y7/1 灰白色土 しまり強 砂質土 地山砂多量混入
49　7.5YR5/4 にぶい褐色土 しまり強

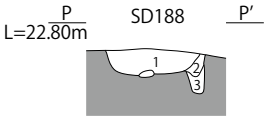


SD166
1　10YR5/1 褐灰色土 しまり強
2　10YR6/1 褐灰色土 しまり強 砂質

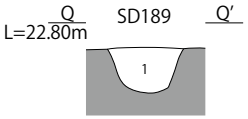
SD187
1　7.5YR6/1 褐灰色土
　しまり強 0.1～0.3cm粒炭化物混入
2　7.5YR6/1 褐灰色土
　しまり強 0.3cm粒炭化物混入 地山土混入
3　7.5YR5/1 褐灰色土
　しまり強 0.1cm粒炭化物少量混入
4　7.5YR6/1 褐灰色土
　しまり強 砂質土多量混入(5Y8/4淡黄色)
5　2.5YR7/1 灰白色土 しまり強 砂質土少量混入
6　2.5Y6/1 黄灰色土
　しまり強 植物片混入 砂質土少量混入
7　2.5Y6/1 黄灰色土 しまり強 砂質土少量混入



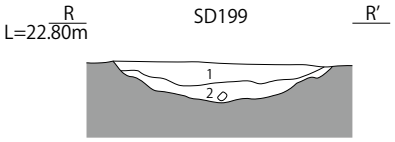
第10図　SD54・166・187断面図



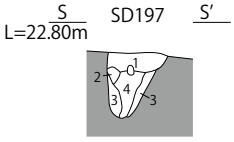
SD188
1　2.5Y5/2 暗灰黄色土 しまり強
　0.1cm粒炭化物混入 地山土混入
2　2.5Y4/2 暗灰黄色土 しまり強
3　2.5Y4/1 黄灰色土 しまり強



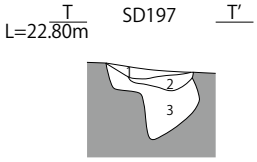
SD189
1　10YR3/1 黒褐色土 しまり強
　0.1cm粒炭化物少量混入
　0.1～0.3cm粒礫少量混入



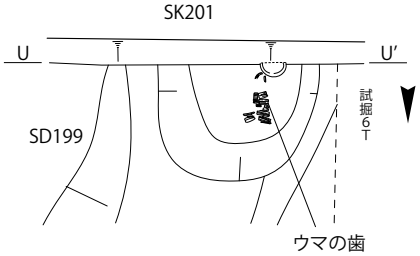
SD199
1　10YR5/1 褐灰色土 しまり強 0.1cm粒炭化物混入
2　7.5YR1.7/1 黒色土 しまり強 0.1cm粒炭化物混入

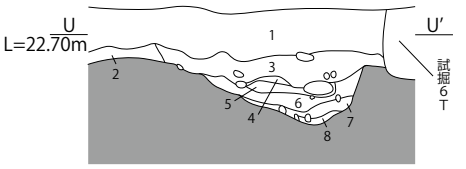


SD197
1　2.5Y4/3 オリーブ褐色土
　しまり強 地山土少量混入
2　2.5Y5/3 黄褐色土 しまり強
3　2.5Y5/2 暗灰黄色土 しまり強
4　2.5Y6/2 灰黄色土
　しまり強 地山土多量混入



SD197
1　2.5Y4/3 オリーブ褐色土
　しまり強 0.1cm粒炭化物混入
　2cm粒礫少量混入
2　2.5Y5/4 黄褐色土 しまり強
3　2.5Y5/3 黄褐色土 しまり強

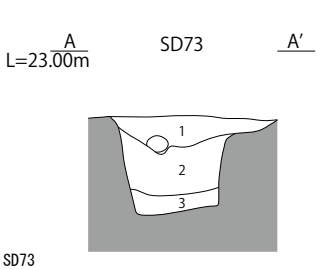




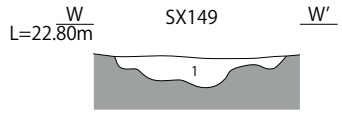
1　2.5Y7/3 浅黄色土 しまり強(表土)
2　2.5Y7/3 浅黄色土 しまり強 0.1cm炭化物混入(包含層)

SD199
3　2.5Y5/1 黄灰色土 しまり強 0.1cm粒炭化物多量混入
　3～15cm礫混入

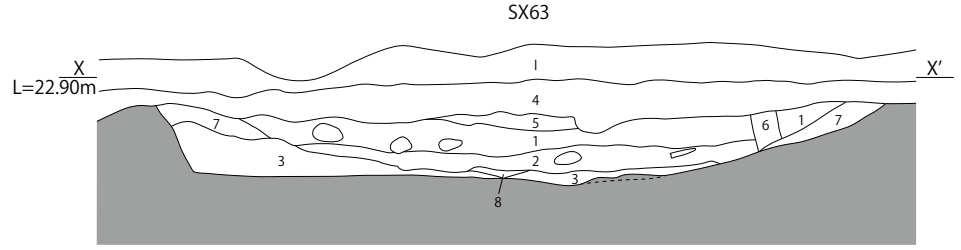
SK201
4　2.5Y5/1 黄灰色土 しまり強 3～15cm礫混入
5　2.5Y5/1 黄灰色土 しまり強 砂質土多量混入
　3～15cm礫混入
6　2.5Y4/1 黄灰色土 しまり強 砂質土混入
　3～15cm礫混入 3～15cm礫混入
7　2.5Y7/1 灰白色土 しまり強 砂質土混入
　3～15cm礫混入
8　10YR4/1 褐灰色土 しまり強



SD73
1　10YR4/2 灰黄褐色土 しまり強 0.5～1.0cm粒炭化物混入
2　2.5Y3/1 黒褐色土 しまり強 0.5cm炭化物少量混入
3　5Y4/1 灰色土 しまり強 砂質土 地山砂多量混入

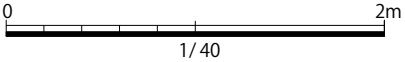


SX149
1　2.5Y6/1 黄灰色土 しまり強 0.1cm粒礫少量混入

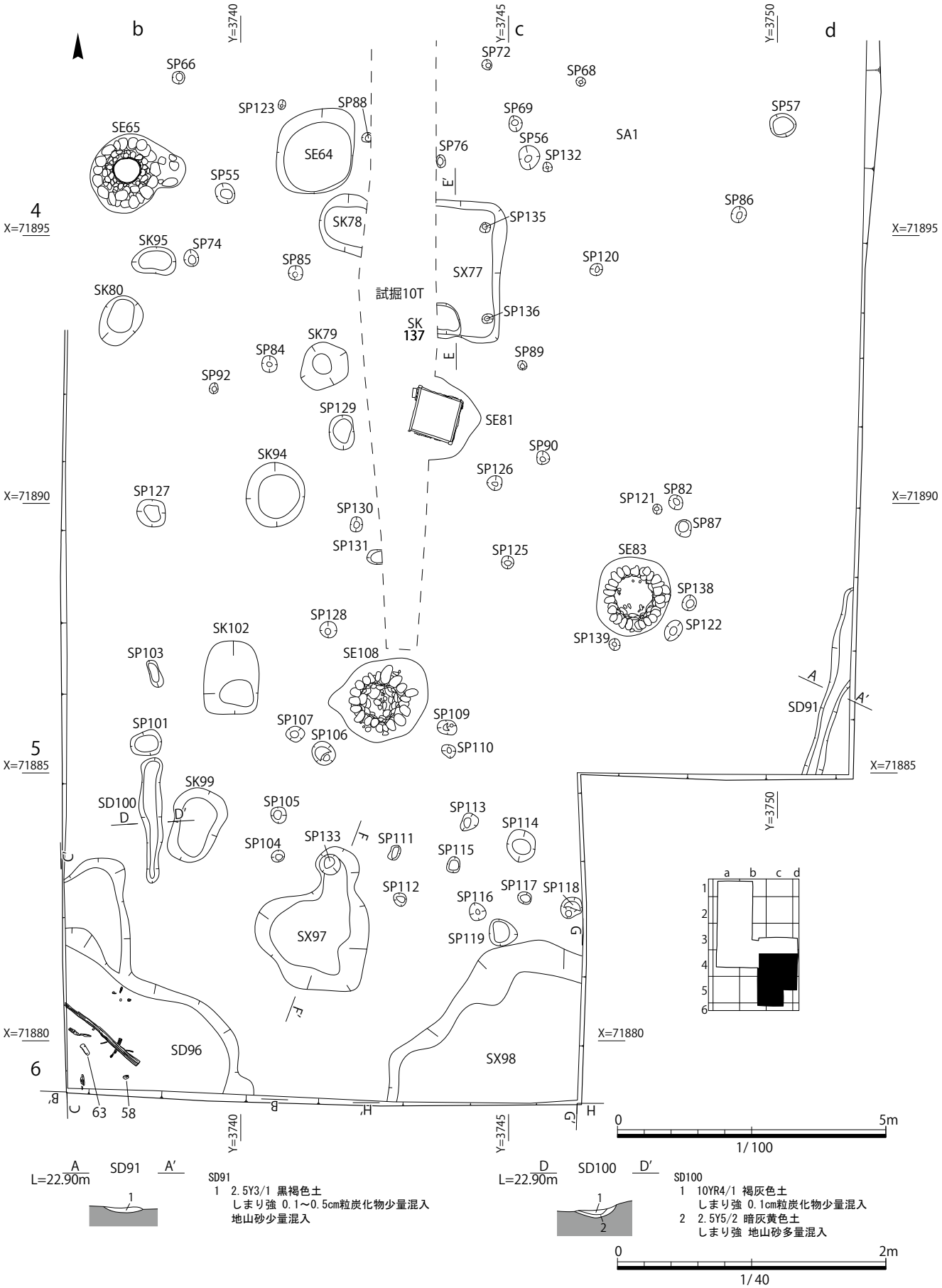


Ⅰ表土(耕作土)　7.5YR4/1 褐灰色土 しまり強
4　10YR5/1 褐灰色土 しまり強 0.1～0.5cm粒炭化物混入 3.0～8.0cm大の礫少量混入 地山砂少量混入(表土2層)

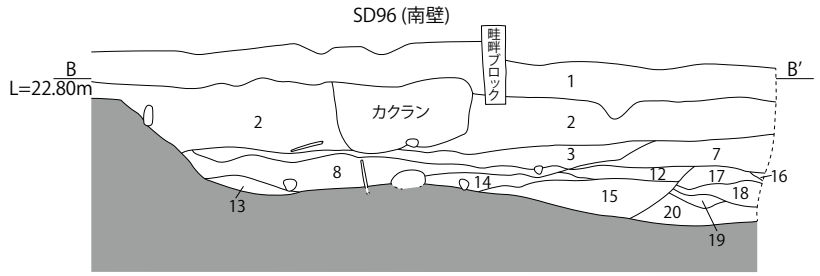
SX63
1　7.5YR5/1 褐灰色土 しまり強 0.1～0.5cm粒炭化物少量混入 地山砂少量混入
2　5Y3/1 オリーブ黒色土 しまり強 0.5cm粒炭化物混入　地山土、砂少量混入 一部5.0～10.0cm大の炭化物(木)混入
3　2.5Y4/3 オリーブ褐色土 しまり強 0.1～0.5cm粒炭化物混入 地山砂多量混入
5　10YR4/1 褐灰色土 しまり強 0.1cm粒炭化物混入 地山砂少量混入
6　5Y4/1 灰色土 しまり弱 1.0cm大の小礫混入 地山砂多量混入
7　7.5Y4/1 灰色土 しまり強 0.1cm粒炭化物少量混入 地山砂多量混入
8　5Y3/2 オリーブ黒色土 しまり強 0.1cm粒炭化物少量混入 地山砂多量混入

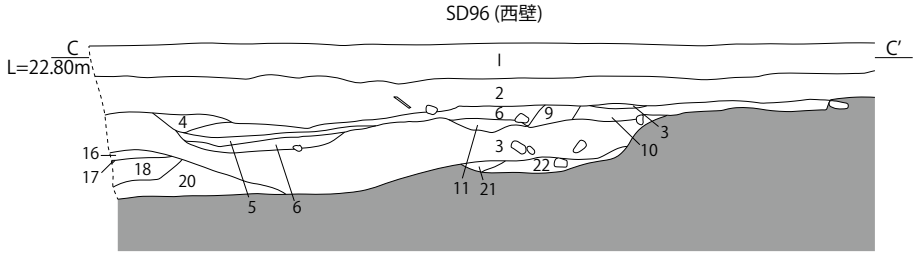


第11図　SK201平面図・断面図　SD73・188・189・197・199・SX63・149断面図

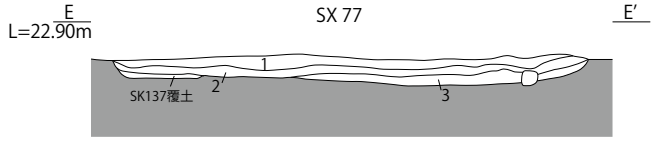


第 12 図　b4 ～ b6・c4 ～ c6・d4 ～ d5 区平面図　SD91・100 断面図

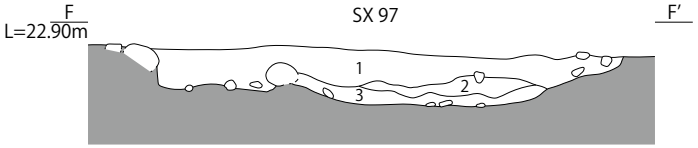




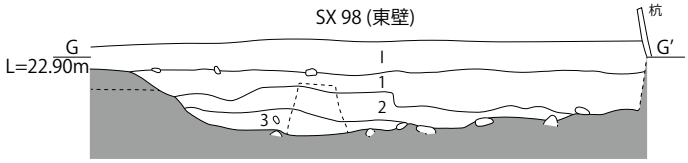
SD96
1　7.5YR4/1 褐灰色土 しまり強 表土(耕作土)
2　10YR4/1 褐灰色土 しまり強 0.5～1cm粒炭化物混入
3　7.5Y5/1 灰色 しまり強 砂質土 1.0～3cm大礫少量混入 地山砂多量混入
4　10Y3/1 オリーブ黒色土 しまり強 0.1cm粒炭化物少量混入
5　10Y3/2 オリーブ黒色土 しまり強 0.1cm粒炭化物少量混入 地山砂多量混入
6　10YR4/4 褐色土 しまり強 3～5cm大の礫混入 地山砂多量混入 砂質土
7　2.5Y2/1 黒色土 しまり強 粘質土 0.5cm粒炭化物混入 地山砂少量混入
8　5Y3/1 オリーブ黒色土 しまり強 0.1cm粒炭化物少量混入 地山砂少量混入
9　2.5Y4/2 暗灰黄色土 しまり強 地山土少量混入
10 10YR4/3 にぶい黄褐色土
しまり強 5～8cm大礫多量混入 0.1cm粒炭化物少量混入 地山砂多量混入
11　5Y4/2 灰オリーブ色土 しまり強 地山砂多量混入 砂質土
12　2.5Y3/2 黒褐色土 しまり強 0.1cm粒炭化物少量混入 地山砂多量混入
13　N4/ 灰色土 しまり強 0.2cm粒炭化物少量混入 地山砂多量混入
14　10Y5/1 灰色土 しまり強 砂質土 地山砂多量混入
0.1cm粒炭化物少量混入
15　N3/ 暗灰色土 しまり強 0.5～2cm炭化物多量混入
3～5cm大礫混入 1～3cm大の木片混入
16　5Y4/3 暗オリーブ色土 しまり強 5cm大の礫混入 砂利層
17　5Y3/1 オリーブ黒色土 しまり強 0.1～0.3cm粒炭化物少量混入
地山砂少量混入
18　2.5Y3/1 黒褐色土 しまり強 0.1cm粒炭化物少量混入
5～8cm大の木片多量混入 1～2cm大の礫、地山砂少量混入
19　10YR2/1 黒色土 しまり強 0.1cm粒炭化物少量混入
3cm大の木片多量混入
20　10YR2/2 黒褐色土 しまり強 0.1～0.5cm粒炭化物混入 地山砂少量混入
21　10Y4/1 灰色 しまり強 砂質土 地山砂多量混入 0.1cm粒炭化物少量混入
22　N2/ 黒色土 しまり強 0.1cm粒炭化物少量混入 地山砂混入



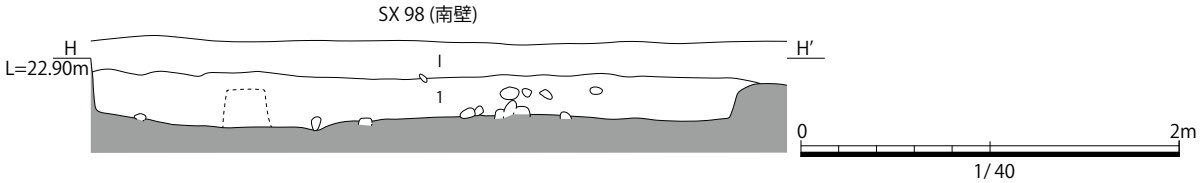
SX77
1　10YR5/1 褐灰色土
しまり強 0.1～0.3cm粒炭化物少量混入
2　5YR5/4 にぶい赤褐色土
しまり強 0.1～0.2cm粒炭化物少量混入 地山砂少量混入
3　10YR4/1 褐灰色土
しまり強 0.1～0.2cm粒炭化物混入 地山砂多量混入



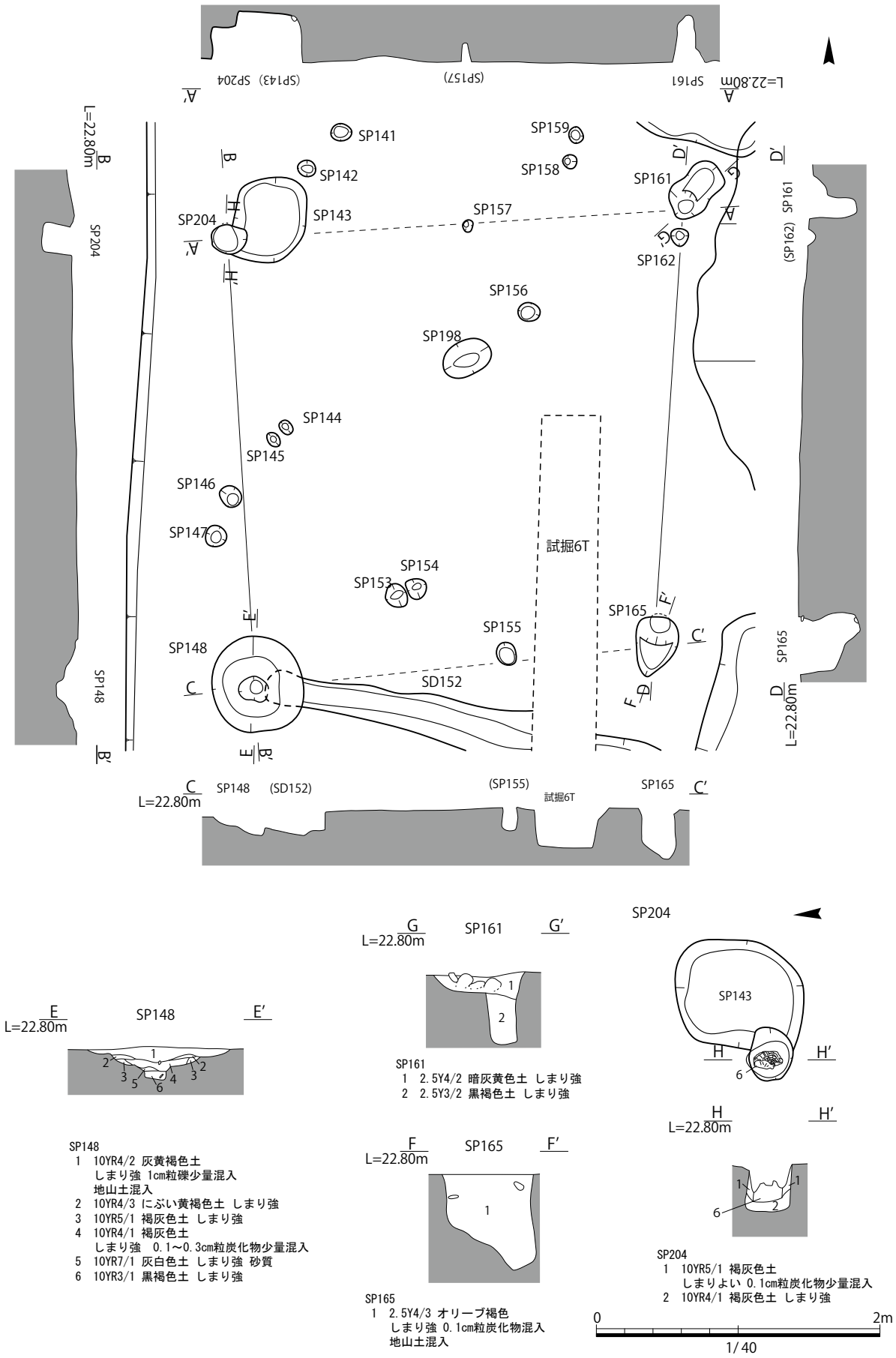
SX97
1　2.5Y4/1 黄灰色土
しまり強 0.1～0.5cm粒炭化物少量混入
1～5cm大の礫少量混入
2　2.5Y5/3 黄褐色土
しまり強 0.1cm粒炭化物少量混入 3cm大の礫少量混入
地山砂多量混入
3　5Y3/1 オリーブ黒色土
しまり強 0.5cm粒炭化物少量混入
地山砂2層より少ないが多量混入



SX98
Ⅰ 表土(耕作土) 7.5YR4/1 褐灰色土 しまり強
1　10YR4/1 褐灰色土
しまり強 0.5～1cm粒炭化物混入
地山砂少量混入
2　2.5Y6/3 にぶい黄色土
しまり強 0.5cm粒炭化物混入 地山土多量混入
3　10YR3/1 黒褐色土
しまり強 0.1～0.5cm粒炭化物少量混入
地山砂多量混入



第 13 図　SD96・SX77・97・98 断面図



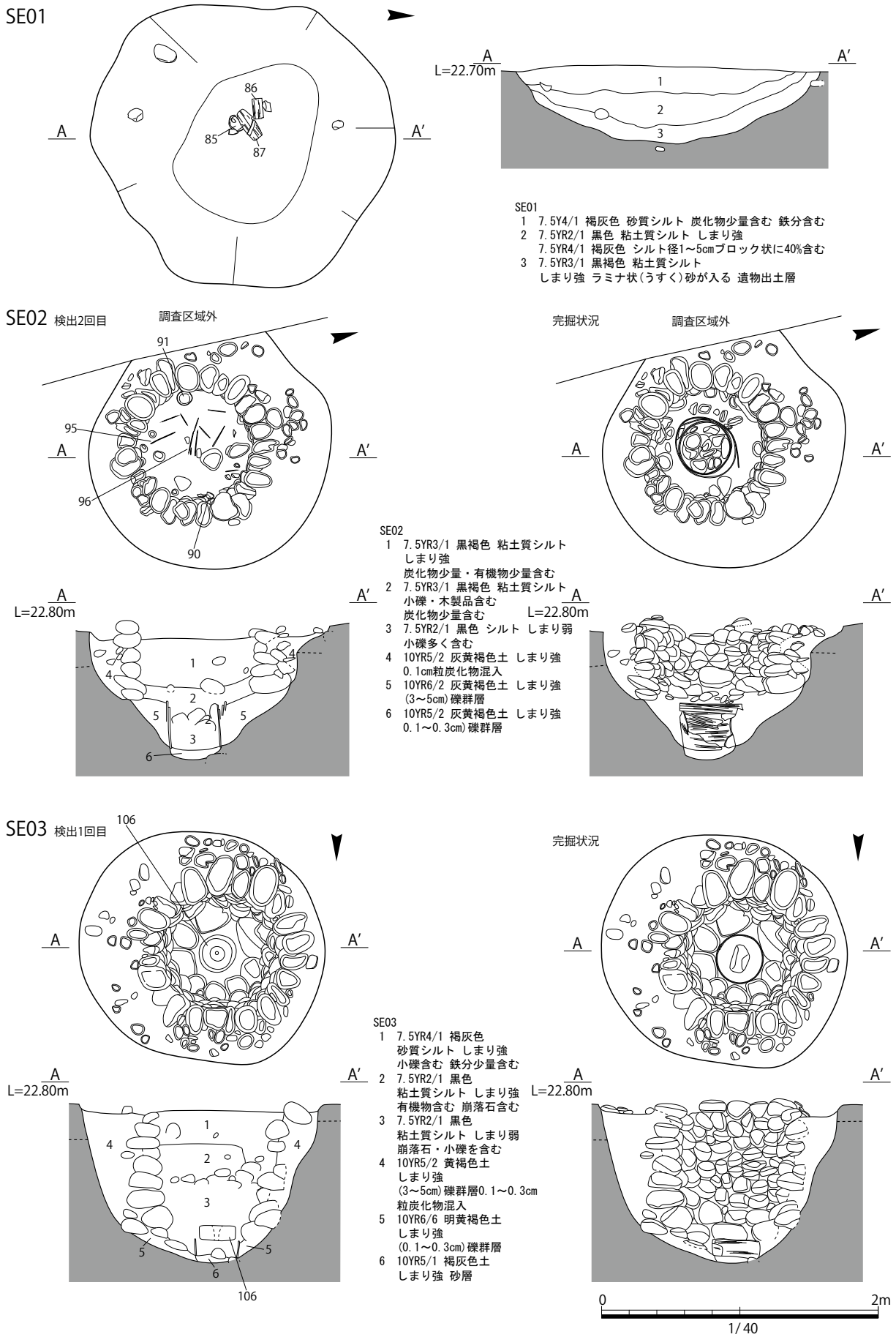
SP148
1 10YR4/2 灰黄褐色土
しまり強 1cm粒礫少量混入
地山土混入
2 10YR4/3 にぶい黄褐色土 しまり強
3 10YR5/1 褐灰色土 しまり強
4 10YR4/1 褐灰色土
しまり強 0.1～0.3cm粒炭化物少量混入
5 10YR7/1 灰白色土 しまり強 砂質
6 10YR3/1 黒褐色土 しまり強

SP161
1 2.5Y4/2 暗灰黄色土 しまり強
2 2.5Y3/2 黒褐色土 しまり強

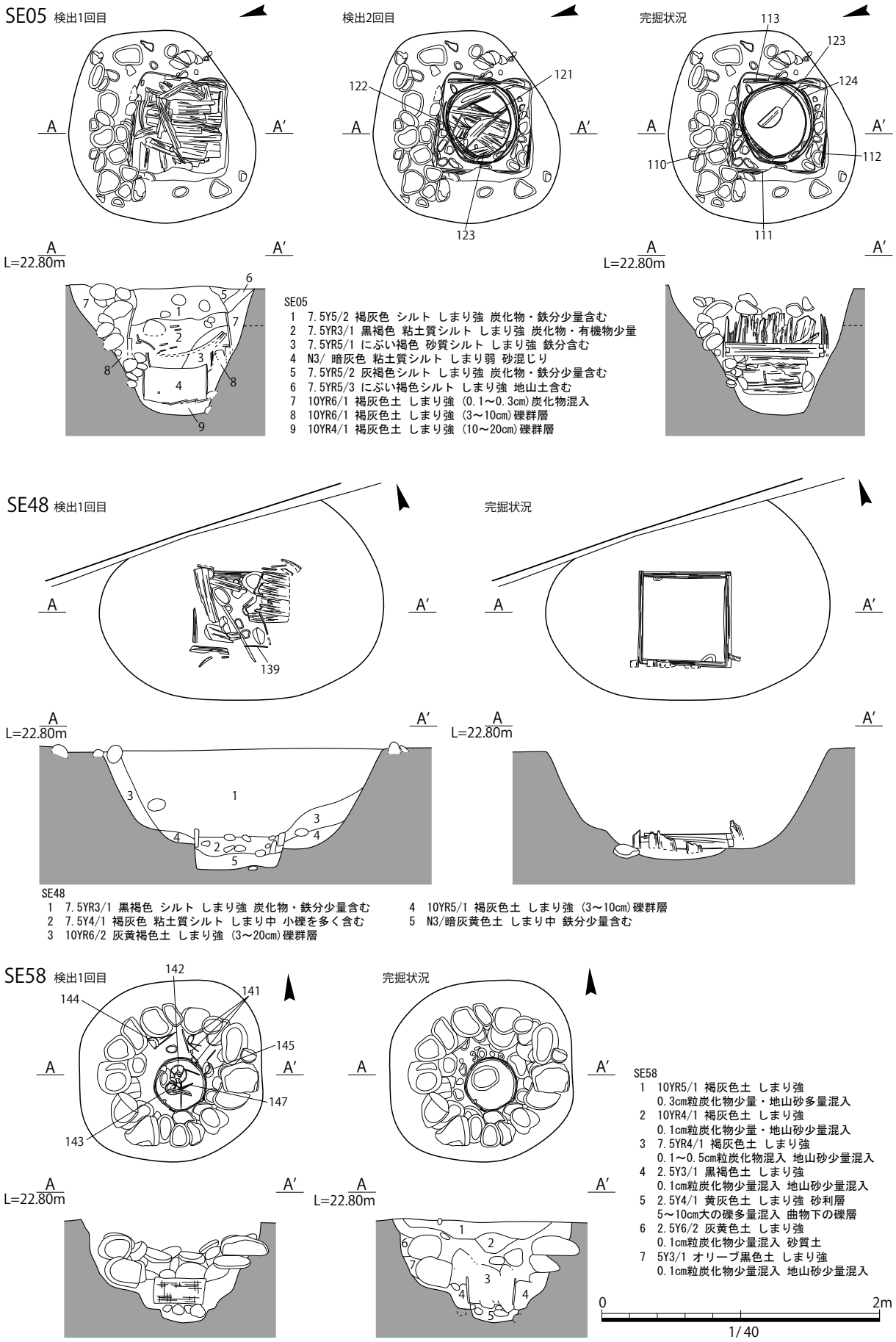
SP165
1 2.5Y4/3 オリーブ褐色
しまり強 0.1cm粒炭化物混入
地山土混入

SP204
1 10YR5/1 褐灰色土
しまりよい 0.1cm粒炭化物少量混入
2 10YR4/1 褐灰色土 しまり強

第 14 図　SB1（SP148・161・165・204）エレベーション・平面図・断面図



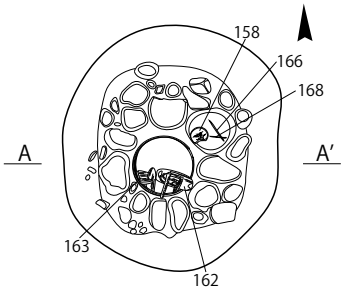
第 15 図　SE01・02・03 平面図・断面図



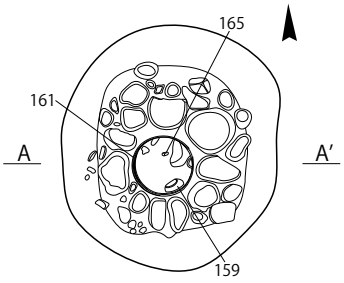
第 16 図　SE05・48・58 平面図・断面図

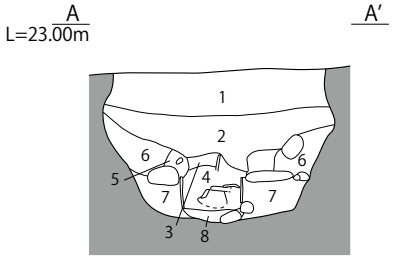
SE61

検出1回目

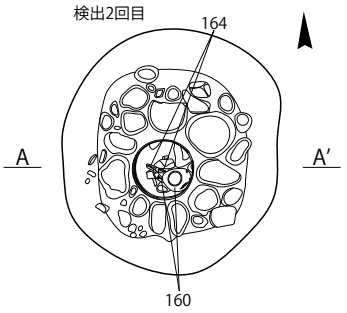


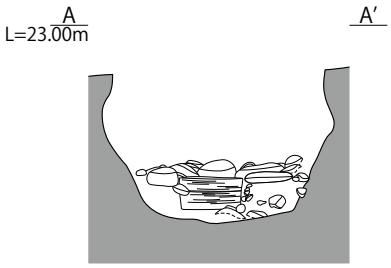
完掘状況





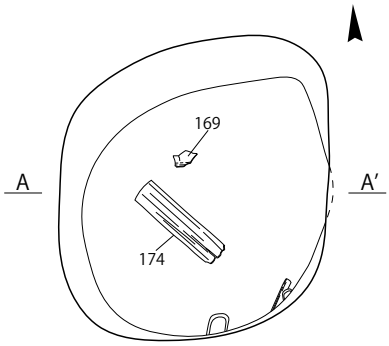
検出2回目

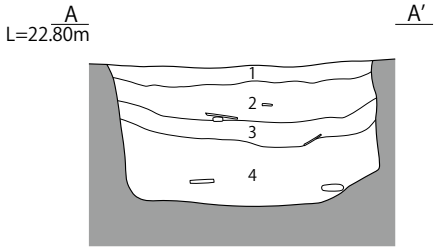




SE61
1 10YR5/3 にぶい黄褐色土 しまり強
0.5～1cm粒炭化物少量混入
2 10YR3/1 黒褐色土 しまり強
0.1～0.5cm粒炭化物少量混入 地山土少量混入
3 5Y6/2 灰オリーブ色土 しまり強
0.1～0.5cm粒炭化物少量混入 地山土多量混入
4 2.5Y3/1 黒褐色土 しまり強 粘質土
0.1cm粒炭化物少量混入
5 2.5Y4/1 黄灰色土 しまり強 粘質土
0.1cm粒炭化物少量混入 地山砂混入
6 10YR5/2 灰黄褐色土 しまり強
0.1cm粒炭化物少量混入 地山砂混入
7 7.5YR5/3 にぶい褐色土 しまり強
3～10cm大の礫多量混入 粗い砂多量
8 2.5Y5/1 黄灰色土 しまり強 粗い砂多量混入

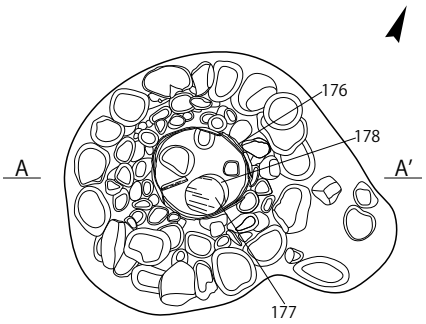
SE64

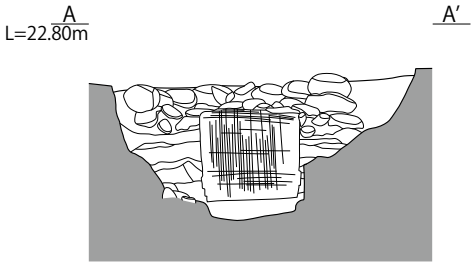


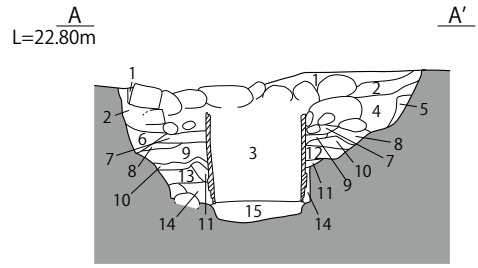


SE64
1 5YR5/4 にぶい赤褐色土 しまり強 0.5cm粒砂利、0.2cm粒炭化物混入
2 N4/0 灰色土 しまり強 0.5～1cm粒炭化物多量混入 木片多量混入
3 2.5Y3/1 黒褐色土 1cm粒炭化物混入 木片少量混入
4 2.5Y2/1 黒色土 しまり強 0.5～1cm粒炭化物混入 木片少量混入

SE65





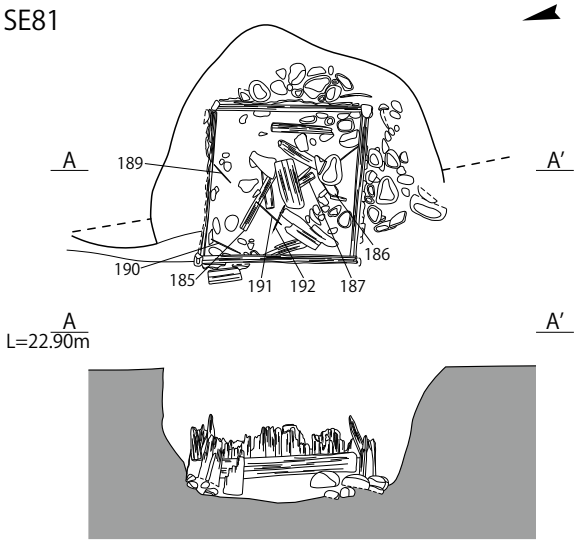


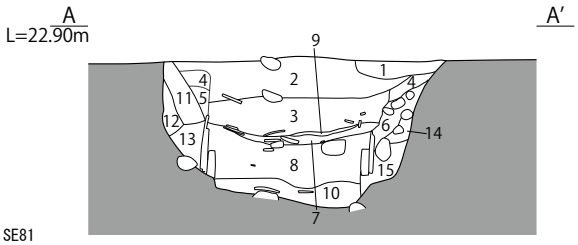
SE65
1 10YR4/1 褐灰色土 しまり強 0.1～0.3cm粒炭化物少量混入
2 2.5Y4/1 黄灰色土 しまり強 0.1cm粒炭化物少量混入
3 10YR3/1 黒褐色土 しまり強 0.2cm粒炭化物少量混入 地山土少量混入
4 2.5Y3/1 黒褐色土 しまり強 0.1cm粒炭化物少量混入 地山土混入
5 2.5Y5/3 黄褐色土 しまり強 0.1cm粒炭化物少量混入 地山土多量混入
6 5Y5/1 灰色土 しまり強 0.1cm粒炭化物少量混入 砂を含む粘質土
7 5Y5/2 灰オリーブ色土 しまり強 砂質土 0.1cm粒炭化物少量混入
8 5Y4/1 灰色土 しまり強 0.3～0.5cm粒炭化物多量混入 砂多量混入
9 5Y3/1 オリーブ黒色土 しまり強 0.3cm粒炭化物少量混入 砂多量混入
10 5Y2/1 黒色土 しまり強 0.1cm粒炭化物少量混入 多量混入
11 7.5Y3/1 オリーブ黒色土 しまり強 0.3cm粒炭化物少量混入 砂多量混入
12 7.5Y4/1 灰色土 しまり強 0.1cm粒炭化物少量混入 砂多量混入
13 7.5Y3/2 オリーブ黒色土 しまり強 0.1cm粒炭化物少量混入 砂多量混入
14 7.5Y2/2 オリーブ黒色土 しまり強 砂質土 0.1cm粒炭化物少量混入
15 10Y4/1 灰色土 しまり強 砂質土 5cm大の礫混入

0 2m
1/40

第17図 SE61・64・65 平面図・断面図

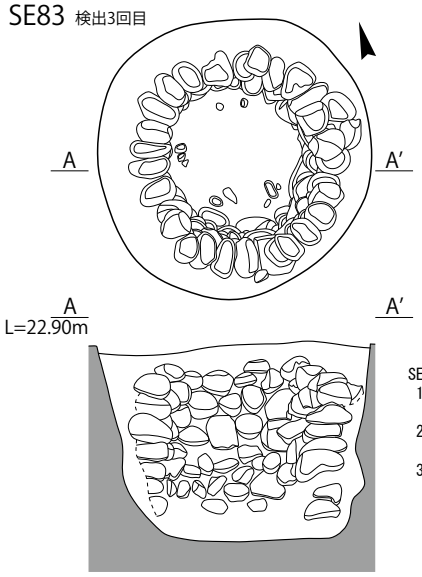
SE81



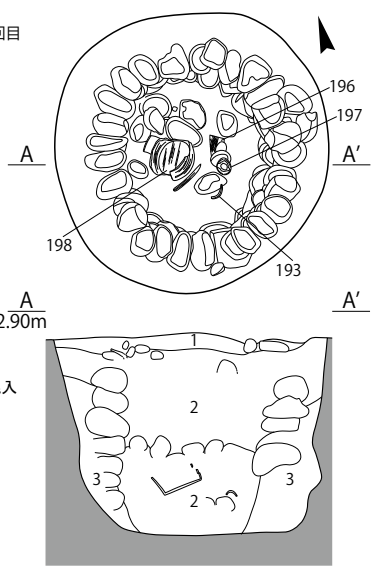


SE81
1 5Y4/1 灰色土 しまり弱 0.1cm粒炭化物混入
0.2cm粒炭化物混入 10cm大の礫混入
2 10YR4/2 灰黄褐色土 しまり強 0.2cm粒炭化物混入 10cm大の礫混入
3 10YR2/1 黒色土 しまり強 0.1～0.2cm粒炭化物混入 5cm大の礫混入
4 5Y3/2 オリーブ黒色土 しまり強 0.1cm粒炭化物少量混入 地山砂多量混入
5 5Y4/2 灰オリーブ色土 しまり強 地山砂多量混入 砂質土
6 5Y5/2 灰オリーブ色土 しまり強 地山砂多量混入
5～8cm大の礫多量混入 砂質土
7 N3/ 暗灰色土 しまり強 0.1cm粒炭化物少量混入 地山砂多量混入
8 7.5Y2/1 黒色土 しまり強 0.1～0.5cm粒炭化物少量混入 地山砂少量混入
9 5Y5/1 灰色土 しまり強 地山砂多量混入 砂質土
10 5Y3/1 オリーブ黒色土 しまり強 地山砂多量混入 砂質土 2～3cm礫混入
11 2.5Y5/1 黄灰色土 しまり強 0.5cm粒炭化物少量混入 砂少量混入
12 2.5Y4/1 黄灰色土 しまり強 0.1cm粒炭化物少量混入 地山砂多量混入
13 5Y5/1 灰色土 しまり強 0.1cm粒炭化物少量混入 地山砂多量混入
14 7.5Y6/1 灰色土 しまり強 5～8cm大の礫多量混入 砂利多量混入
15 10YR4/1 褐灰色土 しまり強 3～15cm大の礫多量混入 砂利多量混入

SE83 検出3回目

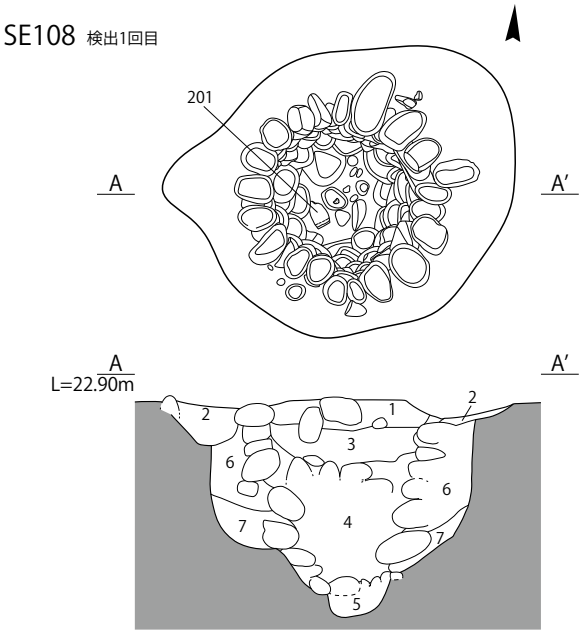


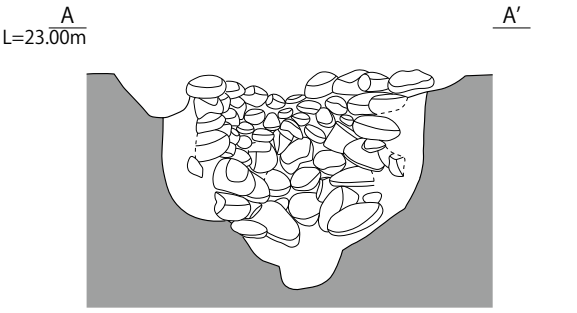
検出2回目



SE83
1 10YR4/1 褐灰色土 しまり強 0.1～0.5cm粒炭化物少量混入
地山砂少量混入
2 10YR3/1 黒褐色土 しまり強 0.2cm粒炭化物混入
地山砂少量混入
3 10YR5/1 褐灰色土 しまり強 0.5cm粒炭化物少量混入
砂質

SE108 検出1回目

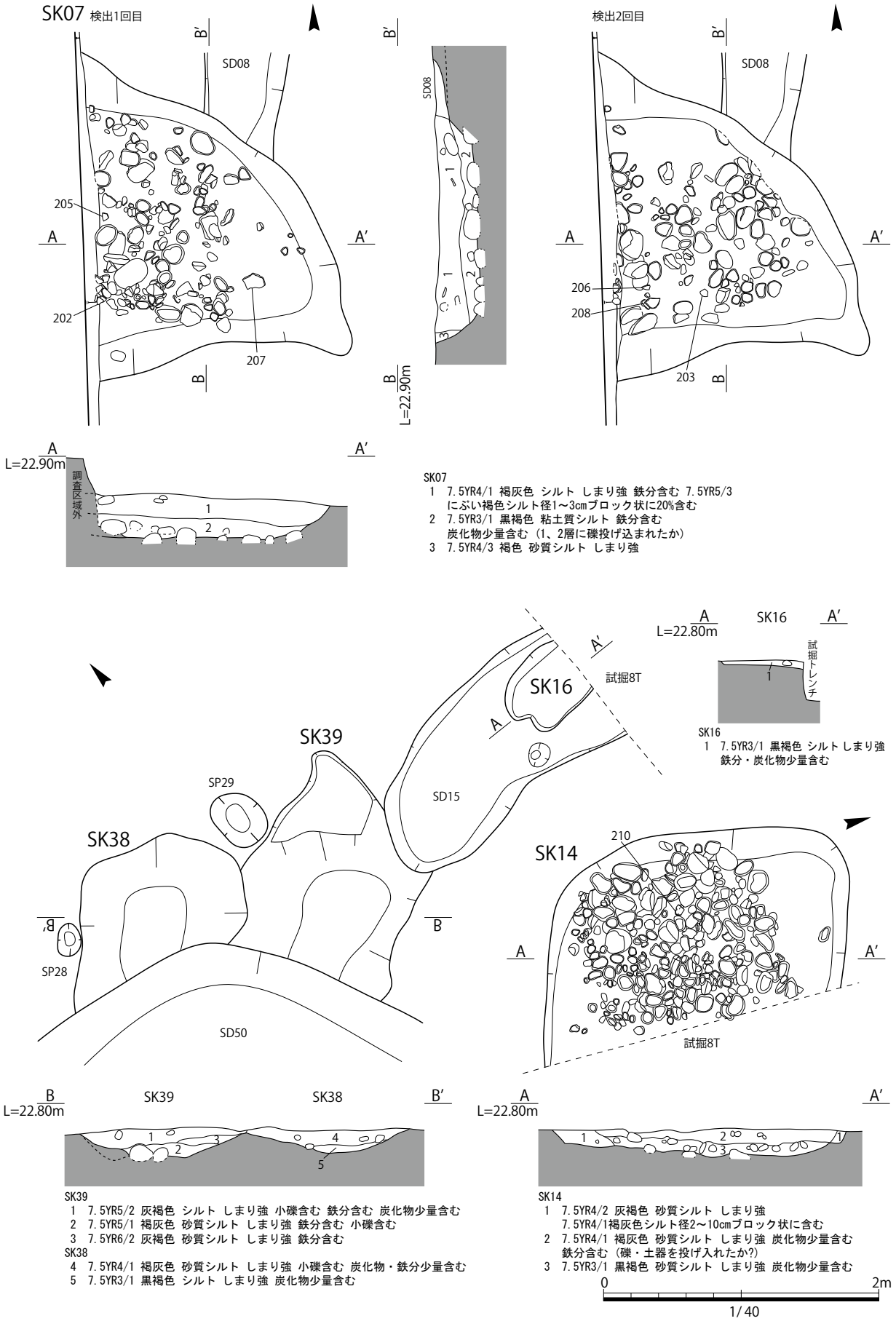




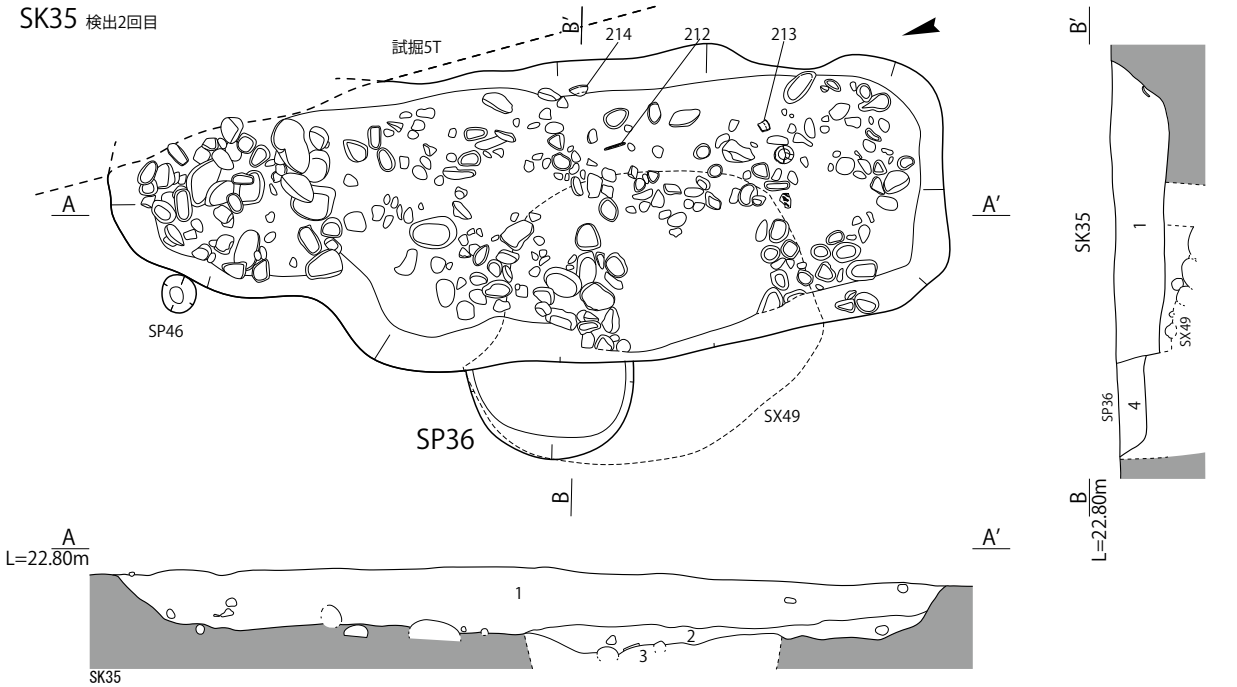
SE108
1 7.5YR4/1 褐灰色土 しまり強 0.5cm粒炭化物混入 地山砂少量混入
2 5Y5/1 灰色土 しまり強 砂質土 0.5～1cm大の小礫多量混入 地山砂多量混入
3 2.5Y4/1 黄灰色土 しまり強 1cm粒炭化物混入 0.2～0.5cm大の小礫混入
4 10YR3/1 黒褐色土 しまり強 3cm大の木片少量混入 0.1cm粒炭化物少量混入
5 2.5Y4/1 黄灰色土 しまり強 砂利層 5～10cm大の礫多量混入
6 2.5Y5/2 暗灰黄色土 しまり強 3～5cm大の小礫多量混入
7 5Y5/2 灰オリーブ色土 しまり強 砂質土 1cm大の小礫多量混入

0 2m
1/40

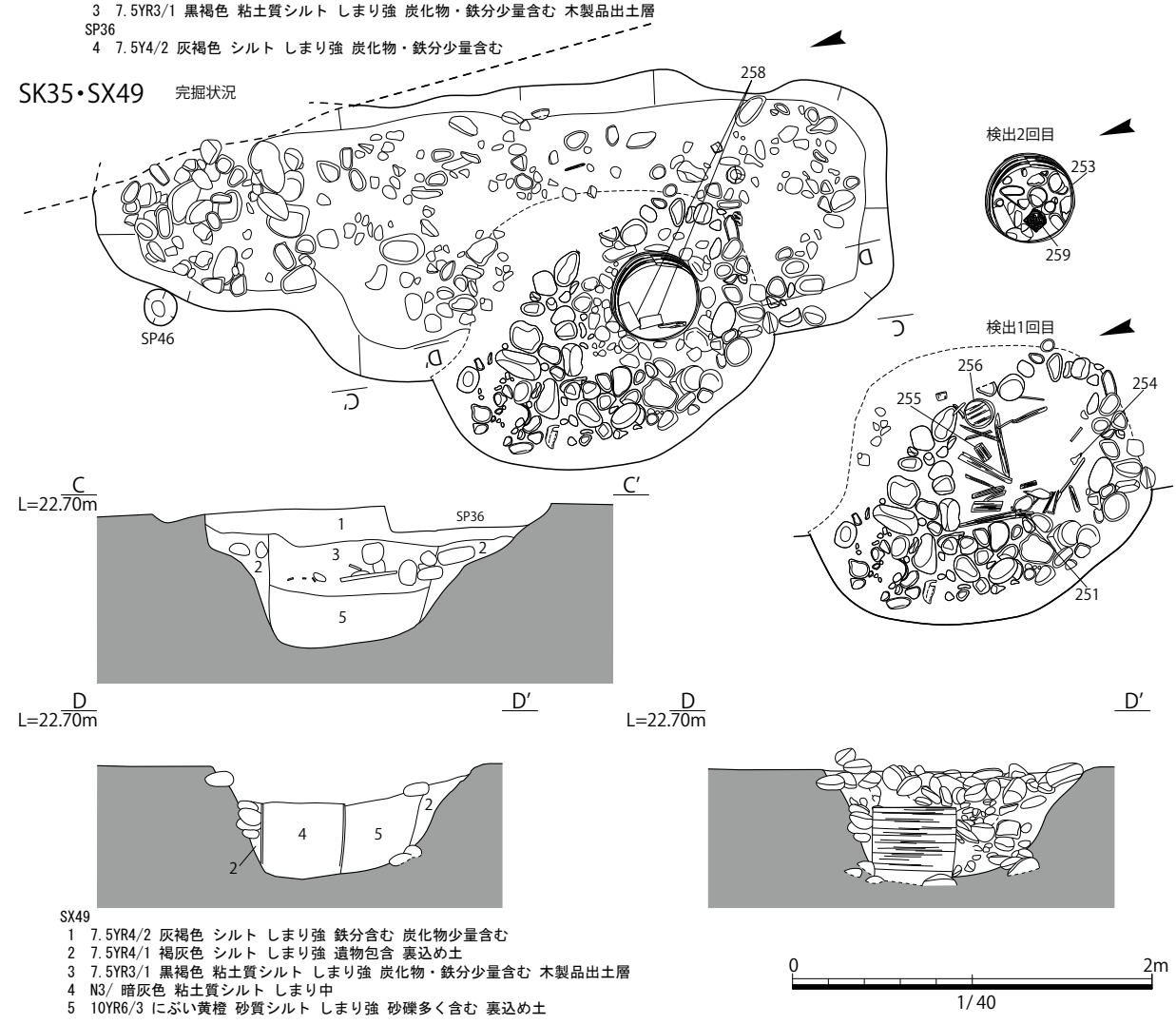
第18図 SE81・83・108 平面図・断面図



第19図　SK07・14・16・38・39 平面図・断面図



SK35
1 7.5YR4/2 灰褐色 シルト しまり強 炭化物・鉄分少量含む 7.5YR3/1 黒褐色シルト径1～10cm粒状に30～40%含む 不規則なラミナが見られる
2 7.5YR3/1 黒褐色 シルト 小礫含む しまり中 7.5YR4/2 灰褐色シルト径1～5cmブロック状に10%含む (SK35とSX49の混合土)
SX49
3 7.5YR3/1 黒褐色 粘土質シルト しまり強 炭化物・鉄分少量含む 木製品出土層
SP36
4 7.5Y4/2 灰褐色 シルト しまり強 炭化物・鉄分少量含む

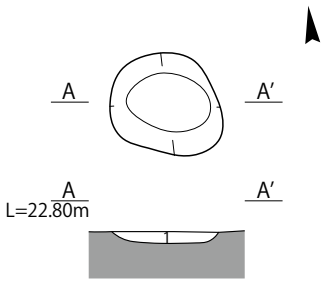


SX49
1 7.5YR4/2 灰褐色 シルト しまり強 鉄分含む 炭化物少量含む
2 7.5YR4/1 褐灰色 シルト しまり強 遺物包含 裏込め土
3 7.5YR3/1 黒褐色 粘土質シルト しまり強 炭化物・鉄分少量含む 木製品出土層
4 N3/ 暗灰色 粘土質シルト しまり中
5 10YR6/3 にぶい黄橙 砂質シルト しまり強 砂礫多く含む 裏込め土

0 2m
1/40

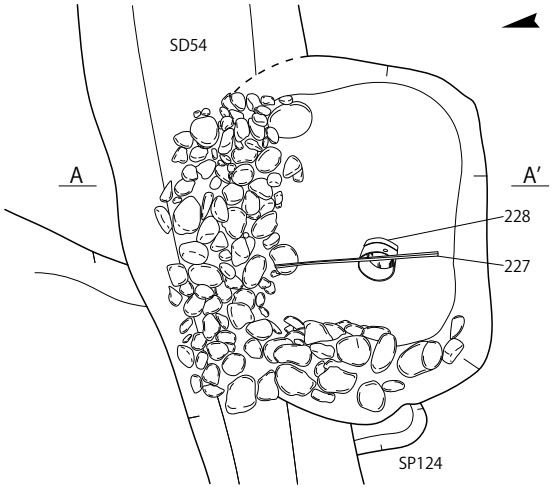
第 20 図　SK35・SP36・SX49 平面図・断面図

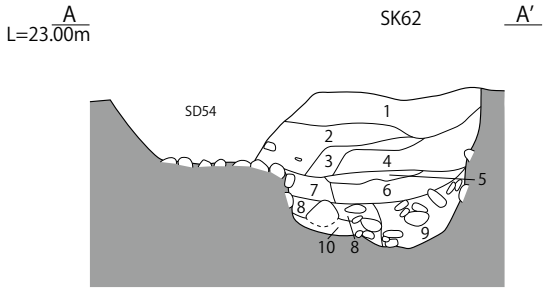
SK59



SK59
1　10YR5/4 にぶい黄褐色土 しまり強 地山土混入

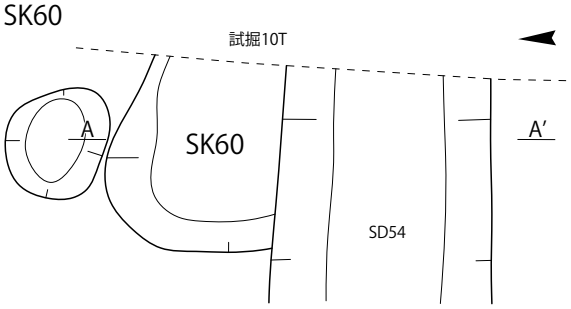
SK62

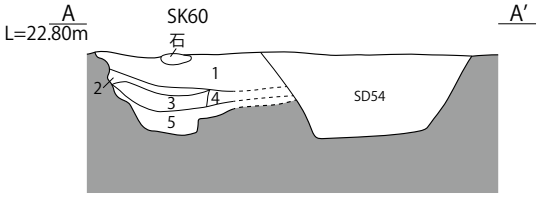




SK62
1　10YR5/3 にぶい黄褐色土
　しまり強 0.2cm粒炭化物少量混入 地山砂多量混入
2　2.5Y4/1 黄灰色土 しまり強 粘質土 0.1cm粒炭化物少量混入
3　5Y5/2 灰オリーブ色土 しまり強 砂質土 地山砂多量混入
4　2.5Y3/1 黒褐色土 しまり強 粘質土 地山砂少量混入
5　10YR6/4 にぶい黄橙色土 しまり強 0.5cm炭化粒少量混入 地山砂少量混入
6　10YR4/1 褐灰色土
　しまり強 0.3cm炭化粒少量混入 地山砂混入 1cmの小礫少量混入
7　10YR5/1 褐灰色土
　しまり強 0.3cm粒炭化物少量混入 地山砂混入 3cmの小礫混入
8　7.5YR4/1 褐灰色土 しまり強 地山砂多量混入 10cmの礫混入
9　2.5Y5/3 黄褐色土 しまり強 地山砂多量混入 5～10cmの礫多量混入
10　2.5Y4/2 暗灰黄色土 しまり強 地山砂多量混入 3～10cmの礫混入

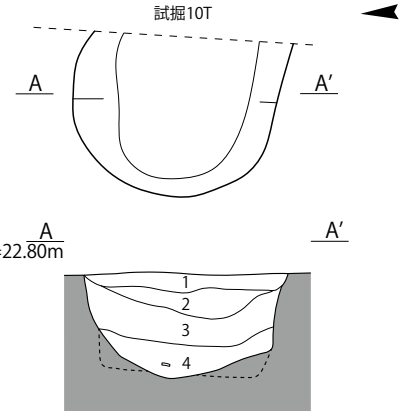
SK60





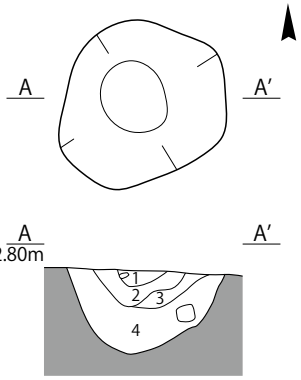
SK60
1　10YR5/3 にぶい黄褐色土 しまり強 1cm粒炭化物少量混入 地山砂多量混入
2　5Y3/2 オリーブ黒色土 しまり強 0.1～0.3cm粒炭化物少量混入
3　5Y3/1 オリーブ黒色土 しまり強 0.5cm粒炭化物少量混入
4　2.5Y4/3 オリーブ褐色土 しまり強 0.1cm粒炭化物少量混入
5　2.5Y6/2 灰黄色土 しまり強 0.1cm粒炭化物少量混入 地山土混入

SK78



SK78
1　10YR4/1 褐灰色土 しまり強 0.1～0.3cm粒炭化物少量混入 地山土多量混入
2　2.5Y4/1 黄灰色土 しまり強 0.2cm粒炭化物少量混入 地山土少量混入
3　2.5Y3/1 黒褐色土 しまり強 0.3cm粒炭化物少量混入 地山土少量混入
4　2.5Y3/2 黒褐色土 しまり強 0.1～0.2cm粒炭化物少量混入 地山土少量混入

SK79

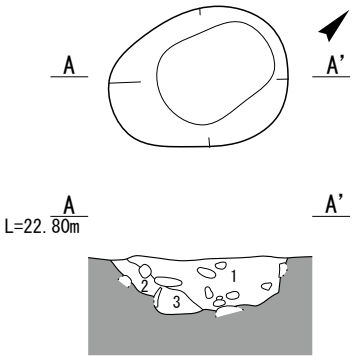


SK79
1　5Y3/1 オリーブ黒色土 しまり強 地山土少量混入
2　2.5Y4/1 黄灰色土 しまり強 0.1～0.3cm粒炭化物少量混入
3　2.5Y3/2 黒褐色土 しまり強 0.1cm粒炭化物少量混入
4　5Y2/1 黒色土 しまり強 0.1～0.5cm粒炭化物混入 地山砂少量混入

0　2m
1/40

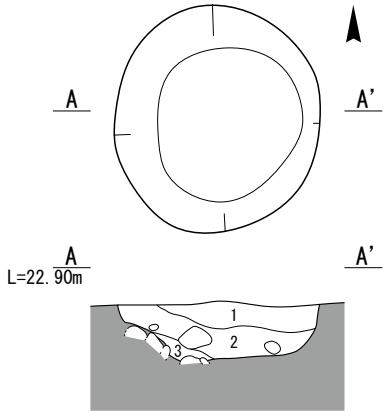
第21図　SK59・60・62・78・79 平面図・断面図

SK80



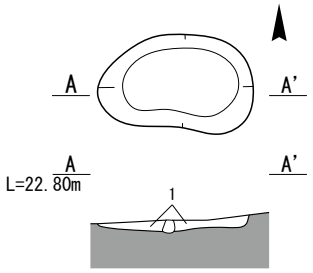
SK80
1　10YR4/1 褐灰色土 しまり強 0.5～1cm粒炭化物少量混入
2　2.5Y4/1 黄灰色土 しまり強 0.1cm粒炭化物少量混入
　地山砂多量混入
3　5Y3/1 オリーブ黒色土 しまり強 0.1～0.5cm粒炭化物少量混入
　地山砂多量混入

SK94



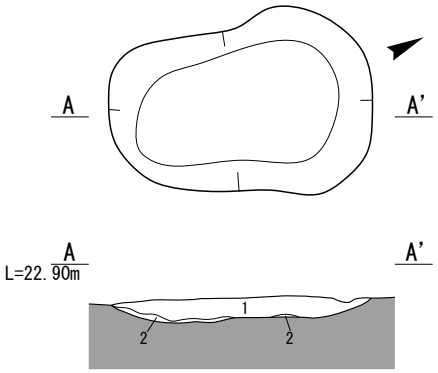
SK94
1　5Y3/1 オリーブ黒色土 しまり強 0.1～0.3cm粒炭化物少量混入
　0.5～1.0cm大の小礫少量混入
2　2.5Y3/1 黒褐色土 しまり強 0.5cm粒炭化物少量混入
　5～15cm大の礫多量混入 地山砂混入
3　2.5Y4/1 黄灰色土 しまり強 0.1～0.5cm粒炭化物少量混入
　地山砂混入

SK95



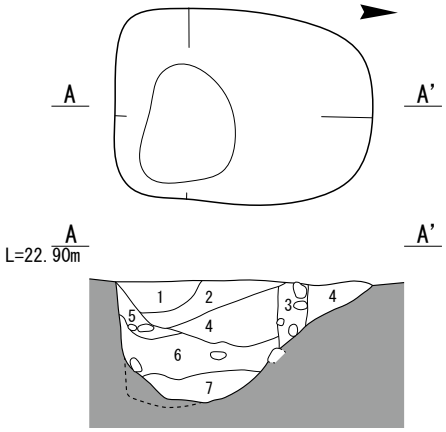
SK95
1　10YR4/1 褐灰色土 しまり強 0.1cm粒炭化物少量混入
　地山砂少量混入

SK99



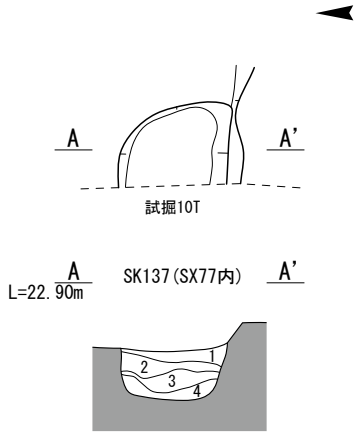
SK99
1　2.5Y3/1 黒褐色土 しまり強 0.1～0.5cm粒炭化物混入
　地山砂少量混入
2　10YR7/4 にぶい黄橙色土 しまり強 地山砂多量混入

SK102



SK102
1　10YR5/1 褐灰色土 しまり強 0.1cm粒炭化物少量混入
　3.0～5.0cm大の礫混入
2　2.5Y5/1 黄灰色土 しまり強 0.1～0.5cm粒炭化物混入
　0.5～5.0cm大の礫混入
3　2.5Y5/4 黄褐色土 しまり弱 5～10cm大の礫多量混入
4　2.5Y4/1 黄灰色土 しまり強 0.5cm粒炭化物少量混入
　5.0cm大の礫混入
5　7.5YR4/3 褐色土 しまり強 1～5cm大の礫混入 地山砂多量混入
6　2.5Y3/1 黒褐色土 しまり強 0.5cm粒炭化物少量混入
　3.0cm大の礫少量混入
7　2.5Y4/3 オリーブ褐色土 しまり強 地山砂多量混入
　2.0cm大の礫少量混入

SK137

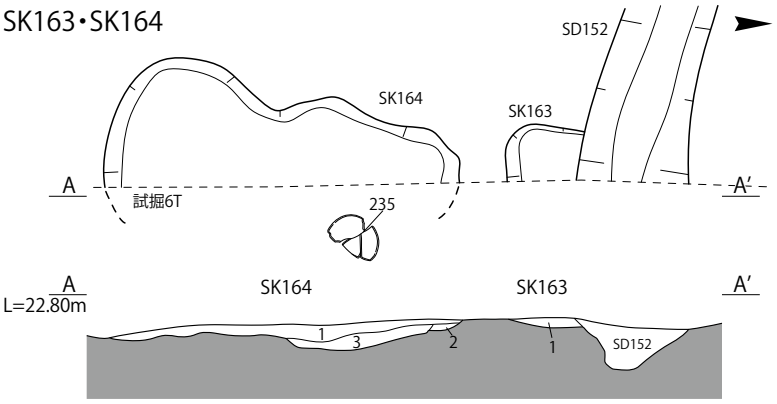


SK137
1　2.5Y4/1 黄灰色土 しまり強 0.1cm粒炭化物少量混入
2　2.5Y3/1 黒褐色土 しまり強 0.1cm粒炭化物少量混入 地山砂少量混入
3　2.5Y5/3 黄褐色土 しまり強 0.1cm粒炭化物少量混入 地山砂多量混入
4　7.5Y3/1 オリーブ黒色土 しまり強 粘質土 0.1cm粒炭化物少量混入

0　2m
1/40

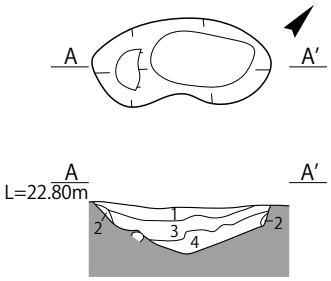
第22図　SK80・94・95・99・102・137 平面図・断面図

SK163・SK164



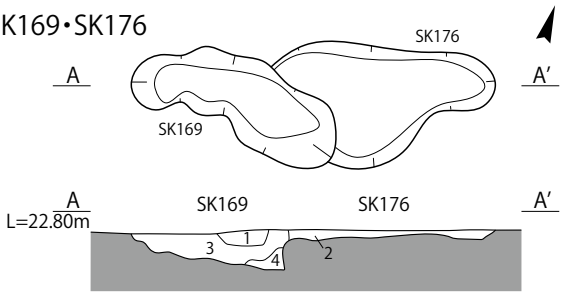
SK164・SK163
1　10YR5/3 にぶい黄褐色土 しまり強
2　10YR5/1 褐灰色土 しまり強
3　2.5Y5/3 黄褐色土 しまり強

SK168



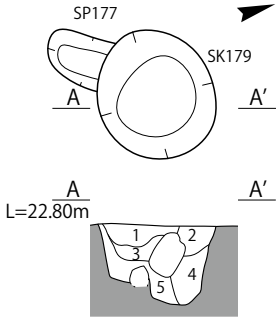
SK168
1　2.5Y5/1 黄灰色土 しまり強
2　2.5Y8/6 黄色土 しまり強 砂質
3　2.5Y4/1 黄灰色土 しまり強
4　2.5Y6/4 にぶい黄色土 しまり強

SK169・SK176



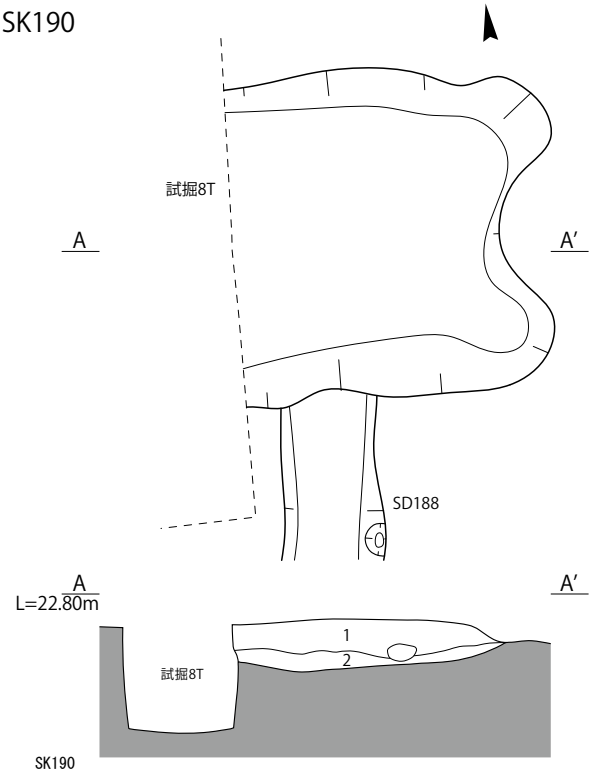
SK169・SK176
1　10YR6/6 明黄褐色土 しまり強 0.1cm粒炭化物混入
2　10YR6/1 褐灰色土 しまり強 0.3cm粒炭化物少量混入 地山土少量混入
3　10YR7/1 灰白色土 しまり強 4cm炭化物混入
4　10YR8/1 灰白色土 しまり強

SK179



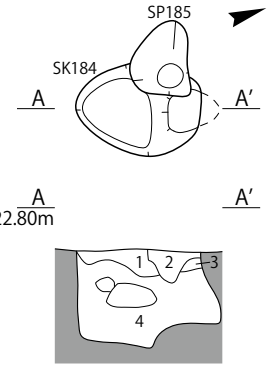
SK179
1　10YR5/6 黄褐色土 しまり強 0.1cm粒炭化物少量混入
　地山土少量混入
2　10YR5/4 にぶい黄褐色土 しまり強 0.1cm粒炭化物少量混入
　地山土少量混入
3　10YR4/4 褐色土 しまり強 0.1cm粒炭化物少量混入
　地山土少量混入
4　10YR4/3 にぶい黄褐色土 しまり強 地山土少量混入
5　10YR5/2 灰黄褐色 しまりよい 砂質

SK190



SK190
1　10YR6/1 灰白色土 しまり強 0.1～0.3cm粒炭化物混入 0.1cm粒礫混入
2　10YR5/1 褐灰色土 しまり強 0.1～0.3cm粒炭化物混入

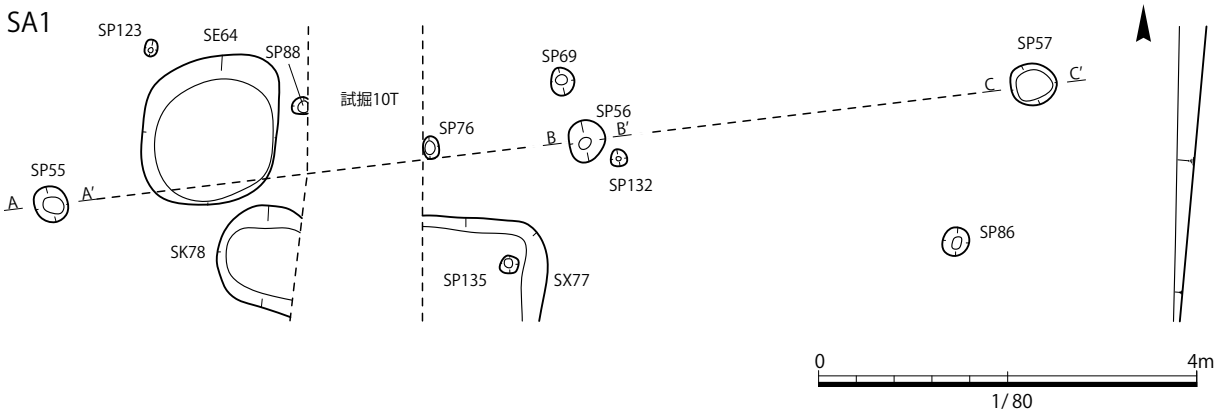
SK184

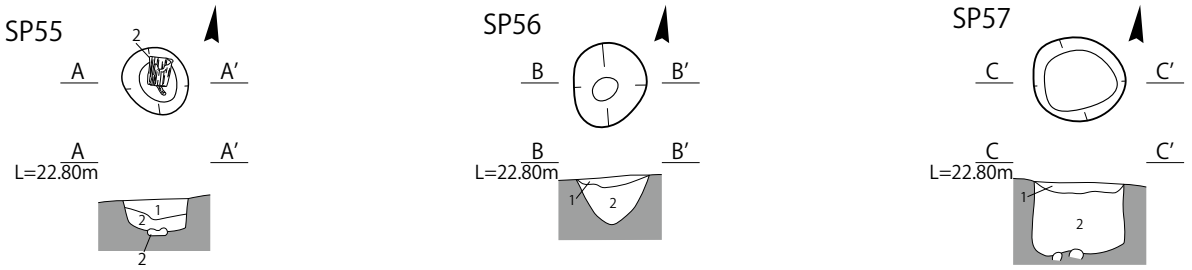


SK184
1　2.5Y6/2 灰黄色土 しまり強 0.1cm粒炭化物少量混入 地山土多量混入
2　2.5Y5/1 黄灰色土 しまり強 地山土多量混入
3　2.5Y5/3 黄灰色土 しまり強 0.3cm粒炭化物少量混入
4　2.5Y7/1 灰白色土 しまり強 0.1cm粒炭化物混入

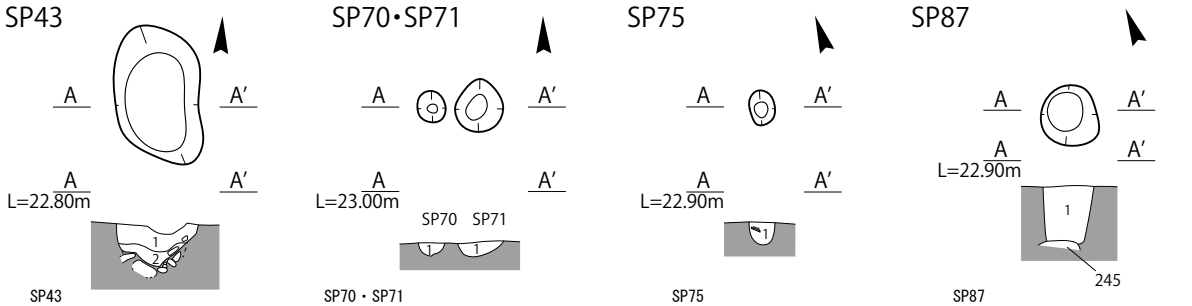
0　2m
1/40

第 23 図　SK163・164・168・169・176・179・184・190 平面図・断面図





SA1(SP55・SP56・SP57)
1　10YR4/1 褐灰色土 しまり強 0.1～0.3cm粒炭化物少量混入 地山砂混入
2　2.5Y6/2 灰黄色土 しまり強 0.1cm粒炭化物少量混入 地山砂多量混入

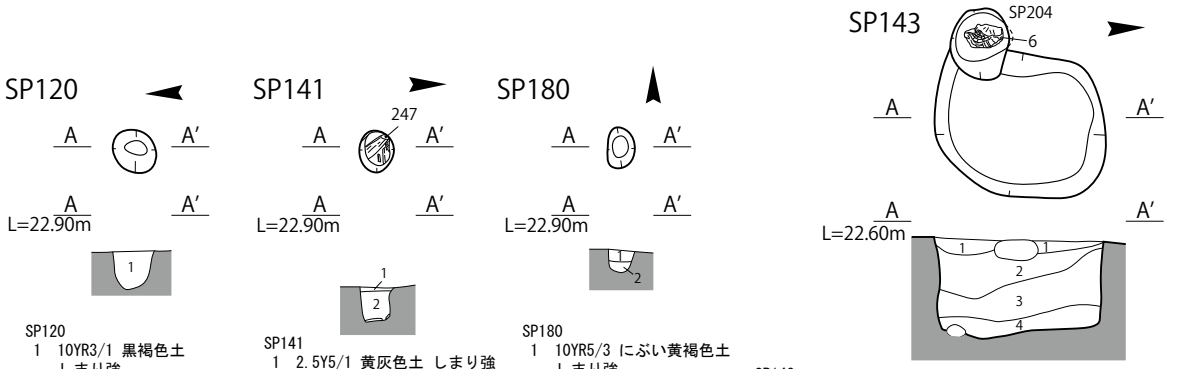


SP43
1　7.5YR3/1 黒褐色 シルト
しまり中 ラミナ状に堆積
炭化物・鉄分少量含む
2　7.5YR4/1 褐灰色 砂質シルト
しまり中 炭化物・鉄分少量含む

SP70・SP71
1　10YR5/3 にぶい黄褐色土 しまり強
0.1cm粒炭化物混入

SP75
1　7.5YR3/1 黒褐色土
しまり強
0.5cm粒炭化物少量混入
地山砂少量混入

SP87
1　5Y4/1 灰色土
しまり強
0.1cm粒炭化物少量混入
0.5～1cm大の小礫少量混入



SP120
1　10YR3/1 黒褐色土
しまり強
0.1cm粒炭化物少量混入

SP141
1　2.5Y5/1 黄灰色土 しまり強
2　2.5Y4/1 黄灰色土 しまり強

SP180
1　10YR5/3 にぶい黄褐色土
しまり強
2　10YR5/4 にぶい黄褐色土
しまり強

SP143
1　10YR5/1 褐灰色土 しまり強 0.1cm粒炭化物少量混入
2　10YR6/1 褐灰色土 しまり強 0.1～0.3cm粒炭化物少量混入
3　10YR6/2 灰黄褐色土 しまり強 0.1cm粒炭化物少量混入
4　10YR5/2 灰黄褐色土 しまり強

0　2m
1/40

第24図　SA1(SP55・56・57) SP43・70・71・75・87・120・141・143・180 平面図・断面図

溝

※規模の（　）は検出長または残存長を表す

図	種別	遺構番号	グリッド	規模			出土遺物	備考
				長さ(m)	幅(m)	深さ(m)		
7	SD	06	b1	(2.11)	2.00	0.04		
7	SD	08	a2	(3.45)	0.74	0.10	中世土師器、鉄滓	SK07・SP33より古い
8	SD	15	b3	(1.86)	0.99	0.20	中世土師器	
7	SD	34	a2	(3.47)	0.77	0.15		
8・9	SD	50	a2・3 b3	東西(9.88) 南北(7.20)	最大2.78 最小1.66 最大2.55 最小1.80	0.75	中世土師器、珠洲、古瀬戸、青磁、越前、刀子の鞘か、折敷	L字に曲がる
8・9	SD	51	a3	3.78	(3.50)	0.54	中世土師器、青磁	L字に曲がる
8・9・10	SD	54	a3・4 b3・4 c3 d3	(30.81)	最大5.60 最小0.79	0.65	中世土師器、珠洲、古瀬戸、青磁、越前、八尾、漆器椀、木製品、砥石、被熱礫	SD50・SX52・SX53より古い 屈曲部が張り出す
9・11	SD	73	c3	(1.70)	0.95	0.52		SD54より古い。
12	SD	91	d5	(3.60)	(0.38)	0.04	中世土師器	
12・13	SD	96	b5・6	(4.29)	(3.45)	0.67	中世土師器、珠洲（刻書土器）、越中瀬戸、磁器、伊万里、青磁、連歯下駄、碁石	杭を打ち込み、横木を設置。
12	SD	100	b5	2.32	0.43	0.10		
8	SD	152	a4	(4.68)	0.58	0.27	中世土師器、珠洲、古瀬戸	SD199・SP148より古い
8・10	SD	166	a4	1.34	0.26	0.06	中世土師器	
8・10	SD	187	b4	2.54	1.36	0.32		自然木多量に出土
8・11	SD	188	b4	(1.80)	0.53	0.23	中世土師器	SK190より古い
8・11	SD	189	b4	(1.43)	(0.45)	0.24	中世土師器	
8・11	SD	197	b3	4.86	最大0.50 最小0.16	0.40	中世土師器	SD54より新しい
8・11	SD	199	a4	(4.83)	1.20	0.22	中世土師器、珠洲、越前、砥石	

井戸

図	種別	遺構番号	グリッド	規模			出土遺物	備考
				長さ(m)	幅(m)	深さ(m)		
15	SE	01	a2	2.20	2.00	0.54	中世土師器、珠洲、八尾、漆器椀、草履芯板、板材	素掘り井戸
15	SE	02	a1	1.77	(1.62)	0.97	中世土師器、珠洲、青磁、箸、被熱礫	石組井戸（水溜めに曲物）
15	SE	03	a2	1.80	1.64	1.12	中世土師器、珠洲、木製品、石臼	石組井戸（水溜めに曲物）
16	SE	05	b2	1.38	1.21	0.94	中世土師器、越前、白磁、曲物、横桟、隅柱、縦板、板状木製品、箸、曲物底板か	木組井戸（水溜めに曲物） 多量の円礫混入
16	SE	48	a1	1.81	(1.36)	0.88	中世土師器、珠洲、古瀬戸、越前、青磁、須恵器、箸、板材	木組井戸、多量の円礫混入
16	SE	58	c3・4	1.30	1.30	0.74	中世土師器、珠洲、須恵器、青白磁、箸	石組井戸（水溜めに曲物）
17	SE	61	c3・4	1.30	1.13	0.81	中世土師器、珠洲、越中瀬戸、漆器椀、漆器皿、横槌、差歯下駄、曲物、箸、竹	石組井戸（水溜めに曲物）石組を取り外し祭祀を行う。息抜きあり。
17	SE	64	c4	1.55	1.41	0.76	中世土師器、八尾、箸、箆状木製品、板状木製品	素掘り井戸
17	SE	65	b4	1.75	1.38	0.80	中世土師器、曲物、曲物底板、箸、不明部材	石組井戸（水溜めに曲物）
18	SE	81	c4	1.54	(0.91)	0.78	中世土師器、珠洲、八尾、青磁、箸、加工木製品	木組井戸
18	SE	83	c5	1.47	1.34	1.06	中世土師器、珠洲、古瀬戸、瓦質土器、漆器椀、曲物底板、箸	石組井戸
18	SE	108	c5	1.85	1.50	1.14	中世土師器、珠洲	石組井戸

土坑

図	種別	遺構番号	グリッド	規模			出土遺物	備考
				長さ(m)	幅(m)	深さ(m)		
19	SK	07	a2	(2.39)	1.84	0.35	中世土師器、珠洲、越前、古瀬戸、青磁、鉄滓	底面に礫多い
19	SK	14	b2	2.15	(1.44)	0.20	中世土師器、珠洲、火打石	円礫多量出土
19	SK	16	b3	(0.59)	(0.50)	0.06		
20	SK	35	a2	4.40	1.60	0.43	中世土師器、珠洲、八尾、栓、棒状木製品	馬小屋遺構
19	SK	38	b3	(1.33)	1.21	0.16	中世土師器、珠洲、越前	SD50より古い
19	SK	39	b3	(1.55)	1.22	0.20	中世土師器	SD15・SK38・SD50より古い
21	SK	59	c3	0.58	0.51	0.06	中世土師器	
21	SK	60	c3	(1.01)	(0.91)	0.44	中世土師器	SD54より古い
21	SK	62	b・c3	(1.60)	(0.95)	0.83	中世土師器、青磁、曲物、柄	SP124より古い。底面・壁面を円礫で覆う
21	SK	78	c4	1.10	(0.84)	0.55	中世土師器	素掘り井戸の可能性あり
21	SK	79	c4	0.96	0.83	0.45	中世土師器	
22	SK	80	b4	0.94	0.73	0.29	中世土師器、珠洲、被熱礫	
22	SK	94	c4・5	1.19	1.08	0.30	中世土師器	
22	SK	95	b4	0.82	0.50	0.09		
22	SK	99	b5	1.39	0.98	0.14	中世土師器	
22	SK	102	b・c5	1.35	1.02	0.65	中世土師器、土錘	
22	SK	137	c4	0.57	(0.43)	0.30		
23	SK	163	a4	(0.41)	(0.30)	0.05		SD152より古い
23	SK	164	a4	1.88	(0.68)	0.17	中世土師器	
23	SK	168	b4	0.94	0.43	0.28	中世土師器	
23	SK	169	b4	1.13	0.41	0.21	中世土師器	
23	SK	176	b4	(1.17)	0.65	0.05	中世土師器、青磁、白磁	SK169より古い
23	SK	179	b4	0.69	0.61	0.43	中世土師器	
23	SK	184	b4	0.65	0.46	0.51	中世土師器	SP185より古い
23	SK	190	b3・4	(1.74)	1.70	0.24	中世土師器、珠洲、砥石	
11	SK	201	a4	0.85	(0.61)	0.33	中世土師器、ウマの歯	SD199より古い。ウマの頭部を埋納する儀礼

第1表　遺構一覧表(1)

ピット　　※規模の（　）は検出長または残存長を表す

図	種別	遺構番号	グリッド	規模			出土遺物	備考
				長さ(m)	幅(m)	深さ(m)		
7	SP	04	a2	0.77	0.51	0.13		
7	SP	09	a2	0.16	0.14	0.05		
7	SP	10	a2	0.20	0.19	0.13		
7	SP	11	a2	0.56	0.33	0.22	中世土師器	
7	SP	12	a・b2	0.24	0.24	0.19	青磁	
7	SP	13	b2	0.18	0.18	0.03		
7	SP	17	b1	0.21	0.20	0.10		
7	SP	18	a・b1	0.30	0.27	0.13	中世土師器	
7	SP	19	a1	0.37	0.28	0.16		
7	SP	20	a1	0.20	0.15	0.11		
7	SP	21	a2	0.29	0.28	0.24		
7	SP	22	a2	0.18	0.16	0.06		
7	SP	23	b2	0.27	0.27	0.12	中世土師器	
7	SP	24	b2	0.30	0.26	0.14		
7	SP	25	b2	0.38	0.35	0.15		
7	SP	26	b2	0.29	0.27	0.12		
8	SP	27	a3	0.48	0.39	0.11		
8	SP	28	b3	0.23	0.16	0.08		
8	SP	29	b3	0.43	0.33	0.10		
7	SP	30	a2	0.29	0.29	0.23		
7	SP	31	a2	0.18	0.12	0.07		
7	SP	32	a2	0.40	0.33	0.13		
7	SP	33	a2	0.65	0.50	0.24	中世土師器	
20	SP	36	a2	0.89	(0.51)	0.14	古瀬戸	SK35より古い
7	SP	37	b2	0.44	0.43	0.08		
7	SP	40	a2	0.33	(0.20)	0.17	中世土師器	
7	SP	41	a2	0.14	0.13	0.07		
7	SP	42	a2	0.34	0.34	0.22	中世土師器	
24	SP	43	a1	0.69	0.45	0.22	中世土師器	
7	SP	44	a2	0.22	0.20	0.08		
7	SP	45	a1	0.21	0.19	0.13		
7	SP	46	a2	0.20	0.18	0.17		
7	SP	47	a2	0.16	0.12	0.07		
24	SP	55	b4	0.38	0.34	0.17	礎板か	柵列か(SA1)
24	SP	56	c4	0.44	0.38	0.25		柵列か(SA1)
24	SP	57	d4	0.48	0.44	0.39	中世土師器	柵列か(SA1)
12	SP	66	b4	0.23	0.23	0.34	中世土師器	
9	SP	67	b4	0.19	0.17	0.11	中世土師器	
12	SP	68	c4	0.17	0.16	0.06	中世土師器	
12	SP	69	c4	0.29	0.24	0.15	中世土師器	
24	SP	70	c4	0.16	0.14	0.07		
24	SP	71	c4	0.27	0.25	0.08	八尾	
12	SP	72	c4	0.18	0.18	0.25		
12	SP	74	b4	0.31	0.26	0.29		
24	SP	75	c4	0.18	0.12	0.12	中世土師器、越前	
12	SP	76	c4	0.24	0.16	0.20	中世土師器	
12	SP	82	c4・5	0.26	0.26	0.22		
12	SP	84	c4	0.30	0.28	0.13		
12	SP	85	c4	0.26	0.26	0.18		
12	SP	86	c4	0.30	0.27	0.11		
24	SP	87	c5	0.32	0.30	0.31	中世土師器、珠洲、礎石か	柱穴の可能性
12	SP	88	c4	0.18	(0.16)	0.18	中世土師器	
12	SP	89	c4	0.18	0.16	0.13		
12	SP	90	c4	0.25	0.23	0.12	珠洲	
12	SP	92	b4	0.20	0.16	0.07		
8	SP	93	b4	0.32	0.30	0.10		
12	SP	101	b5	0.58	0.46	0.06		
12	SP	103	b5	0.52	0.31	0.04		
12	SP	104	c5	0.24	0.21	0.30		
12	SP	105	c5	0.30	0.28	0.24	中世土師器	
12	SP	106	c5	0.45	0.40	0.24		
12	SP	107	c5	0.30	0.29	0.08	中世土師器	
12	SP	109	c5	0.36	0.26	0.12		
12	SP	110	c5	0.27	0.22	0.10		
12	SP	111	c5	0.29	0.18	0.09		
12	SP	112	c5	0.25	0.23	0.23	中世土師器	
12	SP	113	c5	0.36	0.29	0.19		
12	SP	114	c5	0.59	0.52	0.17		
12	SP	115	c5	0.29	0.23	0.11		
12	SP	116	c5	0.33	0.30	0.27		
12	SP	117	c5	0.26	0.22	0.12		
12	SP	118	c5	0.42	0.35	0.13	中世土師器	
12	SP	119	c5	0.52	0.49	0.05		
24	SP	120	c4	0.22	0.22	0.20	中世土師器、金付き中世土師器	
12	SP	121	c5	0.18	0.17	0.18		
12	SP	122	c5	0.41	0.28	0.29		

第2表　遺構一覧表(2)

ピット　　※規模の（　）は検出長または残存長を表す

図	種別	遺構番号	グリッド	規模			出土遺物	備考
				長さ(m)	幅(m)	深さ(m)		
12	SP	123	c4	0.17	0.13	0.04		
9	SP	124	b3	0.65	(0.37)	0.13		
12	SP	125	c5	0.23	0.22	0.05		
12	SP	126	c4	0.27	0.27	0.13		
12	SP	127	b4・5	0.52	0.50	0.17	中世土師器	
12	SP	128	c5	0.31	0.30	0.18		
12	SP	129	c4	0.64	0.50	0.05		
12	SP	130	c5	0.27	0.22	0.15		
12	SP	131	c5	(0.28)	0.27	0.08		
12	SP	132	c4	0.17	0.17	0.10		
12	SP	133	c5	0.39	0.38	0.50	中世土師器	
9	SP	134	b3	0.22	0.17	0.24		
12	SP	135	c4	0.19	0.18	0.11		
12	SP	136	c4	0.20	0.16	0.26		
12	SP	138	c5	0.29	0.25	0.26	中世土師器	
12	SP	139	c5	0.21	0.19	0.15	中世土師器	
8	SP	140	a3	0.17	0.12	0.04		
24	SP	141	a3	0.22	0.18	0.18	加工木製品	
8	SP	142	a3	0.19	0.17	0.28		
24	SP	143	a3	0.91	0.75	0.54	中世土師器	SP204より古い
8	SP	144	a4	0.16	0.12	0.08	中世土師器	
8	SP	145	a4	0.17	0.12	0.12		
8	SP	146	a4	0.24	0.20	0.27	中世土師器	
8	SP	147	a4	0.22	0.21	0.29	中世土師器	
14	SP	148	a4	1.00	0.95	0.22	中世土師器、珠洲	SB1
8	SP	150	a4	0.17	0.13	0.14		
8	SP	151	a4	0.17	0.16	0.04		
8	SP	153	a4	0.25	0.22	0.35		
8	SP	154	a4	0.21	0.20	0.37		
8	SP	155	a4	0.25	0.20	0.25		
8	SP	156	a3	0.23	0.19	0.24		
8	SP	157	a3	0.13	0.10	0.15		
8	SP	158	a3	0.15	0.14	0.19		
8	SP	159	a3	0.17	0.14	0.04		
14	SP	161	a3	0.65	0.40	0.51		SB1
8	SP	162	a3	0.18	0.18	0.07		
14	SP	165	a4	0.65	0.46	0.68	中世土師器	SB1
8	SP	167	a4	0.27	0.23	0.08	中世土師器	
8	SP	170	b4	0.42	0.39	0.25	中世土師器	
8	SP	171	b4	0.27	0.26	0.14		
8	SP	172	b4	0.19	0.19	0.05		
8	SP	173	b4	0.18	0.17	0.04		
8	SP	174	b4	0.26	0.23	0.04		
8	SP	175	b4	0.29	0.25	0.04		
8	SP	177	b4	(0.31)	0.26	0.03		SK179より古い
8	SP	178	b4	0.19	0.14	0.04		
24	SP	180	b4	0.21	0.14	0.12	中世土師器	
8	SP	181	b4	0.20	0.19	0.06		
8	SP	182	b4	0.31	0.26	0.22		
8	SP	183	b4	0.17	0.13	0.07		
8	SP	185	b4	0.39	0.30	0.13	中世土師器	
8	SP	186	b4	0.24	0.24	0.10		
8	SP	191	b3	0.18	0.15	0.08		
8	SP	192	b3	0.24	0.18	0.17	中世土師器	
8	SP	193	b3	0.15	0.13	0.05		
8	SP	194	b3	0.19	0.16	0.14		
8	SP	195	b3	0.16	0.15	0.06		
8	SP	196	b3	0.28	0.24	0.16		
8	SP	198	a3	0.53	0.36	0.24	中世土師器	
8	SP	203	a3	0.18	0.14	0.07		
14	SP	204	a3	0.36	0.30	0.34	柱根	SB1

不明遺構

図	種別	遺構番号	グリッド	規模			出土遺物	備考
				長さ(m)	幅(m)	深さ(m)		
20	SX	49	a2	1.52	1.35	0.86	中世土師器、陶硯、柄杓、編み物、曲物、杓子状木製品、角柱状木製品、折敷	井戸の水溜めの曲物を馬小屋(SK35)の排泄溜めとして利用か
8・9	SX	52	a3	4.03	3.20	0.58	中世土師器、古瀬戸、珠洲、不明木製品、切羽	
8・9	SX	53	b3	(4.42)	4.15	0.45	中世土師器、珠洲	
9・11	SX	63	b・c3	(3.85)	(1.53)	0.44	中世土師器、珠洲、八尾	竪穴状遺構　SD54より古い
12・13	SX	77	c4	2.62	(1.32)	0.15	中世土師器、珠洲	竪穴状遺構
12・13	SX	97	c5	2.71	2.15	0.30	中世土師器、珠洲	
12・13	SX	98	c5・6	(3.54)	(3.00)	0.33	中世土師器、珠洲、古瀬戸、青磁	竪穴状遺構
8・11	SX	149	a4	0.92	(0.09)	0.16		

第3表　遺構一覧表(3)

第４節　遺　物

1　概　要

遺物はほとんどが遺構からの出土である。土器、木製品、石製品、金属製品がある。土器は破片が多数で、完形は少量である。古代・中世・近世の遺物が出土しているが、ほとんど中世で占められる。木製品も多く出土し、特に井戸関連の遺物、及び井戸内から出土したものが目立つ。

土器の時期比定については、主に次の文献を参考にした。中世土師器:宮田 1997a・森 2003・2005、珠洲:吉岡 1994、古瀬戸：藤澤 2008、中国陶磁器：上田 1982・山本 2000、越前：福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2016、越中瀬戸：宮田 1997b。

以下、遺構ごとに記述し、遺構外の表土・表採・試掘トレンチ等の出土遺物も加える。

2　遺構出土遺物

SA1（SP55・57）（第 25 図）　1 は中世土師器である。2 は長方形の板材で、ピットの底部から出土していることから、礎板と考えられる。

SB1（SP148・204）（第 25 図）　3・4 は中世土師器である。3 は 15 世紀中頃、4 は 15 世紀と考えられる。5 は珠洲の壺である。6 は SP204 出土の柱根である。芯持ち材で半分程が腐朽している。先端を加工してやや尖らせている。樹種はスギである。

SD08（第 26 図）　7・8 は中世土師器である。平底気味の底部から開き気味に立ち上がる。7 は底部が突出するへそ皿である。15 世紀と考えられる。

SD50（第 26 図）　9・10 は中世土師器である。9 は底部から内湾して立ち上がる。10 は厚手の体部で開き気味に立ち上がる。9 は 14 世紀中頃、10 は 15 世紀初めと考えられる。11 ～ 13 は龍泉窯系の青磁碗である。11 は体部に鎬連弁文がある。12 は高台内が露胎で、13 の高台内は蛇の目釉剥ぎである。11 は 13 世紀中頃から 14 世紀初め、13 は 15 世紀と考えられる。14 は越前の甕である。15 ～ 20 は珠洲である。15 ～ 18 は擂鉢で、15 は緩い外傾口縁、16 は水平口縁である。16 は一単位 8 条の卸目、17 は 9 条である。15・16 はⅣ期、17 はⅢ～Ⅳ期頃と考えられる。19 は壺で、綾杉文のタタキである。20 は壺で、櫛目波状文を施す。20 はⅣ期と考えられる。21 は折敷の横板で、両端と中央の 3 ヶ所に孔がある。22 は銅製の刀子の鞘か。1 枚の板を二等辺三角形に折り曲げ、頂点部分で合わせている。

SD51（第 26 図）　23・24 は中世土師器である。23 は厚手の口縁部内外に油煙が付着する灯明皿である。24 は口縁端部が小さく外反する。24 は 15 世紀と考えられる。25 は青磁碗で、口縁端部は丸い。

SD54（第 26・27 図）　26 ～ 34 は中世土師器である。26・27 は厚手で、26 は平底である。体部が開き気味に立ち上がる。29 は底部に指頭圧痕があり、緩やかに内湾する。30 は底部から内湾し、口縁端部を外側につまみ上げる。31 は口縁部が小さく外反し、端部をつまみ上げる。32 ～ 34 は底部から開き気味に立ち上がり、32・33 は口縁部に強いヨコナデを行い外反する。33 は口縁端部を外側につまみ上げている。27 と 29 は灯明皿で、油煙が付着している。26 ～ 28 は 14 世紀前半、30 は 15 世紀前半、31 は 15 世紀中頃～後半、32・33 は 16 世紀、34 は 15 世紀か。35 は龍泉窯系の青磁碗で鎬連弁文がみられる。36・37 は古瀬戸である。36 は灰釉平碗で断面に漆継ぎ痕がみられる。14 世紀と考えられる。37 は浅い輪高台の鉄釉碗である。38 は越前の甕で、口縁端部を下に折り返し縁帯を作り出す。越前Ⅱ期、13 世紀と考えられる。39 は八尾の甕で、底部に指頭圧痕がある。40 ～ 54 は珠洲である。40・41 は甕で、円頭のくの字口縁である。Ⅳ期である。42 ～ 44 は擂鉢である。42 は口縁部が

内傾し、内側に平坦な面を作る。Ⅴ期と考えられる。43 は静止糸切りである。44 の卸目は一単位 9 条である。45 は鉢で、端部を丸く収める。Ⅳ期と考えられる。46 は片口鉢で、底面は静止糸切りでⅡ期である。47 ～ 54 は壺である。47 は綾杉状のタタキ、48 ～ 50 は放射状のタタキのある同一個体である。48 は内面の当て具痕が顕著である。47 はⅡ～Ⅲ期、48 ～ 50 はⅡ期と考えられる。52 はⅣ期以前と考えられる。54 は静止糸切りである。55 は漆器椀である。内外面黒漆塗りで、内面に赤漆で草木文が描かれる。56 の木製品は下面が凸状に出っ張り、上面は渦巻文が掘られる。独楽の可能性がある。57 は粘板岩製の板状砥石である。

SD96（第28図） 58は珠洲の壺である。肩部に刻書がある。刻書は焼成前に施されたヘラ書き文字で、「天」か「無（无）」とみられる。また「元」や「尺」のくずし字の可能性もある。Ⅳ期と考えられる。59・60 は越中瀬戸である。59 は鉄釉の擂鉢。60 は鉄釉の壺で、底面は回転糸切りである。61 は伊万里の碗である。62 は近世磁器の染付坏である。63 は連歯下駄である。後の歯が顕著に摩耗している。64 は泥岩製の黒色の碁石である。（村上）

SD152（第 28 図） 65 ～ 70 は中世土師器である。68・69 は体部が弱く外反して立ち上がる。70 は灯明皿で内外面に油煙が付着している。いずれも 14 世紀中頃と考えられる。

SD188（第 28 図） 71・72 は中世土師器である。71 は平底気味の底部から口縁部が外上方に立ち上がる。14 世紀中頃と考えられる。

SD197（第 28 図） 73･74 は中世土師器である。74 は薄手で体部から直線的に開き気味に立ち上がり、端部をつまみ上げる。いずれも 14 世紀中頃と考えられる。

SD199（第 28 図） 75 ～ 78 は中世土師器である。76 は灯明皿で体部から開き気味に立ち上がり、口縁端部を少しつまみ上げる。78 はヨコナデを強く施し、口縁部が外反する。75 は 14 世紀中頃～ 15 世紀初め、76 は 15 世紀、77・78 は 15 世紀中頃～後半と考えられる。79 は越前の擂鉢で、一単位 10 条の卸目があり、底面は静止糸切りである。80 は珠洲の擂鉢で、底面は静止糸切りである。81 は泥岩製の砥石で、3 面に擦面が見られる。いずれの面も繰り返しの使用により擦り減って湾曲している。

SE01（第 29 図） 82 は中世土師器である。13 世紀後半である。83 は珠洲の壺、84 は八尾とみられる甕である。85 は漆器椀で、内外面黒漆塗り、見込みと体部外面に赤漆で草木文（笹文）が描かれる。樹種はケヤキである。86 は板材で四隅の角の一つをＬ字に切り欠いている。表面には刃物による多数の線状痕がある。87 は草履芯板で、つま先部分の 2 ヶ所に小さな孔をあけ、側辺に切り込みを入れた薄板である。板にワラや麻などを編み込むための芯として使用したものである。

SE02（第 29 図） 88 ～ 91 は中世土師器である。89 は灯明皿で煤が付着している。90・91 は幅の広いヨコナデを行う。88・89 は 14 世紀初め～中頃、90 は 14 世紀中頃、91 は 14 世紀代と考えられる。92 は龍泉窯系の青磁碗で、鎬連弁文が認められる。93 は珠洲の擂鉢、94 は珠洲の甕で、いずれも被熱している。特に 94 は内面に多量の炭化物が面的に付着している。断面にも炭化物が付着することから、破損後に被熱したものである。93 は水平口縁でⅣ期である。94 は細密なタタキ目である。95 ～ 97 は箸である。95・96 は両端が細くなる形状で、97 は両面を平坦に削っている。98 は被熱した扁平な円礫で、一部に打撃によるとみられる剥離がある。

SE03(第 29･30 図） 99 ～ 101 は中世土師器である。101 は薄手で底部から緩く外反して立ち上がる。100・101 は灯明皿で、100 は煤、101 は油煙が付着している。99・100 は 14 世紀前半～中頃、101 は 15 世紀中頃と考えられる。102 ～ 105 は珠洲である。102 は甕、103・104 は擂鉢、105 は鉢である。103 は内面がよく摩耗しており、一単位 8 ～ 9 条、104 は 9 条の卸目がある。103・105 は底面静止糸切り後ナデを行う。104 は内外面に､105 は外面に被熱痕がある。106 は角閃石安山岩の石臼（下臼）で、

副溝は5～7本の7区画である。広範囲に被熱痕が見られるが、辺縁部の破断面には見られないことから、被熱後に破損したものである。

SE05（第30・31図） 107は中世土師器である。108は白磁の小型壺か。外面に文様の一部である縦方向の稜がみられる。109は越前の鉢で、口縁端部は外傾する。越前Ⅱ期の13世紀か。110～120は井戸枠の部材である。110～113は、長さ70㎝、幅10.5㎝、厚み3.5㎝の横桟である。ホゾとみぞが作出され、正方形に組まれていた。114～117は幅11.9～13.8㎝、厚み0.5～1.2㎝の縦板で下部のみ残存する。118～120は幅2.7～5.4㎝、厚み2.0～2.4㎝の隅柱である。下部のみ残存している。124は井戸底に置かれた水溜の曲物である。身の部分を三重の側板で作り、下部にタガを巻く。タガの下部から本体に貫通する木釘孔がある。内面にはケビキが施される。121は板状木製品である。細長の台形状で、広端幅4.8㎝、狭端幅2.4㎝、厚み0.4㎝である。端部に向かって薄く加工している。表面に針穴程度の小さい傷が半円状に連なって見られる。122は箸で両端が細い。123は曲物の底板とみられ、表面に刃物による多数の線状痕がみられる。まな板に転用された可能性もある。

SE48（第31図） 125～132は中世土師器である。125は二段ナデを施す。126は灯明皿で油煙が付着する。127は口縁部にヨコナデを施しやや外反する。131はロクロ成形で、平底の底部と体部境界に凹みが見られる。底面は回転糸切りである。125は13世紀中頃、126～131は13世紀後半、132は13世紀代か。133・135は珠洲の擂鉢、134は珠洲の壺である。133は方頭の外傾口縁で、Ⅱ期に比定される。134・135の底面は静止糸切りである。135は1単位5条の卸目があり、内面の摩耗が顕著である。136は鎬連弁文の青磁碗である。13世紀と考えられる。137は古瀬戸の灰釉卸皿、138は越前の壺である。139は箸で両端が細くなる。

SE58（第31図） 140は須恵器の坏で9世紀頃と考えられる。141～145は中世土師器である。いずれも似た形態で、丸底気味の底部から緩やかに口縁部が立ち上がる。144・145は灯明皿で煤が付着する。いずれも15世紀末～16世紀初め頃と考えられる。146は青白磁の瓶類で、外面に唐草文が施される。147・148は箸である。148は板状を呈する。

SE61（第32図） 149～156は中世土師器である。152・156は口縁部が外反する。153は油煙、154・156は煤が付着する灯明皿である。150～154は14世紀中頃、155・156は14世紀代と考えられる。157は鉄釉を施す越中瀬戸の皿である。158は漆器皿で、内外面黒漆塗り、見込みに赤漆で植物文を描く。159・160は漆器椀である。159は内面に赤漆、外面に黒漆を塗り、見込みに菊花文を描く。160は内外面黒漆塗りで、見込みと体部外面に赤漆で植物文を描く。樹種は、158・159がブナ属、160がモクレン属である。161は井戸水溜の曲物である。身の部分を二重の側板で作り、上下に二条にタガを巻く。内面はケビキが施される。162・163は差歯下駄で、ホゾが台表に露呈する露卯下駄である。一対になると考えられる。前歯は台形、後歯は長方形である。鼻緒部分には指の圧痕が残る。164は横槌とみられる。断面は逆三角形で、本体と柄は一体である。165は、曲物内の底面に刺さっていた竹である。井戸埋設時の息抜きと考えられる。節が上の状態で刺さっていた。166～168は箸である。167は両端が細くなる。

SE64（第32・33図） 169は八尾の甕である。170は中世土師器で、幅の広いヨコナデを施す。14世紀中頃と考えられる。171は箆状木製品で先端を刃のように斜めに成形している。172・173は箸である。174は板状の木製品である。

SE65（第33図） 175は中世土師器である。13世紀末～14世紀初めと考えられる。176は水溜の曲物である。身の部分を二重の側板で作り、下部にタガを巻く。下部のタガと本体に穴が12ヶ所開けられている。上部のタガは下に脱落しており、同様に穴が開いている。下端には木釘の孔もある。内

面はケビキがみられる。177・178 は曲物の底板である。

SE81（第 33・34 図）　179・180 は中世土師器である。179 は灯明皿で油煙が付着している。口縁部はヨコナデにより段ができる。14 世紀と考えられる。180 は平底から口縁部が外上方に立ち上がる。14 世紀中頃と考えられる。181 は龍泉窯系の青磁碗で、連弁文がある。14 世紀と考えられる。182 は八尾の甕で、焼き膨れを起こし断面に空隙ができている。183 は珠洲の甕である。184 ～ 188 は木製品である。184 は厚い板状で、長辺の一つの角を段状に加工している。185 は板材で側面に 1 ヶ所抉りを入れる。186・187 は十字相欠き継ぎの一対の板材である。いずれも両端に弧状に抉りを入れている。186 は両端にも継手のための段を加工する。188 は角材の中央に溝を彫り、溝の底面は鑿の痕跡がそのまま残る。189 ～ 192 は箸である。189 は上端を斜めにカットし、190 ～ 192 は両端が細く尖る。

SE83（第 34 図）　193 は古瀬戸の鉄釉天目茶碗である。15 世紀中頃～後半と考えられる。194 は瓦質土器の火鉢か。195・196 は珠洲である。195 は壺で、底面は静止糸切りである。196 は擂鉢で、内面全体に卸目、口縁内端面に櫛目波状文を施す。Ⅵ期である。197 は漆器椀で、内外面は黒漆塗り、見込みに赤漆で文様が描かれるが、状態が悪く不明瞭である。出土時は、椀の内部に黄白色の粘質土状のものが入った状態であった。色樹種はブナ属である。198 は曲物の底板で、側板も伴って出土したが腐朽が激しい。黒漆が側板と底板の広範囲に付着しており、漆容器と考えられる。底板の樹種はヒノキ属である。199 は箸で、両端がやや細くなる。

SE108（第 34 図）　200 は中世土師器である。201 は珠洲の甕で、内側の円形当て具痕が顕著である。Ⅲ～Ⅳ期か。

SK07（第 35 図）　202 ～ 204 は中世土師器である。202 は平底で器高が低く、厚手である。203 は口縁部が外反する。204 は灯明皿で油煙が付着している。202 は 14 世紀、203 は 15 世紀前半と考えられる。205 は龍泉窯系の青磁碗である。鎬連弁文が施される。13 世紀前半である。206・207 は珠洲である。206 は擂鉢で、口縁内端面に櫛目波状文を施す。Ⅴ期である。207 は甕である。208 は越前の甕で輪積み痕がみえる。

SK14（第 35 図）　209・210 は中世土師器である。211 は石英の火打石と考えられ、下端部に細かい敲打痕がある。

SK35（第 35 図）　212 ～ 214 は中世土師器である。213・214 は灯明皿で、煤が付着している。15 世紀と考えられる。215･216 は珠洲である。215 は壺。216 は擂鉢で、一単位 12 条の曲線文がみられる。215･216 はともにⅡ期､13 世紀前半である。217 は八尾の甕である。218 は木製の蓋（栓）とみられる。219 は棒状の木製品で一方の端部を尖らせ、中程には抉りを入れる。一部炭化している。

SK38（第 35 図）　220 は中世土師器で、14 世紀中頃と考えられる。221 は珠洲の甕である。222 は越前の甕で、外面に線状のヘラ記号がみられる。また上方に多数の敲打痕がある。

SK59（第 35 図）　223 は中世土師器である。口縁部はごく緩く立ち上がる。

SK60（第 35 図）　224 は中世土師器である。内湾して立ち上がり、深さがある。13 世紀末～ 14 世紀初めと考えられる。

SK62（第 36 図）　225 は龍泉窯系の青磁碗で、高台内は釉剥ぎしている。高台内は漆とみられる付着物がある。226・227 は木製の柄と考えられる。断面は方形で、一方の端部を加工している。226 と 227 は別の個体である。226 から 20 ㎝掘り下げた地点で 227 が出土している。228 は曲物で、木釘を打ち底板と側板を固定し、下部にタガを 2 条巻いている。側面上部に柄を差し込んだとみられる穴が開いており、226 か 227 いずれかの柄が挿し込まれた柄杓であった可能性がある。

SK79（第 36 図）　229 は中世土師器である。13 世紀末～ 14 世紀初めと考えられる。

SK80（第36図）　230は中世土師器で、口縁部は外反する。15世紀と考えられる。231は珠洲の擂鉢で、一単位9条の卸目である。底面は静止糸切りである。232は自然円礫で、強い被熱により黒く焦げている。安山岩である。

SK102（第36図）　233は中世土師器である。口縁部は緩く外反する。15世紀中頃と考えられる。234は管状土錘である。

SK164（第36図）　235・236は中世土師器である。235は灯明皿で底面に煤が付着している。236は二段ナデとみられる。いずれも15世紀と考えられる。

SK176（第36図）　237は青磁の束口碗か。連弁文が施されている。13世紀と考えられる。

SK190（第36図）　239は凝灰岩の砥石である。上面に斜めの擦痕がみられる。

SK201（第36図）　238は中世土師器である。14世紀中頃と考えられる。本遺構からは他にウマの歯が出土しているが、詳細は第5章第1節で検討する。

SP36（第37図）　240は古瀬戸の灰釉入子である。口縁部はヒダ（花弁）8弁を施す。13世紀～14世紀前半と考えられる。

SP43（第37図）　241は中世土師器である。15世紀前半～中頃と考えられる。

SP71（第37図）　242は八尾の甕で、内面に焼き膨れがみられる。自然釉がかかる。

SP75（第37図）　243は中世土師器である。灯明皿で油煙が付着している。15世紀末～16世紀初めと考えられる。

SP87（第37図）　244は珠洲擂鉢の注口部分である。Ⅱ期と考えられる。245はピット底部から出土した方形に加工した扁平な安山岩石材である。礎石の可能性がある。

SP120（第37図）　246は中世土師器で、内面と口縁端部に金が付けられている。外面には金が見られないことから内面のみに施していた可能性が高い。

SP141（第37図）　247は不明木製品である。全面に加工痕がみられる。

SP143（第37図）　248は中世土師器である。

SP180（第37図）　249は中世土師器である。底部から口縁部にかけて角度を変えて立ち上がる。13世紀末～14世紀中頃と考えられる。

SX49（第37・38図）　250～252は中世土師器である。250・252は灯明皿で油煙が付着している。250は口縁部が強く外反する。いずれも15世紀後半と考えられる。257は越前の陶硯である。幅4.9cm、厚さ1.8cmと小型で、丘側の一部が残存する。丘部分は緩く湾曲して窪んでいる。縁部は面取りを行う。253は曲物である。身の部分を一重の側板で作り、身の下半部にさらに一重の側板を巻き、下部にタガを巻く。上部に孔が開けられ、内面はケビキが施される。254は杓子状の木製品である。255は角柱状の木製品で、全面加工されている。256は曲物と柄からなる柄杓である。曲物の底板は木釘で固定されている。曲物上部に柄を差し込んだ後、柄の上から木釘を打ち込み固定している。曲物内の柄の折損した端部は炭化している。258は折敷の底板で側縁に木釘の孔がある。表面は刃物による線状痕がある。259は木目ござ目の編み物である。上・下・右側面に折り返されている。

SX52（第38図）　260～262は中世土師器である。260は口縁部が強く外反し、外面に煤が付着する。260・262は15世紀後半と考えられる。263は古瀬戸の碗で浅い輪高台である。264・265は珠洲である。264はⅤ期の甕、265はⅥ期の擂鉢である。266は柱状の不明木製品である。下部は先端を小さく突出させるように加工している。樹種はスギである。267は刀の切羽で、両面に漆が塗られる。

SX53（第38図）　268は珠洲の甕片である。方形の小破片で、表面の摩耗が激しく、碁石に転用された可能性がある。

SX63（第 38 図） 269 は中世土師器である。口径 17cm の大型の灯明皿で、内外面に煤が付着している。270 は八尾の甕である。

SX77（第 38 図） 271 は中世土師器である。平底で 14 世紀中頃と考えられる。272 ～ 275 は珠洲である。272 は甕でⅡ期、273 は擂鉢でⅣ期である。

SX97（第 38 図） 276・277 は中世土師器である。276 は灯明皿で油煙が付着している。いずれも口縁部が小さく外反する。15 世紀中頃と考えられる。278 は珠洲の擂鉢で一単位 9 条の卸目である。

SX98（第 38 図） 279 ～ 281 は中世土師器である。279・280 は灯明皿で油煙が付着している。279 は 14 世紀中頃と考えられる。282・283 は古瀬戸である。282 は灰釉卸皿で、口縁内端が小さく突出する。14 世紀中頃と考えられる。283 は碗である。284 は珠洲の小壺で、漆とみられる付着物が外面は斑点状に、内面は部分的にあり、漆容器として使用していた可能性がある。Ⅳ期と考えられる。

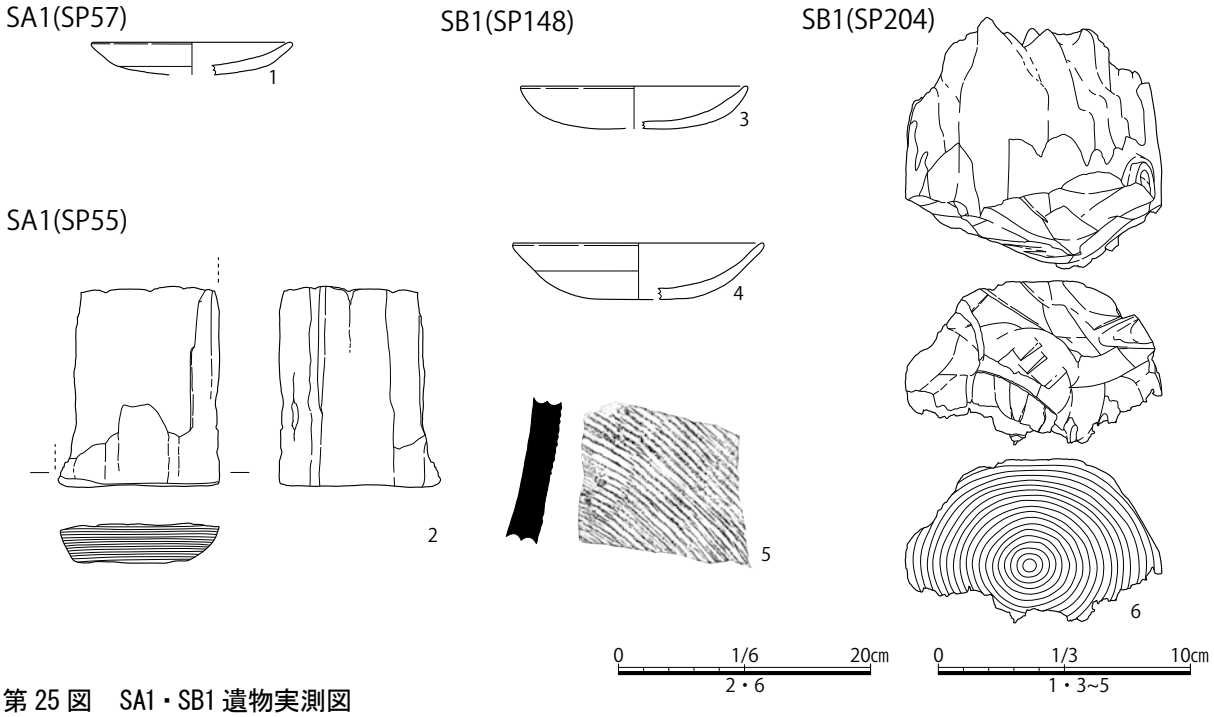
3　遺構外出土遺物

試掘 10T（第 39 図） 285・286 は中世土師器である。286 は灯明皿で油煙が付着している。14 世紀前半と考えられる。287・288 は龍泉窯系の青磁碗で、口縁部が外反する器形である。288 は鎬連弁文が施される。287 は 14 世紀、288 は 13 世紀中頃～ 14 世紀初めとみられる。289 は珠洲の擂鉢で、Ⅱ～Ⅲ期の 13 世紀代である。290 は角柱状の木製品で、SE81 の井戸枠部材と考えられる。

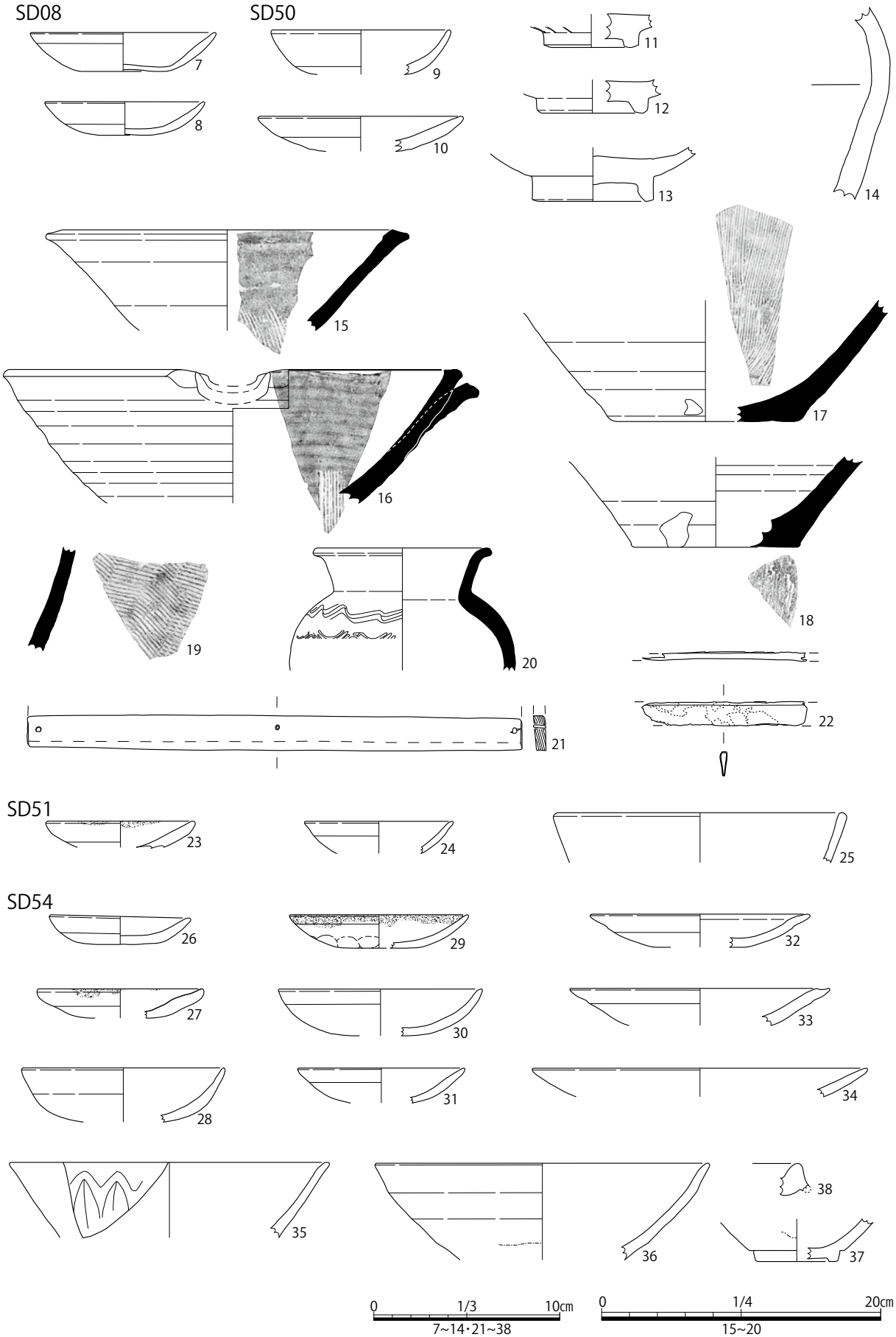
包含層（SD50・51・SX52 付近）（第 39 図） 291・292 は中世土師器で、いずれも口縁部が小さく外反する。15 世紀前半～中頃と考えられる。

検出面・表採・表土・排土（第 39 図） 293 は中世土師器で、口縁端部は尖る。15 世紀前半と考えられる。294 ～ 296 は珠洲である。294 は鉢で、三角頭の内傾口縁で、内面の口端基部を強く撫でて顎状となる。Ⅴ期である。295 は瓶子か。外面全体に自然釉がかかる。296 は円頭のくの字口縁の甕で、Ⅳ期と考えられる。297 は龍泉窯系の青磁碗である。298 は白磁皿で高台に浅い抉り込みを 4 ヶ所入れる。15 世紀前半と考えられる。299 は鉄釉の古瀬戸の小坏で、回転糸切りである。300 は越中瀬戸の擂鉢で、口縁の縁帯を外方に小さく挽き出す。16 世紀末～ 17 世紀初めとみられる。

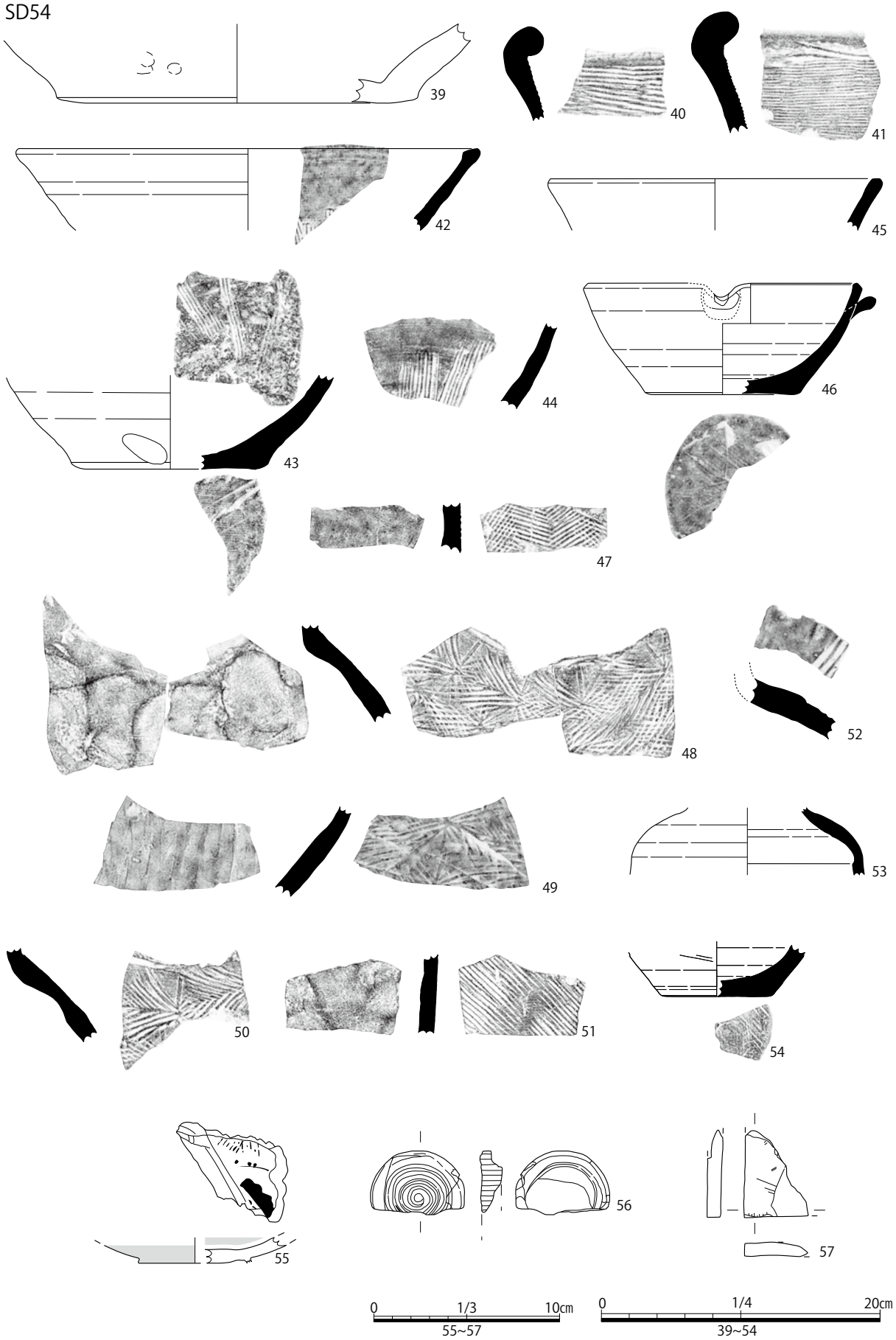
（阿部・今井・村上・矢野）



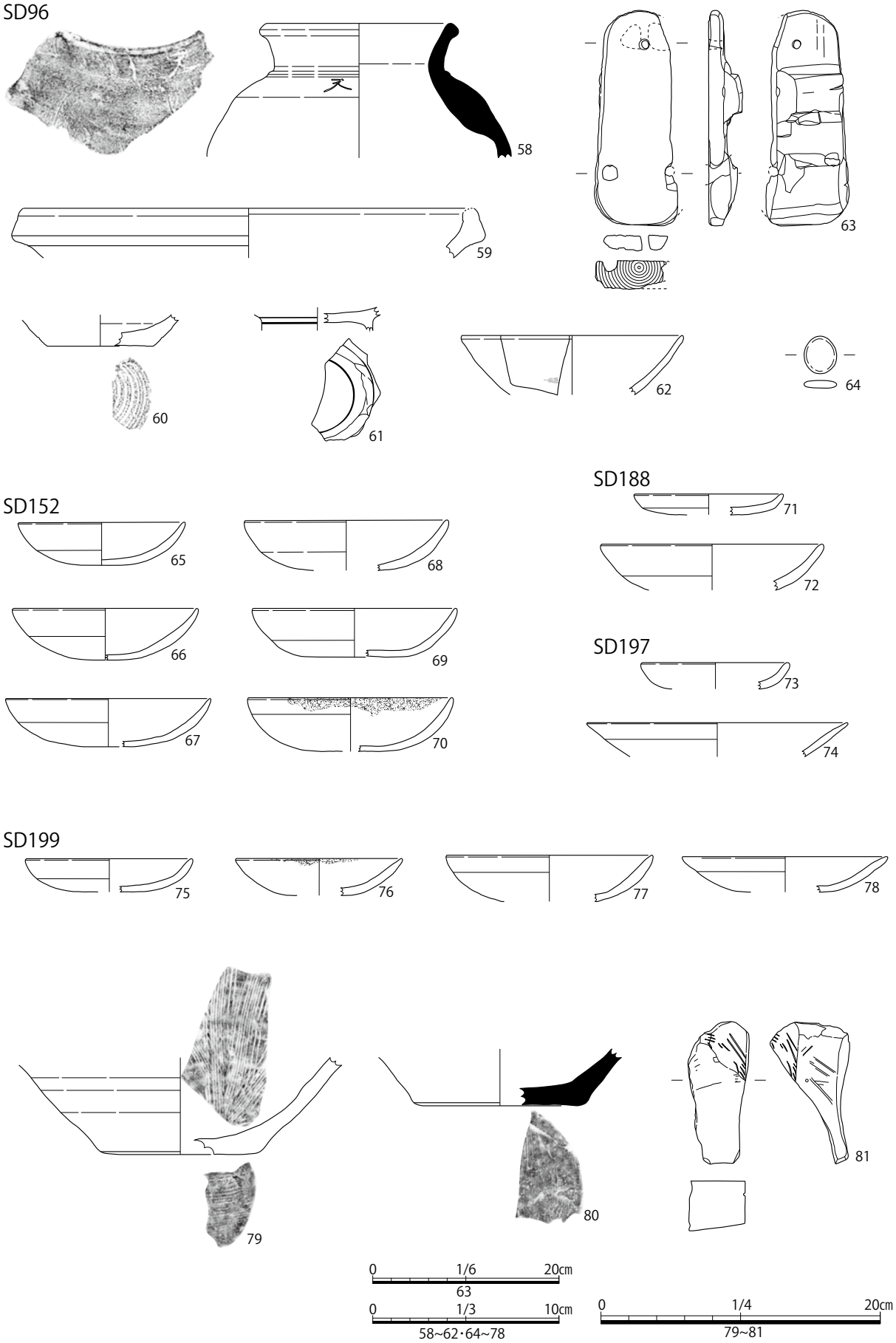
第 25 図　SA1・SB1 遺物実測図



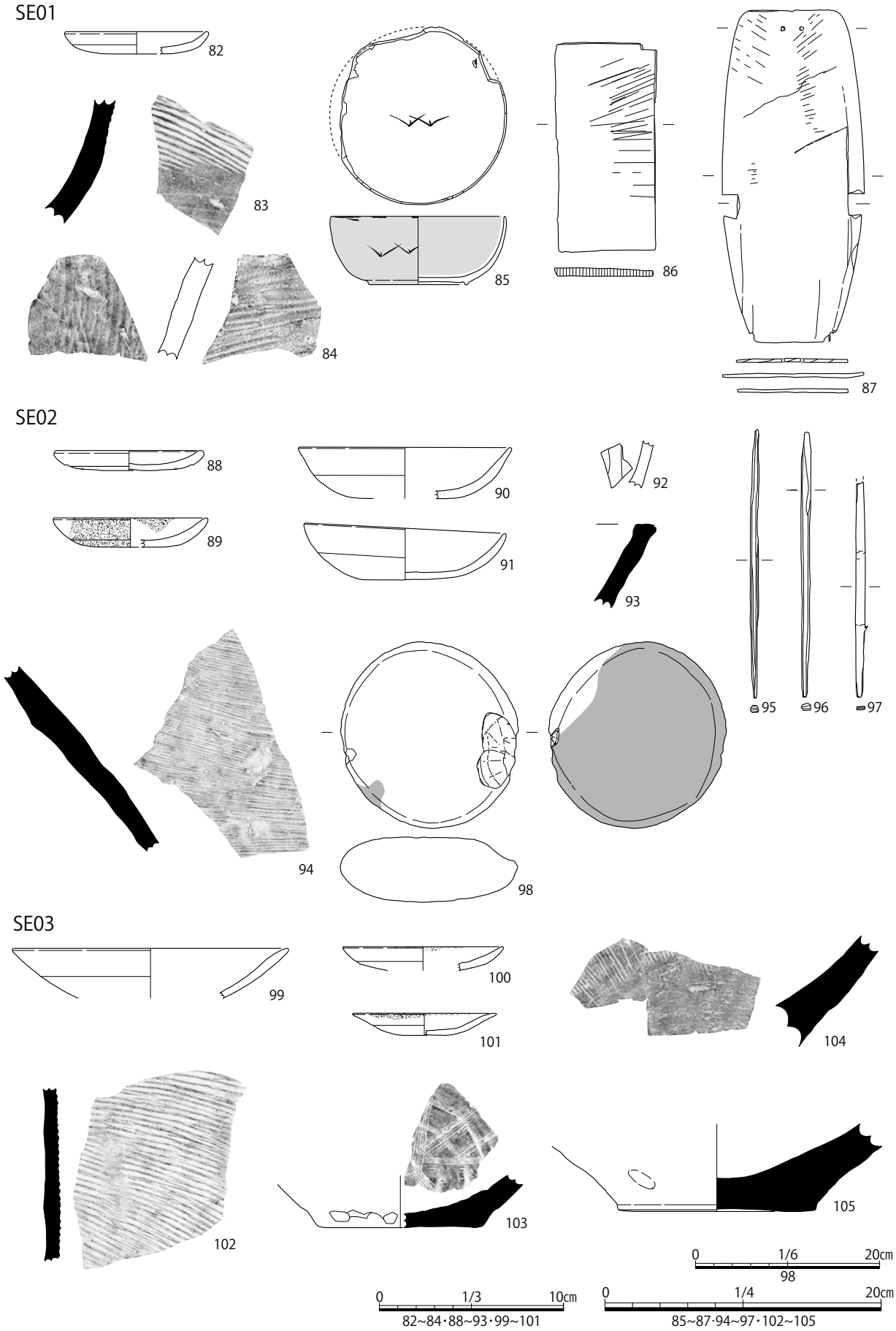
第 26 図　SD08・50・51・54 遺物実測図



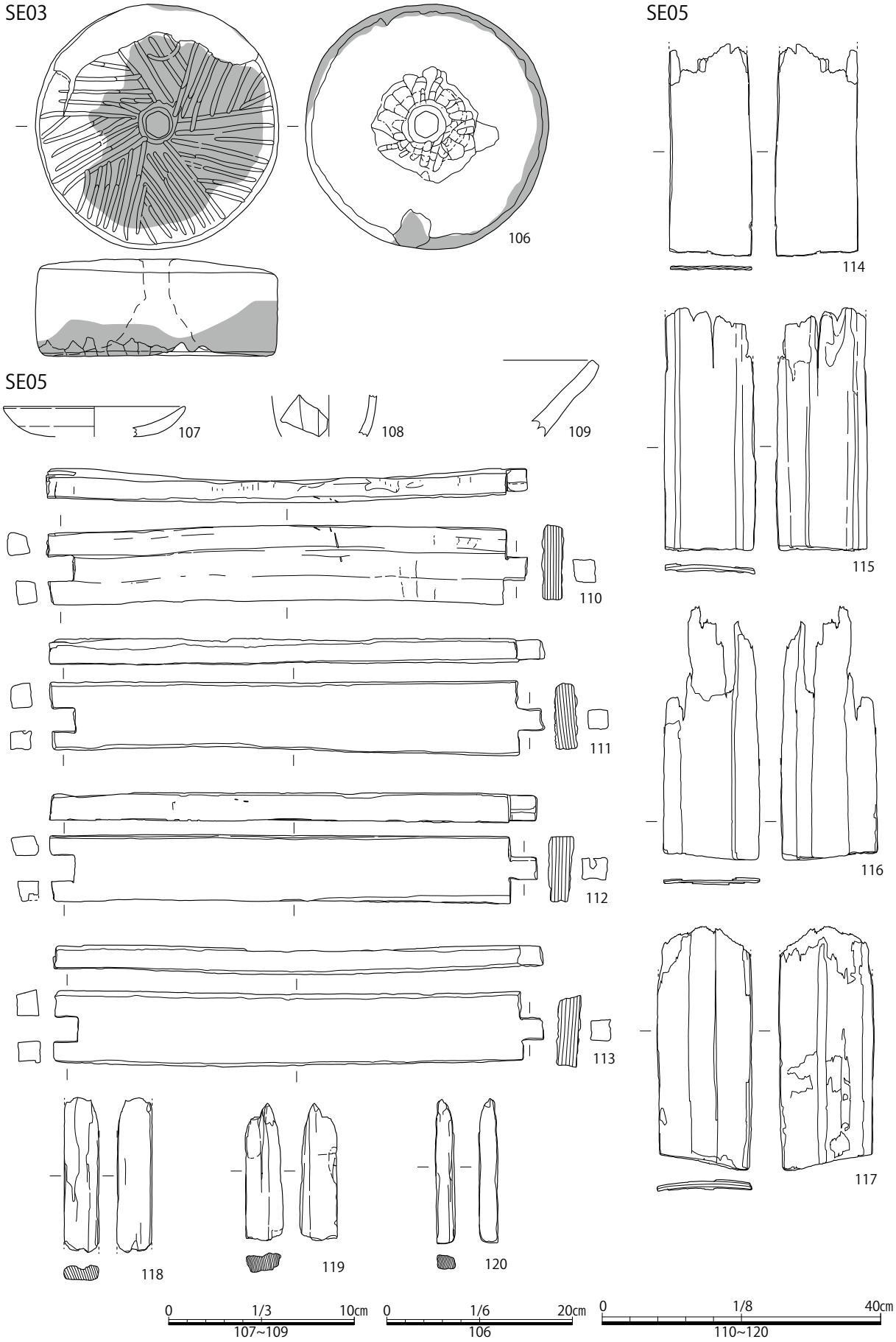
第 27 図　SD54 遺物実測図



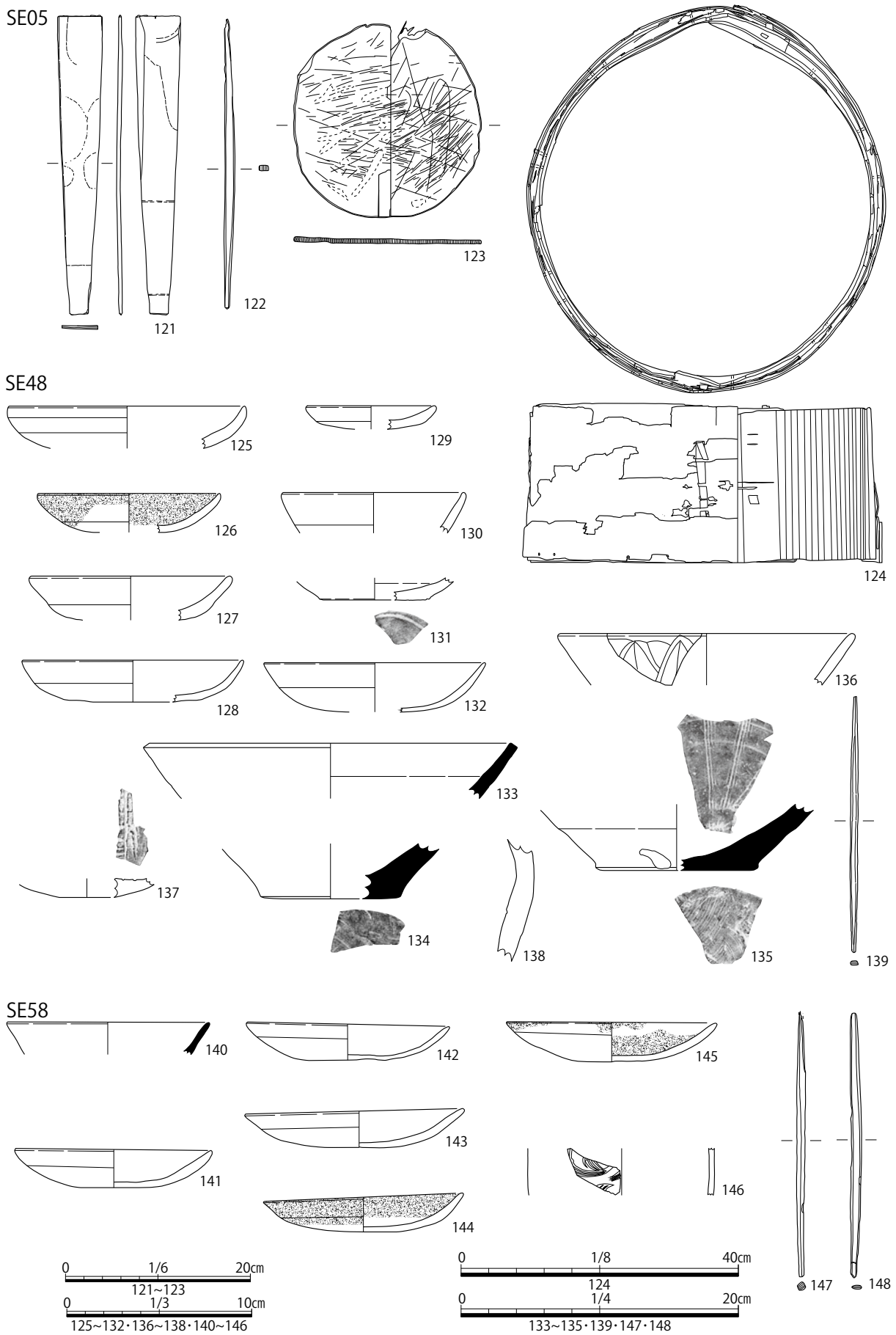
第 28 図　SD96・152・188・197・199 遺物実測図



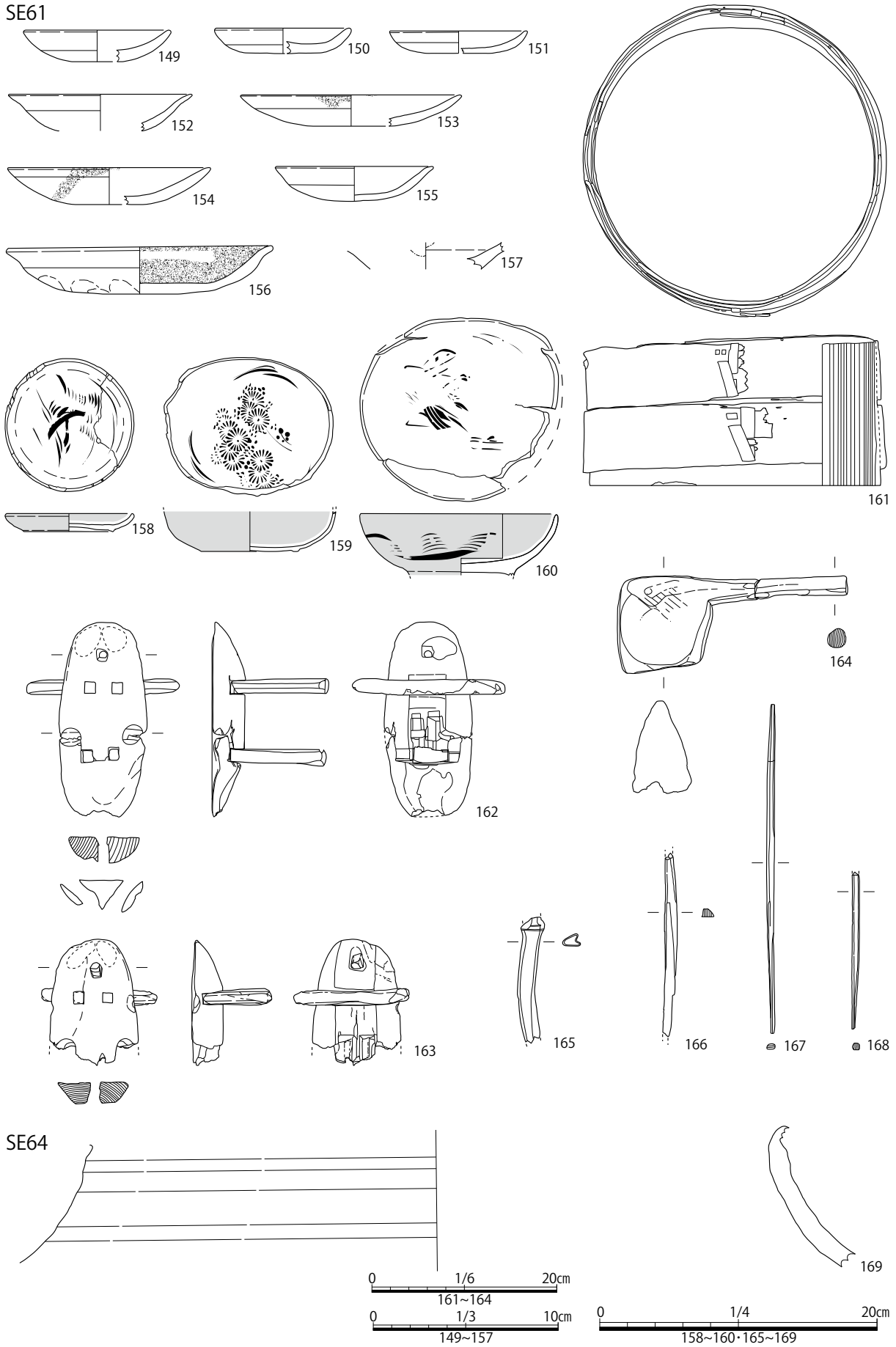
第 29 図　SE01・02・03 遺物実測図



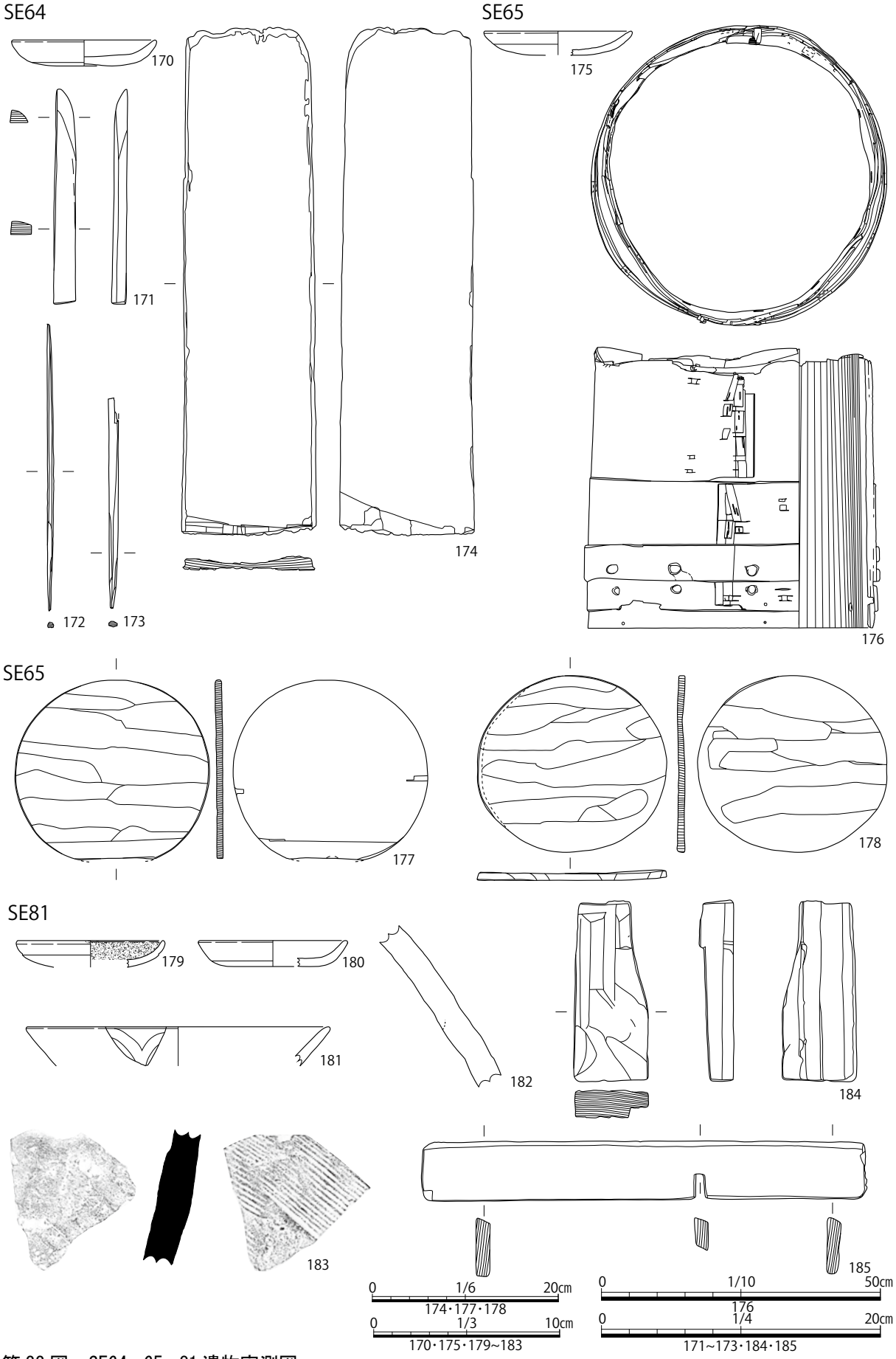
第 30 図　SE03・05 遺物実測図



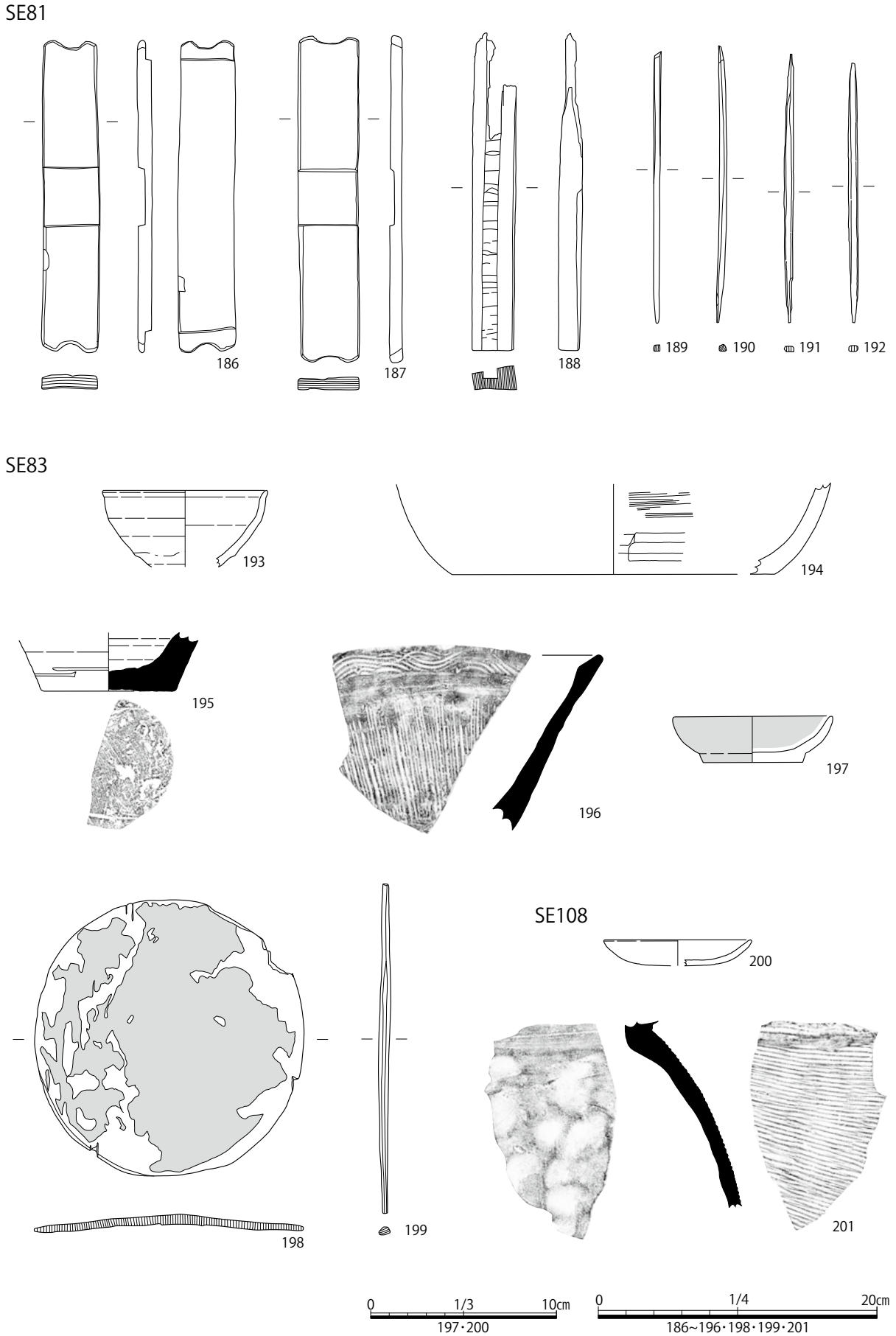
第 31 図　SE05・48・58 遺物実測図



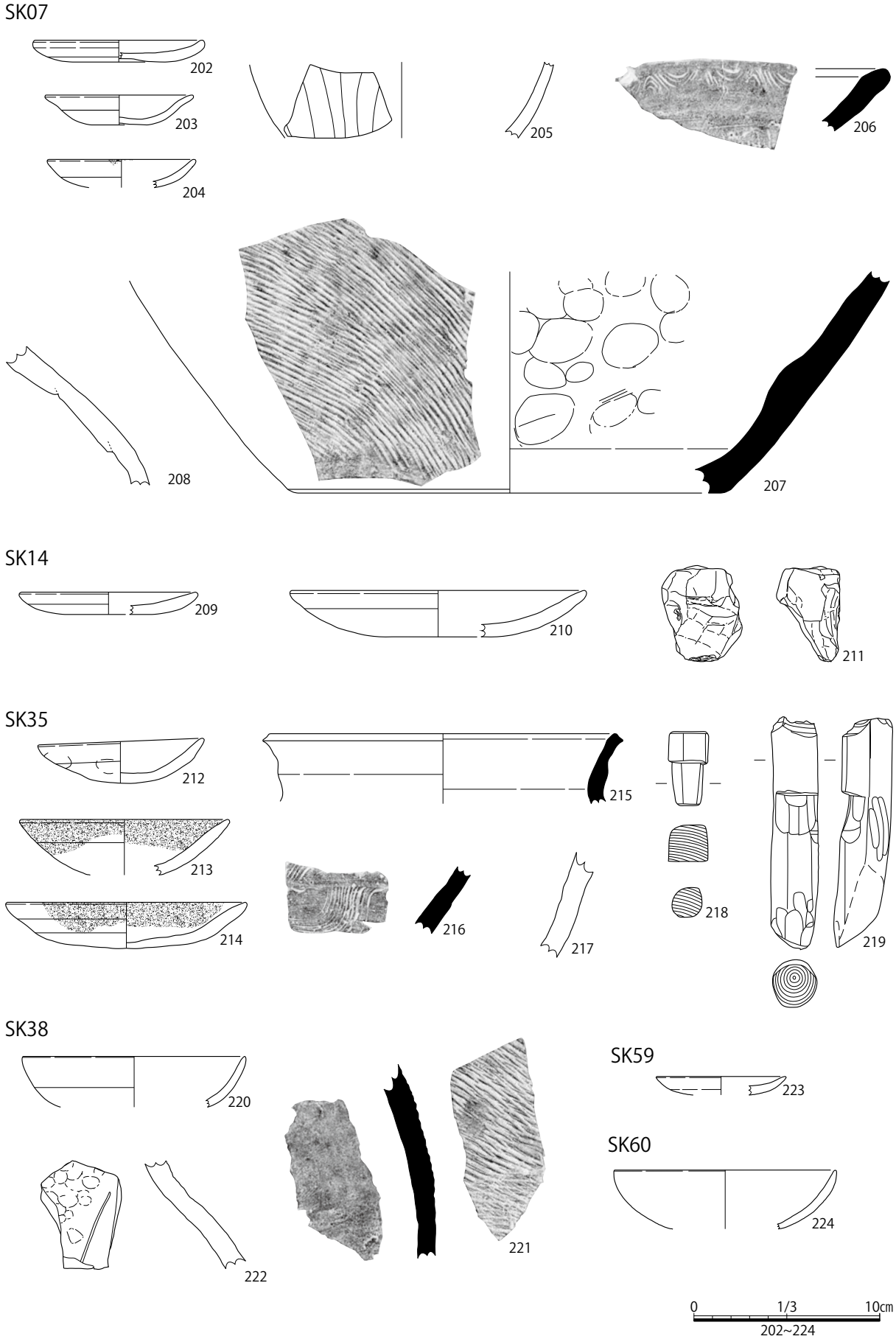
第 32 図　SE61・64 遺物実測図



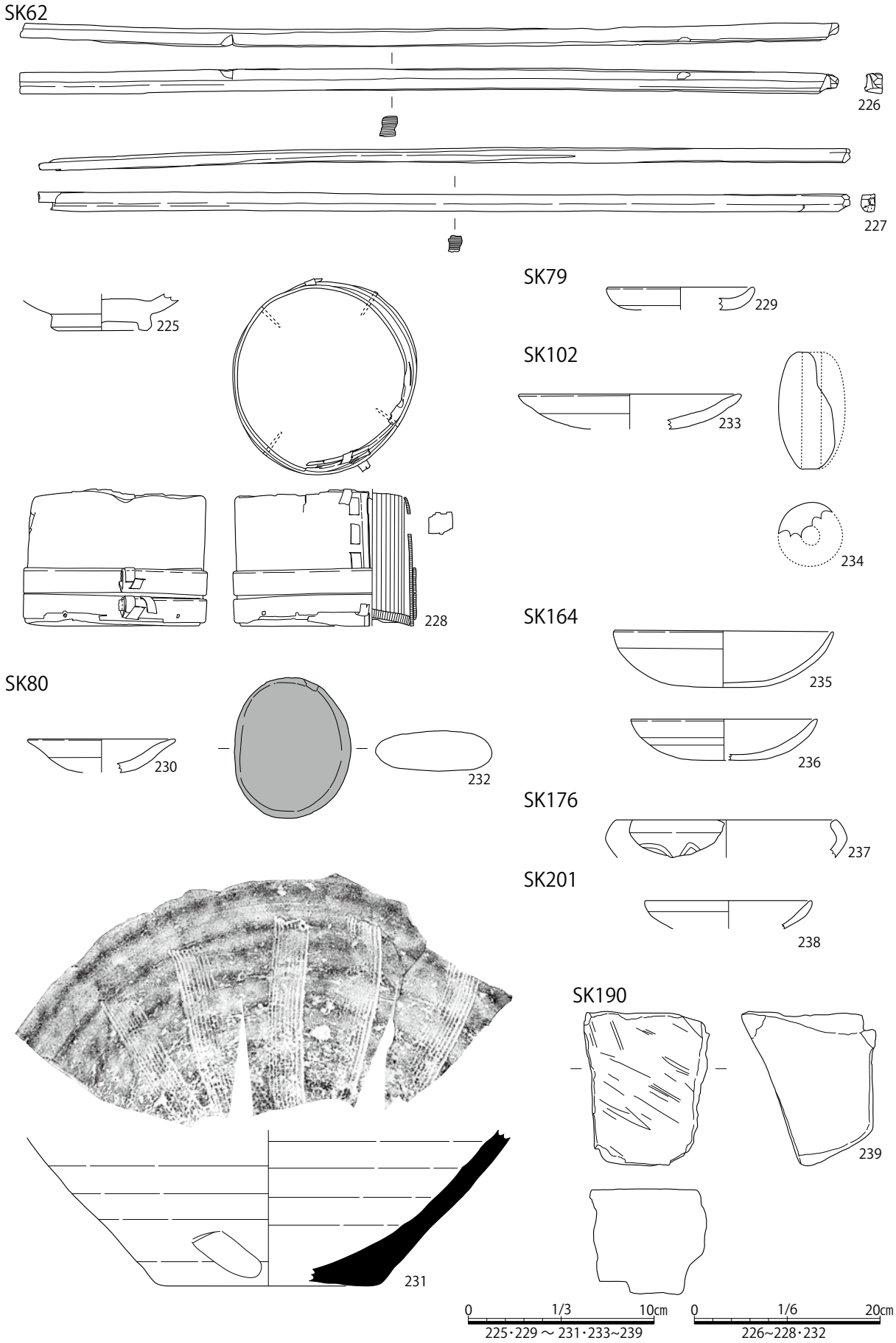
第 33 図　SE64・65・81 遺物実測図



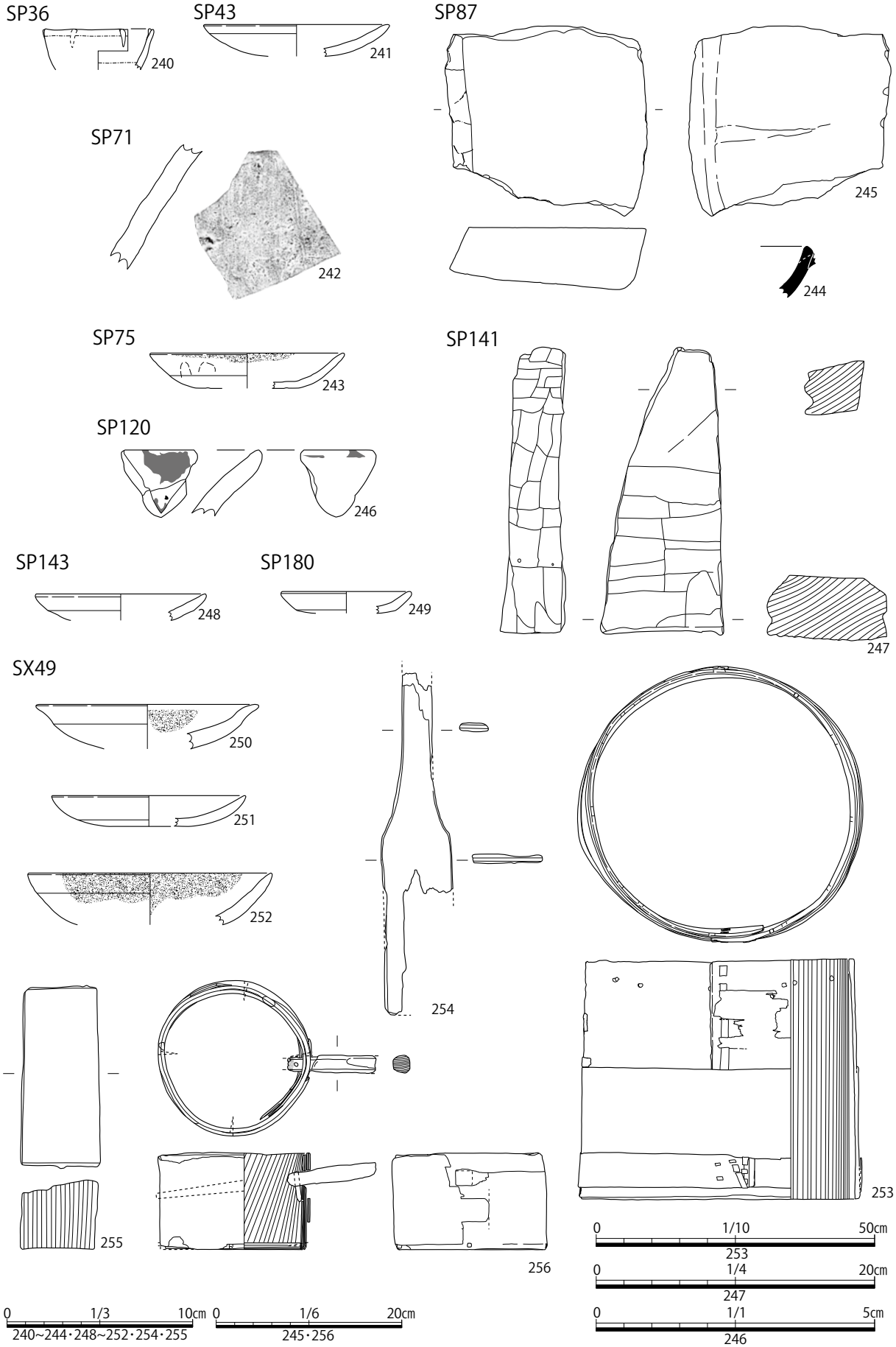
第 34 図　SE81・83・108 遺物実測図



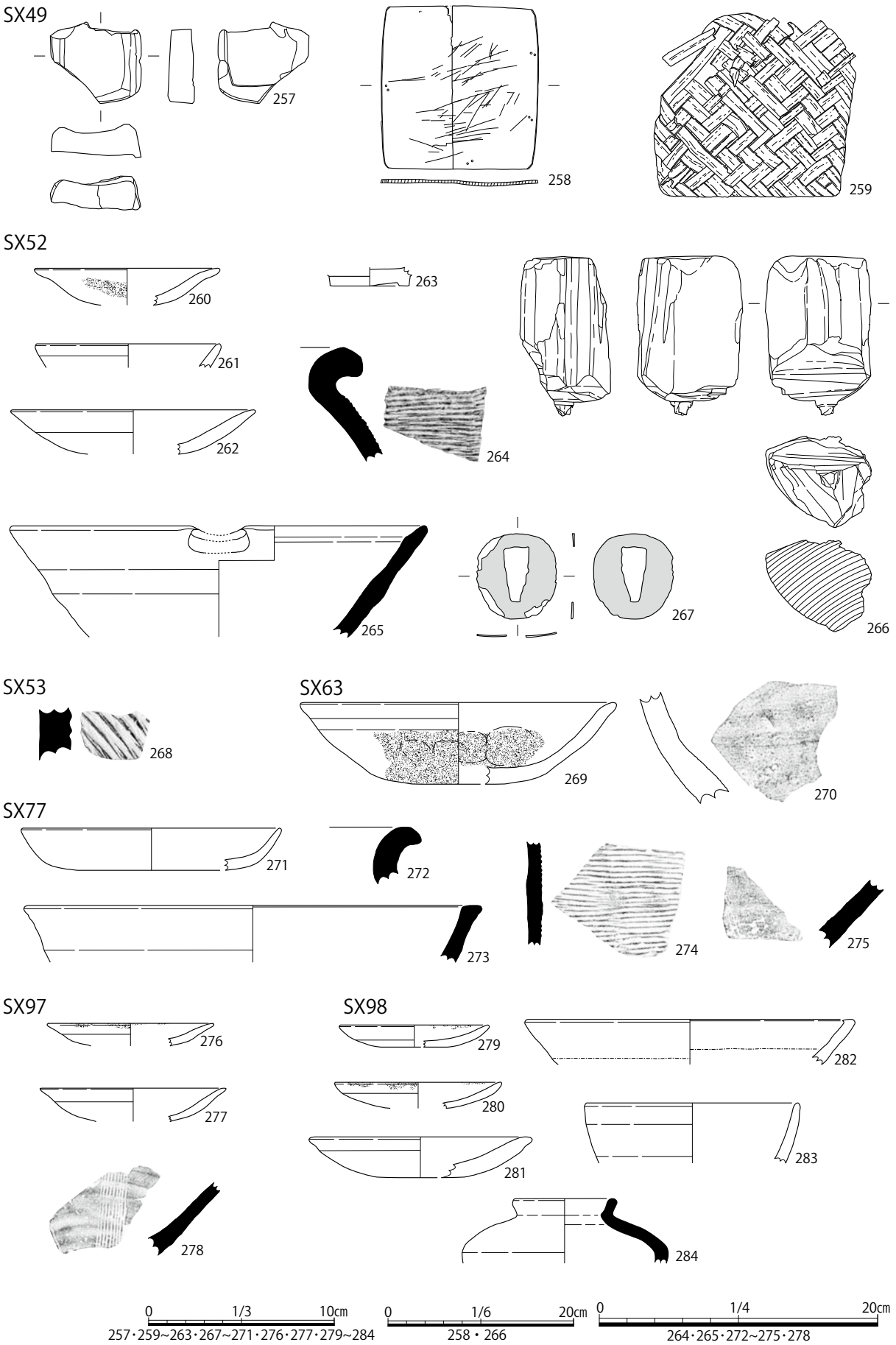
第 35 図　SK07・14・35・38・59・60 遺物実測図



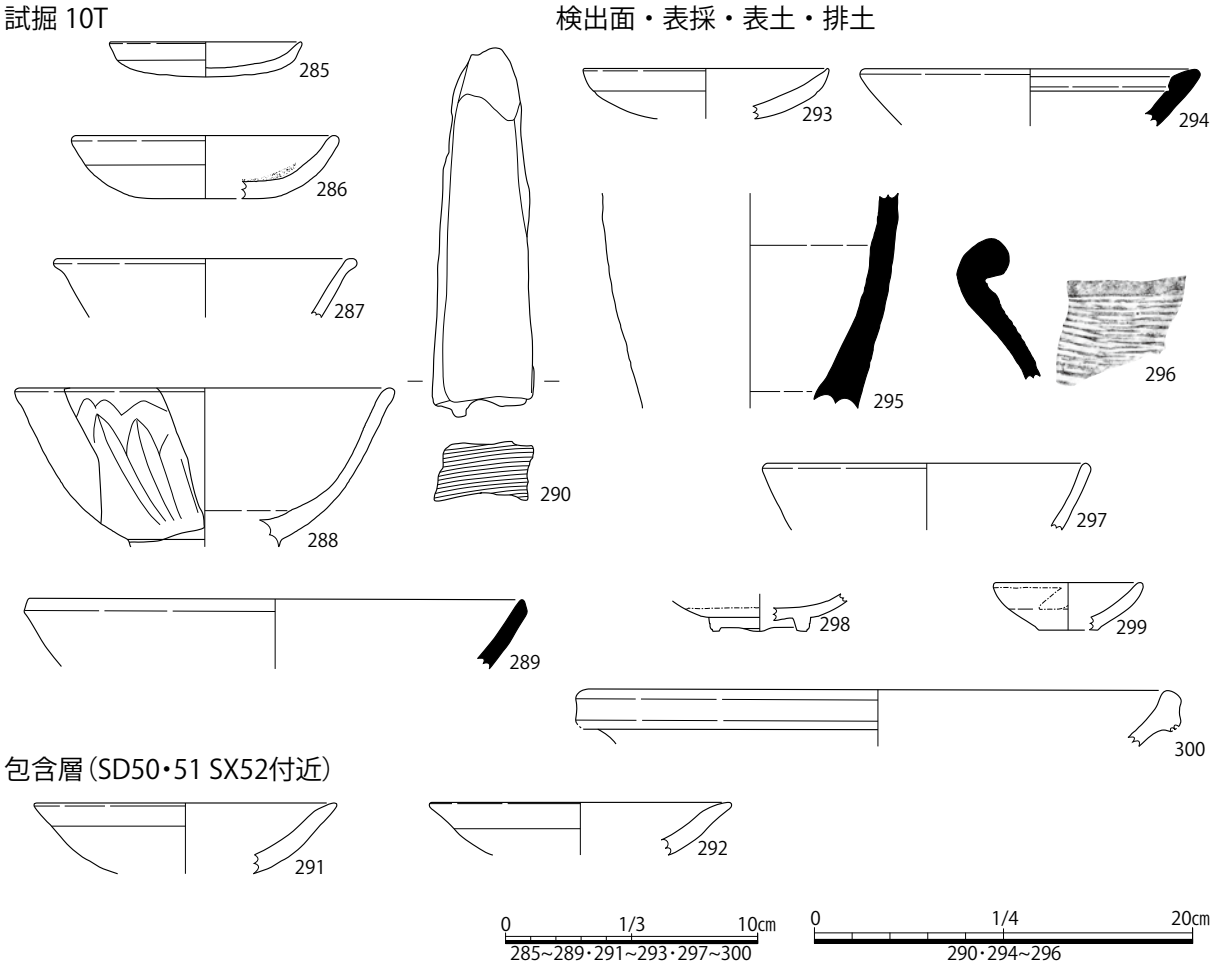
第 36 図　SK62・79・80・102・164・176・190・201 遺物実測図



第 37 図　SP36・43・71・75・87・120・141・143・180・SX49 遺物実測図



第 38 図　SX49・52・53・63・77・97・98 遺物実測図



第 39 図　遺構外遺物実測図

土器・土製品　　※寸法の（　）は復元径または残存長を表す

図No.	番号	遺構名	種別 器種	寸法（cm） 口径	底径	器高	成形・調整・装飾等 内面	外面	胎土	焼成	色調 内面	外面	残存部 残存率	備考
25	1	SA1(SP57)	中世土師器 皿	(7.9)	(4.2)	1.3	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	密 酸化鉄	良好	10YR8/1 灰白	10YR8/3 浅黄橙	口縁部 10%	
25	3	SB1(SP148)	中世土師器 皿	(8.9)	(5.0)	1.7	ナデか	ナデか	密	良好	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	口縁部～底部 20%	15世紀中頃か
25	4	SB1(SP148)	中世土師器 皿	(9.9)	(5.0)	2.3	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	密	良好	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	口縁部～底部 10%	15世紀
25	5	SB1(SP148)	珠洲 壺	－	－	(5.7)	当て具痕	タタキ	密 白色粒 海面骨針	良好	N5/1 灰	N5/1 灰	体部 5%以下	
26	7	SD08	中世土師器 皿	(9.9)	(4.5)	2.1			密	良好	10YR8/2 灰白	10YR8/1 灰白	口縁部～底部 60%	へそ皿 15世紀
26	8	SD08	中世土師器 皿	(8.5)	(5.0)	1.8	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	密	良好	10YR8/1 灰白	10YR8/1 灰白	口縁部～底部 30%	15世紀
26	9	SD50	中世土師器 皿	(9.6)	－	(2.4)	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	密	良好	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	口縁部 15%	14世紀中頃か
26	10	SD50	中世土師器 皿	(10.8)	(9.0)	1.9	ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	密 酸化鉄	良好	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	口縁部 10%	15世紀初か
26	11	SD50	青磁 碗	－	(5.1)	(1.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良好	N8/ 灰白	N8/ 灰白	体部～底部 5%	龍泉窯系　鎬連弁文 13世紀中頃～14世紀初
26	12	SD50	青磁 碗	－	(5.4)	(1.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良好	7.5Y6/1 灰	7.5Y6/1 灰	底部 10%	龍泉窯系
26	13	SD50	青磁 碗	－	(5.8)	(2.9)	ロクロナデ	ロクロナデ 底面蛇の目 釉はぎ	密	良好	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	体部～底部 20%	龍泉窯系 15世紀
26	14	SD50	越前 甕	－	－	(10.4)	ナデ	ナデ	密　長石	良好	2.5Y6/2 灰黄	2.5Y5/2 暗灰黄	体部 5%	自然釉　胎土 2.5Y7/2灰白
26	15	SD50	珠洲 擂鉢	(23.6)	－	(7.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	密　長石 白色粒	良好	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	口縁部～体部 5%	卸目 珠洲Ⅳ期
26	16	SD50	珠洲 擂鉢	(32.2)	－	(9.6)	ロクロナデ 卸目	ロクロナデ	密 白色粒	良好	N6/ 灰	5Y7/1 灰白	口縁部～体部 5%	卸目8条1単位 珠洲Ⅳ期
26	17	SD50	珠洲 擂鉢	－	(12.8)	(8.7)	ロクロナデ	ロクロナデ ユビオサエ ナデ	密　長石	良好	N5/ 灰	N6/ 灰	体部～底部 5%	卸目9条1単位 珠洲Ⅲ～Ⅳ期か

第 4 表　遺物一覧表 (1)

土器・土製品　　※寸法の（　）は復元径または残存長を表す

図No.	番号	遺構名	種別 器種	寸法（cm） 口径	底径	器高	成形・調整・装飾等 内面	外面	胎土	焼成	色調 内面	外面	残存部 残存率	備考
26	18	SD50	珠洲 擂鉢	－	(11.8)	(6.5)	ロクロナデ	ロクロナデ ユビオサエ 静止糸切	密　長石 白色粒	良好	N6/1 灰	N6/1 灰	体部～底部 5%	無文 丁寧な作り
26	19	SD50	珠洲 壺	－	－	(7.6)	当て具痕	タタキ (綾杉文)	密　長石 黒色粒	良好	N5/ 灰	N4/ 灰	体部 5% 以下	
26	20	SD50	珠洲 壺	(12.4)	－	(8.8)	ロクロナデ	ロクロナデ 櫛目波状文	密	良好	10YR7/1 灰白	10YR7/1 灰白	口縁部～体部 10%	珠洲Ⅳ期
26	23	SD51	中世土師器 皿	(7.8)	－	(1.4)	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	密　石英	良好	2.5Y8/2 灰白	10YR7/4 にぶい黄橙	口縁部 20%	灯明皿　口縁部 内外油煙付着
26	24	SD51	中世土師器 皿	7.9	－	(1.7)	ナデ	ヨコナデ ナデ	密	良好	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	口縁部 10%	15世紀
26	25	SD51	青磁 碗	(15.4)	－	(2.7)	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良好	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	口縁部 10%	無文
26	26	SD54	中世土師器 皿	7.5	4.6	1.5	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	密　長石	良好	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	ほぼ完形 95%	14世紀前半
26	27	SD54	中世土師器 皿	(8.8)	(5.0)	1.6	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	密	良好	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	口縁部 20%	灯明皿　油煙付着 14世紀前半
26	28	SD54	中世土師器 皿	(10.0)	－	(2.9)	ナデ	ナデ	密	良好	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	口縁部 10%	14世紀前半
26	29	SD54	中世土師器 皿	(9.5)	(4.0)	1.8	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ ユビオサエ	密　酸化鉄	良好	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/2 灰白	口縁部～底部 20%	灯明皿　油煙付着
26	30	SD54	中世土師器 皿	(10.9)	－	2.5	ナデ	ヨコナデ ナデ	密　長石	良好	10YR8/2 灰白	10YR8/3 浅黄橙	口縁部 15%	15世紀前半
26	31	SD54	中世土師器 皿	(8.9)	－	(1.9)	ナデ	ヨコナデ ナデ	密　酸化鉄	良好	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	口縁部 15%	15世紀中頃～後半
26	32	SD54	中世土師器 皿	(11.6)	(4.8)	1.8	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	密　石英 酸化鉄	良好	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/2 灰白	口縁部 10%	16世紀前半
26	33	SD54	中世土師器 皿	(13.8)	－	(2.0)	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	密　酸化鉄	良好	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	口縁部 10%	16世紀
26	34	SD54	中世土師器 皿	(17.9)	－	(1.5)			密　酸化鉄	良好	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	口縁部 5%	15世紀か
26	35	SD54	青磁 碗	(17.0)	－	(4.1)	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良好	10Y7/2 灰白	10Y7/2 灰白	口縁部～体部 10%	龍泉窯系　鎬連弁文 13世紀前半～14世紀初
26	36	SD54	古瀬戸 灰釉平碗	(17.9)	－	(5.1)	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良好	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	口縁部～底部 10%	漆による補修痕 14世紀
26	37	SD54	古瀬戸 碗	－	(4.5)	(2.3)	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良好	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	体部～底部 10%	鉄釉
26	38	SD54	越前 甕	－	－	(1.7)	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良好	10YR4/4 褐	10YR4/4 褐	口縁部 5% 以下	自然釉　胎土 2.5Y7/1灰白 越前Ⅱ期か
27	39	SD54	八尾 甕	－	(22.0)	(5.7)	ナデ	ナデ ユビオサエ	密　長石 白色粒	良好	7.5YR5/4 にぶい褐	10YR5/3 にぶい黄褐	底部 5% 以下	自然釉　胎土10YR8/1 灰白 内面 底部に付着物あり
27	40	SD54	珠洲 甕	－	－	(6.8)	ナデ	ナデ タタキ	密	良好	7.5Y7/1 灰白	7.5Y7/1 灰白	口縁部 5% 以下	珠洲Ⅳ期
27	41	SD54	珠洲 甕	－	－	(8.7)	ナデ 当て具痕	ナデ タタキ	密　長石	良好	7.5Y6/1 灰	7.5Y6/1 灰	口縁部 5% 以下	珠洲Ⅳ2期
27	42	SD54	珠洲 擂鉢	(33.0)	－	(5.9)	ロクロナデ 卸目	ロクロナデ	密　長石	良好	N7/ 灰白	N7/ 灰白	口縁部～体部 5% 以下	卸目 珠洲Ⅴ期
27	43	SD54	珠洲 擂鉢	－	(12.0)	(6.8)	ロクロナデ 卸目	ロクロナデ ユビオサエ 静止糸切	密　長石	良好	N6/1 灰	N6/1 灰	体部～底部 10%	卸目
27	44	SD54	珠洲 擂鉢	－	－	(6.1)	ロクロナデ 卸目	ロクロナデ	密　石英	良好	N7/ 灰	N7/ 灰	体部 5%	卸目9条1単位
27	45	SD54	珠洲 鉢	(23.6)	－	(3.7)	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良好	N6/ 灰	N6/ 灰	口縁部 5% 以下	珠洲Ⅳ期
27	46	SD54	珠洲 片口鉢	(19.2)	(11.0)	8.0	ロクロナデ	ロクロナデ 静止糸切	密　長石	良好	N6/ 灰	N6/ 灰	口縁部～底部 25%	珠洲Ⅱ期
27	47	SD54	珠洲 壺	－	－	(3.6)	当て具痕	タタキ (綾杉状)	密	良好	N7/ 灰	N7/ 灰	体部 5% 以下	珠洲Ⅱ～Ⅲ期
27	48	SD54	珠洲 壺	－	－	(6.9)	当て具痕	放射状 タタキ	密　長石 小石	良好	N5/ 灰	N5/ 灰	体部 5% 以下	(49)(50)と同一個体 当て具痕顕著 珠洲Ⅱ期か
27	49	SD54	珠洲 壺	－	－	(6.5)	ナデ	放射状 タタキ	密　長石	良好	N5/ 灰	N5/ 灰	体部下部 5% 以下	(48)(50)と 同一個体　珠洲Ⅱ期
27	50	SD54	珠洲 壺	－	－	(6.7)	当て具痕	放射状 タタキ	密　長石 小石	良好	N6/ 灰	N6/ 灰	体部 5% 以下	(48)(49)と同一個体 当て具痕顕著 珠洲Ⅱ期か
27	51	SD54	珠洲 壺	－	－	(5.6)	当て具痕	タタキ	密　長石	良好	N6/ 灰	N6/ 灰	体部 5% 以下	
27	52	SD54	珠洲 壺か	－	－	(4.3)	ロクロナデ	ロクロナデ タタキ	密　長石	良好	N6/ 灰	N7/ 灰白	頸部 5%	珠洲Ⅳ期以前か
27	53	SD54	珠洲 小壺	－	－	(4.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	密　長石 小石	良好	N5/ 灰	N5/ 灰	肩部 20%	
27	54	SD54	珠洲 壺	－	(7.0)	(3.7)	ロクロナデ	ロクロナデ タタキ 静止糸切	密　長石 黒色粒	良好	N6/1 灰	N6/1 灰	底部 10%	

第５表　遺物一覧表（2）

土器・土製品　　※寸法の（　）は復元径または残存長を表す

図No.	番号	遺構名	種別 器種	寸法（cm） 口径	底径	器高	成形・調整・装飾等 内面	外面	胎土	焼成	色調 内面	外面	残存部 残存率	備考
28	58	SD96	珠洲 壺	(9.8)	－	(7.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	粗　長石 黒色粒	良好	N6/1 灰	5Y7/1 灰白	口縁部 10%	「天」か「無(无)」 の刻書あり 珠洲Ⅳ期
28	59	SD96	越中瀬戸 擂鉢	(24.2)	－	(2.7)	ロクロナデ	ロクロナデ	密　石英	良好	7.5YR8/6 浅黄橙	7.5YR8/6 浅黄橙	口縁部 5%以下	鉄釉 近世
28	60	SD96	越中瀬戸 壺	－	(5.6)	(1.7)	ロクロナデ	ロクロナデ 回転糸切	粗　長石	良好	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	体部～底部 10%	鉄釉 近世
28	61	SD96	伊万里 碗	－	(6.0)	(1.25)	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良好	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	高台付近 25%	近世
28	62	SD96	磁器 染付坏	(11.8)	－	(3.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良好	N8/ 灰白	N8/ 灰白	口縁部 10%	近世
28	65	SD152	中世土師器 皿	(8.9)	(4.0)	2.3	ナデ	ヨコナデ ナデ	密	良好	10YR8/1 灰白	10YR8/1 灰白	口縁部～底部 15%	14世紀中頃か
28	66	SD152	中世土師器 皿	(9.8)	(4.0)	2.8	ナデ	ヨコナデ ナデ	密　石英	良好	10YR8/1 灰白	10YR8/1 灰白	口縁部 10%	14世紀中頃か
28	67	SD152	中世土師器 皿	(10.9)	(7.0)	2.6		ヨコナデ	密	良好	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	口縁部～底部 25%	14世紀中頃か
28	68	SD152	中世土師器 皿	(10.8)	(6.0)	2.7	ナデ	ナデ	密	良好	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	口縁部 20%	14世紀中頃か
28	69	SD152	中世土師器 皿	(10.9)	(6.4)	2.6	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	密	良好	10YR8/2 灰白	10YR8/1 灰白	口縁部～底部 40%	14世紀中頃か
28	70	SD152	中世土師器 皿	(10.9)	－	2.9	ナデ	ヨコナデ ナデ	密	良好	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	口縁部～底部 30%	灯明皿　内外面油煙 付着 14世紀中頃か
28	71	SD188	中世土師器 皿	(7.9)	(5.4)	1.1	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	密	良好	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	口縁部 10%	14世紀中頃か
28	72	SD188	中世土師器 皿	(11.8)	－	(2.5)		ヨコナデ	密	良好	10YR8/1 灰白	10YR8/1 灰白	口縁部 10%	14世紀中頃
28	73	SD197	中世土師器 皿	(7.8)	－	(1.4)			密	良好	2,5Y8/2 灰白	2,5Y8/2 灰白	口縁部 15%	14世紀中頃
28	74	SD197	中世土師器 皿	(14.0)	－	(1.8)	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	密	良好	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	口縁部 5%	14世紀中頃か
28	75	SD199	中世土師器 皿	(8.8)	(5.0)	1.8	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	密	良好	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	口縁部 10%	14世紀中頃～15世紀初
28	76	SD199	中世土師器 皿	(8.8)	－	2.0	ナデ	ナデ	密	良好	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	口縁部 5%	灯明皿　油煙付着 15世紀
28	77	SD199	中世土師器 皿	(11.0)	－	(2.5)	ナデ	ヨコナデ ナデ	密	良好	10YR8/1 灰白	10YR6/1 褐灰	口縁部 20%	15世紀中頃～後半
28	78	SD199	中世土師器 皿	(11.0)	－	(1.9)	ヨコナデ ナデ オサエ	ヨコナデ オサエ	密	良好	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	口縁部 15%	15世紀中頃～後半
28	79	SD199	越前 擂鉢	－	9.4	(6.9)	卸目	ロクロナデ 静止糸切	密	良好	10YR8/1 灰白	10YR7/4 にぶい橙	体部～底部 15%	生焼け 胎土2.5Y8/1灰白 卸目10条1単位
28	80	SD199	珠洲 擂鉢	－	(11.0)	(4.1)	ロクロナデ	ロクロナデ 静止糸切	密　白色粒	良好	N6/1 灰	N6/1 灰	体部～底部 15%	無文
29	82	SE01	中世土師器 皿	(7.6)	－	1.2	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	密	良好	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	口縁部 15%	13世紀後半
29	83	SE01	珠洲 壺	－	－	(6.7)	ロクロナデ	タタキ	密　黒色粒	良好	N7/ 灰白	N7/ 灰白	体部 5%以下	
29	84	SE01	八尾か 甕	－	－	(5.5)	ヘラナデ	ヘラナデ	密　長石	良好	10YR6/2 灰黄褐	10YR5/3 にぶい黄褐	体部 5%以下	自然釉 胎土10YR7/1灰白
29	88	SE02	中世土師器 皿	(7.8)	(2.8)	1.1	ナデ	ヨコナデ ナデ	密　石英 酸化鉄	良好	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR8/3 浅黄橙	口縁部～底部 15%	14世紀初～中頃か
29	89	SE02	中世土師器 皿	(8.3)	(4.0)	1.6	ナデ	ヨコナデ ナデ	密　石英 酸化鉄	良好	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	口縁部 25%	灯明皿　スス付着 14世紀初～中頃か
29	90	SE02	中世土師器 皿	(11.5)	(5.4)	(2.8)	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	密　石英	良好	7.5YR8/1 灰白	7.5YR8/1 灰白	口縁部～底部 40%	14世紀中頃か
29	91	SE02	中世土師器 皿	10.8	6.0	2.8	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	密	良好	7.5YR8/1 灰白	7.5YR8/1 灰白	ほぼ完形 95%	14世紀
29	92	SE02	青磁 碗	－	－	(2.6)	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良好	10Y6/1 灰	10Y6/1 灰	体部 5%以下	鎬連弁文 龍泉窯系
29	93	SE02	珠洲 擂鉢	(25.2)	－	(4.6)	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良好	N4/ 灰	N5/ 灰	口縁部 5%以下	スス付着(口縁付近) 被熱痕あり 珠洲Ⅳ期
29	94	SE02	珠洲 甕	－	－	(13.4)	当て具痕	タタキ	密	良好	N2/ 黒	N4/ 灰	体部 5%	内面に炭化物多量 付着 破断後被熱 (断面もススあり)
29	99	SE03	中世土師器 皿	(14.9)	－	(2.7)	ナデ	ヨコナデ ナデ	密　酸化鉄	良好	7.5YR8/3 浅黄橙	7.5YR8/3 浅黄橙	口縁部 10%	14世紀前半～中頃
29	100	SE03	中世土師器 皿	(8.6)	－	(1.3)	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	密　酸化鉄	良好	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	口縁部～体部 10%	灯明皿　スス付着 14世紀前半～中頃
29	101	SE03	中世土師器 皿	(7.6)	(2.4)	1.2	ナデ	ヨコナデ ナデ	密　石英	良好	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	口縁部 15%	灯明皿　油煙付着 15世紀中頃か
29	102	SE03	珠洲 甕	－	－	(12.5)	当て具痕	タタキ	密　長石	良好	N6/1 灰	N4/ 灰	体部 5%以下	
29	103	SE03	珠洲 擂鉢	－	(10.8)	(3.8)	ヨコナデ ロクロナデ 卸目	ロクロナデ 静止糸切後 ナデ	密	良好	N6/ 灰	N6/ 灰	体部～底部 10%	内面の摩耗激しい 1単位8～9条
29	104	SE03	珠洲 擂鉢	－	－	(8.1)	ロクロナデ 卸目	ロクロナデ	密　白色粒 黒色粒	良好	5Y6/1 灰	5Y6/1 灰	体部 10%	卸目 内外面被熱痕

第６表　遺物一覧表(3)

土器・土製品　　※寸法の（　）は復元径または残存長を表す

図No.	番号	遺構名	種別 器種	寸法（cm） 口径	底径	器高	成形・調整・装飾等 内面	外面	胎土	焼成	色調 内面	外面	残存部 残存率	備考
29	105	SE03	珠洲 鉢	－	(12.6)	(6.3)	ロクロナデ	ロクロナデ 静止糸切後 ナデ	密　長石 赤色粒	良好	N6/ 灰	N6/ 灰	体部～底部 20%	外面被熱痕
30	107	SE05	中世土師器 皿	(9.8)	－	(1.6)	ナデ	ナデ	密	良好	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	口縁部 10%	
30	108	SE05	白磁 小型壺か	－	－	(2.1)	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良好	2.5GY8/1 灰白	2.5GY8/1 灰白	体部 5%以下	外面文様あり
30	109	SE05	越前か 鉢	－	－	(4.1)	ロクロナデ	ロクロナデ	密　長石 吹出	良好	10YR5/3 にぶい黄橙	10YR4/4 褐	口縁部 5%以下	自然釉 胎土2.5Y7/1灰白 越前Ⅱ期か
31	125	SE48	中世土師器 皿	(12.8)	－	(2.3)	ナデ	ヨコナデ ナデ	密 酸化鉄	良好	10YR8/1 灰白	10YR8/1 灰白	口縁部 10%	二段ナデ 13世紀中頃
31	126	SE48	中世土師器 皿	(9.9)	－	(2.1)	ナデ	ヨコナデ ナデ	密	良好	7.5YR7/2 明褐灰	10YR8/1 灰白	口縁部～体部 10%	灯明皿　油煙付着 13世紀後半
31	127	SE48	中世土師器 皿	(10.8)	－	(2.4)	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	密	良好	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	口縁部 5%	13世紀後半か
31	128	SE48	中世土師器 皿	(11.8)	(4.2)	2.3	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	密　石英	良好	10YR8/1 灰白	10YR8/1 灰白	口縁部～底部 10%	13世紀後半
31	129	SE48	中世土師器 皿	(6.8)	－	(1.3)	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	密	良好	10YR8/2 灰白	10YR7/3 にぶい黄橙	口縁部 30%	13世紀後半
31	130	SE48	中世土師器 皿	(9.8)	－	(2.2)	ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	密	良好	2.5Y7/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	口縁部 10%	13世紀後半
31	131	SE48	中世土師器 皿	－	(6.0)	(1.2)	ロクロナデ	ロクロナデ 回転糸切	密 酸化鉄	良好	5YR6/6 橙	5YR7/6 橙	底部 15%	ロクロ成形 13世紀後半
31	132	SE48	中世土師器 皿	(11.9)	(4.4)	2.7	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	密　石英 酸化鉄	良好	10YR8/1 灰白	10YR8/1 灰白	口縁部～底部 30%	13世紀か
31	133	SE48	珠洲 擂鉢	(26.0)	－	(4.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	密　長石	良好	5Y6/1 灰	5Y6/1 灰	口縁部 5%以下	珠洲Ⅱ期か
31	134	SE48	珠洲 壺	－	(10.0)	(4.0)	ロクロナデ	ロクロナデ 静止糸切	密　長石	良好	N8/ 灰白	N8/ 灰白	体部～底部 5%以下	スス付着
31	135	SE48	珠洲 擂鉢	－	(10.6)	(4.8)	ロクロナデ	ロクロナデ ユビオサエ 静止糸切後 ナデ	密　長石	良好	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	体部～底部 10%	内面の摩耗が顕著 卸目5条1単位
31	136	SE48	青磁 碗	(15.8)	－	(2.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良好	N8/ 灰白	N8/ 灰白	口縁部 10%	鎬連弁文 龍泉窯系　13世紀
31	137	SE48	古瀬戸 灰釉卸皿	－	(5.0)	(1.0)	卸目	ロクロナデ	密	良好	10YR8/2 灰白	10YR7/3 にぶい黄橙	底部 5%以下	卸目
31	138	SE48	越前 壺	－	－	(6.6)	ナデ	ナデ	密	良好	10YR6/2 灰黄褐	7.5YR5/3 にぶい褐	体部（肩） 5%以下	自然釉 胎土7/1 灰白
31	140	SE58	須恵器 坏	(10.9)	－	(1.7)	ロクロナデ	ロクロナデ	密　長石	良好	N6/ 灰	N6/ 灰	口縁部 5%以下	9世紀か
31	141	SE58	中世土師器 皿	10.6	4.0	2.1	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	密	良好	10YR8/1 灰白	10YR8/1 灰白	口縁部～底部 70%	15世紀末～16世紀 初
31	142	SE58	中世土師器 皿	10.9	6.0	2.0	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	密	良好	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	ほぼ完形 95%	15世紀末～16世紀 初
31	143	SE58	中世土師器 皿	11.7	7.0	2.0	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	密 赤色粒 酸化鉄	良好	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	ほぼ完形 95%	15世紀末～16世紀 初
31	144	SE58	中世土師器 皿	10.8	4.0	1.9	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	密	良好	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	ほぼ完形 95%	灯明皿　内外面スス付 着15世紀末～16世紀初
31	145	SE58	中世土師器 皿	11.3	7.0	2.2	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	密	良好	10YR8/1 灰白	10YR8/1 灰白	ほぼ完形 95%	灯明皿　スス付着 15世紀末～16世紀初
31	146	SE58	青白磁 瓶類	－	－	(2.5)	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良好	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	体部 5%以下	唐草文
32	149	SE61	中世土師器 皿	(7.8)	(2.8)	1.7	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	密	良好	2.5Y7/3 浅黄	2.5Y7/3 浅黄	口縁部 5%	
32	150	SE61	中世土師器 皿	(7.2)	(4.0)	1.4	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	密　長石	良好	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	口縁部～底部 25%	14世紀中頃
32	151	SE61	中世土師器 皿	(7.4)	(4.2)	1.2	ナデ	ヨコナデ ナデ	密　石英	良好	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/1 灰白	口縁部 25%	14世紀中頃
32	152	SE61	中世土師器 皿	(9.9)	－	(2.0)	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	密	良好	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	口縁部 10%	14世紀中頃か
32	153	SE61	中世土師器 皿	(11.8)	(4.8)	1.7	ナデ	ヨコナデ ナデ	密　石英	良好	2.5Y8/3 淡黄	2.5Y8/2 灰白	口縁部 5%	灯明皿　油煙付着 14世紀中頃
32	154	SE61	中世土師器 皿	(10.8)	(4.0)	2.0	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	密	良好	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	口縁部 5%	灯明皿　スス付着 14世紀中頃
32	155	SE61	中世土師器 皿	8.4	5.6	1.9	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	密　雲母	良好	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	ほぼ完形 95%	14世紀か
32	156	SE61	中世土師器 皿	14.2	9.0	2.6	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ ユビオサエ	密　雲母	良好	10YR8/2 灰白	10YR8/1 灰白	ほぼ完形 95%	内外面黒化 (油煙痕かスス) 灯明皿　14世紀か
32	157	SE61	越中瀬戸 皿	－	－	(1.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良好	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	高台付近小片 5%以下	鉄釉 近世
32	169	SE64	八尾 甕	－	－	(10.3)	ナデ	ナデ	密　長石 小石	良好	10YR5/3 にぶい黄褐	7.5YR6/3 にぶい褐	口縁付近 5%以下	胎土N8/ 灰白
33	170	SE64	中世土師器 皿	(7.6)	(3.0)	1.4	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	密　雲母	良好	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	口縁部 10%	14世紀中頃
33	175	SE65	中世土師器 皿	(7.8)	－	1.3	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	密　雲母	良好	10YR8/1 灰白	10YR8/1 灰白	口縁部 20%	13世紀末～14世紀 初
33	179	SE81	中世土師器 皿	(7.9)	－	(1.4)	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	密	良好	10YR8/1 灰白	10YR7/1 灰白	口縁部～体部 30%	灯明皿　油煙付着 14世紀

第７表　遺物一覧表（4）

土器・土製品　　※寸法の（　）は復元径または残存長を表す

図No.	番号	遺構名	種別 器種	寸法（cm） 口径	底径	器高	成形・調整・装飾等 内面	外面	胎土	焼成	色調 内面	外面	残存部 残存率	備考
33	180	SE81	中世土師器 皿	(7.9)	(4.2)	1.4	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	密	良好	10YR8/1 灰白	10YR8/1 灰白	口縁部～底部 20%	14世紀中頃
33	181	SE81	青磁 碗	(16.3)	－	(2.1)	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良好	N7/ 灰白	N7/ 灰白	口縁部 5%	龍泉窯系　連弁文 14世紀
33	182	SE81	八尾 甕	－	－	(8.7)	ナデ	ナデ	密　長石	不良	10YR6/2 灰黄褐	10YR6/4 にぶい黄橙	体部（肩） 5%以下	自然釉 胎土2.5Y8/1灰白 焼きぶくれ
33	183	SE81	珠洲 甕	－	－	(7.3)	ヨコナデ 当て具痕	タタキ	密　長石	良好	N6/ 灰	N6/ 灰	体部 5%以下	胎土2.5Y8/1灰白
34	193	SE83	古瀬戸 天目茶碗	(11.7)	－	(5.5)	ロクロナデ ナデ	ロクロナデ ナデ	密	良好	2.5Y8/3 淡黄	2.5Y8/3 淡黄	口縁部～体部 40%	鉄釉　古瀬戸後Ⅳ期
34	194	SE83	瓦質土器 火鉢か	－	(23.2)	(6.5)	ハケメ ナデ	ミガキ	粗　長石	良好	10YR4/4 褐	10YR5/2 灰黄褐	底部 5%以下	
34	195	SE83	珠洲 壺	－	(9.2)	(4.2)	ロクロナデ ナデ	ロクロナデ 静止糸切	密	良好	N6/ 灰	N5/ 灰	体部～底部 10%	
34	196	SE83	珠洲 擂鉢	(45.7)	－	(12.5)	ロクロナデ 櫛目波状文 卸目	ロクロナデ	密　雲母 長石	良好	N5/ 灰白	N3/ 暗灰	口縁部～体部 10%	珠洲Ⅵ期
34	200	SE108	中世土師器 皿	(7.8)	(3.0)	1.4	ナデ	ナデ	密 酸化鉄 砂粒	良好	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	口縁部 20%	
34	201	SE108	珠洲 甕	－	－	(13.4)	ナデ 当て具痕	ナデ タタキ	密　雲母 石英	良好	5Y6/1 灰	2.5Y7/1 灰白	肩部 10%	珠洲Ⅲ～Ⅳ期か
35	202	SK07	中世土師器 皿	(9.0)	(5.0)	1.2	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	密	良好	10YR8/1 灰白	10YR8/2 灰白	口縁部～底部 20%	14世紀か
35	203	SK07	中世土師器 皿	(7.9)	(3.6)	1.6	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	密 酸化鉄	良好	7.5YR7/1 明褐灰	7.5YR6/1 褐灰	口縁部～底部 30%	15世紀前半
35	204	SK07	中世土師器 皿	(7.8)	－	(1.5)	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	密 酸化鉄	良好	10YR8/1 灰白	10YR8/2 灰白	口縁部 5%以下	灯明皿　油煙付着
35	205	SK07	青磁 碗	－	－	(4.1)	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良好	2.5Y7/2 灰白	2.5Y7/2 灰白	体部 5%	龍泉窯系　鎬連弁文 13世紀前半
35	206	SK07	珠洲 擂鉢	－	－	(3.3)	ロクロナデ 櫛目波状文	ロクロナデ	密　長石	良好	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	口縁部 5%以下	珠洲Ⅴ期
35	207	SK07	珠洲 甕	－	(23.0)	(12.0)	当て具痕	タタキ	密　長石	良好	5Y6/1 灰	5Y6/1 灰	体部～底部 5%	
35	208	SK07	越前 甕	－	－	(7.5)	ナデ	ナデ	密	良好	7.5YR6/2 灰褐	10YR5/3 にぶい黄褐	体部下部 5%以下	輪積み痕 胎土N7/灰白
35	209	SK14	中世土師器 皿	(9.4)	(5.2)	1.2	ナデ	ヨコナデ ナデ	密	良好	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	口縁部 15%	
35	210	SK14	中世土師器 皿	(15.8)	－	2.5	ナデ	ヨコナデ ナデ	密 金雲母 酸化鉄	良好	10YR8/3 浅黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	口縁部 10%	
35	212	SK35	中世土師器 皿	8.8	4.4	2.3	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ ユビオサエ	密	良好	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	ほぼ完形 95%	15世紀
35	213	SK35	中世土師器 皿	(11.2)	－	(3.0)	ナデ	ヨコナデ ナデ	密 酸化鉄	良好	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	口縁部～体部 10%	灯明皿　スス付着 15世紀
35	214	SK35	中世土師器 皿	(12.8)	(7.0)	2.5	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	密	良好	10YR6/2 灰黄褐	2.5Y7/2 灰黄	口縁部 25%	灯明皿　スス付着 15世紀
35	215	SK35	珠洲 壺	(18.5)	－	(3.7)	ロクロナデ	ロクロナデ	密 白色粒 黒色粒	良好	N5/ 灰	N5/ 灰	口縁部 5%以下	珠洲Ⅱ期
35	216	SK35	珠洲 擂鉢	－	－	(3.7)	ロクロナデ 卸目	ロクロナデ	密 白色粒 黒色粒	良好	7.5Y6/1 灰	7.5Y6/1 灰	体部 5%以下	曲線文の卸目 12条1単位　珠洲Ⅱ期
35	217	SK35	八尾 甕	－	－	(5.7)	ナデ	ヨコナデ	密	不良	2.5Y7/1 灰白	2.5Y5/1 黄灰	体部 5%以下	自然釉 胎土2.5Y8/1灰白
35	220	SK38	中世土師器 皿	(11.9)	－	(2.8)		ヨコナデ	密	良好	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/1 灰白	口縁部 10%	14世紀中頃
35	221	SK38	珠洲 甕	－	－	(2.8)	ナデ 当て具痕	タタキ	密　長石	良好	N6/ 灰	N5/ 灰	底部 5%	
35	222	SK38	越前 甕	－	－	(5.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	密　長石	良好	10YR6/2 灰黄褐	2.5Y7/1 灰白	体部肩付近 5%以下	ヘラ記号か　外面敲打痕あり 自然釉
35	223	SK59	中世土師器 皿	(6.9)	－	(1.0)	ナデ	ヨコナデ	密　雲母	良好	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	口縁部 5%以下	
35	224	SK60	中世土師器 皿	(11.9)	－	(3.2)	ナデ	ナデ	密	良好	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	口縁部 10%	13世紀末～14世紀初か
36	225	SK62	青磁 碗	－	4.8	(2.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良好	素地N8/ 灰白	素地N8/ 灰白	底部（高台） 20%	龍泉窯系　高台内 釉剥ぎ　漆少量付着
36	229	SK79	中世土師器 皿	(7.8)	(5.8)	1.2	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	密	良好	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	口縁部 10%	13世紀末～14世紀初
36	230	SK80	中世土師器 皿	(7.9)	－	(1.8)	ナデ	ヨコナデ ナデ	密	良好	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	口縁部 10%	15世紀
36	231	SK80	珠洲 擂鉢	－	(11.2)	(8.4)	ロクロナデ 卸目	ロクロナデ 静止糸切	密　長石	良好	N6/ 灰	N6/ 灰	体部～底部 40%	卸目9条1単位
36	233	SK102	中世土師器 皿	(11.8)	－	(1.9)	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	密　長石 酸化鉄	良好	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	口縁部 10%	15世紀中頃
36	234	SK102	土製品 土錘	(3.5)	(1.2)	6.3	ナデ	ナデ	密 酸化鉄	良好	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	体部 35%	管状
36	235	SK164	中世土師器 皿	11.7	6.5	3.1	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	密　雲母	良好	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	口縁部～底部 60%	灯明皿 底面に スス付着 15世紀
36	236	SK164	中世土師器 皿	(9.9)	(5.0)	2.2	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	密　石英	良好	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	口縁部～底部 10%	二段ナデか 15世紀
36	237	SK176	青磁 束口碗か	(11.8)	－	(2.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良好	N8/ 灰白	N8/ 灰白	口縁部 10%	龍泉窯系　連弁文 13世紀

第８表　遺物一覧表（5）

土器・土製品　　※寸法の（　）は復元径または残存長を表す

図No.	番号	遺構名	種別 器種	寸法（cm） 口径	底径	器高	成形・調整・装飾等 内面	外面	胎土	焼成	色調 内面	外面	残存部 残存率	備考
36	238	SK201	中世土師器 皿	(8.9)	－	(1.5)	ナデ	ヨコナデ ナデ	密	良好	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	口縁部 5%	14世紀中頃
37	240	SP36	古瀬戸 灰釉入子	(6.0)	－	(2.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良好	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	口縁部 15%	ヒダ(花弁)8弁 13～14世紀前半
37	241	SP43	中世土師器 皿	(10.0)	(3.9)	1.7	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	密	良好	10YR5/2 灰黄褐	10YR4/1 褐灰	口縁部 5%	15世紀前半～中頃
37	242	SP71	八尾 甕	－	－	(6.8)	ナデ	ナデ	密	不良	10YR6/2 灰黄褐	10YR6/3 にぶい黄橙	体部下部 5%以下	内面焼きぶくれ 胎土N8/灰白
37	243	SP75	中世土師器 皿	(10.4)	－	1.9	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	密　長石	良好	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	口縁部～底部 45%	灯明皿　油煙付着 15世紀末～16世紀初
37	244	SP87	珠洲 擂鉢	－	－	(2.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	密　長石	良好	N5/ 灰	N5/ 灰	注口部片 5%以下	注口部　珠洲Ⅱ期
37	246	SP120	中世土師器 皿	－	－	(1.2)	ナデ	ナデ	密　鉄石英	良好	10YR8/4 浅黄橙	10YR3/4 暗褐	口縁部 5%以下	内面と口縁端部に 金付き
37	248	SP143	中世土師器 皿	(9.1)	－	(1.4)	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	密	良好	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	口縁部 10%	
37	249	SP180	中世土師器 皿	(6.9)	－	(1.2)		ヨコナデ	密	良好	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	口縁部 10%	13世紀末～14世紀 中頃
37	250	SX49	中世土師器 皿	(11.8)	－	(2.4)	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	粗　長石 酸化鉄	良好	10YR6/2 灰黄褐	10YR7/2 にぶい黄橙	口縁部 10%	灯明皿　油煙付着 15世紀後半
37	251	SX49	中世土師器 皿	(10.3)	(8.0)	1.7	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	密　酸化鉄	良好	2.5Y8/2 灰白	2.5Y7/2 灰黄	口縁部～底部 10%	15世紀後半
37	252	SX49	中世土師器 皿	(13.0)	－	(2.8)	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	密　石英	良好	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	口縁部 10%	灯明皿　油煙付着 15世紀後半
38	257	SX49	越前 陶硯	(4.4)	4.9	1.8	ケズリ	ナデ ケズリ	密	良好	7.5YR5/2 灰褐	7.5YR4/3 褐	－ 30%	縁部を面取り
38	260	SX52	中世土師器 皿	(9.8)	－	2.0	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	密　酸化鉄	良好	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR6/2 灰黄褐	口縁部 10%	外面スス付着 15世紀後半
38	261	SX52	中世土師器 皿	(9.8)	－	(1.3)	ナデ	ヨコナデ ナデ	密	良好	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	口縁部 10%	
38	262	SX52	中世土師器 皿	(13.0)	－	(2.4)	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	密　酸化鉄	良好	10YR8/2 灰白	10YR7/3 にぶい黄橙	口縁部 10%	15世紀後半
38	263	SX52	古瀬戸 碗	－	4.2	(1.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	粗	良好	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	底部 10%	
38	264	SX52	珠洲 甕	－	－	(8.2)	ロクロナデ 当て具痕	ロクロナデ タタキ	密	良好	N6/ 灰	N6/ 灰	口縁部～体部 5%	珠洲Ⅴ期
38	265	SX52	珠洲 擂鉢	(29.6)	－	(8.0)	ロクロナデ 注口部ナデ	ロクロナデ 注口部ナデ	粗　酸化鉄 白色粒	良好	7.5Y7/1 灰	7.5Y6/1 灰	口縁部 5%	珠洲Ⅵ期
38	268	SX53	珠洲 甕	－	－	(2.9)	ナデ	タタキ	密　長石 黒色粒	良好	N5/ 灰	N6/ 灰	体部 5%以下	胎土にワラ様の もの混入 碁石への転用品か
38	269	SX63	中世土師器 皿	(17.0)	(3.0)	4.4	ナデ ユビオサエ	ナデ ユビオサエ	密	良好	10YR8/1 灰白	10YR8/1 灰白	口縁部～底部 20%	灯明皿　内外面スス付 着　14世紀か
38	270	SX63	八尾 甕	－	－	(5.9)	ナデ ユビオサエ	ナデ	密　長石	不良	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR5/3 にぶい黄橙	体部 5%以下	自然釉 胎土N8/ 灰白
38	271	SX77	中世土師器 皿	(13.8)	(8.0)	2.3			密　石英	良好	10YR8/1 灰白	10YR8/1 灰白	口縁部 5%	14世紀中頃か
38	272	SX77	珠洲 甕	－	－	(4.1)	ロクロナデ	ロクロナデ	密　雲母	良好	5Y6/1 灰	5Y5/1 灰	口縁部 5%以下	珠洲Ⅱ期
38	273	SX77	珠洲 擂鉢	(32.3)	－	(4.1)	ロクロナデ	ロクロナデ	密　長石	良好	2.5Y5/1 黄灰	2.5Y6/1 黄灰	口縁部 5%以下	珠洲Ⅳ期
38	274	SX77	珠洲 甕	－	－	(7.4)	当て具痕	タタキ	密　長石	良好	N5/ 灰	N4/ 灰	体部 5%以下	
38	275	SX77	珠洲 擂鉢	－	－	(4.9)	ロクロナデ 卸目	ロクロナデ	密　長石	良好	N7/ 灰白	N6/ 灰	体部 5%以下	卸目
38	276	SX97	中世土師器 皿	(8.9)	－	(1.2)	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	密	良好	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	口縁部～体部 15%	灯明皿　油煙付着 15世紀中頃
38	277	SX97	中世土師器 皿	(9.8)	－	(1.8)	ナデ	ヨコナデ ナデ	密	良好	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	口縁部 25%	15世紀中頃
38	278	SX97	珠洲 擂鉢	－	－	(7.0)	ロクロナデ 卸目	ロクロナデ	密	良好	N6/ 灰	N6/ 灰	体部下部 5%以下	卸目9条1単位
38	279	SX98	中世土師器 皿	(8.0)	(2.0)	1.2	ナデ	ヨコナデ ナデ	密　雲母	良好	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	口縁部～底部 30%	灯明皿　油煙付着 14世紀中頃か
38	280	SX98	中世土師器 皿	(8.9)	－	(1.4)	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	密　酸化鉄	良好	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	口縁部～底部 20%	灯明皿　油煙付着
38	281	SX98	中世土師器 皿	(11.5)	－	2.2	ナデ	ヨコナデ ナデ	密　雲母	良好	10YR7/3 にぶい黄橙	2.5Y7/2 灰黄	口縁部 15%	
38	282	SX98	古瀬戸 灰釉卸皿	(17.6)	－	(2.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良好	5Y7/2 灰白	5Y7/2 灰白	口縁部 5%	灰釉 古瀬戸中期Ⅲ～Ⅳ期
38	283	SX98	古瀬戸 碗	(11.4)	－	(3.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良好	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	口縁部 5%以下	錆釉
38	284	SX98	珠洲 小壺	(5.4)	－	(3.5)	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良好	5Y5/1 灰	N6/ 灰	口縁部 20%	漆容器か 内外面に 漆付着　珠洲Ⅳ期
39	285	試掘 10T	中世土師器 皿	(7.5)	(4.0)	1.4	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	密　石英 小石	良好	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	口縁部 20%	14世紀前半
39	286	試掘 10T	中世土師器 皿	(10.4)	(4.2)	2.5	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	密　長石	良好	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	口縁部～底部 30%	灯明皿　内底面に 油煙付着 14世紀前半
39	287	試掘 10T	青磁 碗	(11.8)	－	(2.3)	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良好	N8/ 灰白	N8/ 灰白	口縁部 5%以下	龍泉窯系　14世紀

第９表　遺物一覧表（6）

土器・土製品　　※寸法の（　）は復元径または残存長を表す

図No.	番号	遺構名	種別 器種	寸法（cm） 口径	底径	器高	成形・調整・装飾等 内面	外面	胎土	焼成	色調 内面	外面	残存部 残存率	備考
39	288	試掘 10T	青磁 碗	(14.8)	－	(6.3)	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良好	N8/ 灰白	N8/ 灰白	口縁部～体部 10%	鎬連弁文 龍泉窯系　13世紀 中頃～14世紀初
39	289	試掘 10T	珠洲 擂鉢	(19.6)	－	(2.7)	ロクロナデ	ロクロナデ	密　長石	良好	N6/ 灰	N7/ 灰白	口縁部 5%以下	珠洲Ⅱ～Ⅲ期か
39	291	包含層(SD50 51 SX52付近)	中世土師器 皿	(11.8)	－	(2.8)	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	密 赤色粒	良好	10YR4/2 灰黄褐	10YR8/3 浅黄橙	口縁部 10%	15世紀前半～中頃
39	292	包含層(SD50 51 SX52付近)	中世土師器 皿	(11.8)	－	(2.1)	ヨコナデ センターナデ	ヨコナデ ナデ	密	良好	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	口縁部～体部 10%	15世紀前半～中頃
39	293	検出面	中世土師器 皿	(9.8)	－	(2.0)	ナデ	ヨコナデ ナデ	密 酸化鉄	良好	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	口縁部 25%	15世紀前半
39	294	検出面	珠洲 鉢	(17.4)	－	(3.0)	ロクロナデ ケズリ	ナデ ロクロナデ	密	良好	N5/ 灰	N5/ 灰	口縁部 5%	珠洲Ⅴ期
39	295	検出面	珠洲 瓶子か	－	－	(11.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	密　長石 黒色粒	良好	2.5Y7/1 灰白	2.5Y6/1 黄灰	体部 5%以下	自然釉
39	296	排土	珠洲 甕	－	－	(7.4)	ロクロナデ 当て具痕	ロクロナデ ケズリ タタキ	密　石英 長石	良好	N6/ 灰	N6/ 灰	口縁部～体部 5%以下	珠洲Ⅳ期
39	297	表土	青磁 碗	(12.6)	－	(2.7)	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良好	7.5Y8/1 灰白	7.5Y8/1 灰白	口縁部 5%以下	内外面無文 龍泉窯系
39	298	排土	白磁 皿	－	(3.7)	(1.5)	ロクロナデ	ロクロナデ ケズリ	密	良好	5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白	底部 15%	高台4ヶ所抉り込み 15世紀前半
39	299	排土	古瀬戸 小坏	(5.7)	(2.4)	1.9	ロクロナデ	ロクロナデ 回転糸切	密	良好	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	口縁部～底部 20%	鉄釉
39	300	表採	越中瀬戸 擂鉢	(23.0)	－	(2.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良好	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	口縁部 5%	16世紀末～17世紀初

木製品　　※寸法の（　）は復元径または残存長を表す

図No.	番号	遺構名	種別	寸法（cm） 最大長／口径	最大幅／底径	最大厚／器高	木取り	残存率	備考
25	2	SA1(SP55)	礎板か	(15.9)	(12.6)	(3.1)	板目	90%	
25	6	SB1(SP204)	柱根	(20.0)	20.3	12.9	芯持ち 丸太	60%	スギ
26	21	SD50	折敷	26.6	(1.9)	0.6	板目	80%	横板　両端と中央の3ヶ所に孔あり
27	55	SD54	漆器椀	－	(6.0)	(1.4)	横木取り	5%	内外面に黒漆　内面に赤漆(草木文)
27	56	SD54	不明木製品	(5.1)	(3.4)	(1.1)	柾目	50%	上面に渦巻文　独楽か
28	63	SD96	連歯下駄	23.1	9.0	3.7	柾目 芯持ち材	97%	後の歯の摩耗が顕著
29	85	SE01	漆器椀	12.8	7.2	5.0	横木取り	80%	内外面に黒漆塗り　見込みと体部外面に赤漆で草木文(笹文)　ケヤキ
29	86	SE01	板材	15.2	7.4	0.6	柾目	100%	表面に刃物痕あり　角の一つをL字状に切り欠き
29	87	SE01	草履芯板	24.1	10.3	0.3	柾目か	99%	つま先部分の2ヶ所に孔　側辺に切り込みあり
29	95	SE02	箸	19.5	0.6	0.5	－	100%	
29	96	SE02	箸	19.2	0.7	0.5	－	100%	
29	97	SE02	箸	(15.6)	0.7	0.3	板目	80%	
30	110	SE05	横桟	69.3	10.9	3.1	板目	100%	井戸枠木組　北辺
30	111	SE05	横桟	71.2	10.8	3.3	板目	100%	井戸枠木組　西辺
30	112	SE05	横桟	70.1	9.6	3.9	板目	100%	井戸枠木組　南辺
30	113	SE05	横桟	70.5	10.5	3.2	板目	100%	井戸枠木組　東辺
30	114	SE05	縦板	(30.5)	11.9	0.5	板目	不明	
30	115	SE05	縦板	(34.9)	13.2	0.9	板目	不明	
30	116	SE05	縦板	(36.4)	13.8	0.8	板目	不明	
30	117	SE05	縦板	(35.0)	13.7	1.2	板目	不明	
30	118	SE05	隅柱	(22.2)	5.0	2.15	柾目	不明	南西角
30	119	SE05	隅柱	(19.7)	5.4	2.4	柾目	不明	北西角柱
30	120	SE05	隅柱	(20.7)	2.7	2.0	柾目	不明	北東角
31	121	SE05	板状木製品	32.4	4.8	0.4	板目	98%	針穴程の小傷が半円状に連なる
31	122	SE05	箸	31.3	1.1	0.6	－	100%	
31	123	SE05	曲物底板か	(20.9)	(20.3)	0.5	柾目	95%	刃物による多数の線状痕あり
31	124	SE05	曲物	55.7	51.8	23.0	柾目	70%	水溜の曲物　身の部分を三重の側板で作り下部にタガを巻く タガから本体に貫通する木釘孔あり　内面にケビキ
31	139	SE48	箸	18.5	0.6	0.3	－	100%	
31	147	SE58	箸	(19.1)	0.6	0.6	－	90%	
31	148	SE58	箸	19.1	0.8	0.3	柾目	100%	
32	158	SE61	漆器皿	9.3	6.4	1.3	横木取り	95%	内外面に黒漆塗り　見込みに赤漆で植物文 口縁部と底部が一部欠損　ブナ属
32	159	SE61	漆器椀	－	7.0	(2.9)	横木取り	80%	内面に赤漆塗り　見込みに菊花文　外面に黒漆塗り　ブナ属
32	160	SE61	漆器椀	14.1	7.6	4.4	横木取り	80%	内外面に黒漆塗り、見込みと体部外面に赤漆で植物文　モクレン属
32	161	SE61	曲物	33.7	32.8	16.3	柾目	100%	水溜の曲物　身の部分を二重の側板で作り上下に二条にタガを巻く 内面にケビキ
32	162	SE61	差歯下駄	(21.0)	9.5	3.6	四方柾	95%	露卯下駄　右足用　前歯は台形　後歯は長方形　指の圧痕
32	163	SE61	差歯下駄	(13.6)	12.5	8.6	四方柾	60%	露卯下駄　左足用　指の圧痕
32	164	SE61	横槌か	24.9	10.5	6.35	二方柾	100%	
32	165	SE61	竹	(9.2)	1.7	0.9	－	不明	井戸息抜き

第10表　遺物一覧表(7)

木製品　※寸法の（　）は復元径または残存長を表す

図No.	番号	遺構名	種別	寸法（cm）			木取り	残存率	備考
				最大長／口径	最大幅／底径	最大厚／器高			
32	166	SE61	箸	(13.3)	0.9	0.6	－	90%	
32	167	SE61	箸	23.7	0.6	0.4	－	100%	
32	168	SE61	箸	(11.3)	0.5	0.5	－	60%	
33	171	SE64	箆状木製品	15.4	1.5	1.0	板目	100%	
33	172	SE64	箸	20.6	0.4	0.4	－	100%	
33	173	SE64	箸	(15.1)	0.7	(0.4)	板目	80%	
33	174	SE64	板状木製品	(54.7)	14.4	1.5	板目	90%	
33	176	SE65	曲物	奥行 53.7	横幅 53.0	50.4	柾目	95%	水溜の曲物　身の部分を二重に側板で作り下部にタガを巻く 下部のタガと本体に12ヶ所の穴あり　上部のタガは下に脱落し 同様に穴あり　下端に木釘の孔あり　内面にケビキ
33	177	SE65	曲物底板	(19.3)	20.9	0.7	板目	95%	
33	178	SE65	曲物底板	19.0	20.3	0.9	板目	100%	
33	184	SE81	板状木製品	13.0	5.3	2.4	柾目	100%	角を段状に加工
33	185	SE81	板材	32.0	4.2	1.0	板目	100%	側面に1ヶ所抉りあり
34	186	SE81	板材	22.3	4.1	1.0	板目	100%	十字相欠き継ぎの部材　両端に抉りと継手のための段の加工あり 187と対
34	187	SE81	板材	23.4	4.4	0.9	板目	100%	十字相欠き継ぎの部材　両端に抉りあり　186と対
34	188	SE81	角材	(22.8)	3.1	1.7	柾目	70%	中央に鑿で溝を入れる　溝の底面に鑿痕が残る
34	189	SE81	箸	(19.5)	0.5	0.5	－	100%	上端を斜めにカット
34	190	SE81	箸	19.9	0.5	0.5	－	100%	
34	191	SE81	箸	19.3	0.7	0.4	－	100%	
34	192	SE81	箸	18.6	0.7	0.4	－	100%	
34	197	SE83	漆器椀	8.6	5.4	2.5	横木取り	80%	内外面に黒漆塗り　見込みに一部赤漆の文様痕跡あり 共伴する天目茶碗の蓋となる可能性あり　ブナ属 内部に黄白色の粘質土状のものあり
34	198	SE83	曲物底板	19.8	19.4	0.7	柾目	90%	漆容器か　内面に黒漆付着　ヒノキ属
34	199	SE83	箸	23.6	0.8	0.6	－	100%	
35	218	SK35	蓋（栓）	4.0	2.1	2.0	柾目	100%	広葉樹
35	219	SK35	棒状木製品	12.4	2.5	2.7	芯持ち材	100%	一部炭化　一方の端部を尖らせ中程に抉りあり
36	226	SK62	柄	87.3	2.4	1.9	柾目	100%	柄杓の柄か
36	227	SK62	柄	87.4	2.0	1.5	柾目	90%	柄杓の柄か
36	228	SK62	曲物	21.1	19.8	14.8	柾目	98%	底板と側板を木釘で固定しタガを下部に二条巻く 側面上部に穴あり　226か227の柄と同一個体の柄杓か
37	247	SP141	不明部材	20.7	8.9	4.6	柾目	100%	全面に加工痕あり
37	253	SX49	曲物	49.5	51.3	43.1	柾目	100%	上部に孔14ヶ所(うち2ヶ所に木栓)　身の部分を一重の側板で作り下半部にさらに一重の側板　下部にタガを巻く 内面はケビキ
37	254	SX49	杓子状木製品	(18.4)	3.8	0.5	板目	70%	
37	255	SX49	角柱状木製品	9.8	4.3	3.7	柾目	100%	全面を加工
37	256	SX49	柄杓（曲物）	16.7	16.5	10.4	柾目	90%	底板を木釘で固定　柄の端部が炭化　底板は板目
			（柄）	(9.5)	1.9	1.8		50%	
38	258	SX49	折敷底板	17.6	16.9	0.4	柾目	60%	側縁に木釘の孔あり　表面に刃物による線状痕あり
38	259	SX49	編み物	(9.9)	(10.3)	－	－	10%	木目ござ目編み　上･下･右側面に折り返されている
38	266	SX52	不明木製品	17.2	11.4	9.8	四方柾	100%	柱状　下部は先端を突出させるように加工　スギ
39	290	試掘 10T	角柱状木製品	(19.5)	5.4	2.9	二方柾	不明	SE81の井戸枠部材

石製品　※寸法の（　）は残存長を表す

図No.	番号	遺構名	種別	寸法（cm）			重量（g）	石材	残存率	備考
				最大長	最大幅	最大厚				
27	57	SD54	砥石	4.7	3.4	0.7	14.8	粘板岩	100%	
28	64	SD96	碁石（黒石）	2.0	1.8	0.4	2.4	泥岩	100%	
28	81	SD199	砥石	10.2	4.4	5.7	177.3	泥岩	100%	3面に擦痕
29	98	SE02	被熱礫	20.3	19.3	7.0	3900	安山岩	100%	一部打撃による剥離
30	106	SE03	石臼（下臼）	26.4	26.2	10.5	11400	角閃石安山岩	100%	副溝は5～7本の7区画　広範囲に被熱痕あり
35	211	SK14	火打石か	5.2	4.3	3.4	82.7	石英	100%	下端部に細かい敲打痕あり
36	232	SK80	被熱礫	15.1	12.6	4.3	1300	安山岩	100%	全体的に被熱
36	239	SK190	砥石	8.3	6.8	7.2	468.6	凝灰岩	100%	斜めの擦痕
37	245	SP87	礎石か	20.5	21.8	6.6	4800	安山岩	－	扁平な方形に加工

金属製品　※規模の（　）は残存長を表す

図No.	番号	遺構名	種別	寸法（cm）			残存率	備考
				最大長	最大幅	最大厚		
26	22	SD50	刀子の鞘か	(8.9)	1.3	0.4	不明	銅製品
38	267	SX52	刀の切羽	4.6	4.3	0.1	100%	倒卵形　茎穴長さ3.0cm　幅1.4cm　無文 表面･裏面に漆を塗る

第11表　遺物一覧表(8)

第４章　自然科学分析

第１節　放射性炭素年代測定

1　はじめに

黒崎種田遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

2　試料と方法

測定試料の情報、調製データは第 12 表のとおりである。PLD-40941（遺物№6）は、SP204 より出土した最終形成年輪を含む柱根である。なお、柱根は樹種同定の結果、スギと判明している（本章第 4 節参照）。PLD-40942 は､SX52 の最下層（8 層）より出土した部位不明の炭化材である。PLD-40943 は、SK201 より出土したウマの歯である。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製　1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後､^{14}C 年代､暦年代を算出した。なお、PLD-40943 は生の歯であるため、コラーゲンを抽出し、EA（ガス化前処理装置）である vario MICRO CUBE（elementar 社製）を用いて炭素含有量と窒素含有量の測定を行った。得られた炭素含有量と窒素含有量に基づいて C/N 比（モル比）を算出した。

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-40941	遺構：SP204 遺物№：6	種類：生材（スギ） 試料の性状：最終形成年輪 器種：柱根 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0mol/L, 塩酸：1.2mol/L）
PLD-40942	遺構：SX52 層位：8層	種類：炭化材 試料の性状： 最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0mol/L, 塩酸：1.2mol/L）
PLD-40943	遺構：SK201	種類：歯（ウマ） 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン コラーゲン抽出

第 12 表　測定試料および処理

3　結　果

第 13 表に、コラーゲン抽出の際に処理した歯の重量、抽出したコラーゲン重量、コラーゲン含有率、炭素含有率、窒素含有率、C/N 比を示す。第 14 表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、暦年較正結果を、第 40 図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C 年代（yrBP）の算出には、^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差（±１σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2%であることを示す。

試料番号	試料情報	処理した歯重量 (mg)	抽出コラーゲン重量 (mg)	コラーゲン含有率 (%)	炭素含有率 (%)	窒素含有率 (%)	C/N 比 (モル比)
PLD-40943	遺構：SK201 種類：歯（ウマ）	768.45	3.20	0.42	18.0	0.6	36.27

第 13 表　コラーゲン抽出結果と C/N 比

測定番号	δ ^{13}C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	^{14}C 年代 (yrBP±1σ)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
PLD-40941	-24.87±0.19	572±18	570±20	1325-1345 cal AD (40.9%) 1394-1407 cal AD (27.3%)	1314-1357 cal AD (58.3%) 1387-1414 cal AD (37.1%)
PLD-40942	-28.67±0.19	495±20	495±20	1419-1436 cal AD (68.2%)	1411-1443 cal AD (95.4%)
PLD-40943	-	-	-	-	-

第 14 表　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い（^{14}C の半減期 5730 ± 40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.3（較正曲線データ： IntCal13）を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2 σ 暦年代範囲は 95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4　考　察

SP204 より出土した最終形成年輪を含む柱根である PLD-40941（遺物№6）は、2 σ 暦年代範囲で 1314-1357 cal AD(58.3%) および 1387-1414 cal AD(37.1%) で、14 世紀前半から 15 世紀前半の暦年代を示した。

SX52 の底面（8 層）より出土した部位不明の炭化材である PLD-40942 は、2 σ 暦年代範囲で 1411-1443 cal AD(95.4%) で、15 世紀前半から中頃の暦年代を示した。

SK201 より出土したウマの歯である PLD-40943 は、768.45mg の試料についてコラーゲン抽出を行った結果、抽出量が 3.20mg と必要量を回収できなかった。コラーゲン含有率は 0.42% と、1% 未満だった。C/N 比も 36.27 と骨や歯が通常示す 2.9 ～ 3.6 の範囲を大幅に上回った。以上より、外来炭素による汚染がある可能性が高いため（DeNiro 1985)、試料の追加採取は行わず、測定を断念した。

第 41 図に、年代の得られた 2 点のマルチプロット図を示す。なお、木材は最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると内側であるほど古い年代が得られる（古木効果)。今回測定した試料のうち、部位不明の炭化材である PLD-40942 は、最終形成年輪が確認されていないため、年代測定の結果が古木効果の影響を受け、木材が枯死もしくは伐採された年代よりも古い年代を示している可能性を考慮する必要がある。

（パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ（伊藤　茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtatidze・小林克也・竹原弘展))

引用・参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

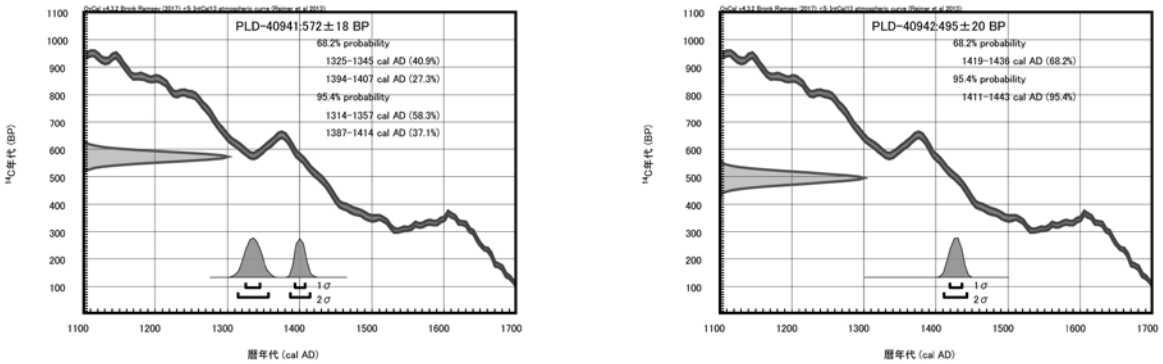
DeNiro, M. J. (1985) Postmortem Preservation and Alteration of in vivo Bone Collagen Isotope Ratios in Relation to Palaeodietary Reconstruction. Nature, 317, 806-809.

G.J. van Klinken (1999) Bone Collagen Quality Indicators for Palaeodietary and Radiocarbon Measurements. Journal of Archaeological Science, 26, 687-695.

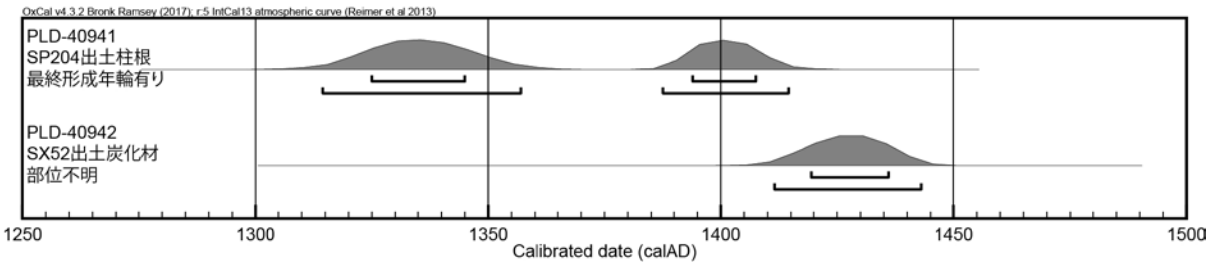
中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」日本第四紀学会, 3-20.

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.

Ryohei Nakagawa, Naomi Doi, Yuichiro Nishioka, Shin Nunami, Heizaburo Yamauchi, Masaki Fujita, Shinji Yamazaki, Masaaki Yamamoto, Chiaki Katagiri, Hitoshi Mukai, Hiroyuki Matsuzaki, Takashi Gakuhari, Mai Takigami, Minoru Yoneda (2010) Pleistocene human remains from Shiraho-Saonetabaru Cave on Ishigaki Island, Okinawa, Japan, and their radiocarbon dating. Anthropological Science, 118(3), 173-183.



第 40 図　暦年較正結果



第 41 図　マルチプロット図

第２節　堆積物中の珪藻化石群集

1　はじめに

珪藻は、10 ～ 500 μ m ほどの珪酸質殻を持つ単細胞藻類で、殻の形や刻まれた模様などから多くの珪藻種が調べられ、現生の生態から特定環境を指標する珪藻種群が設定されている（小杉 1988、安藤 1990）。一般的に、珪藻の生育域は海水域から淡水域まで広範囲に及び、中には河川や沼地などの水成環境以外の陸地においても、わずかな水分が供給されるジメジメとした陸域環境（例えばコケの表面や湿った岩石の表面など）に生育する珪藻種が知られている。こうした珪藻群集の性質を利用して、堆積物中の珪藻化石群集の解析から、過去の堆積物の堆積環境について知ることができる。

2　試料と方法

試料は、黒崎種田遺跡の SD54 の 10 層と SX49 の 3 層から採取された計 2 点である（第 15 表）。

分析№	遺構／ライン	層位	堆積物の特徴
1	SD54 H-H’	10層	10YR2/1　黒色土　しまり強　3～8cm 礫混入（第10図）
2	SX49 A-A’	3層（SK35 2層直下）	7.5YR3/1　黒褐色　粘土質シルト　しまり強　炭化物・鉄分少量含む木製品出土層（第20図）

第 15 表　堆積物の特徴

試料について、以下の処理を行い、珪藻分析用プレパラートを作製した。
(1) 湿潤重量約 0.5g を取り出し、秤量した後ビーカーに移して 30% 過酸化水素水を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行った。(2) 反応終了後、水を加え、1 時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てる。この作業を 7 回ほど繰り返した。(3) 懸濁残渣を遠心管に回収し、マイクロピペットで適量取り、カバーガラスに滴下し、乾燥させた。乾燥後は、マウントメディアで封入し、プレパラートを作製した。

作製したプレパラートは顕微鏡下 600 ～ 1000 倍で観察し、珪藻化石 200 個体以上について同定・計数した。珪藻殻は、完形と非完形（原則として半分程度残っている殻）に分けて計数し、完形殻の出現率として示した。さらに、試料の処理重量とプレパラート上の計数面積から堆積物 1g 当たりの殻数を計算した。また、保存状態の良好な珪藻化石を選び、写真を第 45 図に載せた。

3　珪藻化石の環境指標種群

珪藻化石の環境指標種群は、主に小杉（1988）および安藤（1990）が設定し、千葉・澤井（2014）により再検討された環境指標種群に基づいた。なお、環境指標種群以外の珪藻種については、海水種は海水不定･不明種（?）として、海～汽水種は海～汽水不定･不明種（?）として、汽水種は汽水不定･不明種（?）として、淡水種は広布種（W）として、その他の種はまとめて不明種（?）として扱った。また、破片のため属レベルの同定にとどめた分類群は、その種群を不明（?）として扱った。以下に、小杉（1988）と安藤（1990）が設定した環境指標種群のうち、安藤（1990）が設定した淡水域における環境指標種群の概要を示す。

［上流性河川指標種群（J)］：河川上流部の渓谷部に集中して出現する種群である。これらは、殻面全体で岩にぴったりと張り付いて生育しているため、流れによってはぎ取られてしまうことがない。

［中～下流性河川指標種群（K)］：河川の中～下流部、すなわち河川沿いで河成段丘、扇状地および

自然堤防、後背湿地といった地形が見られる部分に集中して出現する種群である。これらの種には、柄またはさやで基物に付着し、体を水中に伸ばして生活する種が多い。

［最下流性河川指標種群（L)］：最下流部の三角州の部分に集中して出現する種群である。これらの種には、水中を浮遊しながら生育している種が多い。これは、河川が三角州地帯に入ると流速が遅くなり、浮遊生の種でも生育できるようになるためである。

［湖沼浮遊生指標種群（M)］：水深が約 1.5m 以上で、岸では水生植物が見られるが、水底には植物が生育していない湖沼に出現する種群である。

［湖沼沼沢湿地指標種群（N)］：湖沼における浮遊生種としても、沼沢湿地における付着生種としても優勢な出現が見られ、湖沼・沼沢湿地の環境を指標する可能性が大きい種群である。

［沼沢湿地付着生指標種群（O)］:水深 1m 内外で、一面に植物が繁殖している所および湿地において、付着の状態で優勢な出現が見られる種群である。

［高層湿原指標種群（P)］：尾瀬ケ原湿原や霧ケ峰湿原などのように、ミズゴケを主とした植物群落および泥炭層の発達が見られる場所に出現する種群である。

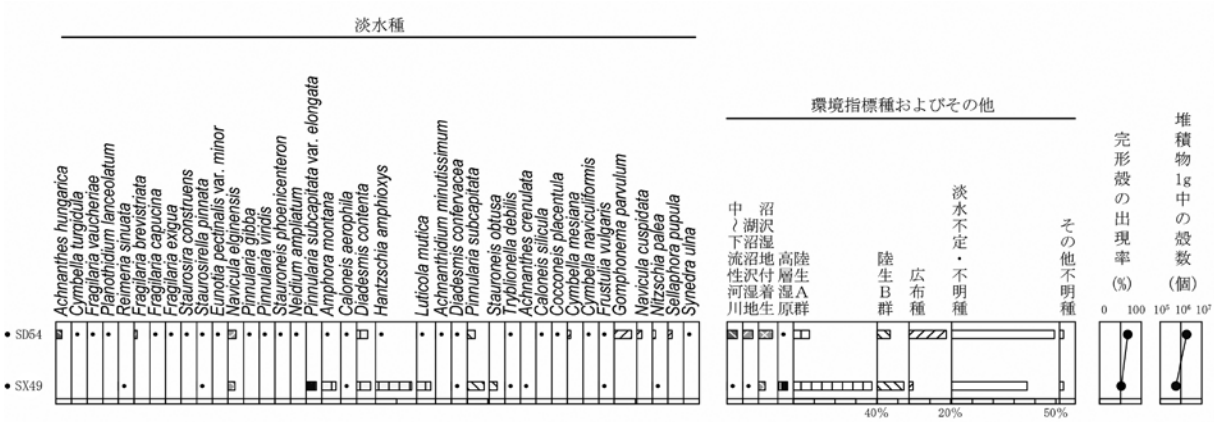
［陸域指標種群（Q)］：上述の水域に対して、陸域を生息地として生活している種群である（陸生珪藻と呼ばれている)。

［陸生珪藻Ａ群（Qa)］：耐乾性の強い特定のグループである。

［陸生珪藻Ｂ群（Qb)］：Ａ群に随伴し、湿った環境や水中にも生育する種群である。

4　結　果

堆積物から検出された珪藻化石は、淡水種が 53 分類群 28 属 36 種 2 変種であった（第 16 表)。これらの珪藻化石は、淡水域における 6 環境指標種群（K、N、O、P、Qa、Qb）に分類された（第 42 図)。以下では、各試料の珪藻化石の特徴とその堆積環境について述べる。



第 42 図　堆積物中の珪藻化石分布図（主な分類群を表示）

SD54 の 10 層（分析 No.1)

堆積物 1g 中の珪藻殻数は 2.7 × 106 個、完形殻の出現率は 67.6% である。堆積物中の珪藻殻数は非常に多い。環境指標種群では、陸生珪藻Ａ群（Qa）がやや多く、中～下流性河川指標種群（K)、湖沼沼沢湿地指標種群（N)、沼沢湿地付着生指標種群（O)、陸生珪藻Ｂ群（Qb）などを伴う。

環境指標種群の特徴から、ジメジメとした陸域や中～下流性河川を伴う沼沢湿地環境が推定される。

SX49 の 3 層（分析 No.2）

堆積物 1g 中の珪藻殻数は 7.6 × 105 個、完形殻の出現率は 51.9% である。堆積物中の珪藻殻数は多い。環境指標種群では、陸生珪藻Ａ群（Qa）が多く、陸生珪藻Ｂ群（Qb）を伴い、高層湿原指標種群（P）、 沼沢湿地付着生指標種群（O）などをわずかに伴う。
環境指標種群の特徴から、沼沢湿地などを伴うジメジメとした陸域環境が推定される。

5　考　察

SD54 の 10 層も SX49 の 3 層も堆積物中の珪藻殻数が多かった。いずれも、陸生珪藻（Qa、Qb）が特徴的で、湿った環境や水中にも生育する陸生珪藻Ｂ群（Qb）と湖沼～沼沢湿地指標種群（N、O）が付随して検出されたため、それぞれの試料採取層位の堆積時には帯水状態を保っていた可能性が高い。

SD54 の 10 層では、中～下流性河川指標種群（K）と湖沼～沼沢湿地指標種群（N、O）が検出されたため、ある程度の水深があり、流水環境であった可能性がある。一方、SX49 の 3 層では、陸生珪藻が圧倒的に多く、高層湿原指標種群（P）を伴う群集組成で、SD54 に比べて水深は浅かった可能性が高い。また、人工水路（堀）の現生珪藻調査で低照度の環境下で優占種群として出現した広義の *Fragilaria* 属（*F. brevistriata*、*Staurosira construens*、*Staurosirella pinnata*）が（辻・新山 2014）、今回の試料ではごく少数の出現に留まっているため、SD54 の 10 層と SX49 の 3 層の堆積時には、比較的日当たりの良い環境であった可能性が高い。したがって、SD54 の 10 層の堆積時期には、植生（水草を含む）などに覆われることが少なく、SX49 の 3 層の堆積時期には、日中は蓋などで覆われるような状況ではなかったと思われる。

（種群は、千葉・澤井(2014)による）

No.	分類群		種群	SD54	SX49
1	*Achnanthes*	*crenulata*	W		1
2	*A.*	*hungarica*	K	6	
3	*A.*	spp.	?	14	3
4	*Achnanthidium*	*minutissimum*	Qb	1	
5	*Amphora*	*montana*	Qa	2	14
6	*A.*	spp.	?	1	
7	*Caloneis*	*aerophila*	Qa	1	1
8	*C.*	*silicula*	W	1	
9	*C.*	spp.	?	4	6
10	*Cocconeis*	*placentula*	W	1	
11	*Cymbella*	*mesiana*	W	3	
12	*C.*	*naviculiformis*	W	1	
13	*C.*	*turgidula*	K	2	
14	*C.*	spp.	?	9	1
15	*Diadesmis*	*confervacea*	Qb	2	1
16	*D.*	*contenta*	Qa	11	14
17	*Diploneis*	spp.	?	2	
18	*Eunotia*	*pectinalis var. minor*	O	2	
19	*E.*	spp.	?	1	
20	*Fragilaria*	*brevistriata*	N	3	
21	*F.*	*capucina*	N	2	
22	*F.*	*exigua*	N	2	
23	*F.*	*vaucheriae*	K	1	
24	*F.*	spp.	?	4	
25	*Frustulia*	*vulgaris*	W	1	2
26	*Gomphonema*	*parvulum*	W	17	
27	*G.*	spp.	?	2	12
28	*Gyrosigma*	spp.	?	1	
29	*Hantzschia*	*amphioxys*	Qa	1	36
30	*Luticola*	*mutica*	Qa	1	14
31	*Navicula*	*cuspidata*	W	5	
32	*N.*	*elginensis*	O	8	7
33	*N.*	spp.	?	28	17
34	*Neidium*	*ampliatum*	P	1	
35	*N.*	spp.	?	2	3
36	*Nitzschia*	*palea*	W	3	1
37	*N.*	spp.	?	12	3
38	*Pinnularia*	*gibba*	O	1	
39	*P.*	*subcapitata*	Qb	8	17
40	*P.*	*subcapitata var. elongata*	P		10
41	*P.*	*viridis*	O	1	
42	*P.*	spp.	?	21	20
43	*Planothidium*	*lanceolatum*	K	1	
44	*Reimeria*	*sinuata*	K		1
45	*Sellaphora*	*pupula*	W	4	
46	*Stauroneis*	*obtusa*	Qb		8
47	*S.*	*phoenicenteron*	O	2	
48	*S.*	spp.	?		4
49	*Staurosira*	*construens*	N	1	
50	*Staurosirella*	*pinnata*	N	2	2
51	*Surirella*	spp.	?	1	7
52	*Synedra*	*ulna*	W	1	
53	*Tryblionella*	*debilis*	Qb	2	1
54	Unknown		?	4	4
	合　計			207	210
	中～下流性河川		K	10	1
	湖沼沼沢湿地		N	10	2
	沼沢湿地付着生		O	14	7
	高層湿原		P	1	10
	陸生Ａ群		Qa	16	79
	陸生Ｂ群		Qb	13	27
	広布種		W	37	4
	淡水不定･不明種		?	102	76
	その他不明種		?	4	4
	海水種				
	海～汽水種				
	汽水種				
	淡水種			203	206
	完形殻の出現率(%)			67.6	51.9
	堆積物1g中の殻数(個)			2686402	763661

第 16 表　堆積物中の珪藻化石産出表

（株式会社パレオ・ラボ　野口真利江）

引用・参考文献

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用．東北地理，42，73-88.

千葉　崇・澤井裕紀（2014）環境指標種群の再検討と更新．Diatom，30，7-30.

小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用．第四紀研究，27，1-20.

辻　彰洋・新山優子（2014）皇居における淡水珪藻植生Ⅱ期．国立科博専報，49，75-88.

渡辺仁治・浅井一視（1992b）高優占度珪藻による有機汚濁度の判定 (2)．*Caloneis, Cocconeis, Cyclotella, Cymbella, Diatoma, Eunotia, Fragilaria, Gomphoneis, Gomphonema* を第 1 位種とする群集．Diatom，7，21-27.

渡辺仁治・浅井一視・大塚泰介・辻彰洋・伯耆晶子（2005）淡水珪藻生態図鑑　群集解析に基づく汚濁指数 DAIpo，pH 耐性能．784p，内田老鶴圃.

第３節　花粉分析とプラント・オパール分析

1　はじめに

黒崎種田遺跡周辺の古環境を解明するために、SD54 と SX49 から堆積物が採取された。以下では、採取された試料について行った花粉分析とプラント・オパール分析の結果を示し、遺跡周辺の古植生について検討した。なお、同一試料を用いて寄生虫卵分析と珪藻分析も行われている。

2　試料と方法

分析試料は、14 世紀の遺構である SD54 の 10 層と、15 世紀の SX49 の 3 層から採取された堆積物、計 2 点である（第 15 表）。これらの試料について、以下の手順で分析を行った。

2-1　花粉分析

試料(湿重量約 4g)を遠沈管にとり、10% 水酸化カリウム溶液を加え 10 分間湯煎する。水洗後、46% フッ化水素酸溶液を加え 1 時間放置する。水洗後、比重分離（比重 2.1 に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトリシス処理（無水酢酸 9：濃硫酸 1 の割合の混酸を加え 20 分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。検鏡は、この残渣より適宜プレパラートを作製して行った。検鏡は樹木花粉が 200 を超えるまでカウントし、その間に現れる草本花粉・胞子を全て数えた。また、保存状態の良好な花粉を選んで単体標本（PLC.3039 ～ 3045）を作製し、写真を第 46 図に載せた。

2-2　プラント・オパール分析

秤量した試料を乾燥後、再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約 1g（秤量）をトールビーカーにとり、約 0.02g のガラスビーズ（直径約 0.04mm）を加える。これに 30% の過酸化水素水を約 20 ～ 30cc 加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により 0.01mm 以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製し、検鏡した。同定および計数は、機動細胞珪酸体に由来するプラント･オパールについて、ガラスビーズが 300 個に達するまで行った。また、保存状態の良好な植物珪酸体を選んで写真を撮り、第 47 図に載せた。

3　結　果

3-1　花粉分析

2 試料から検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉 27、草本花粉 18、形態分類のシダ植物胞子 2 の、総計 47 である。これらの花粉・胞子の一覧表を第 17 表に、花粉分布図を第 43 図に示した。花粉分布図では、樹木花粉の産出率は樹木花粉総数を、草本花粉・胞子の産出率は産出花粉胞子総数を基数とした百分率で示してある。また、図表においてハイフン (-) で結んだ分類群は、それらの分類群間の区別が困難なものを示す。さらに、クワ科やバラ科の花粉には樹木起源と草本起源の分類群があるが、各々に分けるのが困難なため、便宜的に草本花粉に一括して入れてある。

SD54 の 10 層の樹木花粉では、ハンノキ属やエノキ属－ムクノキ属、スギ属、コナラ属コナラ亜属、クリ属、シイノキ属－マテバシイ属、ニレ属－ケヤキ属といった分類群の産出が目立つ。草本花粉では、イネ科や便宜的に草本花粉としたクワ科の産出が目立つ。

SX49 の 3 層では、スギ属やエノキ属－ムクノキ属、マツ属複維管束亜属、コナラ属コナラ亜属、コ

ナラ属アカガシ亜属、クリ属、ニレ属－ケヤキ属といった分類群の産出が目立つ。草本花粉では、便宜的に草本花粉としたクワ科が突出している。

3-2　プラント・オパール分析

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料 1g 当りの各プラント・オパール個数を求めた。一覧表を第 18 表に、植物珪酸体分布図を第 44 図に示した。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は、試料 1g 当りの検出個数である。

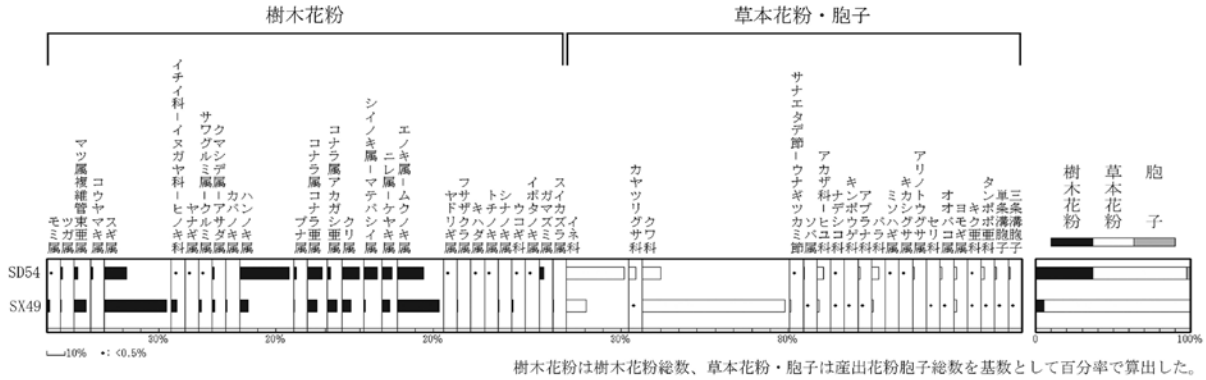
2 試料の検鏡の結果、イネ機動細胞珪酸体とネザサ節型機動細胞珪酸体、ササ属型機動細胞珪酸体、キビ族機動細胞珪酸体の 4 種類の機動細胞珪酸体が確認できた。また、イネの籾殻に形成されるイネ穎破片も検出された。このうち、両試料ともにイネ機動細胞珪酸体が最も多く産出しており、次いでイネ穎破片の産出が多かった。

学名	和名	SD54	SX49
樹木			
Abies	モミ属	1	3
Tsuga	ツガ属	2	1
Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属	4	13
Sciadopitys	コウヤマキ属	2	0
Cryptomeria	スギ属	25	68
Taxaceae－Cephalotaxaceae－Cupressaceae	イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	1	6
Salix	ヤナギ属	1	0
Pterocarya－Juglans	サワグルミ属－クルミ属	1	3
Carpinus－Ostrya	クマシデ属－アサダ属	2	3
Betula	カバノキ属	0	1
Alnus	ハンノキ属	56	9
Fagus	ブナ属	3	1
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属	17	11
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属	4	12
Castanea	クリ属	20	11
Castanopsis－Pasania	シイノキ属－マテバシイ属	15	1
Ulmus－Zelkova	ニレ属－ケヤキ属	12	8
Celtis－Aphananthe	エノキ属－ムクノキ属	30	45
Viscum	ヤドリギ属	1	0
Euptelea	フサザクラ属	0	1
Phellodendron	キハダ属	1	0
Aesculus	トチノキ属	1	0
Tilia	シナノキ属	0	1
Araliaceae	ウコギ科	1	1
Ligustrum	イボタノキ属	1	0
Viburnum	ガマズミ属	5	0
Lonicera	スイカズラ属	0	1
草本			
Gramineae	イネ科	178	396
Cyperaceae	カヤツリグサ科	21	12
Moraceae	クワ科	57	2871
Polygonum sect. Persicaria－Echinocaulon	サナエタデ節－ウナギツカミ節	1	19
Fagopyrum	ソバ属	3	4
Chenopodiaceae－Amaranthaceae	アカザ科－ヒユ科	21	40
Caryophyllaceae	ナデシコ科	1	2
Ranunculaceae	キンポウゲ科	0	1
Brassicaceae	アブラナ科	7	16
Rosaceae	バラ科	21	22
Lythrum	ミソハギ属	1	0
Rotala	キカシグサ属	2	0
Haloragis	アリノトウグサ属	4	0
Apiaceae	セリ科	0	4
Plantago	オオバコ属	6	3
Artemisia	ヨモギ属	8	52
Tubuliflorae	キク亜科	1	6
Liguliflorae	タンポポ亜科	10	5
シダ植物			
monolete type spore	単条溝胞子	5	4
trilete type spore	三条溝胞子	4	4
Arboreal pollen	樹木花粉	206	200
Nonarboreal pollen	草本花粉	342	3453
Spores	シダ植物胞子	9	8
Total Pollen ＆ Spores	花粉･胞子総数	557	3661
unknown	不明	5	14

第 17 表　産出花粉胞子一覧表

	イネ (個 /g)	イネ穎破片 (個 /g)	ネザサ節型 (個 /g)	ササ属型 (個 /g)	キビ族 (個 /g)	不明 (個 /g)
SD54	89, 900	25, 500	1, 300	4, 000	12, 100	2, 700
SX49	57, 300	27, 400	0	15, 600	18, 200	1, 300

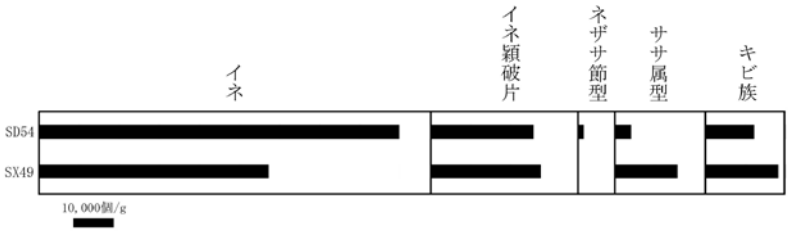
第 18 表　試料 1g 当りのプラント・オパール個数表



第 43 図　花粉分布図

4　考　察

検鏡の結果、SD54 の 10 層ではハンノキ属やシイノキ属－マテバシイ属の産出が目立ち、SX49 の 3 層では、スギ属の産出率が高く、クワ科の産出率が突出する結果となった。花粉組成の相違は、局地的な植生の違いを反映している可能性や、時期差の可能性、遺構の規模による集積される花粉の違いを反映している可能性などが考えられる。こうした相違を踏まえ、14 ～ 15 世紀における遺跡周辺の古植生について検討した。



第 44 図　植物珪酸体分布図

両試料において、エノキ属－ムクノキ属やニレ属－ケヤキ属といった河畔林要素の分類群の産出が目立ち、湿地林要素のハンノキ属の産出も見られる。特に、SD54 でハンノキ属の産出率が高い。珪藻分析の結果では、SD54 の 10 層は水深のある流水環境が推測されているため、溝周辺の水分条件の良好な場所に、ハンノキ属やエノキ属－ムクノキ属、ニレ属－ケヤキ属などの落葉広葉樹が生育していたと考えられる。

また、両試料ともにマツ属複維管束亜属やコナラ属コナラ亜属、クリ属といった二次林要素の植物の産出も見られ、遺跡周辺の開けた明るい場所にはニヨウマツ類やコナラ、クリなどからなる二次林が分布していた可能性がある。さらには、スギ属や照葉樹林要素のコナラ属アカガシ亜属とシイノキ属－マテバシイ属の産出も見られ、遺跡周辺にはスギ林やカシ・シイ類などからなる照葉樹林も分布していたと考えられる。ただし、シイノキ属－マテバシイ属については、SD54 で産出率が高いため、SD54 周辺を中心に分布していた可能性がある。

草本類では、両試料から産出している分類群として、イネ科やカヤツリグサ科、クワ科、サナエタデ節－ウナギツカミ節、アカザ科－ヒユ科、ナデシコ科、アブラナ科、バラ科、オオバコ属、ヨモギ属、キク亜科、タンポポ亜科などが挙げられ、こうした草本類が遺構周辺に分布していたと考えられる。なかでも、便宜的に草本類に一括したクワ科については、SX49 の 3 層で突出しており、集塊での産出も確認できたため、SX49 のすぐそばにクワ科の植物が生育していたか、何らかの要因でクワ科の花が堆積していた可能性がある。また、SD54 の 10 層ではミソハギ属やキカシグサ属といった好湿性植物が産出しており、水分条件が良好な溝沿いに生育していたと考えられる。さらに、両試料からは栽培

植物のソバ属が産出しており、遺跡周辺においてソバ栽培が行われていた可能性がある。

プラント・オパール分析の結果では、両試料においてイネ機動細胞珪酸体が大量に産出しており、次いでイネの籾殻に形成されるイネ穎破片の産出も多い。調査地点は屋敷跡と考えられ、SX49 が検出された場所は馬小屋であった可能性が推測されている。もし馬小屋が存在した場合、屋敷内にイネ藁やイネ籾殻が運ばれ、家畜の餌や堆肥作りなど、イネが様々な用途に用いられていた状況が推測される。

その他では、ササ属型やキビ族の産出も見られ、遺構周辺にはササ属のササ類やキビ族といったイネ科植物も分布を広げていたと思われる。

（株式会社パレオ・ラボ　森 将志）

第 4 節　木製品・木材の樹種同定

1　はじめに

黒崎種田遺跡から出土した木製品・木材の樹種同定を行った。なお、一部の試料については放射性炭素年代測定も行っている（本章第 1 節参照）。

2　試料と方法

試料は、不明遺構や溝跡などから出土した木製品および木材 3 点である（第 19 表）。発掘調査所見では、14 世紀～近世の木製品・木材と考えられている。各試料について、切片採取前に木取りの確認を行った。

樹種同定は、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラールで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡および写真撮影を行った。

3　結　果

同定の結果、試料はいずれも針葉樹のスギであった。同定結果を第 19 表に示す。

遺物 No.	出土遺構	器種	樹種	木取り	時期	年代測定番号
266	SX52	不明木材	スギ	みかん割り	15世紀	
63	SD96	連歯下駄	スギ	板目	中世～近世	
6	SB1(SP204)	柱根	スギ	半割	14～15世紀	PLD-40941

第 19 表　出土木材の樹種同定結果一覧

以下に、同定された材の特徴を記載し、図版に光学顕微鏡写真を示す。

(1)スギ　Cryptomeria japonica（L.f.）D.Don　ヒノキ科　第48図　1a-1c(No.266)、2a-2c(No.63 7)、3a-3c(No.2)

道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、高さ 2～15 列となる。分野壁孔は孔口が大きく開いた大型のスギ型で、1 分野に普通 2 個みられる。

スギは大高木へと成長する常緑針葉樹で、天然分布は東日本の日本海側に多い。比較的軽軟で、切削などの加工が容易な材である。

4　考　察

同定の結果、試料はいずれもスギであった。スギは木理通直で真っすぐに生育し、加工性の良い樹種である（伊東ほか 2011）。富山県内で確認されている鎌倉時代～室町時代の下駄および柱にはスギが多く利用されており（伊東・山田編 2012）、傾向は一致する。

（株式会社パレオ・ラボ　小林克也）

引用・参考文献

伊東隆夫・佐野雄三・安部　久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌．238p，海青社．

伊東隆夫・山田昌久編（2012）木の考古学―出土木製品用材データベース―．449p，海青社．

第 5 節　SX49 の寄生虫卵分析

1　はじめに

黒崎種田遺跡で検出された SX49 は、井戸や馬小屋に伴う遺構の可能性が考えられており、遺構の性格に関する手掛かりを得るために、寄生虫卵分析を行った。なお、同一試料を用いて花粉分析とプラント・オパール分析、珪藻分析も行っている。

2　試料と分析方法

分析試料は、SX49 の 3 層から採取された黒褐色（7.5YR3/1）粘土質シルト 1 点である。この試料について、以下の手順に従って分析を行った。

試料を乾燥後、遠沈管にとり、計量した。そこに 10% の水酸化カリウム溶液を加え、10 分間湯煎する。水洗後、46% のフッ化水素酸を加え、1 時間放置する。水洗後、比重分離（比重 2.1 に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。その後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理（無水酢酸 9：濃硫酸 1 の割合の混酸を加え 20 分間湯煎）を行う。水洗後、得られた残渣に適容量のグリセリンを加えて計量した。この残渣からプレパラートを作製し、プレパラート全面に渡り検鏡した。なお、試料 1g 中の寄生虫卵含有数は、次式で求める。

$X = BD/AC$

X:試料 1g 中の寄生虫卵含有数、A:分析に用いた試料の重量 (g)、B:濃縮試料＋グリセリンの重量 (g)、C：濃縮試料＋グリセリンのうち、封入に用いた重量 (g)、D：プレパラート中の寄生虫卵数

3　結果と考察

計量し、検鏡した結果を第 20 表に示す。分析試料からは寄生虫卵が検出されなかった。よって、寄生虫卵から SX49 の性質について言及するのは難しい。

ちなみに、同試料の花粉分析とプラント・オパール分析の特筆すべき結果として、SX49 の 3 層にはクワ科花粉とイネ機動細胞珪酸体、イネ籾殻に形成される珪酸体が多く含まれていた点が挙げられる。また、珪藻分析の結果では、日当たりのよい滞水環境で堆積したと考えられている。これらの特徴から SX49 の性格を断定するのは難しい。

	SX49
分析に用いた試料(g)	5.6081
残渣＋グリセリン(g)	1.5590
封入に用いた量(g)	0.0628
寄生虫卵	0
(試料1g当たりの個数)	0

第 20 表　試料の計量値と寄生虫卵数

（株式会社パレオ・ラボ　森 将志）

第６節　漆製品の塗膜構造調査

1　はじめに

黒崎種田遺跡から出土した漆製品３点について、その製作技法を明らかにする目的で塗膜構造調査を行ったので、以下にその結果を報告する。

2　調査資料

調査した資料は、第 21 表に示す中世の漆器３点である。

遺物No.	遺構	器種	樹種	概　　要
85	SE01	漆器椀	ケヤキ	内外面ともに黒色地に赤色で文様が施された椀
158	SE61	漆器皿	ブナ属	内面は黒色地に赤色で文様が施され、外面は黒色の椀
159	SE61	漆器椀	ブナ属	内面は赤色地の上に黒色で文様が施され、外面は全面が黒色の椀

第 21 表　調査資料

3　調査方法

第 21 表の資料本体の塗膜付着部分から数㎜四方の破片を採取してエポキシ樹脂に包埋し、塗膜断面の薄片プレパラートを作製した。これを落射光ならびに透過光の下で検鏡した。

4　断面観察

塗膜構造：下層から、木胎、下地、漆層が観察された。（第 49 図）

下　地：全点とも濃褐色を呈する柿渋に木炭粉が混和された炭粉渋下地であった。

漆　層：下地の上に地色の漆が１層施され、その上に装飾のある場合は赤色漆が１層重なっていた。No.159 内面は地色が赤色であるが、その下層に透明漆層が１層あり、赤色漆層の上にさらに文様部の透明漆が１層重ねられていた。

顔　料：全点とも内面に赤色漆が使用されていた。No.85 内面には明確な朱粒子が見られた。

遺物No.	遺構	器種	部位	塗　膜　構　造（下層から）			
				下　地		漆層構造	顔　料
				膠着材	混和材		
85	SE01	椀	内面	柿渋	木炭粉	透明漆1層／赤色漆1層	朱
			外面	柿渋	木炭粉	透明漆1層／赤色漆1層？	朱
158	SE61	皿	内面	柿渋	木炭粉	透明漆1層／赤色漆1層	朱？
			外面	柿渋	木炭粉	透明漆1層	－
159	SE61	椀	内面	柿渋	木炭粉	透明漆1層／赤色漆1層／透明漆1層	朱？
			外面	柿渋	木炭粉	透明漆1層	－

第 22 表　漆器の断面観察結果

5　摘　要

黒崎種田遺跡から出土した漆製品３点について塗膜分析を行った。

木胎の樹種はケヤキ１点とブナ属２点であった。ケヤキの漆器には、文様部に明確な朱が使用され

ていた。No.158・159の赤色漆層に使用された赤色顔料も朱の可能性が高い。

No.159の内面は地色が赤色であるが、下地と赤色漆層の間に透明漆が1層重ねられ、赤色漆層の上に文様部の透明漆層が重なっていた。この透明漆層には黒色の顔料などは見られなかった。

（株式会社吉田生物研究所）

第7節　漆製品の樹種同定

1　試　料

試料は、富山市黒崎種田遺跡から出土した漆製品6点である（第23表）。

遺物No.	遺構	器種	樹種	備考
85	SE01	漆器椀	ニレ科ケヤキ属ケヤキ	
158	SE61	漆器皿	ブナ科ブナ属	
159	SE61	漆器椀	ブナ科ブナ属	
160	SE61	漆器椀	モクレン科モクレン属	
197	SE83	漆器椀	ブナ科ブナ属	
198	SE83	曲物底板	ヒノキ科ヒノキ属	漆容器
－		曲物底板	ヒノキ科ヒノキ属	

第23表　漆製品樹種同定結果

2　観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3　結　果

樹種同定結果（針葉樹1種、広葉樹3種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1）ヒノキ科ヒノキ属（Chamaecyparis sp.）（遺物No.198）（第50図）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行が急であった。樹脂細胞は晩材部に偏在している。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型で1分野に1～2個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。ヒノキ属はヒノキ、サワラがあり、本州（福島以南）、四国、九州に分布する。

2）ブナ科ブナ属（Fagus sp.）（遺物No.158・159・197）（第50図）

散孔材である。木口ではやや小さい道管（～110 μm）がほぼ平等に散在する。年輪の内側から外側に向かって大きさおよび数の減少が見られる配列をする。放射組織には単列のもの、2～3列のもの、非常に列数の広いものがある。柾目では道管は単穿孔と階段穿孔を持ち、内部には充填物（チロース）が見られる。放射組織は大体平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には大型のレンズ状の壁孔が存在する。板目では放射組織は単列、2～3列、広放射組織の3種類がある。広放射組織は肉眼でも1～3mmの高さを持った褐色の紡錘形の斑点としてはっきりと見られる。ブナ属はブナ、イヌブナがあり、北海道（南部）、本州、四国、九州に分布する。

3）ニレ科ケヤキ属ケヤキ（Zelkova serrata Makino）（遺物 No.85）（第 50 図）

環孔材である。木口ではおおむね円形で単独の大道管（～ 270 μ m）が 1 列で孔圏部を形成している。孔圏外では急に大きさを減じ、多角形の小道管が多数集まって円形、接線状あるいは斜線状の集団管孔を形成している。軸方向柔細胞は孔圏部では道管を鞘状に取り囲み、さらに接線方向に連続している（イニシアル柔組織）。放射組織は 1 ～数列で多数の筋として見られる。柾目では大道管は単穿孔と側壁に交互壁孔を有する。小道管はさらに螺旋肥厚も持つ。放射組織は平伏細胞と上下縁辺の方形細胞からなり異性である。方形細胞はしばしば大型のものがある。板目では放射組織は少数の 1 ～ 3 列のものと大部分を占める 6 ～ 7 細胞列のほぼ大きさの一様な紡錘形放射組織がある。紡錘形放射組織の上下端の細胞は、他の部分に比べ大型である。ケヤキは本州、四国、九州に分布する。

4）モクレン科モクレン属（Magnolia sp.）（遺物 No.160）（第 50 図）

散孔材である。木口ではやや小さい道管（～ 110 μ m）が単独ないし 2 ～ 4 個複合して多数分布する。軸方向柔組織は 1 ～ 2 層の幅で年輪界に配列する。柾目では道管は単穿孔と側壁に階段壁孔を有する。放射組織はすべて平伏細胞からなる同性と平伏と直立細胞からなる異性がある。道管放射組織間壁孔は階段状である。板目では放射組織は 1 ～ 3 細胞列、高さ～ 700 μ m となっている。モクレン属はホオノキ、コブシなどがあり、北海道 、本州、四国、九州に分布する。

（株式会社吉田生物研究所）

引用・参考文献

林 昭三「日本産木材顕微鏡写真集」京都大学木質科学研究所（1991）

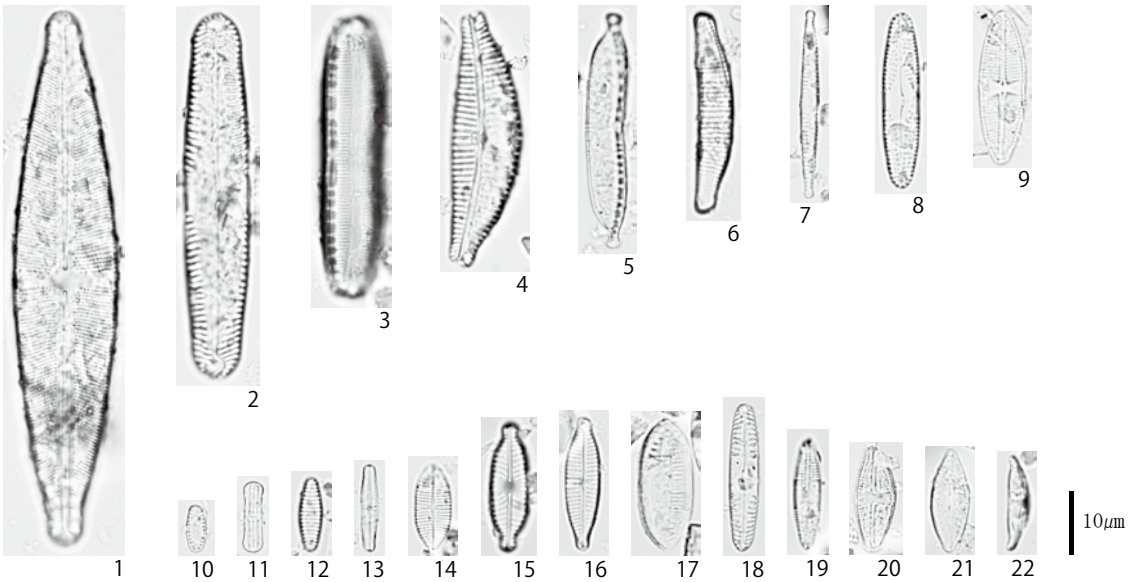
伊東隆夫 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ」京都大学木質科学研究所（1999）

島地 謙・伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版（1988）

北村四郎・村田 源「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」 保育社（1979）

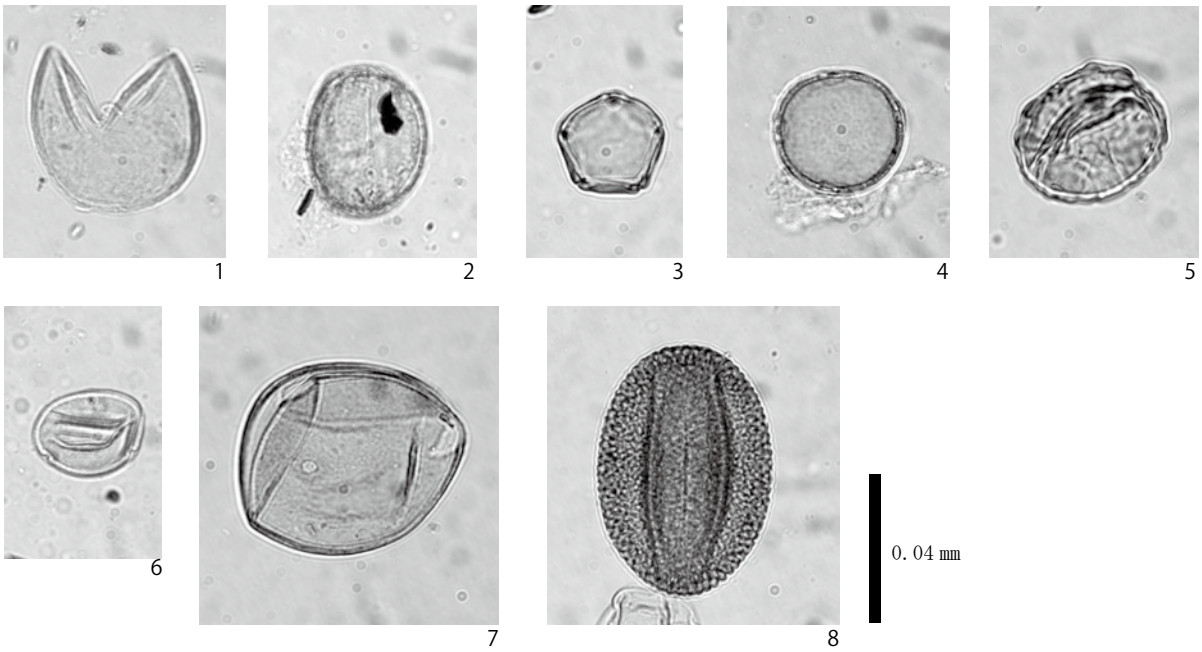
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第 27 冊 木器集成図録 近畿古代篇」（1985）

奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第 36 冊 木器集成図録 近畿原始篇」（1993）



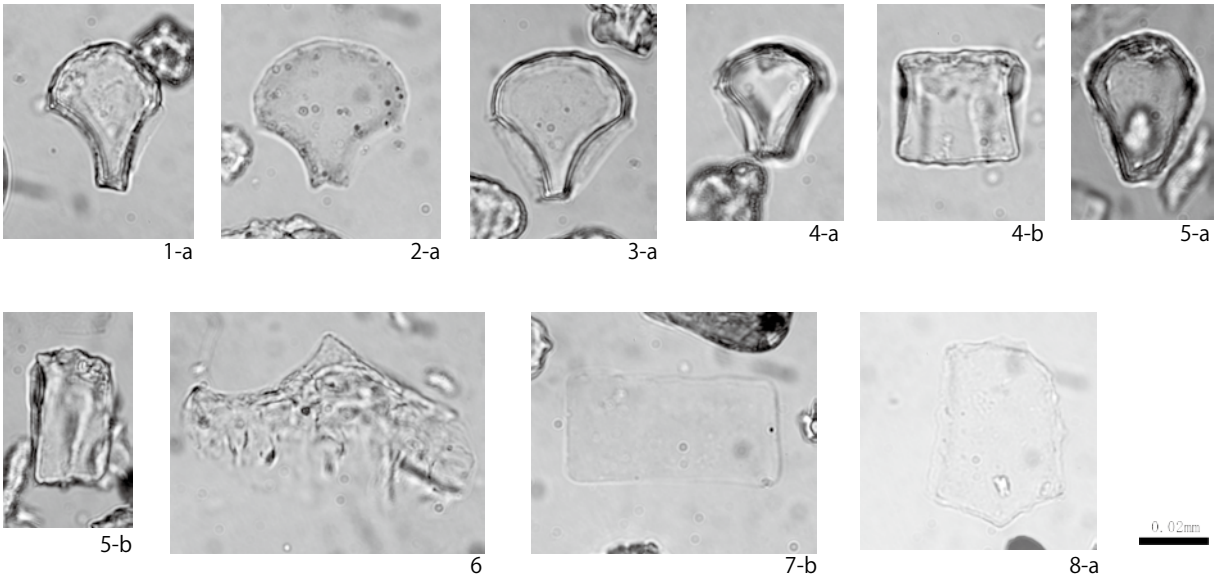
1.Stauroneis phoenicenteron (No.1) 2.Pinnularia gibba (No.1) 3.Hantzschia amphioxys (No.2)
4.Cymbella turgidula (No.1） 5.Hantzschia amphioxys (No.2) 6.Eunotia pectinalis var. minor (No.1)
7.Fragilaria capucina (No.1) 8.Pinnularia subcapitata (No.2) 9.Achnanthes hungarica (No.1）
10.Fragilaria brevistriata (No.1) 11.Diadesmis contenta (No.2) 12.Fragilaria exigua (No.1）
13.Achnanthidium minutissimum (No.1) 14.Achnanthes hungarica (No.1) 15.Navicula elginensis (No.2）
16.Gomphonema parvulum (No.1) 17.Tryblionella debilis (No.1)
18.Pinnularia subcapitata var. elongata (No.2) 19.Caloneis aerophila (No.1)
20.Luticola mutica (No.2) 21.Diadesmis confervacea (No.1) 22.Amphora montana (No.2)

第 45 図　堆積物中の珪藻化石の顕微鏡写真



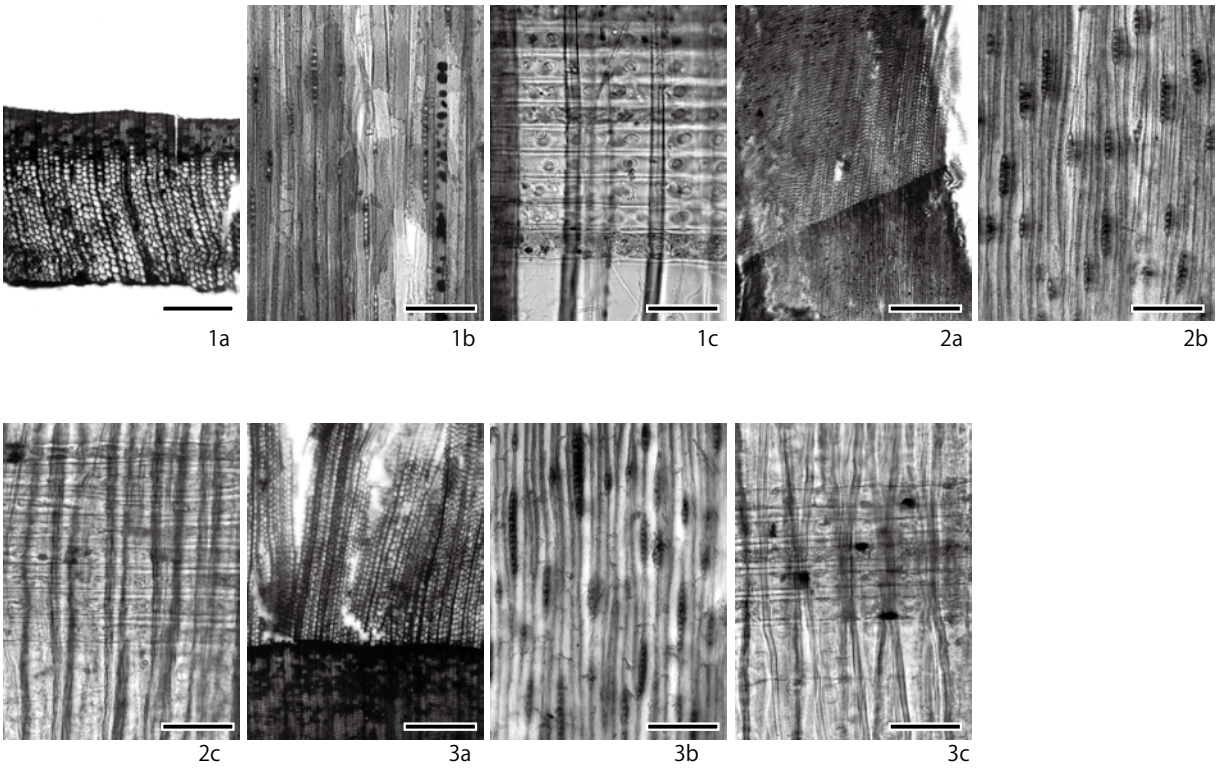
1.スギ属（SD54 PLC.3039）
2.コナラ属コナラ亜属（SD54 PLC.3040)
3.ハンノキ属（SD54 PLC.3041）
4.エノキ属-ムクノキ属（SD54 PLC.3042）
5.ニレ属-ケヤキ属（SD54 PLC.3043）
6.クワ科（SX49 PLC.3044）
7.イネ科（SX49 PLC.3045）
8.ソバ属（SD54 PLC.3046）

第 46 図　産出した花粉化石



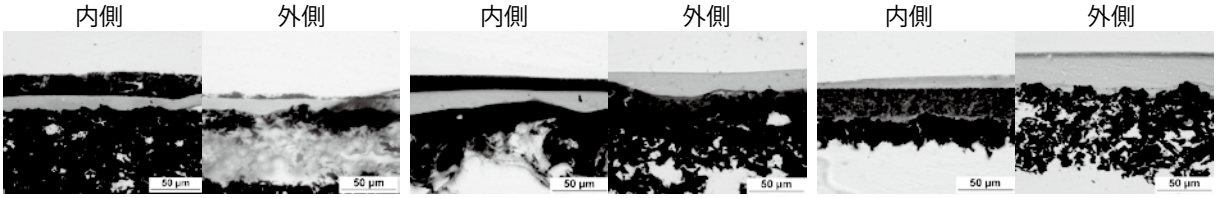
1.イネ機動細胞珪酸体(SX49)　4.イネ機動細胞珪酸体(SD54)　7.キビ族機動細胞珪酸体(SD54)
2.イネ機動細胞珪酸体(SX49)　5.ネザサ節型機動細胞珪酸体(SD54)　8.ササ属型機動細胞珪酸体(SX49)
3.イネ機動細胞珪酸体(SD54)　6.イネ穎破片(SX49)　a:断面　b:側面

第 47 図　産出した植物珪酸体



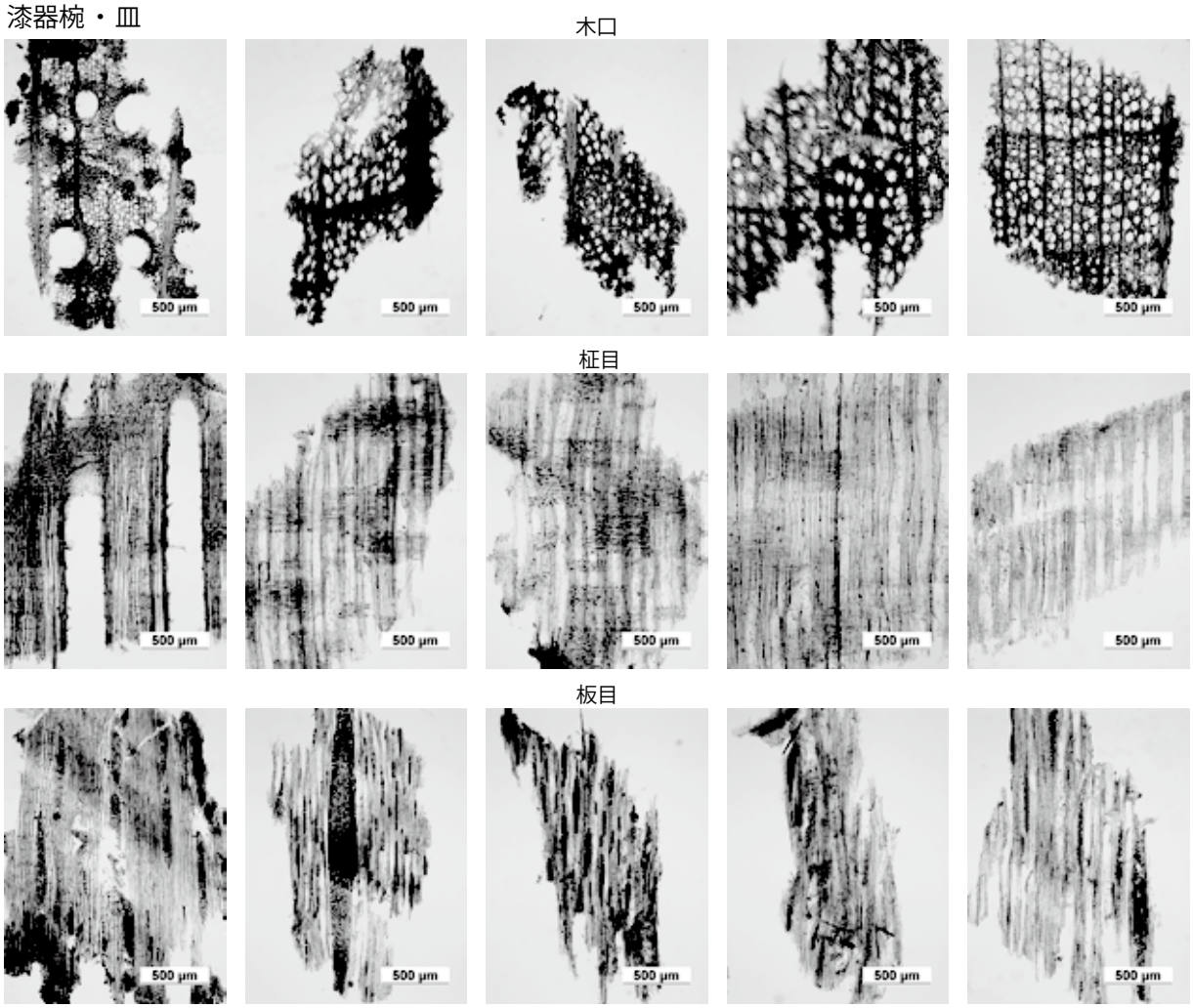
1a-1c.スギ(SX52 No.266)　2a-2c.スギ(SD96 No.63)　3a-3c.スギ(SP204 No.2)
a:横断面(スケール=500 μm)　b:接線断面(スケール=200 μm)　c:放射断面(スケール=50 μm)

第 48 図　木製品・木材の光学顕微鏡写真

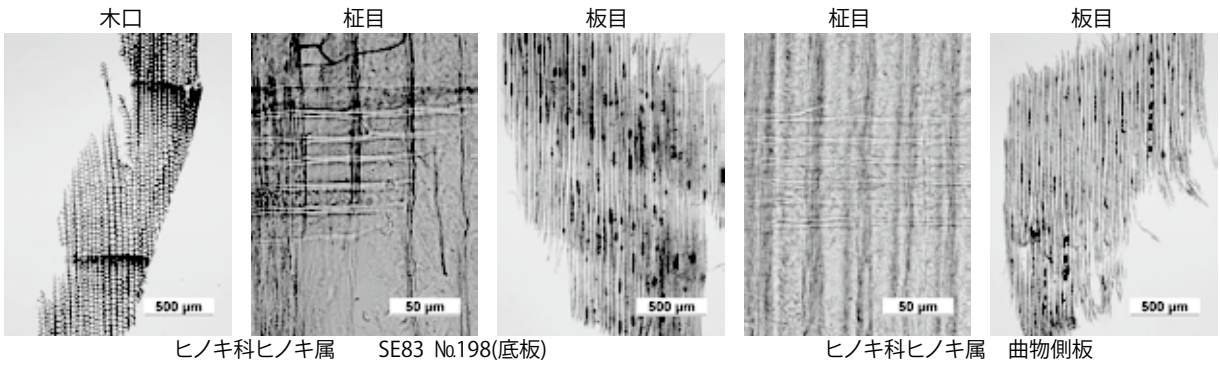


第 49 図　漆器塗膜断面の光学顕微鏡写真

漆器椀・皿



漆容器（曲物）



第 50 図　漆製品の光学顕微鏡写真

第５章　総　括

第１節　SK201 出土のウマについて

1　はじめに

ここで報告する資料は、調査区南西部に位置する土坑 SK201 から出土したウマである。SK201 の時期については、重複する上層の溝 SD199 が 15 世紀と考えられ、SK201 から出土した中世土師器が 14 世紀代とみられることから、14 世紀と推測される。
ここでは観察、分析結果を述べるとともに、若干の考察を行う。

2　出土したウマの詳細

報告するウマは、土坑 SK201 から歯列のみの状態で１個体分出土した。解剖学的位置をおよそ保った状態で出土していることから、頭蓋骨、下顎骨が噛み合った状態で埋没した後、骨質部分は溶解し、組織構造的に残存しやすい歯のみが残存したものと考えられる。吻部を南に向け、左側を下にしてやや斜め状態で、上下の歯列が噛み合って出土している。残存する歯列は

	L				R			
上顎	I2-3		(P2-4)	－	×		×	(M1-2)
下顎	－		P2-4	－	I1-3		P2-4	M1-2

※ ×：消滅　－：埋没等により確認できず

第 24 表　出土したウマの歯列残存状況

	歯冠長	歯冠高
下顎P2L	29.3	
下顎P3L		
下顎P4L		
下顎M1L		
下顎M2L		

	歯冠長	歯冠高
下顎P2R	28.3	47.1
下顎P3R	26.05	
下顎P4R		
下顎M1R	24.6	76.5
下顎M2R		70.85

第 25 表　出土したウマの歯の計測値（単位は mm）

第 51 図　出土したウマの歯

0　5cm

確認できた限りで第24表のとおりである。歯列の残存状態は良好ではなく、左右ともに上下の第3後臼歯が見られず、特に上顎右側の歯列がほとんど消滅しているほか、比較的残存状態の良い下顎歯列にも乱れがみられる。このことから、埋没後に上層のSD199を流れた流水などによる撹乱を受けていると考えられる。

性別は、犬歯が見られないことからメスの可能性が高い。年齢は、残存する臼歯の歯冠高の計測値を基に、西中川他（2015）の推定式を用いた結果から、3.7～4.7歳前後と推定される。また、臼歯列長、および残存する臼歯の歯冠長の計測値を基に林田・山内（1975）及び西中川他（2015）の推定式を用いると、体高116～120㎝前後と推定される。これは日本在来馬の中でもトカラ馬や野間馬といった小型の種類に相当する大きさである。

3　考　察

今回分析したウマは、土坑SK201から歯列のみの状態で出土し、埋没過程で骨質部分は溶解し、歯のみが残存したと考えられる。

全国的にみると、古墳時代以降の遺跡で溝や土坑からウマの遺存体が検出されることは珍しいことではなく、出土状況や遺構の規模から全身が廃棄または埋葬されていたと推定されている例が多くみられる。しかし、本資料の場合、出土した土坑は長径0.85m、短径0.61m以上、深さ0.33mと小さく、頭部以外の部位が廃棄または埋葬されていたとは考え難い。そのため、土坑には頭部のみが埋納されたと考えられる。また、上下の歯列が噛み合った状態で、およそ解剖学的位置を保って出土していることから、頭蓋骨と下顎骨が分離していない状態、つまり肉がついた状態で埋納された可能性が高い。通常、単純に死亡したウマを処分する場合、頭部のみを別に廃棄する必然性はなく、何らかの祭祀、儀礼に伴うものとみるべきであろう。

これまでの研究では、このような古代以降の遺跡から検出された動物祭祀について、生きた動物を殺して神に捧げる「動物犠牲」と、それが形骸化し、動物骨をシンボルとして捧げるものの2つが存在することが指摘されており、特に水路や井戸から発見されたものについては農耕儀礼における雨乞との関連が指摘されている（松井1995）。今回の事例の場合、肉がついた状態で埋納されたとみられることから、前述の「動物犠牲」に伴う可能性が高いと考えるが、水路や井戸ではなく、土坑から出土している点、武家の屋敷地と推定される場所から出土している点から、その性格については、雨乞だけでなく様々な可能性を考える必要がある。

遺跡名	時期	遺跡の性格	出土部位	体高
黒崎種田遺跡	13～14C	武家地	歯(上顎L:I1-3,(P2-4,M1-2),上顎R:P2-4,M1-2,下顎L:(I1-3),P2-3,M1-2),下R:I1-3,P2-3,M1-2	116～120㎝前後
金屋南遺跡	14C後半～15C	生産地(金属器生産)	歯(上顎L:P2-4,M1-2,(上顎R:P2-4,M1-3),下顎L:P2-4,M1-2,(下顎R:P2-4,M1-3))	125～130㎝前後
小出城跡	16C代	武家地(城館)	歯(下顎P2R),橈骨R,中足骨R	145～150㎝前後
仏田遺跡	14C	一般集落	歯((上顎L:P2-4,M1-3),上顎R:P2-3,(下顎L:P2-4,M1-2),下顎R:P2-4,M1	140～150㎝前後
田尻遺跡	15C後半～17C	一般集落	肩甲骨R	110ｃｍ前後
五社遺跡	12C末～13C	一般集落	歯(上顎L:Ｐ４,上顎R:P4,上顎R:M1,下L:P3/4)	120～125㎝前後
	13C～14C	一般集落	歯(上顎L:P2,下顎R:P3)	140㎝前後以上
石名田木舟遺跡	15C後半～16C前半	町屋(城下町)	歯(上顎P4R)	140㎝前後

第26表　越中出土の中世のウマとその推定年齢・推定体高

また、今回出土したウマは、体高 116 ～ 120 ㎝と推定される小型馬である。県内から出土した中世のウマのうち、報告書の記載等から体高推定が可能な事例を集成したところ、体高 110 ～ 120 ㎝前後の小型馬と推定されるもの、体高 125 ～ 130 ㎝前後の中型馬と推定されるもの、140 ～ 150 ㎝前後のやや大型の中型馬と推定されるものの大きく 3 種類が存在する。これら 3 種類の出土遺構の性格等に傾向はみられない。ただし、武家に関係する本遺跡や小出城跡から、それぞれ小型馬、やや大型の中型馬という異なる大きさのウマが出土している点は注目される。小出城跡のやや大型の中型馬は、騎乗用にも十分用いることが可能と推定される。中世日本では体高 4 尺 8 寸（144 ㎝）のものが大馬と認識されていたことを踏まえれば、当時としては大型の個体といえ、遺跡の性格も加味すれば軍馬として用いられた可能性もある。これに対して、本遺跡出土例のような小型馬は、体高の低さから騎乗用に適しておらず、民俗例等から農耕馬や駄馬として用いられたと推定される。

そのため本遺跡出土例は、中世越中の武家地において、ウマが軍馬など騎乗用だけでなく、農耕馬や駄馬としても飼養されていたことを示すものといえる。

4　まとめ

今回の分析から以下のことが明らかとなった。

・出土したウマは歯列のみの状態で 1 個体分であり、残存歯列の状態や計測値から、メスの可能性が高く、年齢 3 ～ 4 歳前後、体高 116 ～ 120㎝前後と推定される。
・出土した土坑の規模等から考えると、頭部のみが肉の付いた状態で埋納されたと考えられる。
・出土状況から何らかの「動物犠牲」に伴う可能性が高く、推定体高から農耕馬や駄馬として用いられていたと考えられる。中世越中の武家地において、騎乗用だけでなく農耕馬や駄馬として用いるためのウマが飼養されていたことが明らかとなった。

今回分析を行ったウマは、何らかの「動物犠牲」に伴う可能性が考えられたものの、どのような祭祀に伴うものなのか明らかにすることができなかった。ウマが出土した遺構は共伴遺物が少なく、出土した資料だけでその性格を追求するには限界がある。出土事例を集成し比較するとともに、民俗事例なども参照し、その性格を追求してゆくことが必要であろう。

また、今回の分析により中世越中の武家地で騎乗用だけでなく農耕馬や駄馬として用いるためのウマが飼養されていたことが明らかとなったが、これについても、今後既存の報告資料の検討をさらに進め、越中におけるウマの利用形態について、さらに考察を進める必要がある。（納屋内）

第２節　SK35 竪穴状遺構について

1　はじめに

第 3 章第 3 節で触れたが、SK35 の竪穴状遺構を馬小屋と推測し、これに付随する SX49 を井戸の水溜めの曲物を再利用し馬小屋遺構の排泄溜めとしていたと推測した。県内における古代から中世にかけての馬小屋の類例を紹介し、黒崎種田遺跡の馬小屋遺構の意義を検討する。

2　馬小屋の条件と類例

篠崎譲治氏は『馬小屋の考古学』(2010) において馬小屋・厩舎とする考古学的な判断基準として、①カマド・炉がない、②竪穴が設けられている、③床面が傾斜している、④尿溜めがある、⑤張り出しが付くものがある、⑥スロープが設けられているものがある。の 6 つを提示している。

この判断基準を参考に、県内で過去に調査された報告書を概観すると、古代以降この条件に幾つか該当する遺構を見出すことができる。

(1) 魚津市仏田遺跡（古代）

2 間× 2 間の掘立柱建物 SB01 が馬小屋の可能性が指摘されている。この SB01 の西と北壁に沿うように北辺中央部に張り出しを有する長軸 2.42m、短軸 2.40 m、深さ 0.20 mの方形竪穴状土坑（SK1417）がある。土坑は貼床や焼土・カマドなどがなく、8 世紀後半とみられる SB01 に付随する施設とされ、馬小屋の可能性が指摘されている。同じ調査区の土壙墓からウマの臼歯が出土、中世（14 世紀か）の建物と平行する主軸となることから同時期の遺構とみられている。

(2) 富山市百塚住吉Ｄ遺跡（古代）

9 世紀後半の大型長方形土坑が 2 基（SX07・08）並列して検出された。SX07 は、長軸 5.33m、短軸 2.11m、深さ 0.85m を測る。SX08 は長軸 5.33 m、短軸 1.96m、深さ 0.35m を測る。埋土はいずれも地山土と包含層土が撹拌された状態で、比較的短時間に人為的に埋められた。隣接する掘立柱建物、柵列も同じ軸方向をとり、馬小屋に関連する遺構と推測された。隣接する調査区で、ウシかウマとみられる大型陸生哺乳類の獣骨片が出土し、集落内に大型動物がいた環境であったことを示唆している。

(3) 富山市任海宮田遺跡（中世）

掘立柱建物に竪穴状遺構が付随するものが 10 棟以上検出されている。その内、3 間× 4 間の総柱建物の北東隅に隅丸長方形の土坑 SX068 が配置される。土坑は、長軸 6.1 m、短軸 2.02m、深さ 0.69m を測る。土坑の中央部に長さ 1.4m、最大幅 1m の穴がある。この穴は尿溜めとみられ、この遺構 SX068 は馬小屋と推測される。12 世紀中～ 13 世紀前半の遺構と推測された。

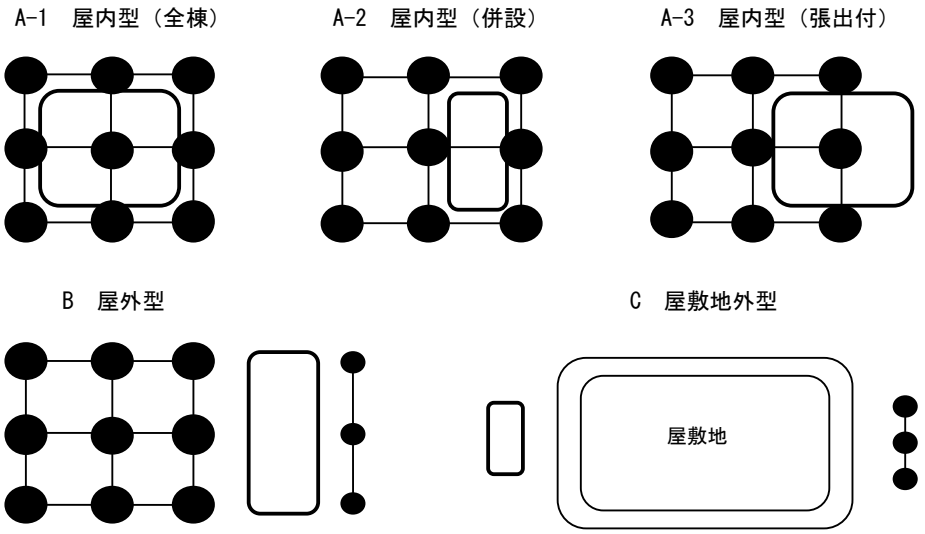
(4) 射水市黒河尺目遺跡（中世）

3 間× 2 間の総柱建物 SB35 と重複する竪穴状遺構 SX1344 が検出されている。土坑は長さ 5.76m、幅 3.80 m、深さ 0.36 を測る。床面は平担で、踏み固められたように硬化し、床面付近には植物の枝・根状の有機物が塊で見られた。東辺に張り出しが付く。北壁中央から溝 SD875 が弓なりに延び、土坑の排水溝と考えられている。12 世紀後半～ 13 世紀前半の倉庫的な性格を持つ遺構と推測されていた。

(5) 富山市婦中町中名Ⅱ遺跡（中世）

3 間× 3 間分の掘立柱建物をベースに南と西辺に 2 間× 1 間の張り出しが付随する。この西辺の張り出しにウマヤと指摘される土坑 SK58 が附属する。土坑は長軸 2.8m、短軸 2.1m、深さ 0.35m で西側に張り出しを持ち、中央部に貼床を施す。さらに 25 ㎝前後の平坦な石を 2 段積んだ石列もみられる。中世末期 16 世紀後半の遺構とみられている。

以上、5遺跡の事例を紹介したが、黒崎種田遺跡例も含めた6事例について平面配置を分類した(第52図)。



第52図　馬小屋の分類模式図

・A－1屋内型(全棟)は、掘立柱建建物の側柱に沿った内部全体に竪穴を掘り込んだもの。

・A－2屋内型(併設)は、掘立柱建物の内部に1間×2間あるいは3間分程度の竪穴を併設するもの。

・A－3屋内型（張出付）は、A－2タイプに屋外へ凸状或いは半円状のステップ状に張出しが付く。

・B屋外型は、掘立柱建物に並列して竪穴状遺構が付随するもの。柵列が伴う場合もある。

・C屋敷地外型は、区画溝で囲まれた屋敷地の外に竪穴状遺構や馬繋ぎの柵列のみが付随するもの。

以上に分類できる。類例として先述した、黒河尺目遺跡はA－1、仏田遺跡・中名Ⅱ遺跡・任海宮田遺跡はA－2、百塚住吉D遺跡はB、黒崎種田遺跡はCに分類できる。A－3タイプとしては、任海宮田遺跡SB103に伴う土坑SX183が該当する。

3　小　結

これまでの調査事例ではこの掘立柱建物に付随する竪穴状遺構を倉庫や作業場などとして区分されてきたが、篠崎氏が提示されている馬小屋・厩舎とする基準や平面配置などから馬小屋遺構と認識できる遺構は多く存在するものと推測される。とくに古代から中世にかけての開墾大集落である熊野川左岸に広がる任海宮田遺跡では、A－2タイプの掘立柱建物に竪穴状遺構を併設する遺構が多数みられる。黒崎種田遺跡からは、3～4歳位のメス馬の馬歯が出土し、その推定高から農耕あるいは運搬に用いられたことが推測された。C屋敷地外型に設けられた馬小屋は建物が付随しないことからも、周辺の領地などから屋敷地へ物資を運搬するために用いられた馬を一時的に繋ぎ留めておくための馬小屋と推測される。SX49の水溜は尿溜めと推測したが土壌分析の結果、寄生虫が検出されず、井戸として地下水が自噴していた場合は、馬の水飲み場や足洗い場等の機能も推測される。

黒崎種田遺跡周辺では、友杉遺跡で「馬甘（うまかい）」と記された古代の墨書土器が出土し（富山県財団2010)、早くからウマに関わる役職や人物がいたことを物語る。また任海宮田遺跡では「墾田」の墨書土器も出土し、荘園などの開墾に用いられた農耕馬なども多くいたことが推測される。古代は概ね10世紀頃まで古代集落が存続するが、一旦途絶え、12世紀後半以降に中世集落が再び形成されるようになる。そのような状況の中で、開墾や物資の運搬のために馬は必要不可欠な存在であることから、これまで竪穴状遺構や土坑としてその意義が不明だった遺構についても、馬小屋や厩舎としての機能を持っていた可能性があるものを見出すことができるだろう。今後さらに検証していきたい。

（鹿島）

第３節　井戸祭祀からみた蜷川氏と徳大寺家領宮河荘の関係

1　はじめに

本調査で検出した井戸は 12 基あり、そのうち 4 基で何らかの祭祀が行われたと推測される状況を確認した。SE02 では、約 40 点の木箸がまとまって廃棄されていた。SE03 では、井戸底に据えられた水溜めの曲物が埋まった後、その上部に被熱した石臼が置かれていた。SE58 では、木箸が 44 本廃棄され、被熱した中世土師器が出土した。SE61 では、井戸の使用後、上部の石組みを外し基底部を残してその上で祭祀行為が行われていた。あわせて石組みの内部に設置された曲物内の底面には竹が刺さり、井戸の息抜きの祭祀が行われていた。特徴的な SE61 の祭祀行為に注目して、若干考察を行う。

2　井戸祭祀の事例

井戸からは様々な遺物が出土するが、その出土位置から、①井戸構築時、②井戸使用時、③井戸埋め戻し時に埋納、納置されたことがうかがえる。①は富山市金屋南遺跡 3-B 地区 SE05（富山市教委 2006a）や同市水橋金広・中馬場遺跡 H14 その 1 調査区 SE08（富山市教委 2006b）などで、井戸構築時の石組みや側板外側に漆器を埋め込む事例がある。②は富山市道場Ⅰ遺跡 SE1802（野口 1999、富山県財団 2004 報告書では SE44）や同市水橋金広・中馬場遺跡 H15 調査区 SE05（富山市教委 2006b）から木製呪符が出土した事例がある。③は南砺市梅原胡摩堂遺跡 SE5549（富山県財団 1994）で中央下層から竹筒の残片が出土し、井戸の息抜きと考えられている。道場Ⅰ遺跡 SE1801 でも水溜の曲物の中に竹が立った状態で出土し、祭祀が行われていたと推測されている（野口 1999、報告書では SE43）。富山市水橋金広・中馬場遺跡 H15 調査区 SE03 からも竹が出土し、関連が指摘されている（安達 2006）。

井戸（井筒）は、地下の冥界と地上の現世を繋ぐ空間で、井戸の神様（井神・水神）の出入口と考えられていた。このため、井戸を埋める際、井神が呼吸できるように竹筒などを刺して息抜きと称し、埋め戻しの儀礼が行われた。その初現は奈良時代で、平城京の調査等で確認されている（鐘方 2003）。息抜き用の部材は、瓦や板を用いていたが、12 ～ 13 世紀以降は節を抜いた竹筒へと変化し、定着する。

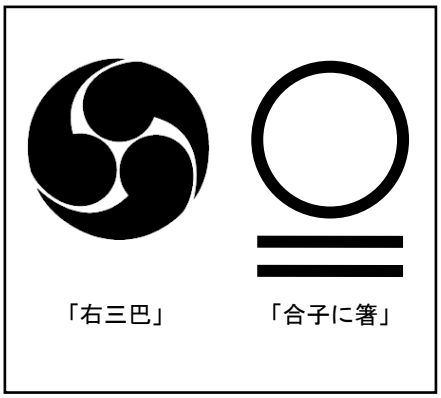
3　SE61 の祭祀

SE61 では曲物内に竹が刺さり、③井戸埋め戻し時に井戸底にて息抜きの祭祀を行っていた。あわせてこの井戸の特徴的な行為として、井戸の石組みを外した後、井戸底の基底部の石の上で漆皿 1 点と木箸 2 本を供える祭祀を行っていた（第 53 図）。このような事例は県内で類例を見出すことができない。また、漆皿と木箸を供えた出土状況は、蜷川氏の家紋の一つである「合子に箸」を想起させる。

蜷川氏の家紋には、その祖となる宮道氏以来用いられていた「右三巴文」と越中蜷川氏となってから用いられた「合子に箸」の二種が伝わる（第 54 図）。右三巴文は、富山市蜷川の蜷川館跡に所在する蜷川氏代々の菩提寺である最勝寺の屋根や位牌などに用いられる。この文様は、富山市道場Ⅰ遺跡 SE51 から内面に右三巴文（丸に右三巴文か）を朱書きした漆器碗が 1 点出土している（第 55 図）。

一方で、「合子に箸」は特徴的な家紋で、『蜷川郷土史』所収の系図には第 54 図右側がみえるが、『東山殿紋帳　見聞諸家紋』（国立国会図書館デジタルコレクションより）には、「合子箸　二番　蜷河」として「○○ ‖」がみえる。出土した状況は漆器皿を用いているが、水溜曲物と漆器皿で「○○」を表しているようにもみえる。井戸底で家紋の形態を模した組み合わせの木製品を用いた祭祀行為が行われていたことは、この井戸が蜷川氏と関連の深い一族によって使用されていたと推測され、家紋の由来を解明する手掛かりになるとみられる。

第 53 図　SE61 井戸底の遺物出土状況



第 54 図　蜷川氏家紋

4　小　結

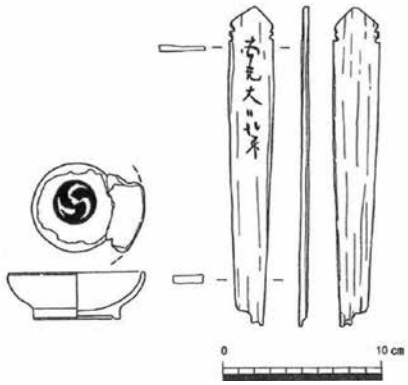
熊野川左岸～井田川右岸に中世前期から展開する道場Ⅰ・Ⅱ遺跡や中名遺跡群、任海宮田遺跡などは荘園開発の拠点集落と推測されていたが、それらの開発領主となった勢力、経営者が誰であったか明確になっていなかった。中世の婦負郡内には、文和 3(1354)年の足利義詮御判御教書案(徳大寺文書)にみえる徳大寺家領荘園の宮河(川)荘が所在していたとされる。明徳 2(1391)年足利義満御内書をもって「為守護使不入之地」とされている。

徳大寺氏は院政期に勧修寺流との姻戚関係をテコに越中に所領を獲得し、発展したとされる（久保 1983)。勧修寺流は蜷川氏の祖、宮道氏（宮道弥益）の京都山科の邸宅跡を醍醐天皇が寺に改めたことに始まる勧修寺に由来する。

宮道弥益は山城国宇治郡の大領で、その娘列子は内大臣藤原高藤の嫁となる。高藤の流れを汲む家系が勧修寺流となる。弥益の 9 代後の宮道親直が越中蜷川初代親直である。徳大寺家が宮河荘を自領とした背景には、蜷川氏の祖である宮道氏との姻戚関係によるところが大きかったのだろう。

勧修寺は、真言宗山階派の大本山である。先述した、道場Ⅰ遺跡の SE1802 からは「南無大日如来」と墨書された呪符木簡が出土し（第 55 図)、真言密教との関連が推測される。黒崎種田遺跡 SE61 と道場Ⅰ遺跡 SE1801 で竹を用いた息抜きの祭祀を行う共通点に加えて、石組井戸が多用され、蜷川氏の家紋の一つでもある「右三巴文」を記した漆器が道場Ⅰ遺跡から出土していることは、黒崎種田遺跡の屋敷跡やその南に隣接する蜷川館跡を拠点とした蜷川氏一族が宮河荘の経営（預所の立場か）に何らかの関わりを持っていたことをうかがわせる。

『祇園社記』康治元（1142）年の記述などから蜷川（宮道）氏の越中における勢力は新川郡堀江荘の下司職（荘官）を母胎として新川郡から婦負郡などに及んでいたとみられる（坂井 1963)。鎌倉時代初期には新川郡太田保の西境、蜷川館を拠点とし、熊野川を越えた婦負郡内に領地をもって勢力を広げていたことが推測される。蜷川館跡や黒崎種田遺跡、宮河荘内の遺跡群における調査研究の進展により、越中中世史に蜷川氏がどのように関与していたか解明されることを期待したい。（鹿島）



第 55 図　道場Ⅰ遺跡漆器・呪符木簡（富山県財団 2004 より）

第４節　遺構の変遷と性格－蜷川氏との関係について－

1　はじめに

黒崎種田遺跡ではこれまで多くの試掘調査・発掘調査等を行ってきたが、遺跡南部にあたる本調査区付近はほとんど遺跡が確認されていなかった。今回の調査は、豊富な遺構・遺物を確認したことの重要性はもとより、空白地帯に近い場所で新たに遺跡が発見されたことで、その性格や広がりを捉え直す契機となった。

本節は、まず遺構の変遷を整理し、調査成果と遺構の性格を総括する。

また、本調査区はこれまで周辺で行ってきた発掘調査や近隣遺跡の状況を踏まえると、南に隣接する蜷川館跡との関連が想定できる。こうした理解にいたった理由と、蜷川氏・蜷川館との関係について最後に検討したい。

2　遺構の変遷

遺構の時期は 13 ～ 15 世紀を主体とし、16 世紀以降のものがわずかに存在する。出土遺物から、その変遷を世紀ごとに整理すると第 56 図となる。なお、遺構の時期を 13 世紀末～ 14 世紀初頭のように 2 つの世紀にまたがって表記している場合は、グレーの網掛けとして両方の世紀に図示した。

各期の概況は次のとおりである。

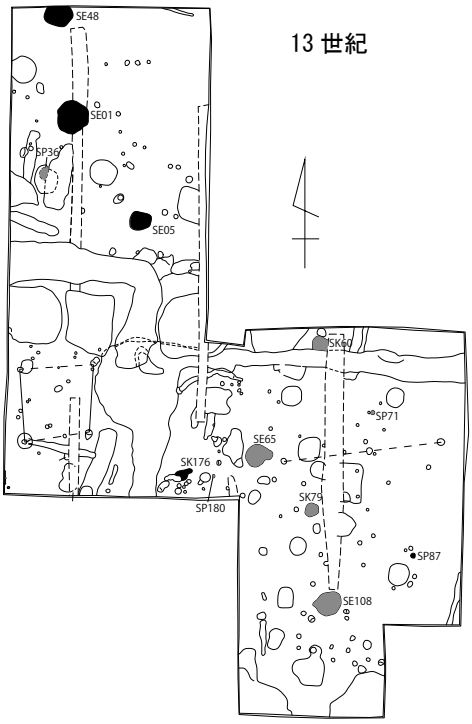
13 世紀　調査区北部に 3 基の井戸、南部に小規模な土坑・ピットが数基あるが、遺構は多くない。ただし、井戸が一定数造られていることから、確実に居住が始まっていたとみてよい。調査範囲が限られるため、14 世紀以降の区画溝をもつ屋敷地のような構造を持っていたかは不明である。調査区外に、これら井戸を取り囲むかたちの区画溝があった可能性も十分あり得る。

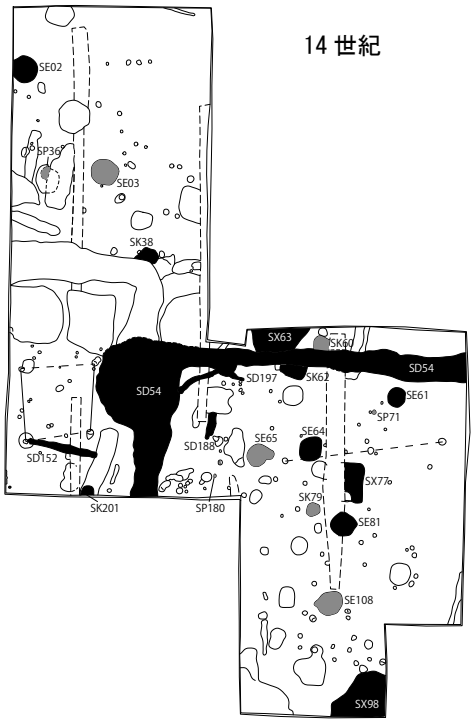
井戸は、素掘り（SE01）が 1 基、木組（SE05・SE48）が 2 基ある。石組井戸 SE65、SE108 も 13 ～ 14 世紀に位置付けられ、当該期に入る可能性がある。中世越中の井戸を整理した塩田明弘氏によると、中世前半（12 ～ 14 世紀）は素掘りや木側（木組）井戸が主体で、中世後半（14 ～ 16 世紀）は素掘りと石側（石組）が主体になるという（塩田 2001）。本調査区も全体としては素掘りや木組が古い傾向にあるが、石組の出現が早いことは注目される。

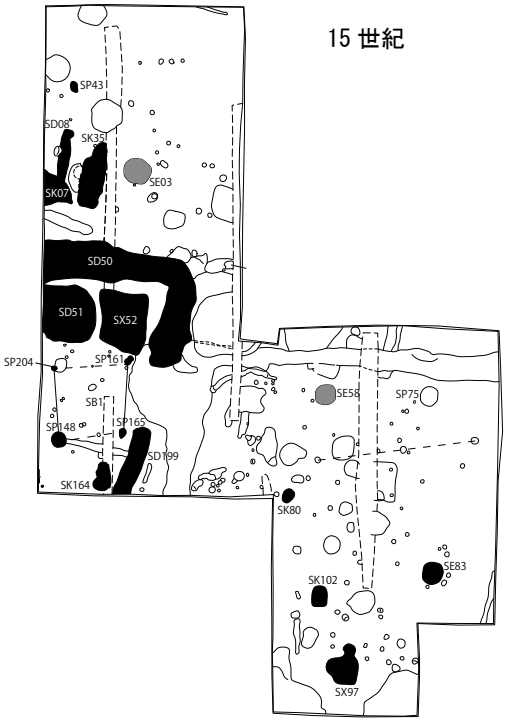
14 世紀　遺構数が増加し、特に調査区南部に集中している。L 字に曲がる溝 SD54 は、形状と規模から区画溝とみられ、屋敷地の存在を示す。少なくとも東西 20m 以上の規模を有する。溝の屈曲部は大きく張り出しており、明確でないが池状の施設があった可能性がある。また、この時期の井戸は 4 基、可能性のあるものを含めると 7 基ある。区画された屋敷地の形成と、遺構の増加が認められ、本調査区の中心的な時期である。

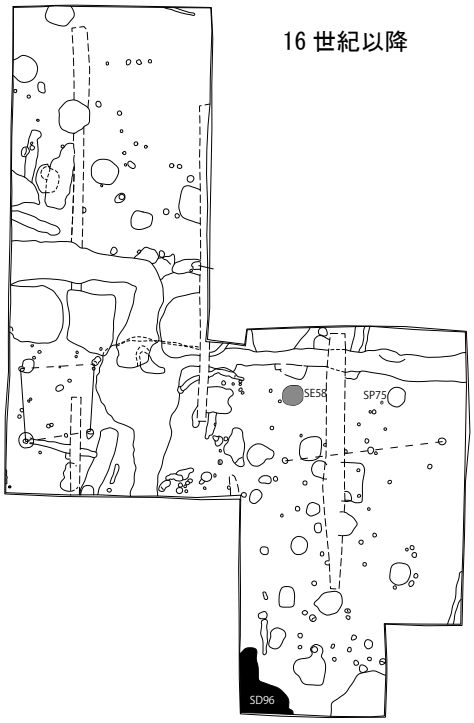
井戸は、可能性のある 7 基のうち 5 基が石組である。越中では石組井戸は 14 世紀に現れ、15 世紀に木組に代わって主体を占めるようになる（塩田　前掲）ことと比べると、石組の出現が早く、占める割合も高い。鐘方正樹氏は、小林善也氏が指摘する石組井戸の分布が有力者の居住域周辺に偏在する傾向があるとする点について、「京都を中心に盛行しつつあった石組型井戸が外見的に都市的井戸様式として転化するような状況が生じ、それを意図的に模倣することによって起こった現象と理解したい」とする（鐘方 2003）。こうした見解を踏まえると、石組井戸の早い出現は、有力者の居住地であることの傍証といえるとともに、一族の一部が京都に移り、室町幕府で政所代まで務めた後述の蜷川氏の存在を措定すると理解しやすい。

このほか特徴的な遺構としては、ウマの頭部が埋納された SK201 がある。ウマを用いた儀礼を行っ









※グレーは、時期が 2 つの世紀にまたがる遺構を表し、
両方の世紀の図に網掛けしている。

0 1/500 20m

第 56 図　遺構変遷図

ていたことがわかる（第5章第1節参照）。

15世紀　この時期の遺構も多く、遺構の中心が西側に偏る。SD50とSD51はL字に曲がる区画溝とみられる。SD50は、前世紀のSD54と切り合い関係があり、SD54が埋まった後に掘削された遺構である。SD50とSD51は併行しており、南端の位置もほぼ同じである。そのため2条一対の区画溝として同時併存していた可能性も考えたが、両溝は近接しており、上層が削平されていることを考慮すると、上面では両溝が重複することになる。よってここでは異なる時期と捉え、15世紀の中で掘り直しがあったと考えておきたい。SD50の南にあるSD199は浅い溝であるが、SD50と方向が一致し、一連の溝の可能性がある。とすれば、両遺構の間の溝が途切れた部分は、区画溝の出入口にあたる陸橋部と考えられる。この陸橋部のすぐ西側で確認した掘立柱建物SB1は、屋敷地の出入口に設けられた門などの可能性がある。遺構の説明でも記したとおり、SB1は平面形が歪なため、SP148とSP204、SP161とSP165という組み合わせで、時期の異なる2基の掘立柱遺構となり、それぞれSD50とSD51の2つの区画溝に対応するかもしれない。

区画溝の配置から、屋敷地の中心部は調査区の南西側となるが、屋敷地外にあたる区画溝の北側や東側でも遺構が確認される。北側は前節で検討した馬小屋遺構のほか、井戸がある。東側でも井戸等の複数の遺構があり、区画溝の外側も生活域として利用されていたようである。

16世紀以降　16世紀になると遺構・遺物は大きく減少する。確実なものでは調査区南端のSD96が近世で、そのほかは 井戸SE58が15～16世紀と考えられる程度である。16世紀には居住地としての利用が大きく衰退している。

小　結　以上のとおり、本調査区では遅くとも13世紀に居住地としての利用がはじまり、14世紀は区画溝のほか、井戸等の遺構も増え、屋敷地として利用されたことがわかる。15世紀も引き続き、場所を西側に移して別の屋敷地が営まれるが、16世紀になると居住地としての利用が衰退した状況が見てとれる。

調査区は全面的に削平されているとみられるので、浅い柱穴などは残っていない可能性が高く、本来はより多くの遺構が存在したはずである。このような状況で、なおかつこの限られた調査範囲において、少なくとも13世紀から15世紀まで継続的に遺構が見られることは、周辺一帯で長期間にわたり、高い遺構密度で屋敷地が営まれていたことを示す。

ところで、区画溝SD199、SD54は、本来調査区外の南側に延びていたと思われるが、試掘調査では調査区南側は落ち込みがあり、遺構は確認されなかった。この理由について検討する。

第57図は、調査区付近の1947年空中写真である。ちょうど調査区の南端をかすめるように北西－南東方向の細長い地割が明瞭にみえる（白点線）。これは旧流路と考えられるが、位置と方向がおおよそ近世溝SD96に一致する点に注目したい。

第57図　調査区付近の空中写真
（1947年米軍撮影に加筆）

これらの事実から次のような解釈ができる。すなわち、15世紀以降のある時期、大規模な洪水や氾濫をきっかけに調査区南側に河川流路が形成された。実際、この流路の西側は、南北方向の別の旧流路が存在していて、水が流れやすい環境に

あったとみられる。SD96 はこの流路の一部とみられる。このときの流路形成によって屋敷地の一部が削り取られ、調査区南側は遺跡が失われたのではないか。そして、SD96 の出土遺物から、この流路は 17 世紀以降に埋没したと推定できる。さらに憶測を重ねるなら、本調査区で 16 世紀以降に遺構が減少するのは、この流路の形成によって居住地としての利用が困難になったことが関係するかもしれない。

3　遺跡の性格

本調査区は、東西 2 ヶ所の区画溝が切り合い関係を持って存在することから、少なくとも 14 ～ 15 世紀にかけて屋敷地が継続的に造営された。さらに一部の調査範囲であることを考えれば、調査区外に別の屋敷地が存在した可能性は高い。

遺跡の継続性は井戸からもわかる。12 基の井戸は 13 ～ 15 世紀の時期幅があり、北西－南東方向に直線的に分布している。区画溝の方向から、当時の地割は正方位に近いものだったと推測できるが、井戸の分布がこの地割に沿っていないのは、人為的な理由ではなく、おそらく地下水脈の方向に規定された結果と考えられる。同じ地下水脈に沿って井戸を掘り直しながら、長期にわたり居住していたことを物語る。

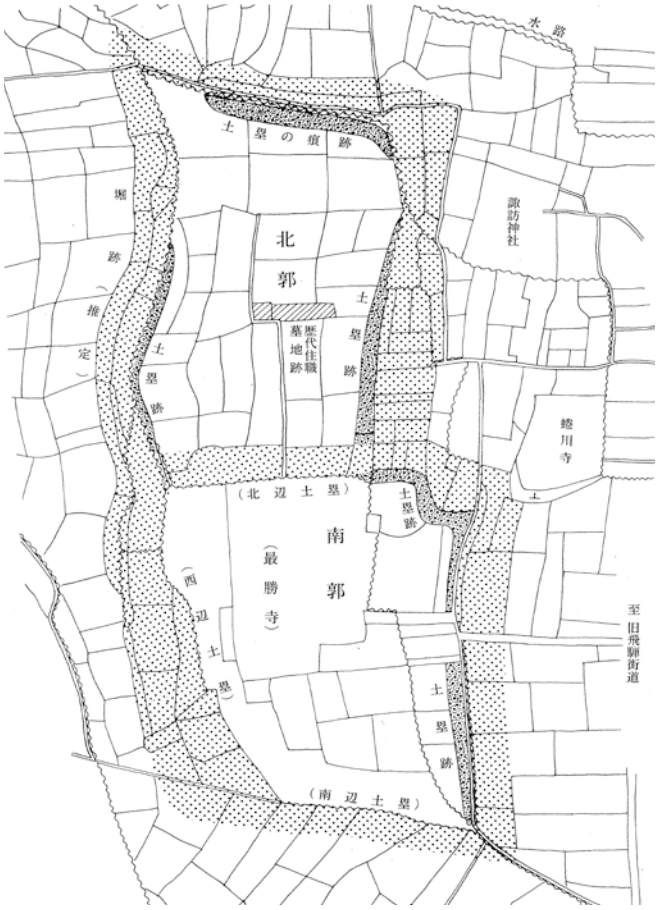
遺物では、刀の切羽や硯などが武家との関連をうかがわせる。さらに、金付き土器は、国内では京都市の山科本願寺跡、山口市の大内氏館跡、新潟県胎内市の奥山荘城館遺跡など地域の有力寺社や拠点遺跡で出土しているように、有力者の存在を端的に示す。青磁・白磁等の中国磁器が一定量出土している点も一般集落とは様相を異にする。

以上のとおり有力武士がこの地に複数世代にわたり居を構えていた可能性が高く、武家の屋敷地が営まれていたと考えてよいだろう。

4　蜷川館跡との関係

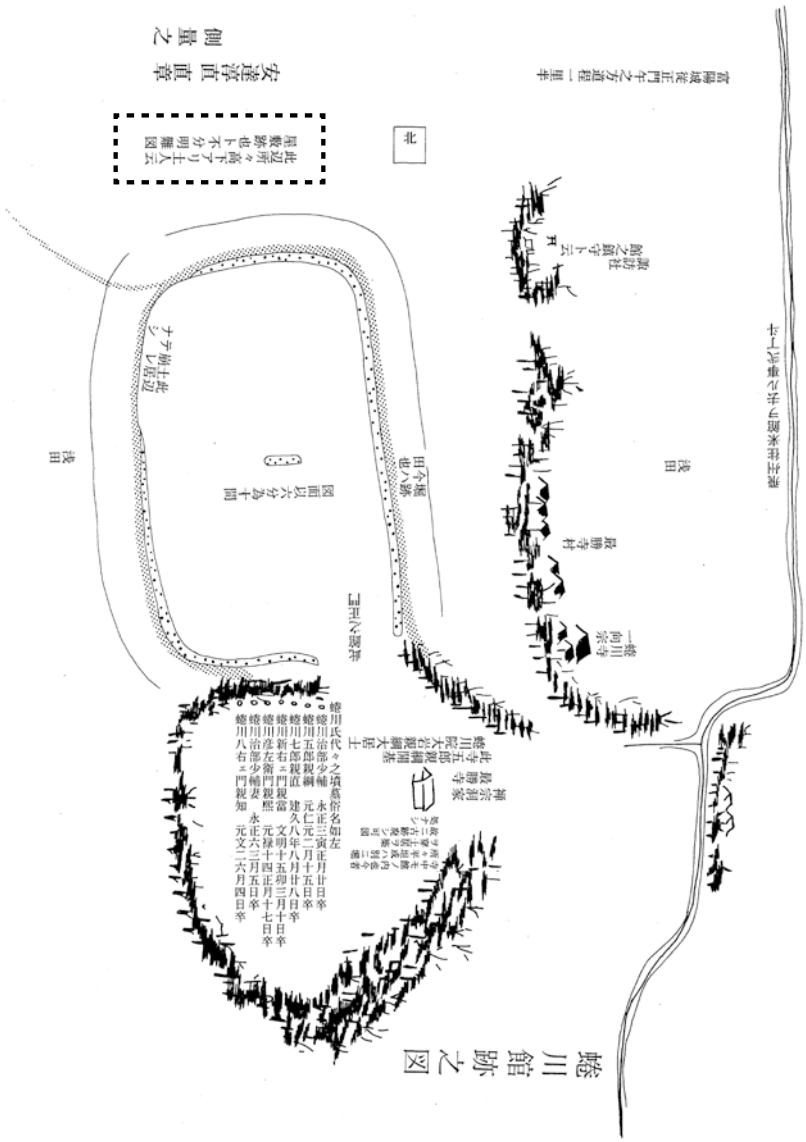
以上でみたとおり、本調査区では 13 ～ 15 世紀にかけて居住地として利用され、少なくとも 14 ～ 15 世紀には区画溝を有する武家の屋敷地が営まれた。

本遺跡や隣接する黒瀬大屋遺跡、蜷川館跡などでは、これまで約 160 件の本調査・試掘調査・工事立会を実施し、おおよその遺構の所在状況の傾向が把握されている。概括的にいうと、北側の黒瀬大屋遺跡から黒崎種田遺跡北部ににかけて主に古代集落が、黒崎種田遺跡の中部にやや空白地帯があり、同遺跡南端部から蜷川館跡にかけて中世の遺構がある。本調査区は黒崎種田遺跡の南端部に位置し、すぐ南に蜷川館跡がある。こうした周辺の調査成果と立地状況を考慮すると、本調査区は、南に隣接する蜷川館跡との関係が示唆される。



第 58 図　地割図による蜷川館のプラン復原（高岡編 1998）

蜷川氏は、鎌倉時代初期に初代親直が蜷



第 59 図　「蜷川館跡之図」
（金沢市立玉川図書館蔵原図より高岡徹氏作図（高岡編 1998）に加筆）

川姓を名乗って蜷川郷に居住し、戦国期の永禄 9 年（1566）、12 代常嗣が敗死するまで、およそ 12 世紀末から 16 世紀中頃まで拠を構えたと推測される。その本拠が、本調査区の約 300m 南の最勝寺付近に存在した蜷川館跡である。蜷川館跡については、最勝寺境内において、高岡徹氏らが現存土塁や文献による館のプラン復原、石造物等の調査を行っている（高岡編 1998）。それによると、館は南北 2 つの郭からなり、周囲は土塁と堀がめぐる。堀を除く規模は南北 250m、東西 110m という県内最大級の居館となることが明らかにされた（第 58 図）。また、最勝寺境内に分布する石造物や採集遺物は、古代の須恵器を除けば、14 ～ 16 世紀のものがある。石造物は 15 世紀代が最も多く、16 世紀は減少するという傾向が示された。発掘調査は行われていないため詳細な存続期間は特定できないが、表採遺物や石造物の時期は、本調査区と重なる部分が多い。

この蜷川館跡についてはいくつかの絵図が残るが、本調査区との関係では、文化 11 年（1814）、富山藩士安達淳直・直章が作成した「蜷川館跡之図」（金沢市立玉川図書館蔵・第 59 図）が重要である。絵図の中央の堀で囲まれた方形部分とその南の樹木で囲まれた部分が、それぞれ北郭と南郭にあたるが、注目したいのは北郭の北側に書かれた注記「此辺所々高下アリ土人云屋敷跡也ト不分明難図」（第 59 図の点線部）である。蜷川館跡の北側は地形の高低差があり、地元の人によれば屋敷跡があったと伝わるが、明確でないという内容である。本調査区は蜷川館跡のすぐ北に位置しており、本調査区で検出した遺構は、絵図に記されたこの「屋敷跡」の一部と考えてよいだろう。絵図は、この「屋敷跡」と蜷川館がどのような関係にあるかは示していない。しかし、本調査区は蜷川館跡の北側のごく近くにあること、検出遺構と蜷川氏の活躍時期及び最勝寺境内（蜷川館跡）の採集遺物の時期が重なる部分が多いことを考え合わせると、本調査区の遺構が蜷川館と無関係だったとは考えにくく、関連するものとみるのが自然である。

そうした場合、本調査区の遺構が 13 ～ 15 世紀主体、対して最勝寺境内（蜷川館跡）の表採遺物や石造物が 14 ～ 16 世紀で、本調査区の方がやや古いことから、館の本体がある時期に本調査区付近から現在の場所（最勝寺付近）に移動したという見方もできるかもしれないが、その可能性は低いと考える。蜷川館の堀の幅は、最勝寺蔵「当時境内絵図」では幅 3 間（約 5.5m）や 6 間（約 10.9m）の記載がある。南郭で幅 1 間と狭く記載される部分もあるが、高岡徹氏は埋められたためかもしれないとし（高岡 1998）、本来の堀幅を示していない可能性がある。この 3 間や 6 間という堀幅と比べると、本調査区で検出した区画溝は、SD50 が最大幅 2.78m（約 1.5 間）、SD51 が幅約 3.5m（約 1.9 間）、SD54 が幅約 0.79 ～ 2.4m（約 0.4 ～ 1.3 間）と大幅に狭い。移動した際に拡張したとする見方もできなくはないが、それにしてもこの差は大きく、本調査区の区画溝は館本体の堀としては貧弱である。したがって、本調査区は館の本体ではなく、館に付随して蜷川氏一族または家臣の有力武士が居住した屋敷地であったと考えられる。

5　おわりに

本調査では、蜷川氏との直接的な関わりを示す資料は見つかっていない。しかし、蜷川館の至近にあり、蜷川館と検出遺構の時期が重複すること、また遺構の様相も考慮すると、蜷川氏一族またはその家臣の有力武士が居住した屋敷地が存在したと考えられる。

以上の成果を踏まえ、最後にこれまで周辺で行ってきた調査との関係に触れておく。

冒頭に記したとおり、これまで周辺で行ってきた試掘調査等では、本調査区周辺で遺跡はほとんど確認されていなかった。この理由について、上記した第 59 図「蜷川館跡之図」の「此辺所々高下アリ土人云屋敷跡也ト不分明難図」の記載に再度注目したい。「此辺所々高下アリ」は、蜷川館の北側に地形の高低差があったことを示している。屋敷等の居住地は高い場所を選んで設置したはずなので、面的に広がりをみせるのでなく、高い場所に点在したと推測できる。つまり、屋敷や集落は営む適地が限られ、広範囲に分散せざるをえなかった可能性が高い。そのためにこれまでの調査では遺跡が見つかりにくかったというのが実態ではないか。

こうした視点でみると、本調査区の北西約 700m にある平成 16 年度発掘調査地もやや離れてはいるが、蜷川氏に関わる場所であった可能性が高まる。12 世紀後半から 13 世紀の掘立柱建物、竪穴状遺構、井戸等が検出され、青磁の碗・盤、青白磁の梅瓶など、一般層とは異なる遺物が出土している（富山市教委 2005）。文献からみた蜷川氏の初期に当たる点も注意される。こうした蜷川館からやや離れた地点でも、今後関連遺構が発見されることが想定される。

蜷川氏の本拠である蜷川館は「県内でも最大級の居館」（高岡編 1998）とされる。また、京都に移った一族は室町幕府で政所代にまで登り詰め、蜷川親當はアニメ「一休さん」に登場する「新右衛門」のモデルになるなど、市民の興味を集める要素も多い。今回の調査は、こうした蜷川氏との関係を含め、周辺一帯の遺跡の性格を捉え直す大きな意義を有するものであった。本調査区の周辺は近年多くの開発が行われている地域であり、今後は単に遺構の有無の確認にとどまらず、蜷川氏との関わりにも十分目を配りながら調査を行っていく必要がある。（野垣）

引用・参考文献

青山裕子　2013『仏田遺跡発掘調査報告』富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

安達志津　2006「水橋金広・中馬場遺跡における井戸祭祀の変遷」『富山市水橋金広・中馬場遺跡発掘調査報告書Ⅱ』富山市教育委員会

五十嵐俊子　2013「宮河荘についての一考察」『大山の歴史と民俗』第16号　大山歴史民俗研究会

上田秀夫　1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』№.2　日本貿易陶磁研究会

鹿島昌也　2019「富山市百塚住吉D遺跡の厩舎遺構」『馬がつなぐ古代社会』古代交通研究会第20回大会資料集

鐘方正樹　2003『井戸の考古学』同成社

金子浩昌　1996「骨・貝類同定」『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告書（遺物編）』第2分冊　富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

久保尚文　1983「荘園史の特色」『越中中世史の研究』桂書房

塩田明弘　2001「越中（富山県）の様相」『中世北陸の井戸』北陸中世考古学研究会

坂井誠一　1963「初期の蜷川氏」『逼歴の武家－蜷川氏の歴史的研究―』吉川弘文館

瀬戸市歴史民俗資料館　1991『研究紀要Ⅹ』

定森秀夫　1989「日本出土の高霊タイプ系陶質土器（1）」『朱雀』第2集　京都国立博物館

篠崎譲治　2010『馬小屋の考古学』高志書院

高岡　徹編　1998『蜷川館跡調査報告書』とやま歴史的環境づくり研究会

富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所　1994『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告書（遺構編）』

富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所　1996『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告書（遺物編）』

富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所　2002『石名田木舟遺跡発掘調査報告書』

富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所　2004『黒河尺目遺跡・黒河中老田遺跡発掘調査報告』

富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所　2004『道場Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告』

富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所　2005a『吉倉B遺跡発掘調査報告』

富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所　2005b『中名Ⅴ・Ⅵ遺跡、砂子田Ⅱ遺跡発掘調査報告書』

富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所　2006『任海宮田遺跡発掘調査報告書Ⅰ』

富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所　2007『任海宮田遺跡発掘調査報告書Ⅱ』

富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所　2008a『任海宮田遺跡発掘調査報告書Ⅲ』

富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所　2008b『友杉遺跡発掘調査報告』

富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所　2010『友杉遺跡発掘調査報告』

富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所　2013『仏田遺跡発掘調査報告』

富山県埋蔵文化財センター　2004『富山県埋蔵文化財センター年報　平成15年度』

富山県埋蔵文化財センター　2007『富山県埋蔵文化財センター年報　平成18年度』

富山市教育委員会　1988『昭和62年度富山市埋蔵文化財発掘調査概要』

富山市教育委員会　2000『富山市上新保遺跡発掘調査報告書』

富山市教育委員会　2001『富山市水橋金広・中馬場遺跡発掘調査報告書』

富山市教育委員会　2002『富山市吉岡遺跡・経力遺跡発掘調査報告書』

富山市教育委員会　2005『富山市黒崎種田遺跡発掘調査報告書』

富山市教育委員会　2006a『富山市金屋南遺跡発掘調査報告書』

富山市教育委員会　2006b『富山市水橋金広・中馬場遺跡発掘調査報告書Ⅱ』

富山市教育委員会　2007『富山市小出城跡発掘調査報告書』

富山市教育委員会　2009a『富山市上新保遺跡発掘調査報告書』

富山市教育委員会　2009b『富山市上新保遺跡発掘調査報告書』

富山市教育委員会　2012『富山市百塚住吉D遺跡発掘調査報告書Ⅱ』

富山市教育委員会　2014『富山市黒瀬大屋遺跡発掘調査報告書』

富山市教育委員会　2014『富山市新庄城跡発掘調査概報』

富山市教育委員会　2015『富山市千石町遺跡発掘調査報告書』

富山市教育委員会　2018『富山市黒瀬大屋遺跡発掘調査報告書』

西中川駿・堀沢祐一　2007「富山市金屋南遺跡出土の馬歯」『富山市金屋南遺跡発掘調査報告書Ⅳ』富山市教育委員会

西中川駿・幸村真由美・吉野文彦・塗木千穂子・松元光春　2015「ウマの臼歯の計測値から体高および年齢の推定法」『動物考古学』32　日本動物考古学会

蜷川校下自治振興会　1968『蜷川の郷土史』

野口雅美　1999「道場Ⅰ遺跡出土の井戸祭祀に関わる遺物」『富山考古学研究』紀要第2号　富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

林田重幸・山内忠平　1975「馬における骨長より体高の推定法」『鹿児島大学農学部学術報告』6

林田重幸　1995「中世日本の馬について」『馬の文化叢書　第3巻　中世－馬と日本史2』馬事文化財団

パリノ・サーヴェイ　2002「石名田木舟遺跡自然科学分析調査」『石名田木舟遺跡発掘調査報告』第3分冊　富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

パリノ・サーヴェイ　1998「五社遺跡出土の動物遺体」『五社遺跡発掘調査報告』第2分冊　富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

広島県立歴史博物館　2017『草戸千軒町遺跡漆器関係資料2』

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　2016『越前焼総合調査事業報告』

藤澤良祐　2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院

婦中町教育委員会　1995『中名Ⅱ遺跡発掘調査報告』

北陸中世土器研究会編　1997『中・近世の北陸－考古学が語る社会史－』桂書房

松井　章　1995「古代・中世の村落における動物祭祀」『国立歴史民俗博物館研究報告』61　国立歴史民俗博物館

宮田進一　1997a「越中国における土師器の編年」『中・近世の北陸－考古学が語る社会史－』桂書房

宮田進一　1997b「越中瀬戸の変遷と分布」『中・近世の北陸－考古学が語る社会史－』桂書房

森　隆　2003「富山県の中世土器（資料編）」『富山考古学研究』第6号　富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

森　隆　2005「富山県の中世土器（資料編2）」『富山考古学研究』第8号　富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

山本信夫　2000『大宰府条坊跡ⅩⅤ－陶磁器分類編－』太宰府市教育委員会

山本正敏・横山和美・越前慎子　1996『梅原加賀坊遺跡・久戸遺跡・梅原安丸遺跡・田尻遺跡発掘調査報告　第1分冊』富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

吉岡康暢　1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館

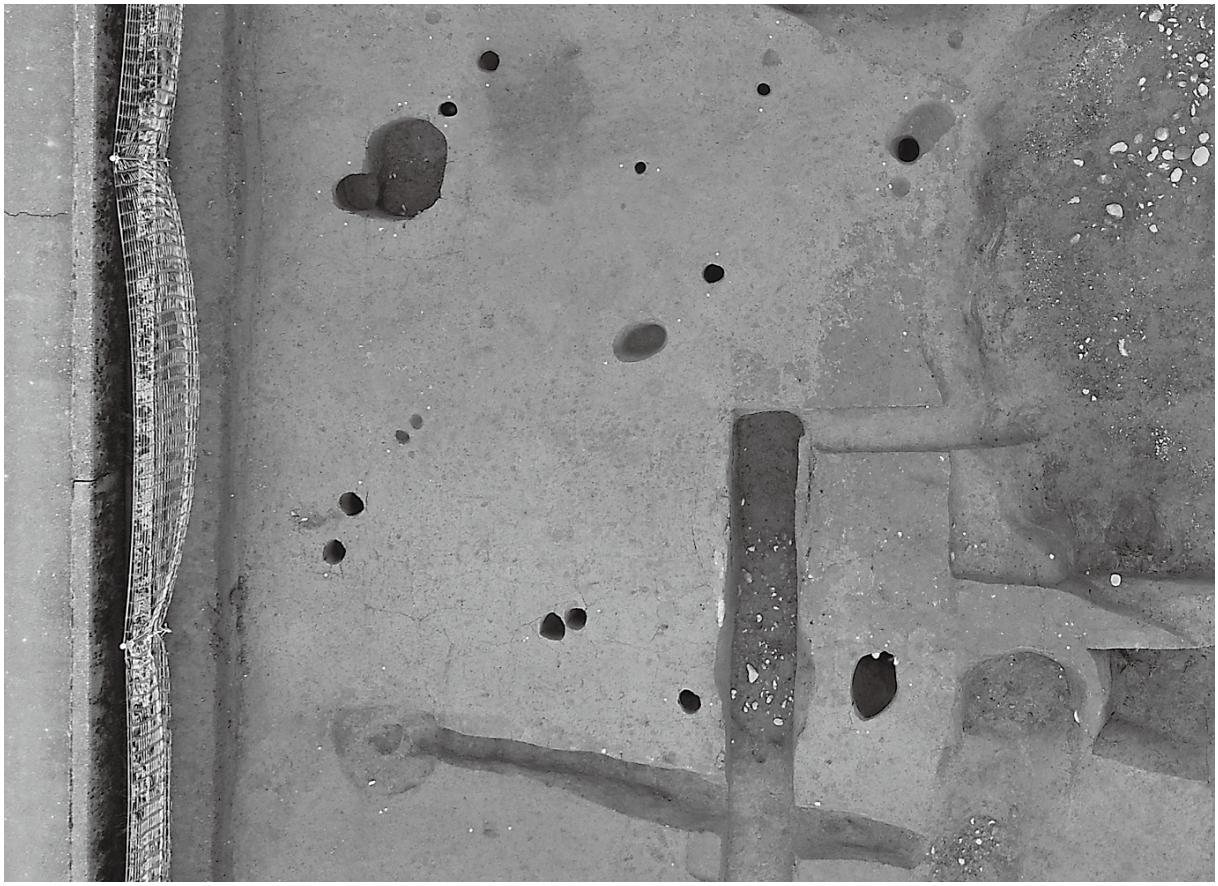
吉田生物研究所・奈良文化財研究所　2007「動物遺存体について（平成15・16年度調査）」『富山市小出城跡発掘調査報告書』富山市教育委員会

写真図版1　調査区遠景

調査区遠景（南西から）

調査区遠景（北東から）

調査区完掘状況（オルソ写真合成）　上が北



SB1（SP148・SP161・SP165・SP204）　完掘状況　上が北

SP148　完掘状況（南から）

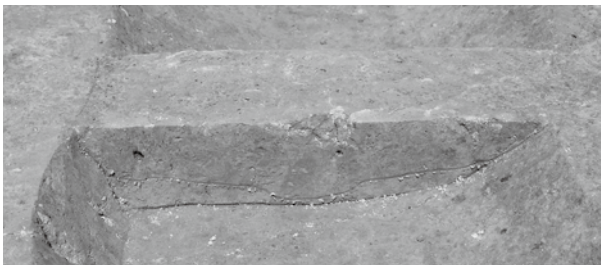
SP161　完掘状況（北西から）

SP165　完掘状況（東から）

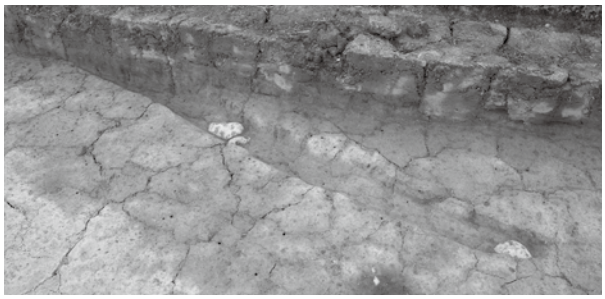
SP204　断面状況（東から）

SD08・SD34　完掘状況（西から）

SD08　断面状況（北から）

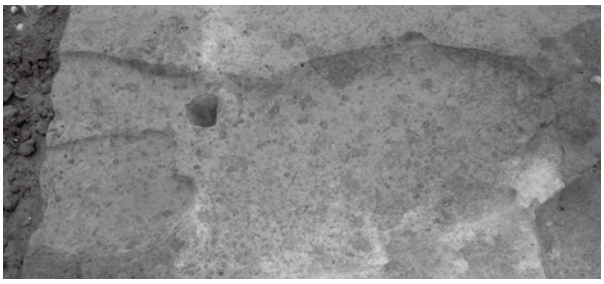


SD34　断面状況（東から）



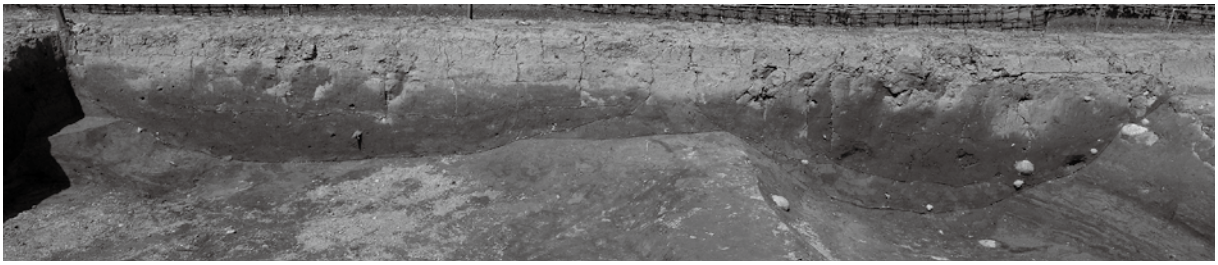
SD06　完掘状況（南から）

SD06　断面状況（西から）



SD15　完掘状況（北から）

SD15　断面状況（東から）



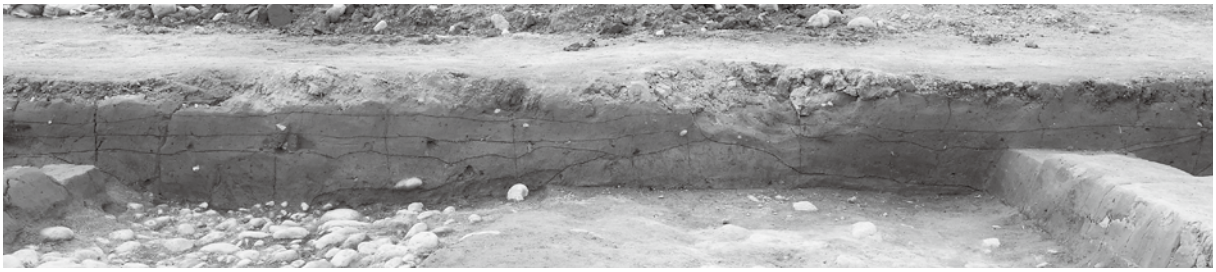
SD51・SD50　C-C’　断面状況（東から）

SD50・SD51・SX52　完掘状況（北から）

SD50・SX52　E-E’　断面状況（北西から）

SX52　遺物(267)出土状況（北から）

SX52・SD51　D-D’　断面状況（北から）



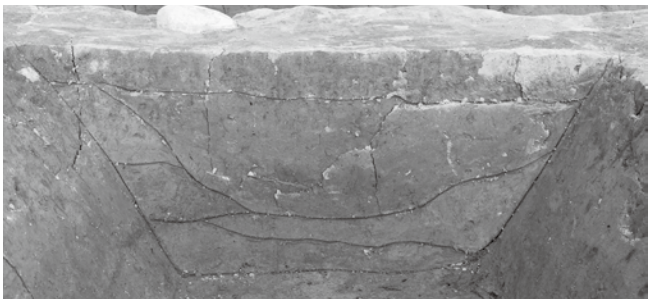
SD50・SX52　D-D’　断面状況（北から）

SD54　完掘状況（東から）

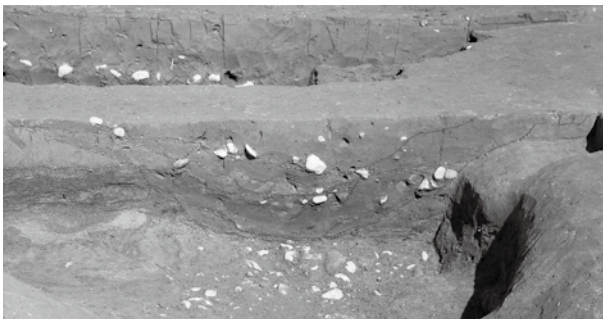
SD54　M-M’　断面状況（西から）

SD54　L-L’　断面状況（東から）

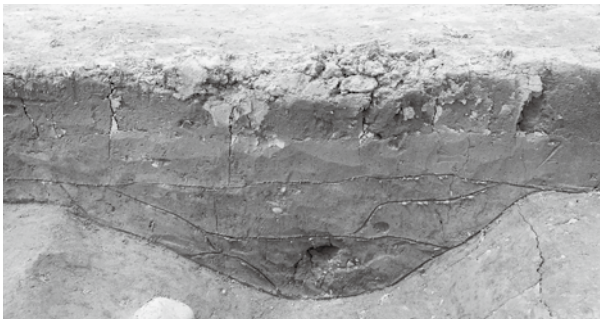
SD54　完掘状況（南から）



SD54　K-K’　断面状況（西から）



SD54　I-I’　断面状況（西から）



SD54　J-J’　断面状況（東から）

SD50・SD54　G-G’　断面状況（南から）

SD54　H-H’　断面状況（南から）

SD73　断面状況（南から）

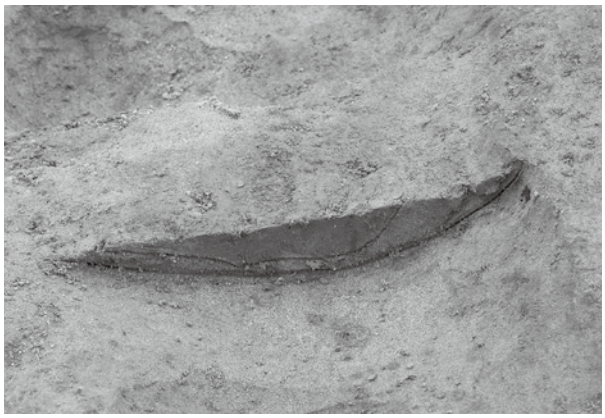
SD91　完掘状況（北西から）

SD96　遺物出土状況（東から）

SD96　断面状況（北から）

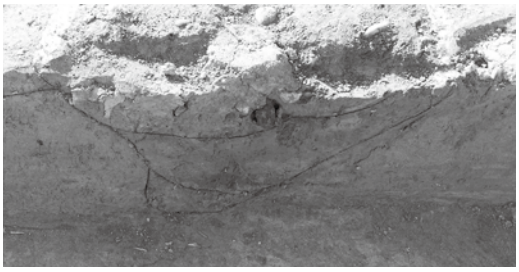
SD96　刻書珠洲(58)出土状況（南から）

SD96　連歯下駄(63)出土状況（北東から）


SD100　断面状況（南から）

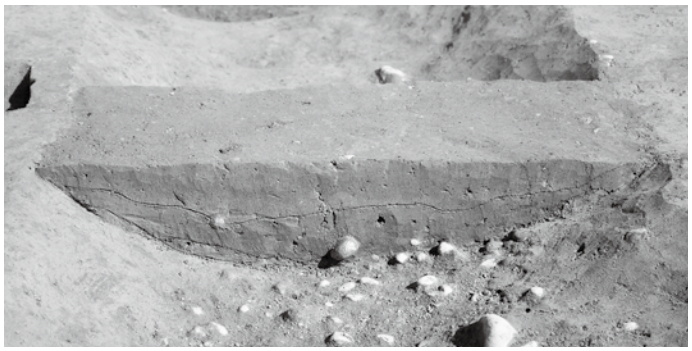
SD100　完掘状況（南西から）

SD152・SD166・SD199　完掘状況（南東から）



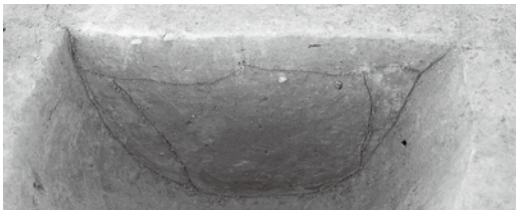
SD152　断面状況（東から）

SD166　断面状況（南から）

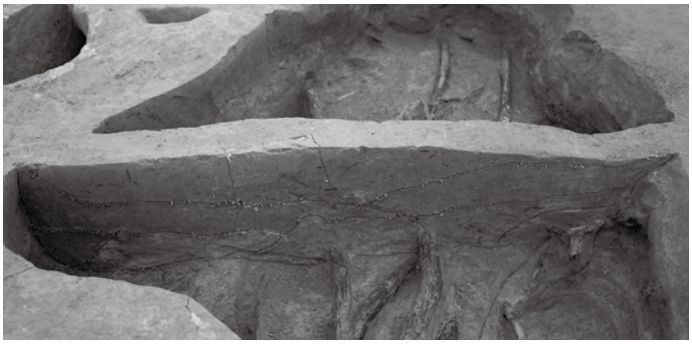


SD199　断面状況（北から）

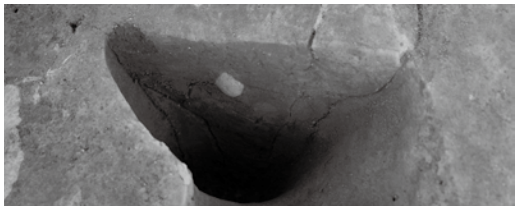
SD188　断面状況（南から）



SD189　断面状況（南から）



SD187　断面状況（南から）



SD197　断面状況（東から）

SD187・SD188・SD189・SD197　完掘状況（東から）

SE01　遺物出土状況（南東から）

SE01　遺物出土状況（南東から）

SE01　断面状況（東から）

SE01　遺物出土状況（北東から）

SE02　完掘状況（東から）

SE02　断ち割り断面状況（東から）

SE03　遺物出土状況（北から）

SE03　断ち割り断面状況（南から）

SE05　完掘状況（北西から）

SE05　断ち割り断面状況（西から）

SE48　完掘状況（北東から）

SE48　断ち割り断面状況（南から）

SE58　完掘状況（南から）

SE58　断ち割り断面状況（南から）

SE61　完掘状況（西から）

SE61　遺物出土状況（北東から）

SE61　遺物出土状況（北西から）

SE61　遺物出土状況（北から）

SE61　遺物出土状況（西から）

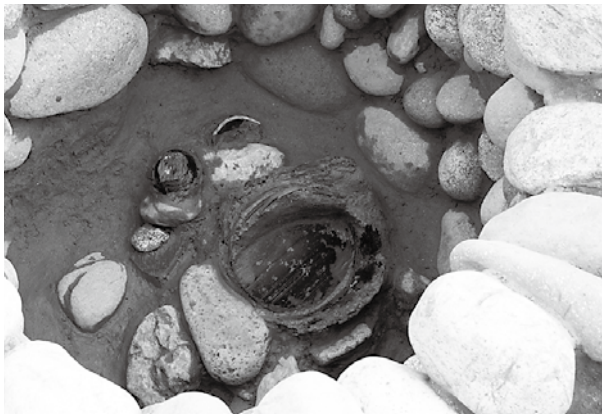
SE64　完掘状況（西から）

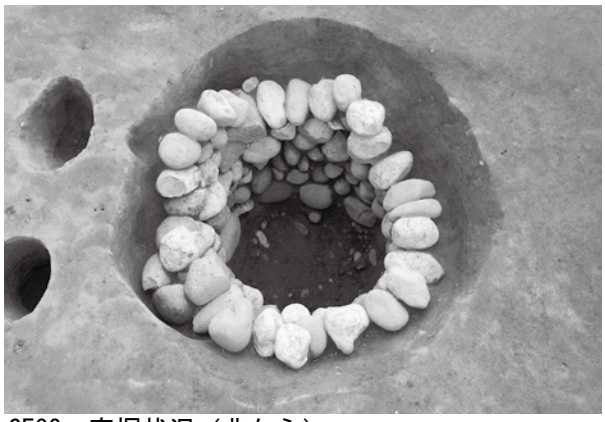
SE65　完掘状況（北東から）

SE65　断ち割り断面状況（南東から）

SE81　完掘状況(西南から）

SE81　断ち割り断面状況（西から）


SE83　遺物出土状況（北から）


SE83　完掘状況（北から）

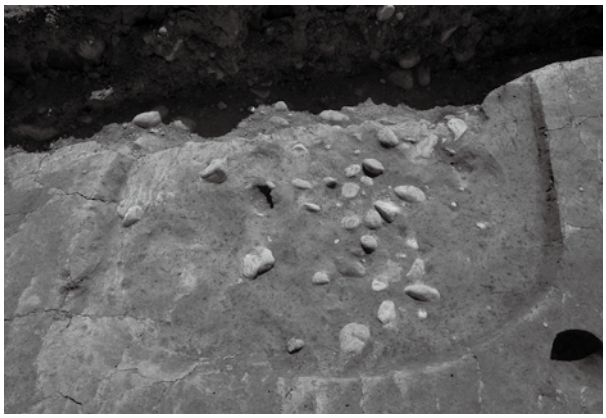
SE83　断ち割り断面状況（南から）

SE108　完掘状況（北から）

SE108　断ち割り断面状況（南から）

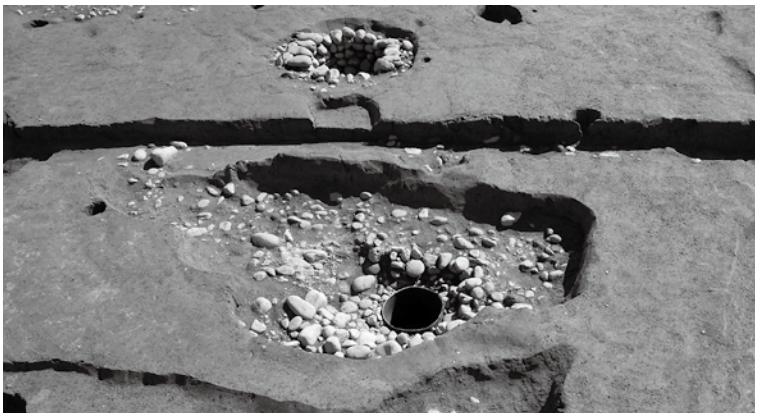
SK07　遺物出土状況（東から）

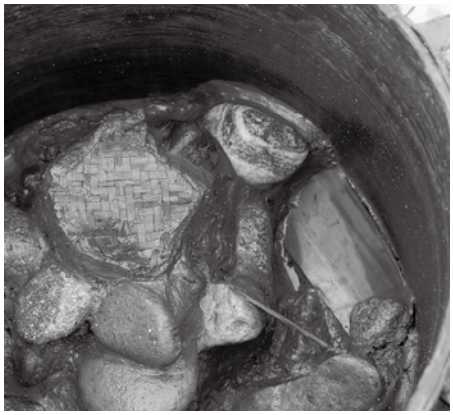
SK14　礫出土状況（西から）


SK14　完掘状況（西から）

SK35　完掘状況（西から）

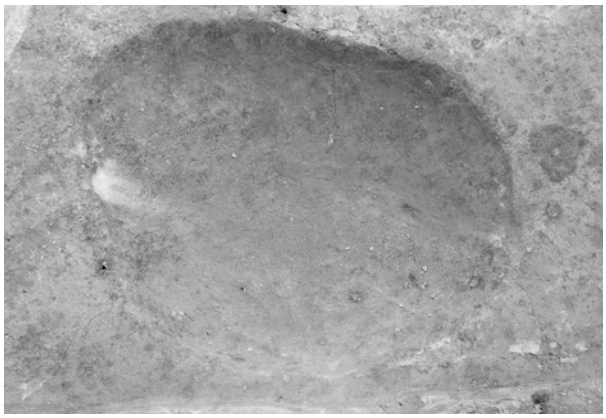
SK35　遺物出土状況（北から）


SK35・SX49　完掘状況（西から）


SX49　遺物出土状況（東から）

SX49　断ち割り断面状況（東から）

SK38・SK39　完掘状況（北から）

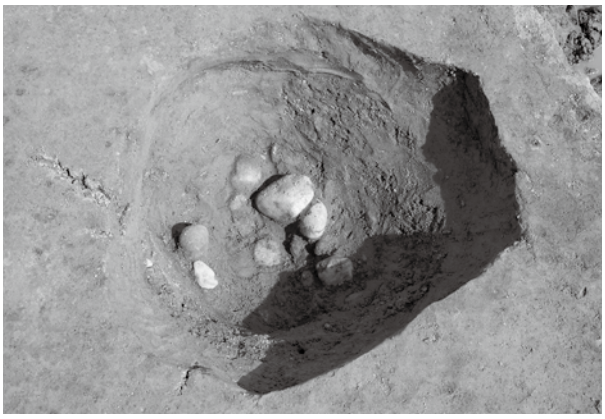

SK59　完掘状況（北から）

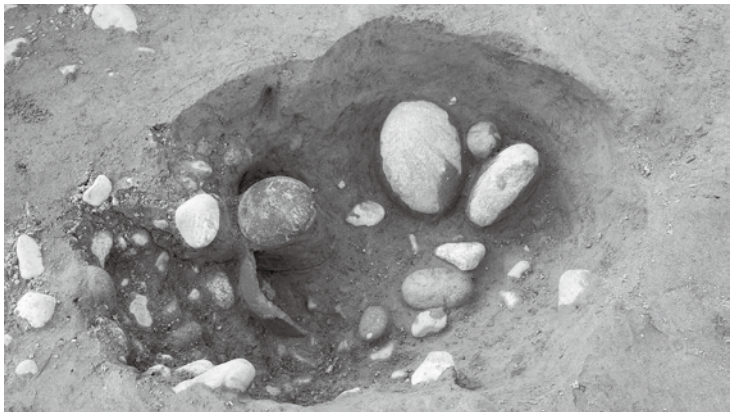
SK60　完掘状況（北から）

SK62　遺物(227・228)出土状況（東から）

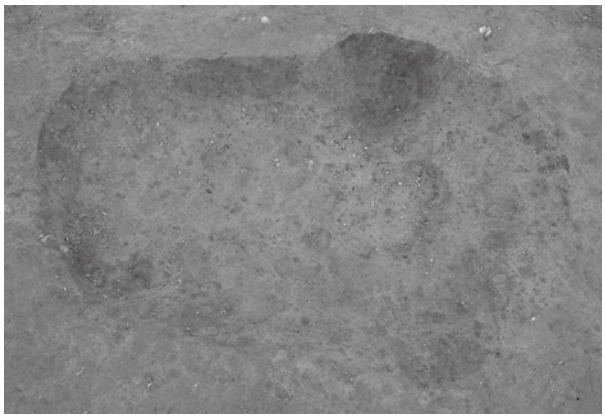
SK62　完掘状況（北から）

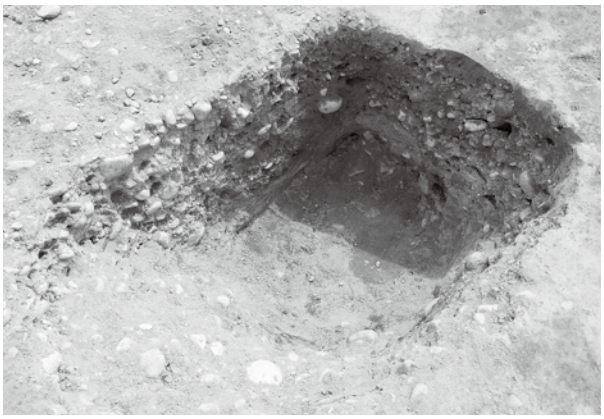
SK78　完掘状況（東から）


SK79　完掘状況（南から）


SK80　完掘状況（南東から）

SK80　遺物出土状況（北から）

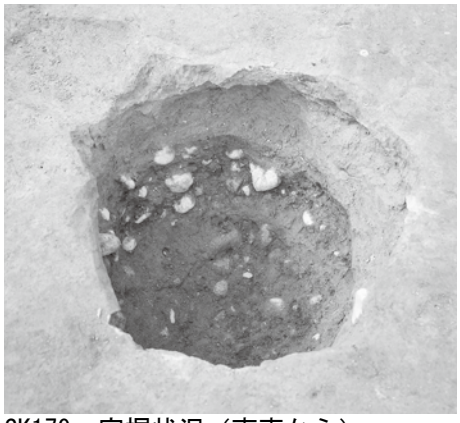

SK99　完掘状況（東から）


SK102　完掘状況（北西から）

SK137　完掘状況（西から）

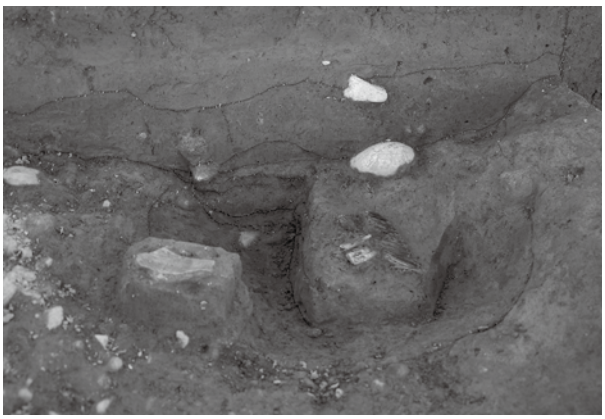
SK164　完掘状況（東から）

SK169・SK176　完掘状況（北から）

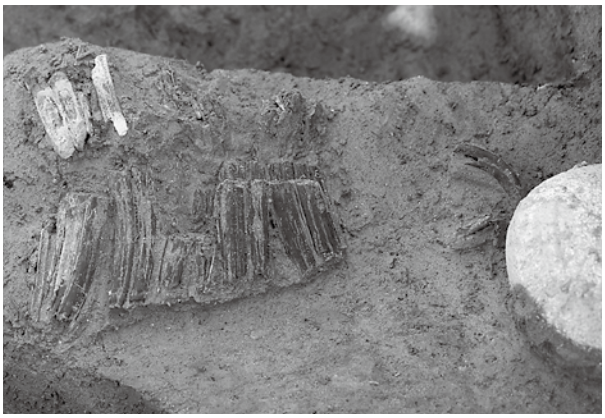


SK179　完掘状況（南東から）

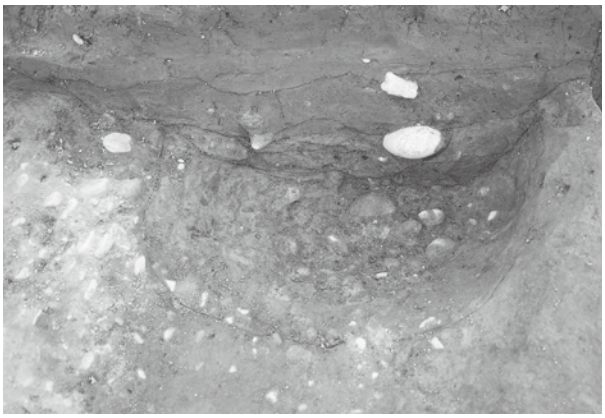
SK190　完掘状況（北東から）



SK201　遺物出土状況（北から）



SK201　ウマの歯出土状況（西から）

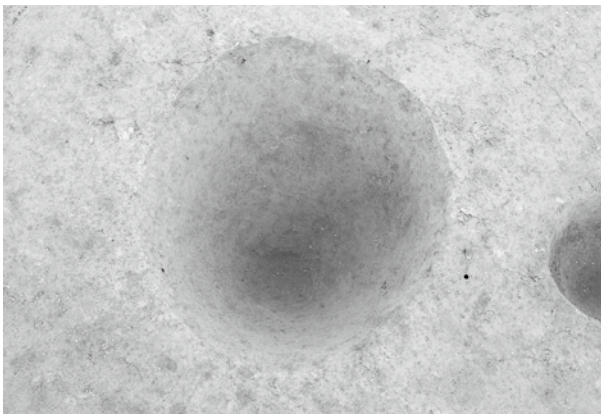


SK201　完掘状況（北から）

SA1（SP55・SP56・SP57）　完掘状況　上が北

SP55　断面状況（南から）

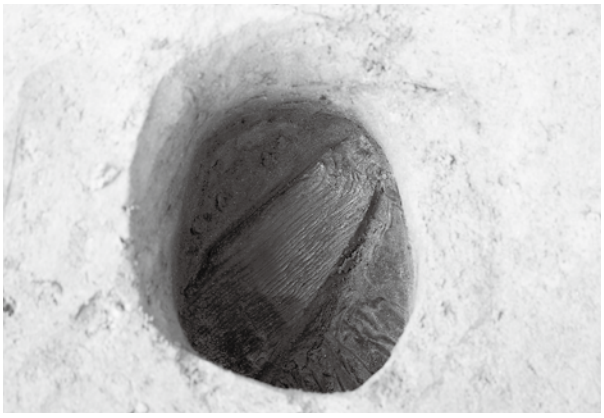
SP55　礎板(2)出土状況（南から）



SP56　完掘状況（南から）

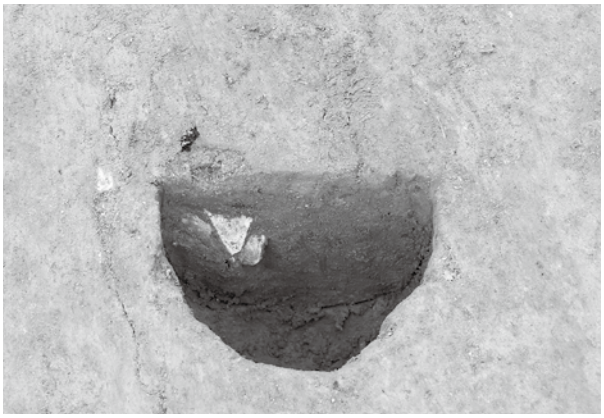
SP57　完掘状況（南東から）

SP141　断面状況（東から）

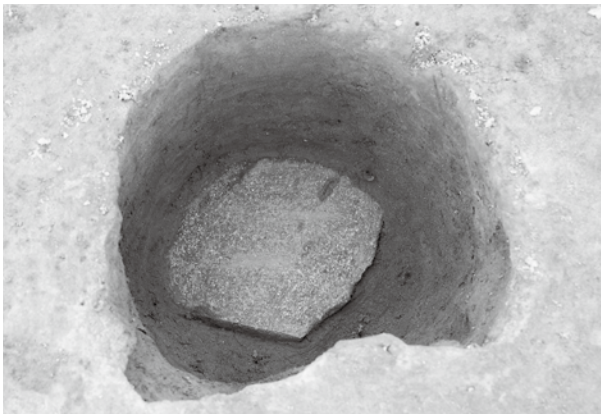


SP141　遺物(247)出土状況（東から）

SP71・SP70　完掘状況（北から）

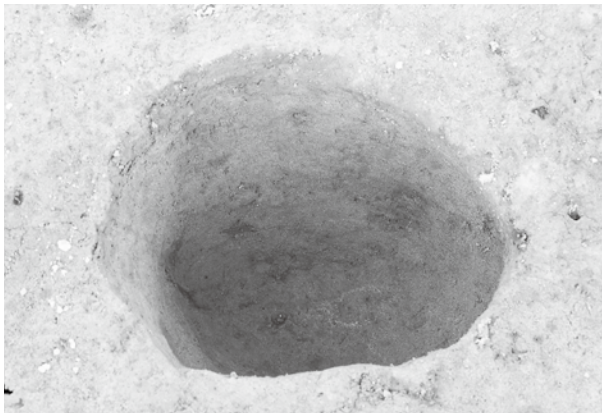

SP75　断面状況（南から）

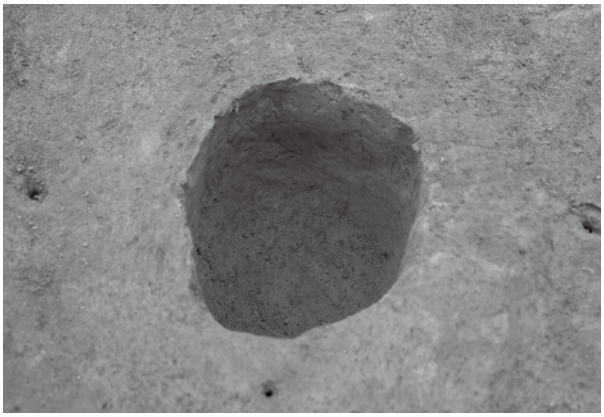
SP87　断面状況（南から）


SP87　礎石(245)出土状況（南から）

SP143　断面状況（東から）

SP143　完掘状況（東から）


SP120　完掘状況（東から）


SP180　完掘状況（南から）

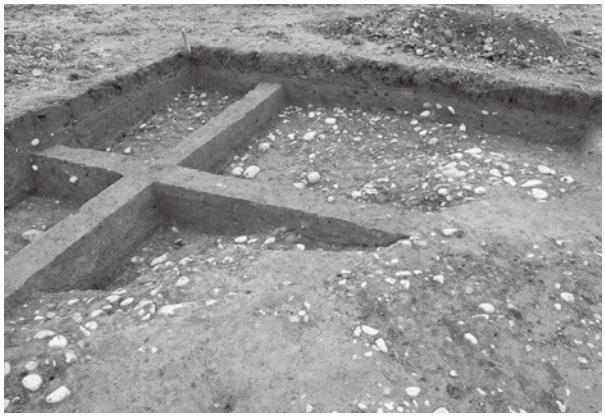
SX53　完掘状況（北から）

SX63　完掘状況（南から）

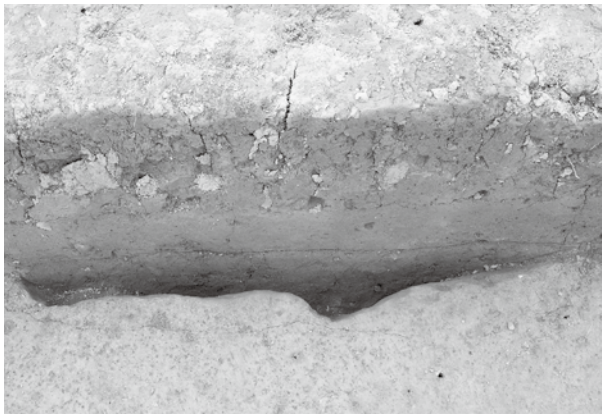
SX77　断面状況（東から）

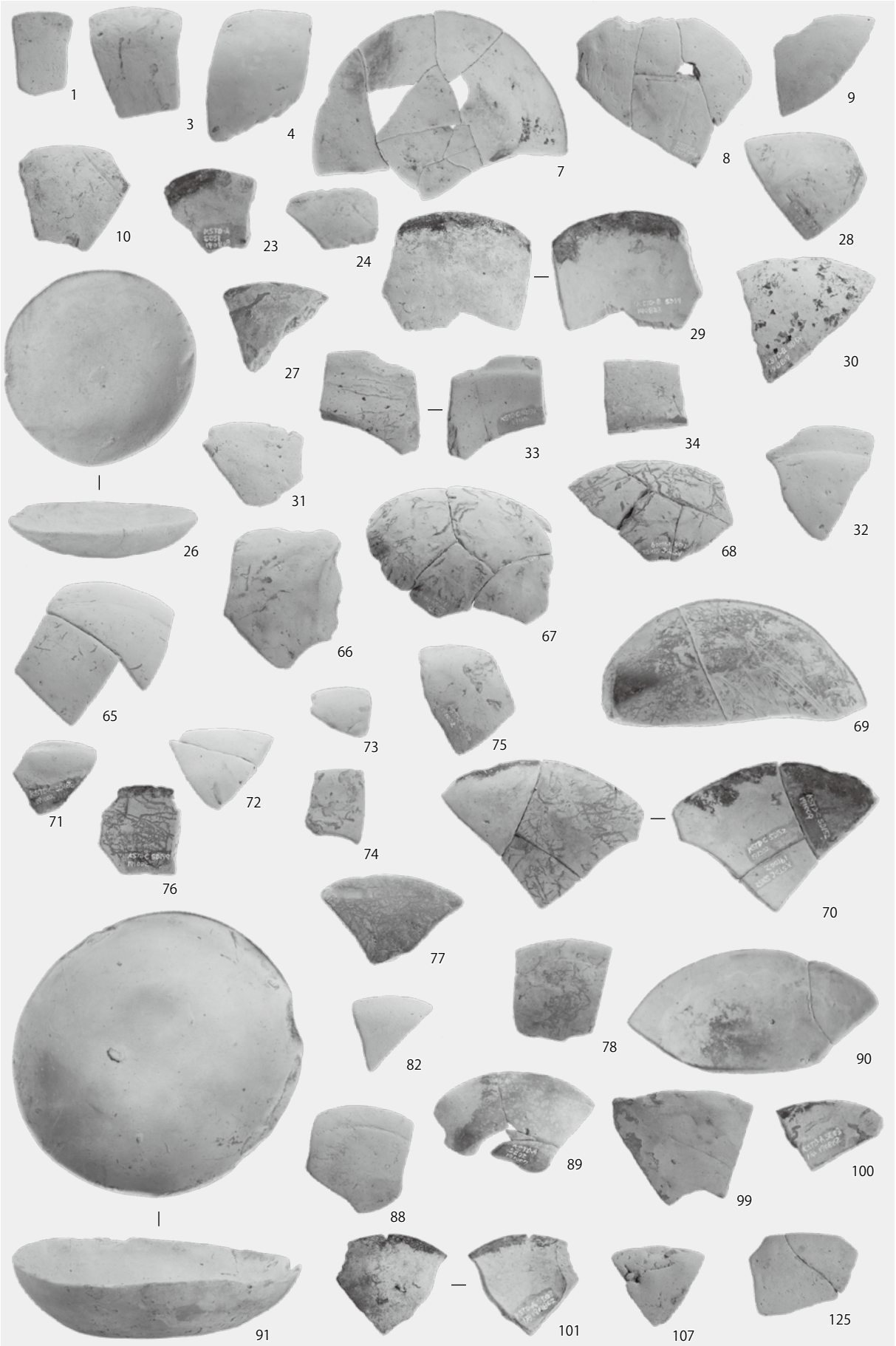
SX77　完掘状況（西から）

SX97　断面状況（西から）

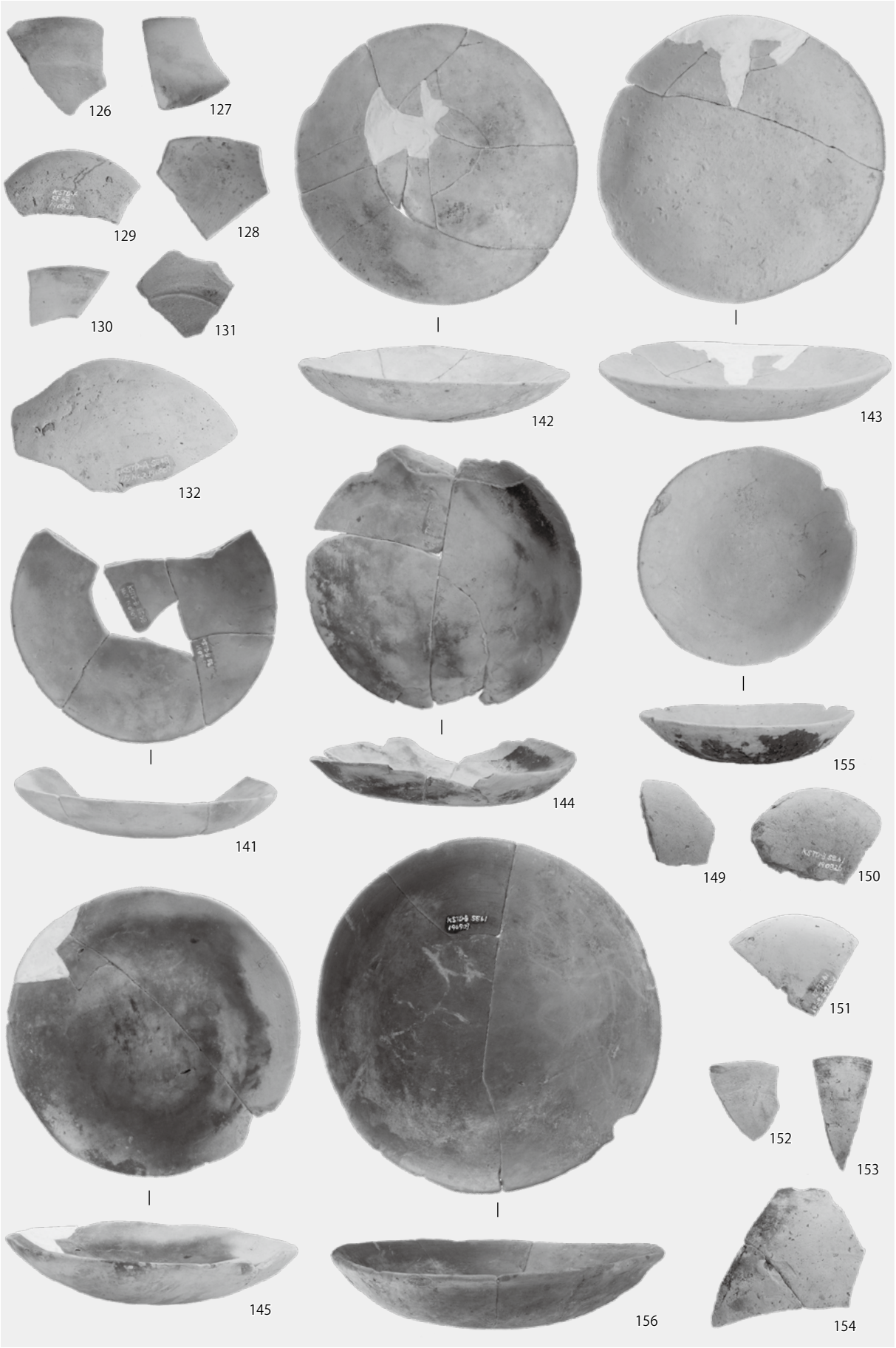

SX98　断面状況（北西から）

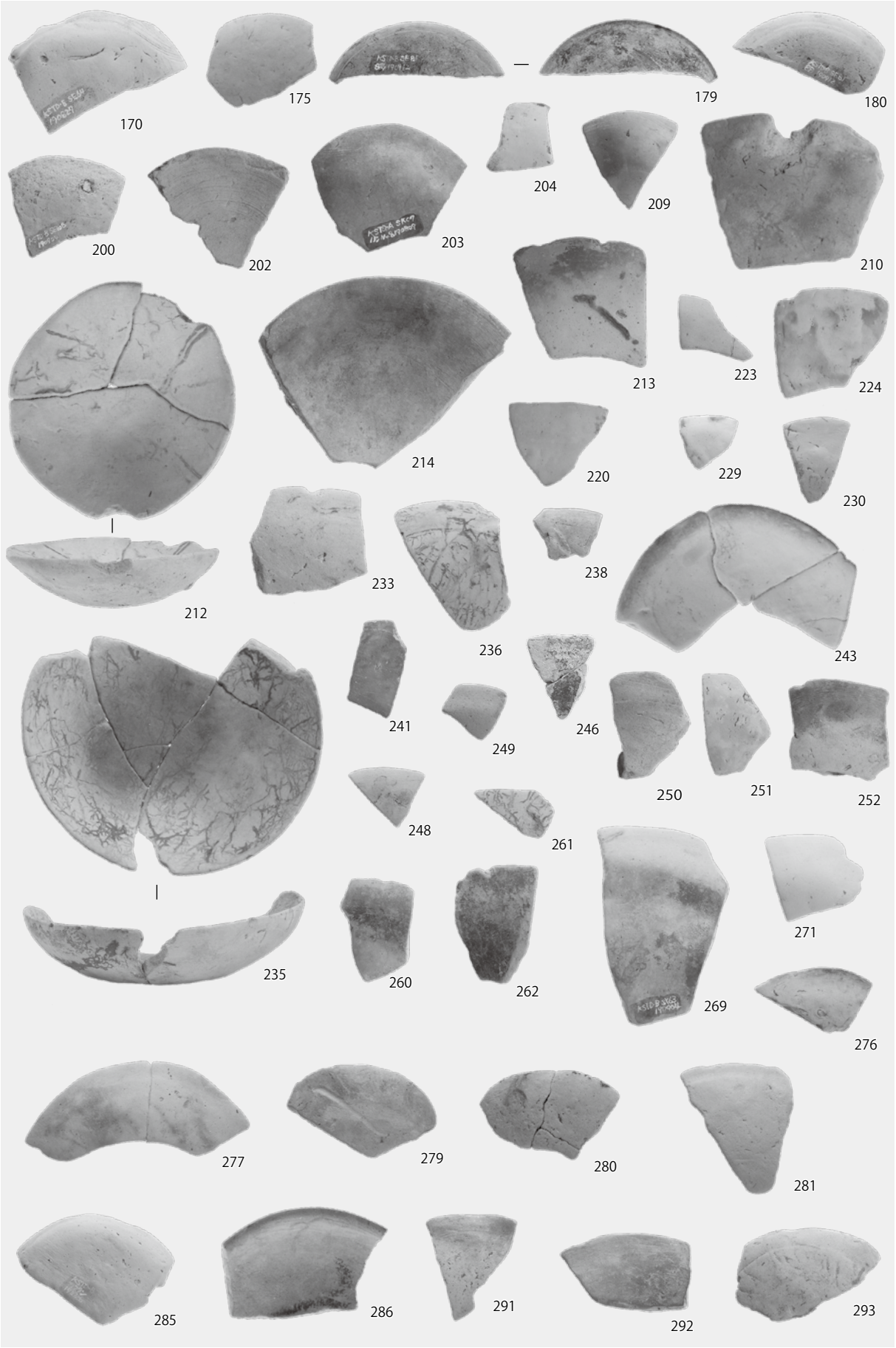
SX98　完掘状況（北西から）


SX149　断面状況（東から）

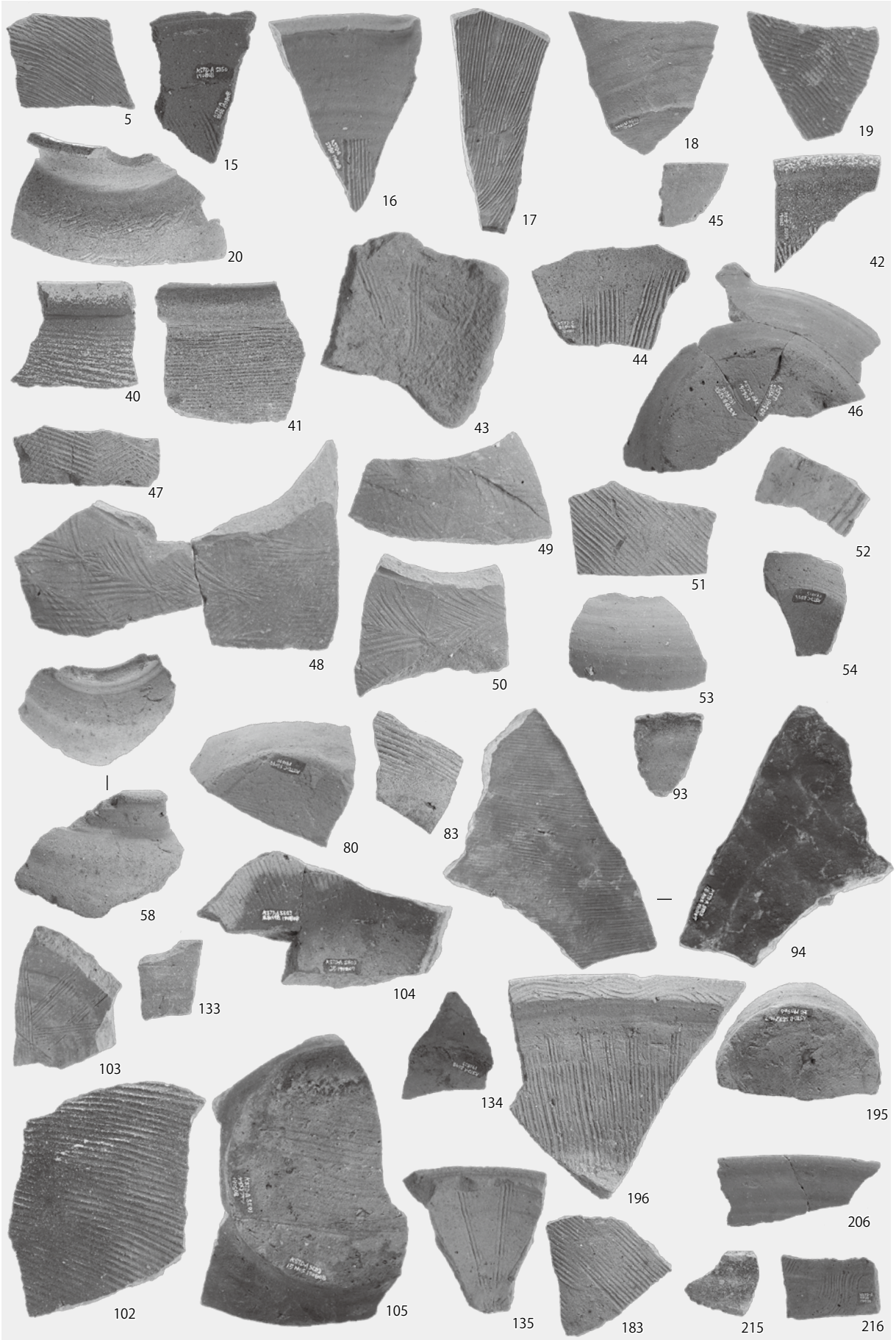

1
3
4
7
8
9
10
23
24
28
29
30
27
33
34
31
26
68
32
66
67
65
69
73
75
71
72
74
76
70
77
78
90
82
89
100
99
88
91
101
107
125

写真図版20　遺物（中世土師器）

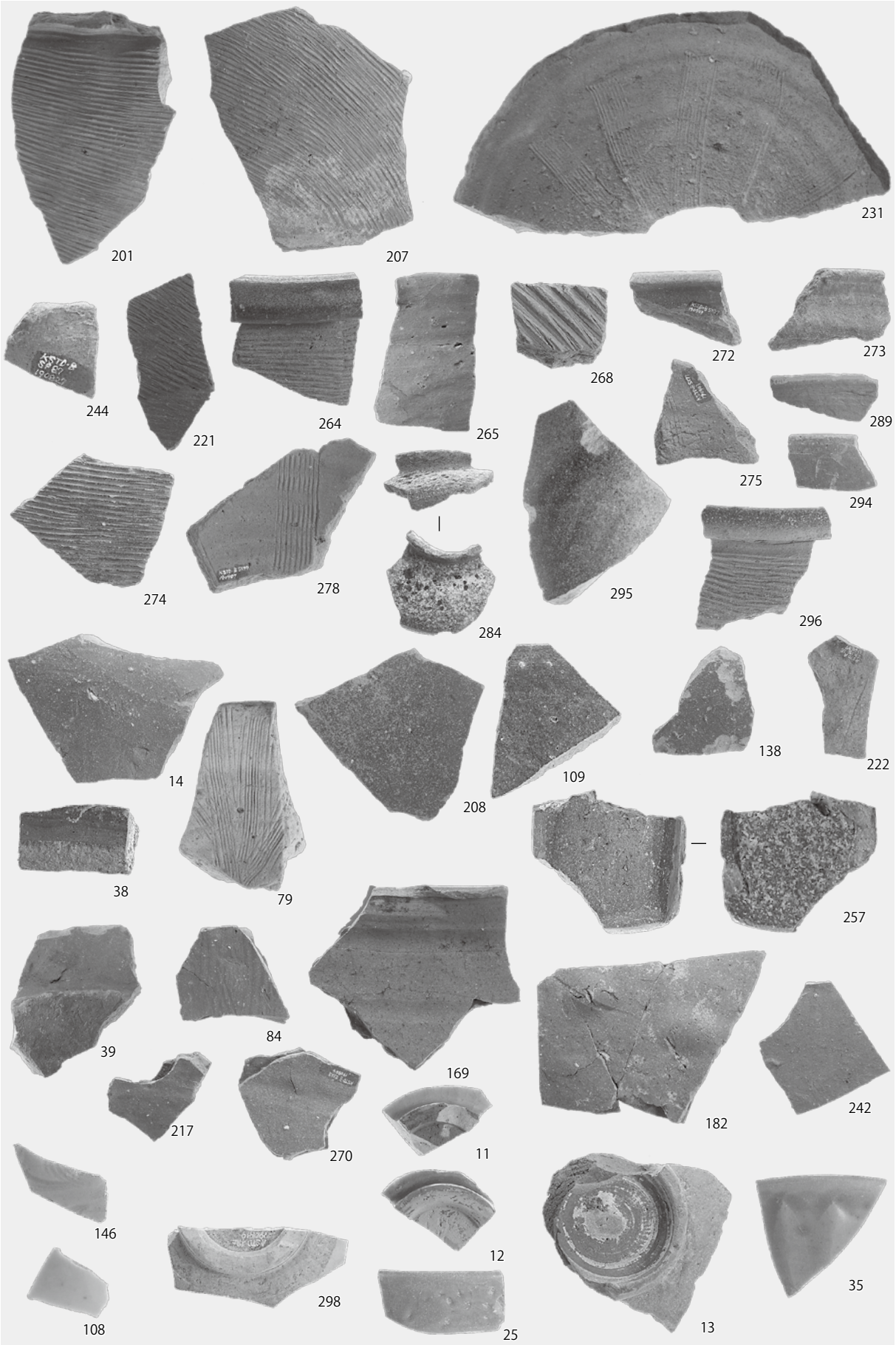



170
175
179
180
200
202
203
204
209
210
212
213
214
220
223
224
229
230
233
235
236
238
241
243
246
248
249
250
251
252
260
261
262
269
271
276
277
279
280
281
285
286
291
292
293

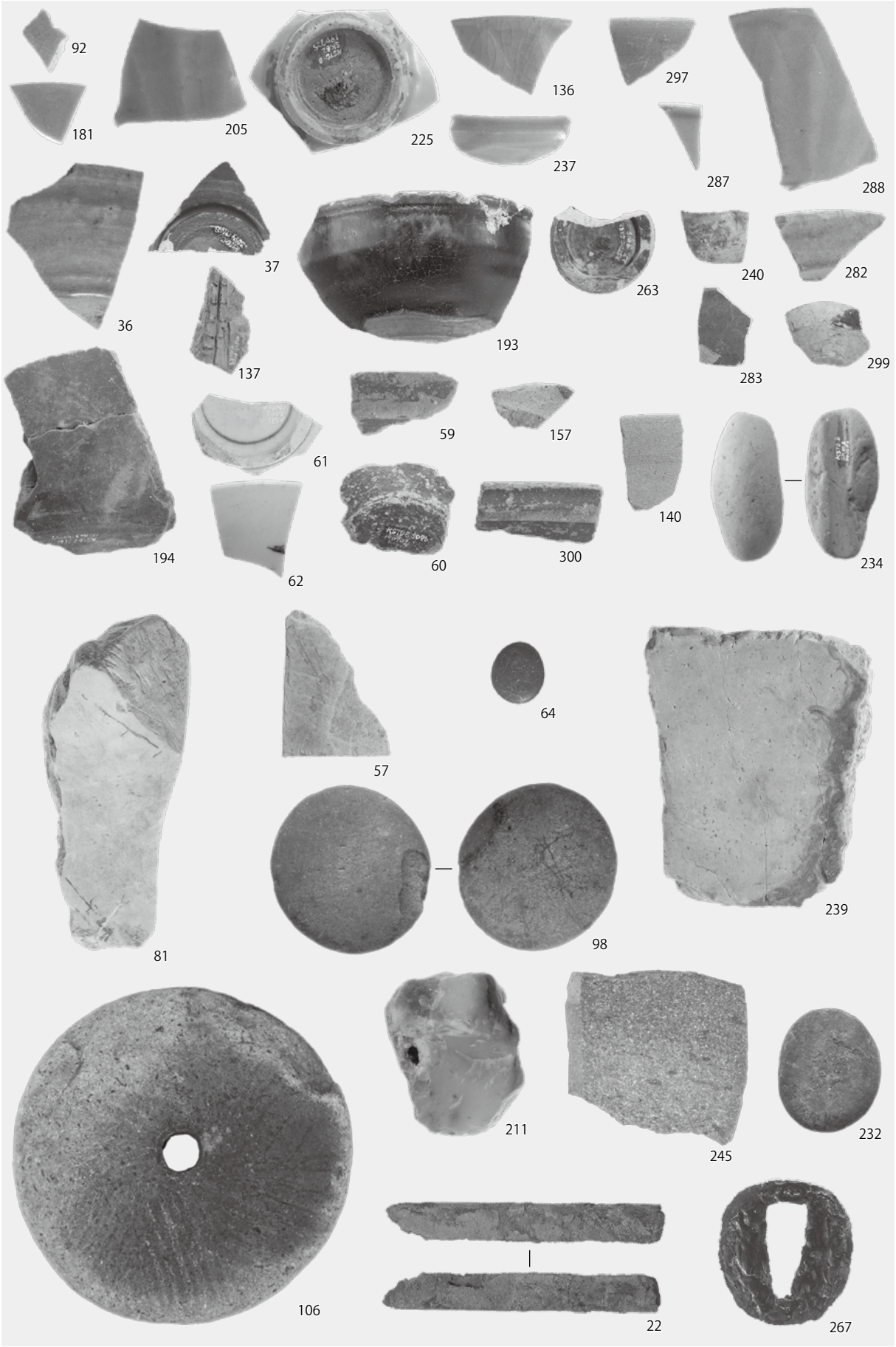
写真図版22　遺物（珠洲）

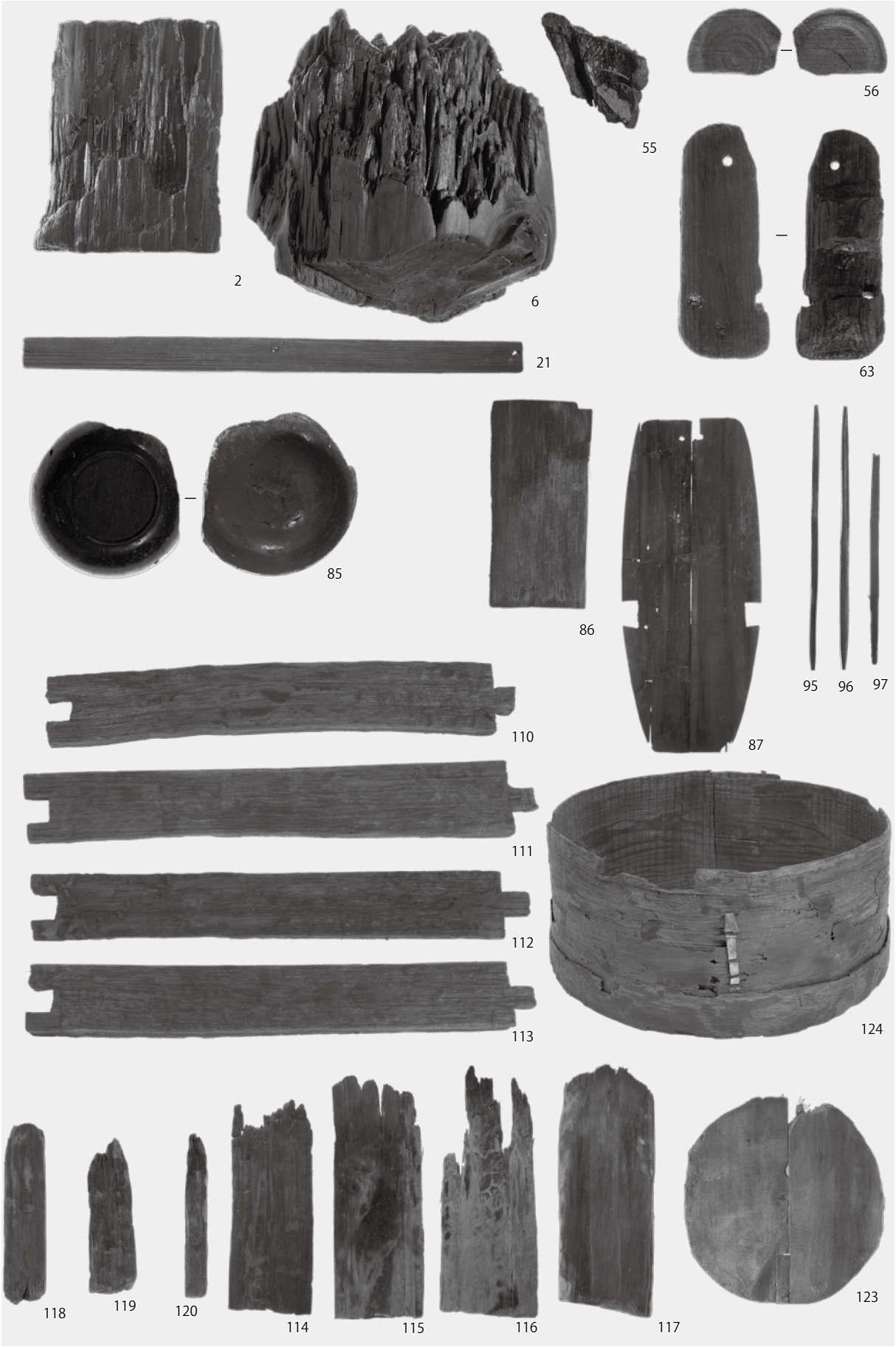

5
15
16
17
18
19
20
45
42
40
41
43
44
46
47
49
52
51
48
50
54
53
93
80
83
94
58
104
133
103
134
195
196
206
102
105
135
183
215
216

写真図版23　遺物（珠洲・越前・八尾・青白磁・白磁・青磁）



写真図版24　遺物（青磁・古瀬戸・瓦質土器・越中瀬戸・伊万里・磁器・須恵器・土錘・石製品・金属製品）




2
6
55
56
21
63
85
86
87
95
96
97
110
111
112
113
124
118
119
120
114
115
116
117
123

写真図版26　遺物（木製品）

写真図版27　遺物（木製品）

報 告 書 抄 録

ふ り が な	とやましくろさきたねだいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書 名	富山市黒崎種田遺跡発掘調査報告書
副 書 名	富山県医師会館建築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
シ リ ー ズ 名	富山市埋蔵文化財調査報告
シ リ ー ズ 番 号	101
編 著 者 名	鹿島昌也・野垣好史・納屋内高史（富山市埋蔵文化財センター） 阿部将樹・基峰修・今井千尋・三島ゆかり・村上佳・矢野義治（株式会社アーキジオ） 伊藤　茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtatidze・小林克也・竹原弘展・野口真利江・ 森　将志・小林克也（株式会社パレオ・ラボ） 株式会社吉田生物研究所
編 集 機 関	株式会社アーキジオ
所 在 地	〒933-0824　富山県高岡市西藤平蔵 581　TEL 0766-63-8850
発 行 機 関	富山市教育委員会
発 行 機 関 所 在 地	〒939-2798　富山県富山市婦中町速星 754　婦中行政サービスセンター本館 3 階 TEL 076-465-2146
発 行 年 月 日	2020 年 8 月 31 日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
黒崎種田遺跡（くろさきたねだいせき）	富山市黒崎（とやましくろさき）	16201	2010550	36 度 29 分 10 秒	137 度 12 分 20 秒	20190722～20191111	784.87	富山県医師会館建築工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
黒崎種田遺跡	集落	古代		須恵器・土錘	
		中世	井戸・柵列・掘立柱建物・溝・土坑・ピット・不明遺構	中世土師器・金付き中世土師器・珠洲・越前・八尾・青磁・白磁・青白磁・古瀬戸・瓦質土器・陶硯、木製品（漆器椀・曲物・下駄・箸・草履芯板・柄・折敷・栓・柄杓・部材・編み物・井戸部材・横槌・ヘラ・柱根・礎板か）、石製品（石臼・砥石・被熱礫・礎石か・碁石・火打石）、金属製品（切羽・刀子鞘）	武家の屋敷地に関連する遺構・遺物を確認
		近世	溝	越中瀬戸・伊万里・磁器	

要　約

黒崎種田遺跡は富山市街地の南、常願寺川と神通川・熊野川の複合扇状地に立地する。調査区の標高は約 23m である。

ほぼ表土直下の遺構面において、柵列 1 列、掘立柱建物 1 基～2 基、溝 18 条、井戸 12 基、土坑 26 基、ピット 137 基、不明遺構 8 基を検出した。遺構は 13～15 世紀を主体とし、わずかに 16 世紀以降に降るものがある。

14～15 世紀は、区画溝で囲まれた 2 つの屋敷地が存在する。12 基の井戸は、13～15 世紀の時期幅があり、北西－南東方向に直線的に分布することから、地下水脈に沿って井戸を掘ったことが推測される。1 基の井戸からは、使用後に石組を取り外して井戸終いの祭祀を行った状況が認められた。このほか馬小屋遺構 1 基を確認したほか、土坑から馬の歯が出土し、馬の頭部を埋納する儀礼を行っていたことが判明した。また、県内初となる金付きの土師器皿や多数の木製品の出土も特筆される。

本調査区の約 300m 南には、県内最大級の居館とされる蜷川館跡が存在する。検出遺構は、蜷川氏の活躍時期や蜷川館跡で採集されている遺物の時期と重なる部分が多く、本調査区付近は蜷川氏一族または家臣の有力武士が居住した屋敷地であったと考えられる。

富山市埋蔵文化財調査報告101

富山市黒崎種田遺跡発掘調査報告書

―富山県医師会館建築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告―

発 行 日　令和2(2020)年8月31日

編　　集　株式会社アーキジオ

発　　行　富山市教育委員会

〒939－2798　富山市婦中町速星 754

(婦中行政サービスセンター本館3階)

TEL 076-465-2146　FAX 076-465-5032

E-mail:maizoubunka-01@city.toyama.lg.jp

印　　刷　株式会社トーザワ